
贅姫と鬼神

藤童女

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

贄姫と鬼神

【Nコード】

N8973E

【作者名】

藤童女

【あらすじ】

最愛の妹を守るため、自ら生贄になることを望んだ少女、紫恋。だが彼女に待っていたのは死ではなく、妖界においての過酷な日々だった。そこで出逢ったのは様々な思いを抱える七人の鬼、そして暗い過去に苦しみ続ける青年、魅月。これは心を閉ざした鬼神に捧げられた、一人の娘の物語。

第一章 紫瞳の娘

それはあまりにも美しく、あまりにも神聖であり、そして酷く残酷な光景だった。

異様な程に張り詰めた重苦しい空気の中、その場にいる者は誰も微動だにしない。この沈黙を破ることを恐れるかのように、ただひたすらにその場に立ち尽くしていた。

居合わせているのは七人。その内の六人の視線は皆そろって、残る一人の背中へと注がれている。

もの言いたげに注がれるそれらに気付いていない訳がないのだが、注目を一身に集める男は後方に佇む六人に振り返ることも声をかけることもしないまま、じつと夜の空を仰ぎ見ていた。

虫の聲が不自然な程に一切聴こえぬ常でない静寂な夜。普通ならば不気味だと感じるはずなのだが、今宵のこの場をあまりにも美しいと表現してしまいたくなるのは、闇色を明るく照らす光のせいにあるのだろう。

ただの人の住まう外界の月光とは異なる。空から注がれる光は妖しい程に明るくきらめきを帯びており、神殿の屋上に組まれた足場に立つ七人の姿を照らし出していた。

常ならば月光の色は青白い。心が安らぎ、癒される光に世界は包まれる。だが………今宵の光の色は、違う。違うからこそ、あまりにも美しく、しかし酷く残酷に目に映るのだ。

空が血を流したかのような、赤。鮮血の如き月光が下にいる彼等に降り注がれていた。

そして無言で六人が見つめている一人の男。まがまがしいはずの赤い月光は、恐ろしいほど完璧に、彼という唯一無二の存在に調和していた。

白い首筋を撫でる漆黒の髪、造り物のように整った顔立ち、高い背に美しく均整のとれた肢体。その姿はなまめかしく妖艶であり、

性別を問わず他者の目を惹きつける。この世に実際に存在していること自体が奇跡であると疑いたくなるほどの美貌と、彼こそが世界の中心と疑う余地がないその存在感。それに加えて赤い月光を纏う彼の姿は、背中だけでも充分に見るものの言葉を失わせる程の威力があった。

六人はひたすら彼の後方で、彼の背を見つめて待っていた。彼が動くのを。どんな思いでいるのか読めない彼から、その思考の欠片でもよいから伝わるような言葉がかけられることを。

赤い光に照らされて、沈黙と静寂が場を支配する。六人が息の音さえも潜めていた張り詰めた状況に……突如、変化は訪れた。

パタパタパタという、軽やかな足音。直後、急いで走ってきたことがわかる、はあはあと息のあがった音が響き、六人の背後から飛び出すように、もう一人がこの場に登場した。

この場にいる者の中で一番小さく、一番幼いその少年は、緊迫した空気を読む事よりもまず目の前に広がった衝撃的な光景に意識をひっぱられ、到着してすぐさまはつとした表情で上空を見上げて叫んだ。

「赤い月!!」

甲高い子どもらしい声は、どこか悲鳴じみて静かな夜に響き渡った。

膠着した状況をあっさり破壊した存在により、六人はようやく息をつくと共に身じろぎをし、少年にならって目線を上げた。

少年の言葉通りに、そこには赤い月光を放つ赤い月が浮かんでいる。

それは世界が新たな姿へと生まれ変わる証であり、変化を伝える兆しであり、そして……これから一人の娘が、残酷な出逢いを果たさねばならないことを示すものだった。

小さな少年は、立ち尽くす六人の脇をすり抜けて、恐れることな

く前へと進み出た。足音をはばかりことなくずんずんと、少年は背を向ける自分の主へと歩み寄る。

今まで微動だにしなかった男は、ようやく赤い月から視線を外してゆつくりと後ろを振り返った。赤い光に浮かぶ端正な顔立ち。笑っているのか思案にくれているのか、すつと細められた双眸が背後に控える彼等へ向けられ、そしてすぐ傍に視線を落とした先、まっすぐに男を見上げている少年と目を合わせた。

「鬼神きじん、ねえ鬼神！お願いだよ！」

少年は男の纏う、夜よりも濃い闇色の衣を握りしめて叫ぶように懇願した。

「贄姫にえひめを傷付けちゃだめだ！贄姫は大切にしなきゃいけないものなんだでしょ！？お願いだから、お願いだから贄姫を傷付けないで！哀しませるようなことはしないで！！鬼神、俺は」

「黙れ」

地の底から響き渡る魔神のような低い声音が、少年の耳朵を冷たくなぶった。元々くるんとした大きな目がさらに大きく見開かれ、全身が総毛立つ感覚に襲われる。興奮ぎみに火照っていた少年の顔は、瞬時に恐怖によって青ざめた。

これほどまでに冷酷な主の声音を少年は聞いたことがなかった。先ほどまで抗議の念で張り切っていた少年の心臓は、瞬時に真逆の意味でドクドクと音を打ち鳴らした。言葉が喉の奥で止まってしまい、少年は腹にぐつと力を込めて、一度こくりと唾を飲み込んだ。黙れと一言言われて、素直に黙る訳にはいかなかった。主がこれかしらうとしている行いは、幼い少年の胸にもしつかりと宿る、信念というものに反することなのだから。

きつと後ろの六人だって、同じ思いのはずなのだ。だけど六人は

オトナらしい従順な下部の役に徹しているから、きつと反論をしないのだ。だから、ここで自分が黙る訳にはいかない。少年は再び心を奮い立たせ、主の衣をさつきよりも強い力で握った。

「鬼神」

冷ややかに見下ろしてくる眼差しを、心を奮い立たせて睨むようにまっすぐ見返す。

「俺、何でもするから。鬼神のためにどんな嫌な仕事でも頑張るから、だから、だから、お願いだから贄姫を」

殺さないで。

そう、少年は続けようとしたが、言葉は最後まで言い切る前に途絶えた。否、強制的に途絶えさせられた。

少年の足が地から離れて、宙でバタバタと暴れる。顔は真っ赤に染まって苦しげに歪められ、小さな手は必死で、首を締め付けて宙に持ち上げている主の右手を掻きむしった。

「黙れと、言っている」

さつきよりも一層冷酷な物言いで、男は少年の首を掴んだまま己の頭よりも高い位置に、まるで見せ物のように持ち上げた。

少年は必死にもがくが、首を絞める腕は一見するとしなやかで細いくせにびくともしない。いよいよ少年の顔が絶望と恐怖の色で塗りつぶされた。呼吸が浅くなり、涙が自然に零れ落ちる。

「やめてくれ、鬼神」

凍り付いたその場に、制止の声があがった。それは決して荒げた

声ではなく静かな物言いだったが、確かな怒気が込められたものだった。

男は少年を締め上げたまま、この状況で鬼神を制する発言をしてみせた勇者へと視線を向けた。後方に立っている六人の内の一人、長身の青年の鋭い眼光とぶつかり、両者は一時睨み合う。

ふっと、男の形の美しい口元が妖しく笑みの形に歪んだ。

「・・・いい兄を持ったものだな？」

言葉は少年へ冷ややかに、皮肉のようにも聞こえる響きで投げかけられた。少年は苦痛に顔を引きつらせながらも、自分をかばおうとしてくれた青年の姿を横目で見つめ、ぴくぴくと痙攣したした手を緩慢な動作で持ち上げて、青年へ助けを求めた。

小さな身体を持ち上げていた右手が、一度大きく横に揺れた。少年が驚き目を見張った次の瞬間には、少年の首は解放されて、体は玉が投げられたかのように軽々と宙を飛んだ。

なんとも幸いな事だが、憤る主にも一応の理性と慈悲の念は残っていたらしい。少年が投げられたのは高い所に位置するこの神殿の屋上のさくの外ではなく、少年をかばった長身の青年に向かってだったからだ。かといって、決して優しく投げられたのではない。子供一人がなかなかの距離を飛ぶ程の力である。両手を広げ少年の身を抱きとめた青年は、予想以上の力に押し負けて腕の中の少年と共に後ろへ倒れこんだ。

あまりの事に傍観してしまっていた残る五人は、はっと我にかえって口々に二人の名を呼んだ。

少しの間の後青年は上半身を起こし、腕の中で首を押さえながら激しく咳き込む少年へ気遣わしげに言葉をかけ、丸まった背中を優しく撫でた。

緊張に包まれていた空気にほんの一時、安堵のため息が交じる。よっかた、少年への罰がこれだけで終わって……。このタイミン

グで少年が主に放った言葉を考えれば、もつと最悪な状況がいくらでも生まれていておかしくはなかったのだから。

だが、そう安堵しきるのは、まだ早かった。次の瞬間放たれた主の言葉に、再び場は凍りつくことになる。

「すべての事が終わるまで、そのうるさい猫は檻につないでおく」

苦しげな息を吐く少年は、ひくりと息を飲み込み、見開いた眼で主を凝視した。

だがもはやどんな言葉も、どんな眼差しにも心を動かす気などない男は、少年の戦慄した表情にも、他の従者等の非難を帯びた視線にも興味を示さず、気にかける事もしないで、再度彼等に背中を向けて空に浮かぶ不気味でしかし美しい赤い月を仰ぎ眺めた。

漆黒の瞳が赤く輝く球体を映し出す。

「来いよ、生贄の娘。哀れで目障りな贄姫よ。お前は生きて地獄を見る前に、この俺が直々に――」

下方から、大きな風が巻き起こる。ざわざわと不安げに周りの木々が震えて悲鳴を上げた。

闇色の衣が、冷酷に輝く眼光を隠すようにはためき、舞い踊った。すべての始まりを告げる象徴をしかと眼に宿し、鬼神と呼ばれるようになった年若き男は薄く笑んだ。口元を皮肉気に歪めて、双眸は半月の形になぞらえて。

木々のざわめく音が、今宵はやけに騒がしい。

だが、静か過ぎるよりはずっと良い。あんまりにも音の無い時は、さすがに寂しくて哀しくて、心のほうが先に死んでしまいそうだから。木々の鳴る音を子守歌に、今夜は眠ればよい。

瞳を閉じた暗闇の中、耳の感覚だけが妙に研ぎ澄まされていく。外の世界は眠る気配をいつまでもたっても見せず、ざわり、ざわりと不安めいた唸りをあげ続けた。どうしてそんなに騒いでいるのだろうか。

「やはり、わかるのかしら」

近づいている『その時』を。

彼女が上を見上げれば、冷たい石造りの壁の、手の届かない程高い所に付いている唯一の窓から、空を眺める事が出来る。この狭い空間には明かりは無いが、その窓から差す月の光で、己の手のひらの輪郭がはっきり見えるほどには明るくなる。

特に、最近の光は明るいのだ。

「赤い、月の光」

手のひらは、まるで血に染まったようで。

小さな窓には、頑丈な鉄格子が取り付けられている。一本一本の格子の隙間から、それは目に入る。少女のすべてをぶち壊した、赤い赤い月。

冷ややかな壁に頭を擦り付け、彼女はぼんやりと窓の外の赤い夜空を見つめた。

少し体を動かすたびに、ちゃりちゃりと音を鳴らす無骨な重い腕の枷。こんなものをつける必要など、ないというのに。逃げる気など、ありはしないのだから。

「私は、幸せだから」

そう言つて若くあどけない娘は笑つた。口は半月のかたちになぞらえて、双眸からは静かに涙を流しながら。

第一章 紫瞳の娘（後書き）

アドバイス、感想等いただけたら嬉しいです。

第二話

日々何気なく過ごしている日常は、何か大きな変化があるわけもなく、平淡であるからこそつまらなくも感じる。

しかし実はそれは、本当はともとても幸せなことなのだ。何も変化のない安定した日々がずっと繰り返されて、一緒にいることが当たり前になっている大切な人達と、当たり前のように毎日を過ごし、昨日と少しだけ進展のある噂話で笑いあつて、別れるときは「また明日」と、同じ平和な明日が当然来ることを口にする。それは「そうやって過ごしている内は気付かない事なのだけれど、実はとても愛おしくて、とても大切にしなければならぬもので、感激するほど幸福な事なのだ。」

一人の少女は、そのことに気付いた。十六年間生きてきて、ようやく彼女は実感した。胸が張り裂けて泣き叫びたくなるほどに。自分は、幸せだったと。

全てを失うことで、知ったのだ。全てに別れを告げて独りあの世へ旅立つ覚悟を決めた時に。

揺るぎなく続いていくと思われた平穏な日常は、いともあっさりと壊された。優しく親切な村の人たちは被っていた仮面を外し、非情な顔を苦渋の色と共に少女へ晒した。

少女は自分の儚い生命も、これから辿る哀しい最期も、愛しい妹の幸せへの過程なのだと思えば、受け入れられた。自分は最期まで幸せなのだと思えた。

全ての終わりと絶望の始まりは、あまりにも唐突に空から訪れた。夜色の空を、まがまがしく鮮烈な血の色に染め上げて。それは、赤い赤い――

小川の澄み切った水が、さらさらと涼やかな音色を奏でて流れていく。もうすぐ夏が始まる、少し暖かな空気に包まれた小さな村。暖か、と言ってもまだ蝉も鳴かぬ時期であり、川に入るにはいささか早く、触れた水の冷たさに体は震える。

だが今日の特別な洗濯仕事は普段の汚れ物を洗う仕事とは違うために、ひんやりとした水の冷たさは苦にはならず、むしろ心は樂しげにときめいてすらいた。

地味で簡素な着物の裾をあげ、膝の高さまで川の水に浸かり、懸命に水の中で両手を動かして洗いものにいそしんでいた一人の少女は、かじかんだ手を一度休めるために曲げていた腰をくつと伸ばして背伸びをした。腰より長い髪は仕事の邪魔にならぬよう無造作に束ねられているが、束ね損ねた毛束がゆるやかな風に遊ばれて舞踊る。風に弾かれた水たちが、太陽の光を受けてきらきらと輝いた。

透明な水の中でゆらゆらと揺れているものは、鮮やかな赤い布に美しい白い布。長い布たちは緩い川の流れに身を任せてくねくねと踊っている。

美しい光景だった。祭りに使う綺麗で神聖な布を洗っているのだ、水がどれだけ冷たかろうが、少女の心が浮き立たない訳がない。そつと小さく笑みをこぼして、その年に一度の特別でお気に入りの光景を眺めていると、少女の後ろからかうような声がかかった。

「こら紫恋しれん！なあにばおつとしてるのよ。早く水からあがりたんだから、さっさと終わらせましょうー！」

水中の色彩に見とれていた少女は、ふいに名前を呼ばれてはっと我に返り、頬を膨らましながら後ろを振り向いた。

「千世^{ちせ}、別に少しくらい休んだっていいでしょう。急ぐことはないじゃない」

「急ぎたいにきまつてるでしょう。こんなに水が冷たいんだもの。いくら村のしきたりだからって、この季節に若い娘を川に入れるなんて酷い話しだわ」

友人の千世は布を洗う手を休めず不満気な顔で愚痴をこぼした。

「そんな酷いことかしら。祭りに使う布を洗うのは好きよ、私。だってこんなに綺麗なんだもの」

「・・・はあ・・・まったくあんたって子は。そんなのんきなこと思ってるのはあんただけよ紫恋」

言われて、紫恋は周りを見渡した。川には紫恋と千世以外にも、若い娘達は何人も入っていて、皆赤と白の布を洗っている。確かに千世の言うとおり、ぼんやりゆっくりしている者はおらず、皆早く川からあがるために急いで仕事を進めていた。初夏に行われる年に一度の大きな村の祭り。その祭りに使用する布を倉から出して一年分の汚れを川で清めるのが、この狭間村の若い未婚の娘達の役目であり、代々のしきたりだった。

せつかくなのだからみんなもつと楽しめばいいのに。紫恋は内心ため息をつきながら、再び腰をかがめて洗う作業へと戻った。

「お祭りになれば、町に出ている男の人達も帰ってくるわね。千世、嬉しいでしょう。小悟^{こご}さんが帰ってくるから」

「なになっ！！何言ってるのよ紫恋！あああたしは別に！小悟様のことなんてっ」

「あのね・・・ばればれだから。みんな知ってるわよ」

「ううう・・・小悟様には言わないでよね」

かあつと頬を染めていじける千世の顔はまさしく恋する乙女といった風であり、かわいらしいこと、と紫恋は思わず笑ってしまった。千世は赤くなりながらもむくれたが、ふと眉を寄せて難しい顔をした。

「ちよつと・・・心配だつたりするのよね」

「心配？」

「うん、ほら、ここがあんまりにも平和だから忘れてしまいそうになるけれど、あの山三つほど越えたところでは先日小規模な争いがあつたじゃない。なんか・・・そういうのに巻き込まれていないかと思つて。そうでなくても、町には怪しい人もたくさんいるし、妙な辻斬りに遭つたらとか考えちゃつて」

「長い戦乱の世も落ち着いたとはいえ、まだまだ怖い御時世よね。でも、暗いことは考えるものではないわよ千世。無事を信じて祈らないと。大丈夫、狭間の村の人々は太古の偉大なる大巫女様の力に護られてるんだから」

「だといいいけれど。小悟様、案外抜けてるところがあるからなあ」

狭間村は山奥にある小さな村であり、町へ稼ぎに出ている者も多く、千世の想い人もそうだった。行つて一年にもなれば、やはり心配でしょうがないのだろう。

「ねえそつといえば・・・」

後ろの千世が数歩近付き、若干小声で話しかける。

「紫苑ちゃん、今年も来れなかったのね」

「・・・ええ、そうね。あの子はとても来たがつたのだけれど、まだ体調がいいとは言えなくて。少し走るだけで苦しくなるのだから、こんな冷たい水に浸かつたらどうなってしまうかわからないでしょ

う。だから叱りつけて置いてきたわ」

「去年は起き上がることも出来なくて、お祭り本番も参加出来なかったわよね。今年はどうなの？」

「去年よりは体は良くなっていると思うの。家事もよく手伝ってくれるし、本人はお祭りに参加する気満々よ。なんかね、私の正装姿、一度も見たことないから早く見てみたいんですって」

今年十一歳になる、紫恋の五つ年下の可愛い妹、紫苑。その子が今朝笑顔でそう言ったのを思い出して、紫恋は苦笑した。

「ああそうなの。紫苑ちゃん、あんたの正式な巫女姿見たこと一度もないのね」

「あんな病弱な体じゃ、人の多い公式な場には連れていけなかったから」

「そつか・・・でも、さ、これからもそれでいいの？その・・・一応、紫苑ちゃんもあんたと同じ『眼』を持ってるんだから、巫女としての教育は必要なんじゃ」

「千世」

紫恋は再び腰を伸ばして腕の水滴を振り落とし、後ろを向いた。

風が吹いて前髪が揺れる。紫恋の大きな二つの瞳が、千世の姿を映し出した。その目を見た瞬間、千世の動きは止まり、はっと無意識に息を呑む。

それは、見とれたと言っている。水にきらめく太陽の光にもゆめく鮮やかな色彩にも無頓着だった千世が、思わず目を奪われる程の魅力が、そこに確かに存在した。

紫の、瞳。

紫恋が持つ二つの瞳の色。明るすぎず、けれども暗い色でもない。まるで明るい月光に照らされた幻想的な夜のような、美しく艶やかでいて深い、魅惑的で神聖なる瞳。それは紫恋が、太古の昔この狭

間の地を護ったとされる伝説の大巫女の血と意思を色濃く継いでいるという証であり、将来、狭間の社の巫女姫となるかもしれない候補者であることを示していた。

「社の巫女には、いずれ私になるわ。」

惚けている千世に向かって、紫恋ははっきりと告げた。

「現在若い紫瞳の娘は私と妹だけ。でもあの子はあんなに弱いんだもの、神事をこなすことなんて出来ないわ。巫女姫様も、跡継ぎは私で決まりだとはつきりと仰ったのよ。なら体に無理をしてまで紫苑が巫女修行することはないの。あの子は難しいことは考えず、自分の体調を崩さないことだけに専念していればいいのよ。」

「・・・大変じゃ、ないの？巫女候補が一人で頑張ってるのなんて、過去にもあまりないことなんでしょう」

「きつと紫苑に手伝わせたほうが心配事が増えて大変だわ。私はほんとに大丈夫。妹のためと思えば、大丈夫。平気よ、そんな負担になってるわけじゃないもの。別に巫女候補だからって少し時間が削られるだけで、普通の子と大して変わりはないんだから」

「まあ確かに、こうしてあたし達と一緒に洗濯なんてしちゃってんだから、一般的な巫女よりは解放的か。恋愛も結婚も許されてるんだから、普通と変わらないと言えは変わらないのかもね」

「ええ。本当に、巫女でも狭間の巫女として生まれられて幸運よね」

紫瞳の娘とは、この狭間の村の血を引く夫婦に時々生まれる娘のことだった。生まれつき紫の瞳を持っており、その娘は物心つくころから狭間の村の大きな山のふもとにある社で、巫女として修行に励むのが慣わしである。通常一つの年齢の段階層に数人の候補者がいるものなのだが、最近は紫瞳の娘が生まれる頻度が少なく、現在三十より下の巫女候補は十六の紫恋と妹の紫苑のみであり、他はも

うお年を召した今の巫女姫様と同期の方々ばかりだ。必然的に、次の巫女姫候補は紫恋しかない。

紫恋としては、別に自分が将来巫女姫として神事を取り仕切ることに抵抗はなかった。そりゃあ多少の責任感の重みはあれど、千世の言ったように、狭間の巫女姫は案外自由があり解放的なのだ。ずっと社に閉じ込められるわけでもなく、外出も割と簡単に来る。何より、恋愛と結婚が自由というのが神に身を捧げる巫女としては異例なことだろう。だが紫瞳を持つものにとって子を産むことは義務であるのだ。紫瞳の娘からは紫瞳を持つ子が生まれやすいから。より優秀で血の濃い娘を輩出するために、巫女は狭間の男と結ばなければならない。だがまあ、紫恋も紫苑も、今の社の巫女姫様の血筋ではなかったりするのだが。

「正直、あたしだったらお堅い巫女様修行なんてとうにいやになつてただろうから、黒いお目でよかつたとは思っけど・・・でもちょっとだけ、羨ましかつたりもするのよね。あんたのその宝石みたいな綺麗な瞳。それに、そのお顔」

「・・・お顔？」

なんのことやら、と紫恋は首を傾げた。

「ん、だからその、紫瞳の娘ってみんなそうじゃない、神様からの贈り物っていうか、神様が美しいものを傍に置きたいからそういう風に生まれさせたんじゃないかってくらいなの・・・」

紫恋の顔を凝視しながらしどろもどろに話す千世に、ますます疑問の表情を浮かべる紫恋。やがって千世は一人で納得したように、言ってもわかんないか、と呟いて、急に話を変えてきた。

「あの、さ、紫恋。あんたは今年参加するの？夜の方に」

「夜の方・・・ああ、後夜祭のことね。いいえ、私は行かないわよ」

後夜祭はお祭り本番が終わった後、夜遅くから始まるもう一つのお祭りだ。参加できるのは十五歳以上の男女。若者が中心となつて盛り上げられるそれは、大きな大きな焚き火を囲つて、皆が疲れ果てるまで踊り飲み明かすのだという。紫恋は去年から参加資格があるのだが、去年は昼間の巫女姫様の神事の手伝いで疲れてしまい、終わったら家で臥せていた妹の所に飛んでいったので参加はしていない。今年も参加しない理由としては、後夜祭が持つ意味に、自分はまだ関係ないと思うからだ。

「後夜祭は、男女の交流の場。想い人がいる人が相手に気持ちを伝える絶好の時でしょう。私が行つてもしょうがないじゃない」

村の若者達にとつて、昼のお祭りより重要視して気合を入れるのが後夜祭だった。ある意味、主役は後夜祭と言つていいだろう。祭りという特別な高揚感のもと、日頃なかなか想いを伝えられない愛する人に、思い切つて告白をする、そのためにつくられた空間。村の夫婦にはこの後夜祭をきっかけに恋仲に発展したという事例がとても多い。

「それに、紫苑はまだ参加できないんだから、家に残すのはかわいそうだわ」

「そう・・・ね。うんまあ、それじゃしょうがないわよね。紫苑ちゃんによろしくね」

「・・・千世？」

「え、な何？」

「いや、何か他に言いたいことがあるのかと思つて。なんか表情硬いわよ」

「うえ！？別に、何も無い何も無い！！」

「そう・・・ならいいけど」

首を勢いよく振ってすぐさまうつむき、洗う作業を黙々と再開しだした千世を不思議に思いながらも、紫恋は止まっていた手を再び動かして作業に戻る。だがその直後に川の岸から声がかかった。

「お——い！しれ——ん！！」

「葵？どうしたの？」

紫恋にとつてはもはや顔なじみの、褐色の肌の健康的な青年が手を振っていた。

「お祖母様がお前を社に呼んでるから迎えに来た！」

「巫女様様が？わかったすぐ行くわ。千世、ごめんなさい」

「ん、わかった。後はあたしがやっておく。頑張つてね未来の巫女様」

おどけた格好をしてみせた千世に苦笑し、自分も同じまねをしてみせてから、紫恋は流れる水をかきわけて葵のいる岸まで向かった。親切にも手を差し出してくれた彼の好意に素直に甘えて岸をあがる。ありがとう、と紫恋は笑顔でお礼を言ったのだが、すると葵はなぜか手を離すと同時に、顔をぶいっとそむけてしまった。なぜだろう、最近彼は自分に対してこういう態度が多い。三つ上の、昔から兄のように慕ってきた彼からいきなりこの態度をされると戸惑ってしまう。何か意識しないところで、彼を不快にさせるようなことをしてしまっていたのだろうか。

「いくぞ、紫恋」

「え、う、うん」

急にいつもの明るい声音でそう言った彼に再び戸惑いながらも、紫恋は彼に付いていき川を離れた。

紫恋と葵、二人の姿が完全に見えなくなった瞬間。川にいた娘たちはいつせいに手を止め、千世の周りに群がった。

「千世、紫恋なんて言ってた!？」

「こ・な・い・ってさ!後夜祭」

苦笑しながらそう言った千世の言葉に、一様に周りの娘たちからは安堵の表情とため息がうかがえる。

「そう・・・こう言ったら紫恋ちゃんに悪いけど、よかったわ」

「ほんとにね。うち、今年こそ勝負に出ようと思ってたからさ、あの子の姿がないのは本当に助かるのよ」

「うんうん、そのとおり。いやでもほんと、妹しか見えてない子で助かったわ」

「同感。もしあの子があれば並外れた鈍さの持ち主じゃなかったら、今頃村の男共みいんな根こそぎあの子にもっていかれてるわ」

「違いない。あゝあ、あの子を憎んで仲間はずれにできたら楽なんだけど」

「やめときなさいって。それあの子にやると、自分がいかに惨めな敗者か自分に気づかされるから」

「経験者は語る」

どつと笑いがおきた。

「んもっ、葵さん早いとこ頑張ってくればいいのに」

「村一番のいい男が人のもんになっちゃうのはちよいと寂しいけど、彼相手なら他の男もあきらめるだろうしね。巫女姫の旦那としては申し分ないじゃない、なんてったて現巫女姫のお孫様」

「まあ・・・問題はあの妹しか視界に入らない子だね」

「葵さんを遠巻きに観察してる私たちですらとくに気づいてるのに、なあって紫恋本人は気づかないの。恐ろしい子」

あきれたようなため息が、水の音と共に流れていった。

第三話

社に行く前に、家に置いてきた妹が心配だから一度家に寄りたい。そう紫恋がお願いすると、葵は急がなくても構わないからと快く了承してくれた。

長く続く草原に、踏みならされて自然に出来た、むき出しの土の道。少女と少女より頭二つ分は背の高い青年は、並んで姉妹の家へ向かって歩いていった。

「んー気持ちいい」

汗ばんだ額や首筋をさらりと冷やして通り抜けていく風に顔を緩めて、紫恋は無造作に結んであった自分の髪へと手を伸ばした。もともと丁寧に結んでいなかった髪は、祭りの布を清める仕事の最中にさらに絡まってしまったらしく、紐を引っ張るつもりが毛束まで一緒に引っ張るはめになりなかなか痛い。諦めようかと思ったが、しかしこんなぐしゃぐしゃな髪型で社に行けば、身だしなみにうるさい巫女姫様から何を言われるかわかったものではない。

紫恋は隣に並んで歩く葵を仰ぎ見た。葵はすぐに言いたいことが分かったのだろう、ああ、と頷き、絡まった髪に手を伸ばす。だが紫恋の黒髪に触れそうになった手は、直前になって躊躇するようにぴたりと止まった。

なんだろう、と不思議に思い、紫恋はなるべく頭を動かさないようにちらりと目線だけをあげた。するとなにやら難しそうな、妙な表情をした彼の、妙な格好のまま固まった姿が目に入った。いったいなんだというのか。もしかしたら、見た目にもどうやって解いたらよいのかわからないくらいに散々な絡まり方をしているのだろうか。

「・・・葵？」

一度顔を上げて、首を傾げる紫恋。すると目が合った瞬間、葵ははつとした表情になった。どうやら今の瞬間、なにやら考え込んでいたか、ぼうつとしていたらしい。どうかしたの、と問いかけると、なんでもない、といううやむやな返事が返ってきた。

何かをごまかすような顔と声にますます疑問は募ったが、彼が絡まった髪を解くためにそつと手を触れてきたため、おとなしく解かれることにした。葵の大きくて、でも男の人にしてはすらりと長くて綺麗な指が、髪の毛を優しく扱っているのが伝わってくる。やはり彼は器用だから、紫恋が自分でやるよりは全然痛くなかった。

結び目はものすごく複雑に絡まっているのかと思ったが実はそうではなかったらしく、そう時間もかからないうちに土色の麻の紐は紫恋の黒髪からするりと音をたてて解けていった。腰より伸びた長くまっすぐな髪は解放されて、夏の訪れを告げる爽やかな風につけて自由に舞った。太陽の光に黒々とした髪は白いわつかを作ってつやつやと輝く。

「伸びたな」

隣で葵がぼそりと呟いた。

「うん、もう火に焦がさないように気をつけていたからね」

幼い頃の、焚き火の火が髪に移って、ぱっさり切り落とすはめになった時の事を思い出し、紫恋は肩をすくめて笑った。

「あれは悲惨だったよな。短い髪は恐ろしいくらいお前に似合っていないかった」

「あらそうだったの？あれはあれで動くには邪魔にならなくて楽だ

ったのだけど」

「もう切るなよ。お前は長い髪がよく似合う。せつかく、そんなに

褐色の腕が紫恋に伸びる。肩をさらさらと流れる美しい髪に触れようとした葵の手だったが、紫恋が顔をあげてにつこり笑いかけた途端、髪に触れる直前でさっと引っ込んでしまった。

また紫恋は疑問の表情になる。やはり最近彼の自分に対する態度は、明らかにおかしいものがある。今までだったら髪の毛なんて平気でぐしゃぐしゃ撫で回してきたし、結び方が下手だったら綺麗にやりなおしてくれたぐらいだったのに。最近の彼は、積極的に紫恋の髪を触ってこなくなった。髪だけじゃない。さつき川で岸に上げてくれた時だって、さつさと手を離して歩いていつてしまった。今まで仲良くじゃれあったり、よく勝手に抱っこやらおんぶやらをしてきたくせに。彼は最近、触れてくることがなくなった。そればかりか目線さえも時々そらされる始末だ。せつかくこちらが笑いかけても、葵はとまどったように顔をそむける。そういえば、この前紫恋がふざけていきなり後ろから彼に抱きついた時だって、彼は後ろを一度確認してすぐに顔を前に戻し、やめろ、と低い声音で一言だけ言って去ってしまった。いきなりおどかしたことを怒ったのだからかと反省したのだが、それでも今までとは何かが違う反応、実の兄のように慕い昔から中のよい彼からそういう態度をとられたのは辛かった。次の日謝りに行ったときにはもう何事も無かったかのようには笑ってくれていたからよかったが、芽生えた疑問は心の奥で渦を巻いた。

やはりここは思い切って話し合うべきではないか。そう紫恋は思いつた。今さら隠し事なんてあんまりではないか、いつだって二人は正直にお互いのことを伝え合って、一緒に手を取り助け合ってきたのだから。

・・・まあ実のところ、葵のおかしな態度の真意に気づいていな

いのは、狭間村の中で紫恋だけだったりするのだが、無論本人はそんなこと知る由も無い。

少し緊張しながらも覚悟を決めて、紫恋は口を開きかけた。が、しかし

「紫恋」

先に声をかけたのは葵の方だった。

「え、な何？」

「祭りの・・・後夜祭のことなんだけど」

「後夜祭？さつきも千世とそんな話が出たわね」

「行くのか？お前」

きょとんと紫恋は葵を見上げた。なんだか葵が緊張して見えるのは気のせいだろうか。顔が赤く見えるのは・・・多分、暖かな太陽の日差しのおかげ、褐色の肌の色のせいなのだろう。

「行かないわよ」

「・・・行かないのか」

「ええ、妹が待つてるから」

「・・・そ、そうか。あの、でも紫苑なら夜うちで預かってもいいし、お前は来たらどうだ後夜祭。去年は来なかったんだから、今年くらい」

「でも、私独りになっちゃいそうだし。千世も想う方のところに行っちゃうだろうから、目的の無い私はちよつと・・・」

そう言つと葵は、眉を寄せてなんだかものすごく困ったような、複雑そうな顔になった。

「そんなさびしい事にはまずならないと思うけど。お前ならな。・・・あ、でもだからむしろお前は後夜祭にこないほうがいいのか・・・」
「葵？何言ってるの？」

後半ぶつぶつと独り言を言い出し始めた葵に紫恋が不審そうな顔をすると、勝手に思考の波にのまれていたらしい彼ははっと口を覆って、自分を見上げてくる紫の瞳を気まずそうに見下ろした。

「え、えつとまあ、その、もうちょっと考えてみるよ後夜祭。けっこう楽しめると思うし」

「わかった、一応考えてみるわ。・・・あのね葵、やっぱ最近の葵なんか変じゃ」

「よし紫恋家まで競争だ！！」

突然高らかにそう宣言した葵は、紫恋の返事を待たずに走り出した。

「はあっ？ちよつと待ってよ葵！！ずるい！！」

あわてて紫恋は走り行く彼の背中を追った。彼への話がはぐらかされた気もしたが、それは追いかけっこの最中ころっと忘れてしまった。

息を切らしながら、小さく質素な家の古めかしい木の扉を開けると、すぐに聞きなれた明るい声が聴こえてきた。

「おかえりなさいお姉ちゃん！」

「ただいま、紫苑」

中に入った途端に飛びついてきた小さな少女を受け止めて、紫恋は笑って彼女の背中をなでなでした。

「体はどう？私がない間に何かなかった？」

「全然大丈夫！最近ほんとに調子がいいんだから。お姉ちゃんは心配しすぎなのよ」

そう言つて紫恋の妹、紫苑はぶくつと頬をふくらませた。やはり今朝、川について行きたいと駄々をこねたのを叱られて家に置いていかれたのを根に持っているらしい。だが、いくら最近元気が出てきたからといって、こうやって抱きしめれば伝わる、やせた肉付きのない肢体。普通の十一の子と比べると一回り小さい身体。心配するなというほうが無理だった。

まだまだ幼さの残る白い小さな顔、その繊細な顔立ちに華をそえる、惹きつけられるような二つの大きな目。そこにあるのは極上の宝石のような美しい紫の瞳。姉妹おそろいの、巫女の証。

あどけない妹の、年相応にすねた顔がどうにも可愛らしくて、紫恋はついついぎゅうつと小さく軽い身体を抱きしめて頭をぐりぐりと撫で回した。

「もうお姉ちゃんつたら！」

「よしよいい子いい子。お祭りに行くまでその元気はとっておこうねー紫苑」

「なにやってんだこの妹バカ」

入り口からあきれた様に苦笑した声がかかる。

「あれ葵お兄ちゃんだ」

「なによ、せつかくの姉妹の感動の再会を」

「なあにが感動の再会だ。朝別れたばっかだろうが」

べ、と紫恋は舌を出す。妹バカなど、自分には褒め言葉だとは思わない。このか弱くてかわいい紫苑を守るのは自分しかないし、自分の義務だと思っていた。そう、この子には自分しかないのだ。そして・・・自分には、この子しかない。

紫恋は狭い家の中を見渡した。必要最低限の物しか置いてない簡素な室内。これで十分だった。ここに住むのは今は紫恋と紫苑だけなのだから。他の肉親は、いない。父と母は、昔はいたが、今はいない。

いなくなった理由については聞かされているが、聞かされている以上の父母についての事を調べるのは禁忌とされていた。事情をよく知る村の大人達も、皆一様に姉妹に対して両親のことについては口を閉ざす。ただの孤児より少々厄介な事情の過去が、姉妹にはあった。だが、それを別段苦に思ったことはなかった。村の人たちはみんな紫瞳の姉妹に優しくしてくれたし、紫苑と仲良く手を取り合って生活していった。

「どうして葵お兄ちゃんがいるの？」

「巫女姫様が私を呼んでいらつしやるんですって。今から行って来るから、悪いんだけどもう少しお留守番していてね」

「！！あ、じゃあわたしも一緒に」

「だめよ。遊びに行くんじゃないんだから。きつとお祭りの神事について大事な用があるんだわ。お願いだから、ここでおとなしくしててちょうだい」

「・・・わたしだって、紫瞳の娘なのに・・・」

かたくなな姉を説き伏せるのは無理と判断した紫苑は、ちらりと目線を入り口に立つ葵へと向けた。救いを求めるような眼差しとば

つちり目が合ってしまった葵は、言葉に詰まったように顔を引きつらせた。彼は妹のためと言い出したら聞かない紫恋の性格は熟知しており、ここで紫恋に紫苑を連れて行こうなどと言えば、説教をくらうことが十分に想像できた。正直、今紫恋の不興を買うような事は避けたい葵としては、その眼差しに応えてやることは出来なかった。

片手を顔の前にやり、葵がごめんと身振りで返すと、紫苑もこれ以上ねばっても無理と過去の経験から判断して、がっくりと肩を落とした。

「・・・いつてらっしゃい」

「ありがとう紫苑、行ってくるわね。勝手にどこかに行っちゃだめよ」

「わかってる」

むくれた顔を愛しげに撫でて、紫恋は葵を連れて再び家を出た。少しでも早く用事を済ませ家に帰ることが出来るように、村のはずれにある社までは走る体力はもうないものの急ぎ足で向かった。

「お待たせいたしました」

葵が開けた、品の良い細工のほどこされた大きな扉、その奥に、すでに背筋をピンと伸ばして座っている一人の女性の姿を見つけて紫恋は深々と頭を下げた。

「お入りなさい紫恋」

凜とした、彼女独特の重みのある声音が、社の一角にあるこの広

い部屋に響き渡った。もう一度会釈し、紫恋は室内へと足を踏み入れる。その後が続いた葵は、戸を閉めてから戸の隣の部屋の隅に腰を据えた。紫恋はそのまま部屋の中央、座した女性の真正面の下座にすえられた一枚の敷物に座った。今一度手を突いて礼をした後、紫恋は真正面の女性と目を合わせた。現在この社の主であり、葵の祖母にもあたる方。ずっと昔から姉妹がお世話になっている狭間村の巫女姫様だ。

「紫苑のところに行っていたんですね」

「はい、朝方はあの子の体調も良かったので心配はないかとも思ったのですが、念のため」

「回復に向かっているのならなによりです。このまま行けば、紫苑もこの社へ通うことが可能なではありませんか」

「・・・そう・・・ですね。そうかもしれませんが、しかし、無理はさせたくないのです。良くなってきたとはいえ、まだまだ他の子に比べると体力は劣るのですから。あの子が出来ない分、巫女としての修行は私が倍励みますから、どうぞご心配なく」

「ふ・・・まったく、いつまでもたっても過保護なものよ」

真白い巫女装束の袖で口元を隠し、彼女は苦笑した。笑われたとはいえ、その優美な姿に紫恋は思わず胸が高鳴った。やはり何度見てもお美しい方だと思わずにはいられない。葵ほどに大きい孫がいるとはとても思えないほど、彼女は凛々しく他の村の同年代の女に比べて若々しい。艶を失わない髪や肌、しゃんと伸びた背筋、気丈な性格、何もかもが実際の御歳よりもはるかに若く彼女を見せているが、しかしその紫の瞳だけは、紫恋や紫苑にはない長い時を生きても様々なものを見てきただけの深みがある。

まさに、将来こうなりたいと思う理想の女性。紫恋が時に厳しくもあつた巫女修行を乗り切ってこられたのも、この方に追いつきたいという思いがあつたからだろう。

「それで巫女姫様、今日私が呼ばれたわけというのは、その・・・」

ちらりと、視線を向き合う彼女の瞳からその足元へと移す。実は二人が向き合う間には、先ほどから思わせぶりな大きな平たい箱が置いてあった。艶のある黒塗りの上にとろどろ金の花模様、朱の蝶が舞っている、社以外ではまずお目にかかれないだろう豪華な箱だった。

この中身を見せるためにきつと巫女姫様は自分と呼んだのだろう。こんな美しい箱に入っているものとは果たしてなんなのか、とても興味をそえられる。

きらきらと輝いた紫恋の眼差しに、巫女姫はふっと目を細めてうなずいた。

「開けて御覧なさい」

ときどきという緊張のもと、おもむろに手を伸ばしてそつと縦長のふたを開けた。まず見えたのは、白い紙だった。そして漂う真新しさを感じさせる香り。どうやら入っているものは上等の装束らしかった。いったい何の。そんな疑問とともに、わくわくとした表情で紫恋は紙をめくってみる。そして、その下にあるものが姿を現した直後・・・紫恋の表情は固まった。

「じ、れは・・・」

言葉までも忘れそうになるほど、目がその装束、その鮮やかな色彩に釘付けになった。巫女姫の前で間抜けな顔などするものではないと気をつけているが、これはもう啞然とするしかなかった。硬直する紫恋の反応にまた苦笑した巫女姫は、静かにはつきりと告げる。

「紫恋、そなたの物です。そなたが今年の神事で私の補佐をする際に身に着けるものですよ」

目を見開いて彼女を見つめ、再び手元に視線を落とす。

それは、とても美しく、とても鮮やかで濁りのない、朱色の袴。神聖なる巫女装束だった。この色があらわすことの意味を知らないほど、紫恋はなまけた修行はしてきていない。

今まで紫恋が神事の手伝いで身に着けていたものは、巫女装束ではあれどこんなに鮮やかなものではなかった。鮮やかな朱の色は社の巫女姫が身につけるものであり、見習いの紫瞳の娘が身につけるのは暗い紅の装束だった。だが、巫女姫以外にもこの朱の色を纏うことが許される者がいることを紫恋は知っている。それは、次の狭間の巫女姫に正式に選ばれた紫瞳の娘だ。現巫女姫が認めたたった一人の娘に許される色なのだ。

「巫女姫様・・・」

「認めます、紫恋。そなたが朱の色を纏うことを。これまでそなたは本当によく私を助けてくれました。修行もまじめにこなし、他の人々の模範になる程の行いをしている。人望も厚く、村の皆から愛されていると聞きます」

思わず背筋がぴんと伸びる。心の底から熱いものがこみ上げてきた。

「頼りにしていますよ、次期巫女姫」

「はいっ！これまでに以上に一心に、精進させていただきます。いつか、貴女のような巫女姫様になれるように」

「願わくば私を越えるほどの器になって欲しいものですが」

「そそそんな恐れ多い。はい、でも、が頑張ります」

顔を真っ赤に染めて、紫恋は箱に頭をぶつけんばかりに頭を下げる。巫女姫は満足げに微笑み頷いた。

それから彼女は側仕えの女たちを呼び、紫恋にこの巫女装束の衣装合わせをするように指示をだした。当然、戸の側で事の成り行きを呆然と見ていた葵には退出をしてもらい、紫恋は女たちの手を借りて穢れなく白い袖に手を通した。

「そうそう・・・紫恋」

少し声の調子を落として巫女姫が思いついたように口を開く。

「記憶の方はどうですか。十六になっても、変わりはありませんか」

その質問に、胸元の飾り紐を結う女の手がピクリと反応したのに紫恋は気づいたが、あえて気づかないふりをして答えた。

「はい変わりはありません。大丈夫です、何も思い出してはいません。この通り心は平穏を保っています」

「そう、ならばよい。ですがもし少しでも五歳前の記憶が戻るようなことがあれば、すぐに私のところに来るのですよ。そなたの過去は、決して思い出してはならないものなのですから」

「・・・はい、わかっています。私も、自分の心が壊れるのはごめんですから」

複雑な表情で、紫恋は笑った。装束を着せている女たちは無表情を保っているが、果たして心の中では何を思っているのだろう。今の会話の意味を女たちは解っているし、それなりの歳の彼女たちは紫恋の知らない紫恋の過去を知っているはずだ。いろいろ思うものがあるだろう。だが気にはなるが、訊く気などはなかった。どうせ明確な返事など返ってこないことはわかっている。紫恋の過去につ

いてを口にすることは巫女姫によって堅く禁じられているのだから。それはすべて、巫女姫が紫恋の心を守るためになさってくださったこと。紫恋はとくに了承していることだった。

紫恋には、五歳以前の記憶が一切存在しない。それは頭を打って記憶喪失というわけではなく、巫女姫の特異な力によって人為的に封印されての事だ。記憶を封印しなければこの先、紫恋はまともに生きられない。そう周りが判断するほどの悲惨な出来事が過去に存在したらしい。

――母親の、自殺。

紫恋の母親は、お腹に紫苑の命が宿った直後に夫をなくし、酷い鬱と錯乱状態に陥った。そんな状態のまま紫苑を産み、その数日後、彼女は幼い姉妹を残して自らの手で命を絶ったそうだ。五歳の紫恋の見ている目の前で、鮮血を散らして。物心はとうについている紫恋は目の前で母が血を流し息絶える様を見て、心が崩壊寸前にまで追い込まれた。大切な紫瞳の娘が壊れるわけにはいかない、そう村人は思つて、巫女姫に記憶の封印を願い出た。・・・らしい。全て、らしいとしか言えない。紫恋はもはや何も覚えておらず、聞かされた事実もまるで他人事のような感覚でしかないのだ。

もし記憶が戻ったら、紫恋の心はきつと崩壊してしまうと巫女姫から何度も聞かされていた。村人たちには、全てを忘れた彼女に両親について一切のことを教えてはならないという暗黙の了解が出来ている。

だから紫恋には過去を思い出す要因となる事柄は何も教えられないことがない。両親の名前すら知らないし、どんな人柄だったのか、誰と親交が厚かったのか、何一つ知りはない。

すこしさびしい気もするが、しかしそれでよいと思っていた。このまま一生過去を知らなくてもいいと。辛い過去を思い出して今が生きられなくなるくらいなら、過去が空虚のままでも、妹とこれから先もずっと平穏に生きていく道を選ぶのが当然のことだ。記憶を封じた巫女姫様には本当に感謝しなければならない。

十一年前、記憶を取り払われて目覚めた後、巫女姫に優しく抱きしめられたことをふと思い出したところで、紫恋は思考を打ち切った。これ以上過去のことを思い返して、余計な光景が脳裏をよぎったらと考えると恐ろしい。意識を今この瞬間に引つ張り戻し、紫恋は真白い袖を持ち上げた。振り向けば鮮やかな朱の袴が品良く衣擦れの音を奏で、胸元の小さな金の鈴が軽やかに鳴る。

「よく、似合っていますよ」

きつと嘘ではないお褒めの言葉をいただいて、思わず笑みがこぼれた。

「……俺も見たかった」

「いいじゃない、お祭り本番のお楽しみということで」

隣で仏頂面をしている葵の背を、まるで子供をあやすように叩く。すると彼は違う意味でますます仏頂面になり、つい紫恋はくすくすという笑いが抑えられなかった。

衣装合わせが終わったころにはもう日は落ちており、外は闇に包まれていた。女一人で歩かせることなど出来ないという律儀な葵の意向に従い、二人はまた来た道を一緒に歩いていた。

「今日の夜はすごく暗いわね。なんだか不気味」

「ああ……月が出ていないからだ」

「本当ね。雲が隠しているんだわ」

真の闇が支配する夜は、やはりなんだか恐ろしい。声で怯えているのが伝わったのだろうか、闇の中、葵がこちらを見たのが気配で

わかった。

次の瞬間、右手に大きくて暖かくな感触が伝わってくる。

「葵・・・」

彼からこんな風に触れてこられたのは、久々だった。名を呼ぶ声に返事はないが、暗闇の中、なんとなくだが葵はこちらを見ている気がした。そっつけないが確かな優しさに、紫恋はつい嬉しくなつてその手をぎゅっと握り返す。すると繋いだ手は、なぜだろうか一瞬間まった後に、同じように握ってくれた。

どうやら、葵に嫌われているのかもしれないという変な勘ぐりはいらぬようだった。ほっと心の中でため息をついた後、再び彼に話しかけようと口を開く。

だが、言葉はさえぎられた。

風が薙いだ。大気の全てを切り裂くように。突如地から生まれるかの如く現れた突風は、紫恋の長い髪をばさばさと乱して舞い上げる。

思わず目を閉じた紫恋は、風が去ったのを確認した後そっと目を開け、髪をなでた。そしてふと気づく。周りが、やけに明るくなっていることに。瞬時に混乱して隣の葵を仰ぎ見て・・・紫恋は胸が、ずっと冷えたのがわかった。彼の、今まで見たことのない表情を目の当たりにして。

「うそ・・・だ・・・だって、もうしばらくは現れないって・・・」

彼の片手で覆った口が何かを呟いているのが聞こえた。それが何かを確認する前に、紫恋は彼の見ているものを追う。

見開かれた紫の眼に、それは鮮明に映し出された。

紫恋に全ての始まりと、全ての終わりをもたらすことになる、赤
く、まがまがしい光を放つ満月が――

第四話

目に映るものが、信じられなかった。その光景はあまりにも現実離れしすぎていて、日々当たり前のように夜空に浮かぶものであるからこそ、その色が違うだけで世界そのものが変わってしまったかのような激しい動揺に襲われた。

いつそ自分の目そのものがおかしくなってしまったと考えたほうが楽なのかもしれない。だが、その可能性は限りなくないに等しいというのは隣にいる彼の様子から見て判断できる。普段はいつも明るく笑顔でいて、何事にも動じない頼れる青年が、空を仰いで驚愕の表情をあらわにしているのだ。いや、ただの驚愕の表情ではない。その様子は驚きの入り混じった、ほとんど恐怖に近い表情だ。まがまがしい光に照らされた彼の顔は目がこれ以上はないというほどに見開かれ、口を覆う手も、すくみあがった肩も、小刻みに震えているのがわかった。それはあるいは、絶望の淵に立たされた者の表情か。何れにせよ、紫恋は彼のこんな表情を見たのは初めてだった。

どくどくと、心臓が鳴り出したのが胸を押さえずとも伝わってきた。手が麻痺したような感覚に陥って、頭が現実味を失いそうな錯覚に捕らわれる。これはたぶん、黒い闇に包まれていた上空を一気に夕焼けよりも赤く濃く血をぶちまけたかのごとく染め上げた赤い月を見てではなく、それを目にする葵を見てのことだ。

何かが、あった。もしくはこれから何かが起ころうとしている。それを知らせるのが赤い月であり・・・そしてきっと、葵はそれが何なのか知っている。

「あ・・・おい・・・？」

声が震えた。かすれもしたか。心臓の音がうるさくて自分の声もよく分らない。

「これは、なに？」

葵は一体何を知っている？なぜ月の色が赤いことで、そんなにまで怯える必要がある？そして――

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

なぜ、そんな目で自分を見る？

背の高い葵を仰ぎ見た格好のまま、紫恋は微動だにせず立ち尽くしていた。さつきまで彼と繋がっていた手は、今はもう離れてしまっている。紫恋の手を優しく繋いでくれた手は、今彼自身の口を覆っているのだ。目しかわからない彼の表情。この世の終わりとはばかりに月を凝視していたその双眸は、そろりと隣に立つ紫恋へと向いた。赤い月を見るのと、ほとんど変わらない眼差しで。

紫恋の背筋がぞくりと粟立った。限界だ。何か葵に喋らせないと、そうあせって、彼の腕をつかもうと麻痺した右手をあげる。だが、それよりも早く動いたのは葵の腕のほうだった。

突如ものすごい勢いで腕を掴まれ、その力強さに思わず息をのむ。そのままぐつと引つ張られて葵の顔が近づいた。

「家に帰れ」

単刀直入な言葉。だが彼のあまりの迫力に反応が出来なかった。言葉を失って立ち尽くす紫恋の姿を見て、ようやく葵は事の重大さに体が動いたようだった。

「家に帰るんだよ早く！お前の家に！紫苑のところに早く行け！！早くしないと連れさらわれるんだよ！！妹に一生会えなくなるぞ！！」

一言一言叫ぶたびに、葵は激しく紫恋の身を揺さぶった。紫恋を正気付けるように、また自分の焦燥をぶつけるように。

「赤い月が出たら紫瞳の娘は終わりだ」

さっきまでうるさいほどに鳴っていた紫恋の心臓の音は、今はしんと静まり返っていた。何を言われたのか理解できなかった。理解しなくなかったのかもしれない。だって葵が叫んだ言葉は、とても現実を受け入れられることではなかったから。

呆然と紫の瞳で見つめられた葵は、一度小さく舌打ちをした。これ以上言葉で言い聞かせても無駄だと判断したのだ。事は一刻を争う。

「来い！！」

いつもの彼からは想像もつかない怒鳴り声が紫恋の鼓膜を震わせて、痛いほどに腕を引っ張られた。凍りついたように固まっていた紫恋の足が前に進みだす。遠慮なく腕を掴み走り出した葵に引きづられるようにして走り出した。

暗闇は今や煌々と赤い月光に照らされており、迷うことなく走ることが可能だった。

腕を葵の手に締め付けられ、無茶な速さで走らされるうちに、徐々に現実を認識しだした頭。葵が、こんなにまで取り乱してあせるほどのことがこれから起こる。この足が行き着く先、紫苑の元に行つて、果たして目にするものとはなんだ。聞かされることはなんだ。紫苑に、一生会えなくなる？そんなことがどうして起こるというのだ。この赤い月が紫瞳の娘と何の関係があるというのだ。

心臓が再び狂いだす。それは走っているせいもあるだろうが、なによりあふれ出した疑問がとてつもない恐怖となつて全身をかけめ

ぐったからだ。

あどけない妹の、愛しすぎる笑顔が浮かぶ。お願いだから、無事でいて。この葵の行動が、ただの勘違いであって。今朝のような笑顔で自分を出迎えて。

心臓の限界など構わないほどに、気づけば紫恋は愛する妹に向かって、自分の力で全速力で走っていた。

ようやく立ち並ぶ家々が見えてきた。いつも当たり前のように過ぎてきた見慣れた村の風景は、赤い月光に照らされている影響でなんだかとても不気味で、恐ろしい妖怪が棲みつく知らない異界のようだった。だが村の様子がいつもと違うと感じた理由は月光のせいばかりではないことに、紫恋は村を見渡すうちに気が付いた。

外に、人がいないのだ。まだこの時間なら、いつもはおじさんたちが外で談笑している姿などがあるのに。この赤い月を皆不気味に思ったのだとしたら、外に出てがやがやと騒ぐ村の人たちの姿があってもおかしくはないのに。紫恋と葵が走る村の道から、人影はまったく見えなかった。

簡素な家々からは明かりが漏れているため、皆村からいなくなっただけではないのは分かる。だが、今狭間村は紫恋と葵以外いなくなったのではないのかと思うほどに、しんと静まり返っていた。どの家からも気配はあるのに人の声が聞こえない。恐怖心がさらに増大した。村の雰囲気そのものが、途方もない不安をあおってくる。さすがに走りっぱなしで足がぐくぐくと悲鳴をあげていたが、失速しながらも二人の足は止まることをしなかった。

赤い月光に目がおかしくなりそうになっていた時、明るい橙の炎がいくつかゆらゆらとゆれているのが目に飛び込んできて、二人の走る速さが一気にあがった。それは村人達が手にもった松明の明かりだ。結構な数の人々が、一つの家の前に集合していた。そこで、

紫恋は軽くめまいを覚えた。そう、村人たちが集まっているのは……紫恋の住む小さな家の前。紫苑が一人で留守番をしているはずの、姉妹の家の前だったのだ。

走り寄る二人の姿に気づいた村人達が、一瞬ざわりとどよめいた。息をのんだ者もいる。彼等の動揺がありありと伝わってきた。

震える手のひらを狂ったように暴れる心臓の上に置き、ぎゅっと硬く握り締めながら、紫恋は注目を一身に浴びながら彼等の前に進み出た。視線が意識せずとも泳いでしまう。近くで見たら、集まっているのは男ばかりだった。若い者はあまりいない。それなりに歳のいった、狭間の村の中心を担う男たちだった。厳しくもあるが、優しく思いやりのある人達がほとんどだ。だが、今日の前にしている彼等の姿を、紫恋は純粹に怖いと感じた。普段の彼等の豊かな表情を知っているからこそ、今日の前に立ち尽くしている彼等の、赤い月光と橙の炎によって照らされた、しかめられた苦渋の表情は、いつその恐怖と不安を紫恋に与えてきた。

「紫苑は」

男たちが立つその向こう側、閉ざされた家の扉を凝視しながら、紫恋は掠れた声で誰にというわけでもなく尋ねた。

「紫苑は中にいますか」

男たちの視線が、一気に自分から逸らされたのを感じた。それが、答えだった。

「紫苑は……どこですか」

重苦しい沈黙が降りた。松明の炎が鳴るぱちぱちという音だけが場に響く。そんな沈黙に、もはや耐える余裕などは微塵もなかった。

「紫苑をどこにやったの!？」

こんな声が自分から出るものなのかと、驚きたくなるほどの怒りに満ちた叫び声が響き渡った。その場の全員が肩を震わせ、息をのむほどに。紫恋は一人一人を睨み付けるようにして見渡した。そして、一步前に歩み出た一人の老人と向き合った。

「・・・村長」

「どうお前に謝ればよいのかわからん。わし等の行いはあまりにも非道であり罪深いことだ。謝って済むことではない」

「紫苑・・・は・・・」

「社だ」

「社? そんなはずはないでしょう。だって私たちはたった今社からの道を帰ってきて」

「山からの近道を使ったな」

葵が口にした言葉に、紫恋ははつと息をのんだ。そういえば社への道はもう一つある。川を越えるために遠回りとなるいつも使う道ではなく、山道を通る近道だ。だが、その山は誰もが立ち入りを禁じられている禁忌の山。その道を通るなど許されないはずだ。

「赤い月が出た今となつては、その道を通つても問題はない。だからあんたらは俺たちが帰つてこないうちに、紫苑を拉致して山道を通り、社に運んだんだろう? 紫苑を逃がさないよう監禁するために」

葵の怒声を含んだ追及の言葉に、下を向いた村長の額のしわが一層深くなる。

「何が起きているの? 紫苑を、監禁?」

自分一人がおいてきぼりだ。ここにいる誰よりも当事者であるはずなのに。

混乱する紫恋に、やがて村長はうつむいたまま言葉を吐き出した。

「赤い月が狭間村の上空に昇った時、掟に従い紫の瞳を持つ娘を山の神へ生贄に捧げること。それが、古来よりこの村に言い伝えられてきた事であり、実際に行われてきたことだ」

「な・・・？」

「そうせねば村が滅びる。遙か昔、一度その掟をやぶろうと試みた時、村は幾度にも及ぶ大震災に苦しめられたという。娘を差し出した途端に、地が暴れることは一切なくなったと」

「・・・だから？だから、今こうして赤い月が出たから、紫苑を生贄に捧げよう？」

村長はこれ以上ないと言うほどに歪めた苦しげな表情をして、その場に膝を折って手をついた。

「すまない紫恋。この通りだ」

村長にならって、次々に男たちが膝を折る。だが、霞み始めた紫恋の視界には、それらの光景はもうどうでもいいものにしか映らなかった。紫恋はゆっくり後ろを振り向く。後ろに青ざめた表情で立つ、葵を仰ぎ見た。

「知ってたのね？葵。ずっと前から」

「紫恋・・・」

「この紫の瞳が示す意味を、あなたは知っていたのね。知ってて、ずっと黙っていたのね」

「俺、は、」

「葵」

涙がまっすぐ頬を伝って、赤く染まった土に落ちる。

「巫女姫様のところに連れて行つて」

葵はもう目を見えてくることはなかった。暗く沈んだ表情で、わかった、とだけ返事をして歩き出した。向かう方向は、生贄を求める残酷な神が棲む禁忌の山。彼の広い背中を見つめながら、紫恋は彼の後ろを付いて歩いた。もう二度と、彼と笑いあうことはないだろう。そう考えると、紫苑を思ふのと合わせて涙は止まらなかった。

さつきまで、笑顔で衣装合わせをしていたのが嘘のようだ。昔から馴染みのこの社の建物に足を踏み入れた心地は、今や敵陣に独りで乗り込む武士と同じものだった。紫苑を自分から奪おうとするもの。それはどんな理由があれど、誰であろうと敵に違いなかった。そなたを認めます、つい先ほどそう仰って微笑んでくださった、敬愛なる巫女姫様。今、自分が彼女に抱く感情は何だ。そして彼女が、同じ紫の瞳を持つ彼女が、この赤い月を見て思うことは何なのだろう。

和やかに衣装合わせが行われたその部屋で、再び紫恋は巫女姫と向かい合う。どちらも暗い表情で、重い雰囲気纏って。

「紫苑は今どこにいるのでしょうか」

「この社のはずれにある地下牢に運びました」

「……地下牢なんてものが、この神聖なる社に存在していたのですか」

「ええ、ずっと昔から。生贄に選ばれた紫瞳の娘を捧げる日まで閉

じ込めておく、そのためだけにつくられた牢です」

ぎゅっと、震える手で着物のすそを掴む紫恋。

「巫女姫様！私は今まで何も知りませんでした。紫瞳の娘が、そんな恐ろしいさだめを背負って生まれてくるものだったなんて！誰も教えてくれなかった、誰も助けてくれなかった！みんな、みんな私たち姉妹に優しくしてくれたけど、それは心の中ではこの村から生贄を逃がすまいという思いがあつたからなのでしょう！？」

「落ち着けというのは無理な話でしょうが、少し心を静めなさい、紫恋。気持ちは私には痛いほどわかります。私も事実を知った時の衝撃は拭い去れないほどでした。紫恋、紫瞳の娘に事実が告げられないのはいつの時代も同じなのです。私も娘時代は何も知らずに修行に励んでいました。知らされたのは、前巫女姫から正式にその地位を譲り受けた、もう生贄に捧げられるには無理がある程に歳をとった頃のことでした。ですが紫恋、それは誰を恨むことも出来ないのです。紫瞳の娘が村から逃げてしまい赤い月が出たら、狭間の土地だけではなくこの辺り一帯の土地すべて・・・いやもしかしたらそれ以上の範囲にまで天災が起こり被害が出る。それを避けるためには、紫瞳の娘には何も知らせずに安穩とした日々を与えておこうと考えるのが当然の流れなのです」

「狭間の土地や人々が、滅んでほしくありません。ですが・・・こんなの、あんまりです。到底受け入れられることじゃありません。もう、何もかもが信じられない。何を大切に生きればよいのか分からない。人も生活も、狭間の巫女としてのありかたも」

「村の人々は、決してそなたたち姉妹を、紫瞳の娘だからという理由だけで大切に扱ってきたのではないのですよ。皆、心優しいそなた等自身に惹かれて周りに集まったのです。実際、紫瞳の娘についての真実を知っているのは村の中でもごく少数。中心となる年嵩の男たちや、私に仕える数人の女たちだけです。その彼等だって、決

してそなた等に下心があつて親切にしていたのでありません。・・・
・従来通りであれば、まだこれから数百年は赤い月が出るはずがなかったのですから。そなたの代でこの事態が起こることは、まず間違ひなく有り得ることではないと私含め皆が思っていたのです」

「・・・前回赤い月が現れたのは、そう遠くない話なのですか」

呆然としたままそう尋ねると、巫女姫はその問いに、なぜかしばらくの間をおいた。

「巫女姫様？」

「・・・そう、ですね。そのように・・・聞いて、います。ですからしばらくは心配は要らないと、油断していました」
「それなのに・・・もう、現れてしまったのですね。神様は、あまりにも貪欲すぎるわ」

神様を信じ奉ること。それが出来ないで巫女になれるはずがない。だから自分は、もうこれからどれだけ修行に身を鍛えようと、巫女姫になどなれはしない。なる資格などない。神様を、恨み憎む者がどうして朱の袴をはけようか。

「・・・巫女姫様、どうしても、生贄を捧げなければならないのですね」

「はい、どんなに辛かろうと、もはやそれは逃れられない宿命なのです。紫苑を捧げ物とすることは、私だって身を裂かれるように辛い。実の娘のように思ってきた、愛しい子です。ですが、数千数万の命の危機にはかえられない。どうしようも、ないのです」

この状況で、二人紫瞳の娘がいるにもかかわらず当然のように紫苑が生贄に選ばれた。その理由は、深く考えずともわかること。紫苑が普通より体が弱くて、巫女姫の跡継ぎとしては心もとないから

だ。だから幼かろうが構わず連れ去られ、牢に閉じ込められた。今頃、どんな風に泣き叫んでいるのか容易に想像が出来る。その声が、耳に届いてきたような気がした。

これで全てがまるく収まると誰もが思っていることだろう。紫恋さえ丸め込んでしまえば、また平穏な日常が続いていくと思っっているのだろう。だが、残念だがそれはありえない。巫女姫も村の人たちも、大変な誤算をしている。

紫恋が、素直でまじめな性格だから巫女修行をまじめにおこなってきたのだと思ったら大間違いだ。紫恋の行動の全ては、元をたどれば妹の為に行き着くことだと、本当に理解している者など果たしているだろうか。きっと、いないに違いない。紫苑の存在があるから紫恋は巫女でいられたのだ。巫女姫を志していたのだ。それを、理解していないから、皆紫苑を捧げるという結論を出してしまったのだ。

一度、紫恋はまぶたを伏せて呼吸を整えた。今、己の中で出た一つの答えとそこから生まれた選択に、胸中でうなずいた。

ずっと、無言で立ち上がった紫恋を、巫女姫は怪訝な顔で見上げた。だが、次の瞬間、それは驚愕と焦燥の色に変わることになる。

「やめなさい紫恋!!」

その叫び声に、万が一に備えて廊下で控えていた男衆が部屋に足を踏み入れた。だが、皆直後に目にした光景に体が固まった。

「動かないで」

紫恋の鋭い声音に、場の時が止まった。

立ち上がった紫恋の右手には、銀色に輝く鋭い小刀が握られている。そしてその切っ先は、紫恋自身の白い首筋にあてがわれていた。この小刀は巫女姫が紫恋に護身用に与えた物で、紫恋がいつも懷に

隠し持っていた物だった。

「なにしてんだ紫恋！死ぬ気か？」

乗り込んできた葵が一步前に進み出たが、じろりと紫恋が睨んだ瞬間足が止まった。

「死ぬ気はないわ。まだ、ね。でも巫女様様が私の願いをお聞き届けにならないのなら、私はここで死ぬことになる」

「何ですか、その願いというのは」

「生贄の変更」

そう告げた瞬間、巫女様は目をまん丸にして息をのんだ。

「まさか・・・そなた、本気で言っているのですか」

「本気です。妹を犠牲に自分は生き延びるなんて、私には絶対に出来ません。差し出すなら、私の命を差し出してください。生贄には私になります。それが駄目だと仰るなら・・・今、この場で首を斬って死にます。困りますよね巫女様？紫苑も私もいなくなったら、跡継ぎがいなくなりますもの」

言ったことに、後悔の念は微塵もなかった。

「さあ、どうなさいますか」

首筋に伝わる刃の冷たさにあわせるように、部屋の空気が凍りついた。

第五話

一歩足を進めるたびに、両足首を繋ぐ鎖がぴんと張って音を鳴らす。少し腕を持ち上げて、頬を伝う温かいものをぬぐえば、重い両手首の枷が目の前にさらされて、この身が囚われ人となったことを思い知らされた。

剥き出しの石でかためられた地下牢の壁。冷たい印象を伝えてくる大小さまざまな石壁は、いったいどれだけ昔に造られたものなのだろう。ところどころ表面が剥がれ落ち、鋭利にとがった部分が垣間見れる。果たしてこの地下牢には、今までに何人の紫瞳の娘が入れたのだろうか。何人の娘の泣き声を響かせたのだろうか。

格子が張り巡らされている以外の三面の壁を、立ち尽くした状態で涙でかすんだ目で見渡した。壁の状態のわりには、この地下牢の内装は案外綺麗にまとめられており、罪人がぶち込まれるような劣悪な環境ではなかった。必要最低限の物しか置いてはいないが、ぼろぼろに風化したものなどは見受けられない。たたまれた布団も、汚れも破れた箇所も見られない。敷かれた畳の上にも塵などなく掃除もきちんと行き届いているようだった。神へと捧げられる哀れな娘への、せめてもの心遣いなのだろうか。

明かりのない牢の中だが、夜でもここまで室内がよく観察できるのは、一つだけある窓から、煌々と月光が差し込んでいるからだ。地下牢とはいえ、この部屋はすべてが土の下にあるのではないらしく、半分より少し上くらいからは地上に出ている造りの様だった。手を伸ばしても届かないほど高い所に、小さな窓が一つぽつんとあいている。よじ登れるような足場もなければ、あんな狭い窓からじゃ頭を通す事だって出来はしないだろうに、ご丁寧に格子がきつちりと取り付けられていた。

赤い月の光が、牢の中に満たされる。少女の線の細い輪郭も、赤い光に浮かび上がる。

手枷を持つ村の男に自ら両腕を差し出し、自らこの地下牢に足を踏み入れた、たった十六の少女は、格子の隙間をぬって見つめてくる赤く輝く月を見上げた。

現実感を失った、けれども己の選択に後悔の念は微塵もない、冷え切った頭。いつも新たな一日にきらきらと好奇心に輝いていた瞳は、今はただ赤の球体を映しているのみである。

凍りついた表情に、伝う一筋の涙。まるで命を宿した人形のようなその姿を、赤く照らす月はいったいどんな思いで見下ろしているのだろう。まがまがしいその姿にみあった、残酷な笑いを必死に堪えて、夜の静寂を保っているのか。

ならば、こちららも笑ってやろうではないか。そんな不気味な姿を晒されたところで、こちららもう、迷ったりなどしない。逃げ出そうともがく事も泣き叫ぶこともしない。

「私は、幸せだから」

紫恋は口角をあげて笑った。涙が襟元に落ちて染み入った。

「紫苑を守れて、紫苑の未来が繋がって、私は、幸せだから。大事なものを守れるならば、死ぬのは辛いことではないの」

それでも、涙は頬を伝いつづけた。でもこれは、決して後悔や恐怖からではない。ただ・・・さみしい、だけだった。愛しいたった一人の妹に、もう会えないのだと思うと。最後に見た紫苑の顔が、笑顔ではなく涙でぐしゃぐしゃになった顔だったのが、どうにも心残りだ。

紫恋は俯いて手のひらを見つめた。まだ、あの子のぬくもりが残っている。きつと死ぬまで、消えはしない。忘れはしない。ぎゅつと、きつくとどめるように、手のひらを握り締める。

「紫苑………っ！」

そなたには、負けました。

凍りついたあの場所で、巫女姫はそう呆然と呟いて、力なく座り込んだ。その瞬間、場にいた男たちが一様に息をのものが伝わってきた。生贄の選択は、代々巫女姫にゆだねられている。巫女姫が生贄の交代を認めたら、それに反発することは許されない。皆、紫恋の存在の重要性をわかっていながらも、紫恋を神に捧げるしかない。折れかかった巫女姫にすぐに反論することはその瞬間可能だったのだろうが、しかしその場で声を発する者はおらず、ひたすら沈黙が降りた。

紫恋の今すぐ首を斬って死ぬという言葉が、ただの脅しではないことは、紫恋の表情を見れば誰の目からも明らかだった。紫の瞳は動揺にゆれていない。自分の命を投げ出す覚悟と、妹を守り抜く意志とで、鋭く輝きまっすぐに巫女姫を見つめている。

紫恋、と震えた低い声が沈黙の中からあがった。その方向に視線を向ければ、顔を真っ青にそめた葵の姿が目映った。葵、と名を呼び返し、紫恋はようやく首から小刀を離して、彼に向かって、笑いかけた。

「ごめんね」

「………っ！！ふざける……」

葵が片手を前に突き出し一歩足をふみだした。次の瞬間、彼は男たちによって取り押さえられ、床に頭を打つ音が響いた。這い蹲る姿勢になりながらも、彼は半狂乱のように叫んでもがき暴れた。

「離せ……！！離せふざけるな！！なんで紫恋なんだ！なんでよりによって紫恋なんだよ！！冗談じゃないってんだ！それじゃないっ
たい何のために十一年前紫恋のはは——」

強く殴打する鈍い音があまりにも痛々しく耳に届いた。頭をがっくりと床に落として、葵はそのままうめき声ひとつ、身じろぎ一つすることなく気を失った。そうして男たちに部屋の外まで引きずられていく。紫恋はただ、胸中でごめんなさいと謝罪の言葉を繰り返しながら、ぐったりとして運ばれていく葵の姿を見送った。

きつと、彼と話をする機会はまだ二度とないのだろう。今まで無邪気に慕ってきた分、彼が生贄の秘密を黙っていたという事実には傷つけられた。だがしかし、それは紫恋に怯えた暮らしをさせないようにするための、彼の思いやりであつたのだと、理解できないわけではない。こうして最後にあがいてくれたのは、生贄の可能性を秘めた娘だから大切に扱ってくれていたのでは決してないのだと伝わってきた。恨みたくなどない。恨むことなど、できない。この村で出会った全ての人々、全ての思い出を、何一つ恨まずに、幸せであつたと胸を張って逝きたかつた。

「……紫苑をここへ」

巫女姫が、あきらめきつた、絶望したかのような声で指示を出した。

まもなくして、騒々しい足音が響いてきた。静寂を重んじるこの社で、こんな走る音を聞く日がこようとは思わなかった。

「お姉ちゃん!!」

ああ、やっぱり予想通りだった。両目から涙を拭いきれないほどにぼろぼろ流して、大きくしゃくりあげながら、小さく頼りない体がこちらに向かって走ってくる。両手を広げて、紫恋は胸に飛び込んできた妹を受け止めて、ぎゅっと強く抱きしめた。がたがたと目に見てもわかるほどに紫苑は震えていた。いきなり家に男たちが押

し入り連れ去られて、地下の牢屋に入れられて、どれだけ怖い思いをしたのだろう。せつかく直りかけた体調が、また悪化してしまうかもしれない。

「やだ、やだやだやだやだお姉ちゃん！お姉ちゃんがなくなっちゃうなんていやだ！ぜったいいやだああ！！どおしてどおして！？ずっと一緒にいるってお姉ちゃん言った！ずっと紫苑のそばにいるよって・・・なのに、なんでえ・・・」

しゃくりあげてところどころ言葉になっていないままに、紫苑は混乱を必死に伝えてきた。どうやら真実は簡単ながらも説明されているらしかった。だがとうてい、幼い妹に理解できる話ではないだろう。むしろまだ、全てを知るには早すぎるのかもしれない。しかし受け入れてもらわなければならない。これから紫苑の人生は続いていくのだから。ここからが、新たな紫苑の道の始まりなのだ。

「お姉ちゃんは、紫苑が大好きよ。いつだって、どんなときだって紫苑が一番大好きなのは変わらないの。紫苑が怖い目にあわないようにするためなら、お姉ちゃんは何だってできるのよ。そのために離れ離れになっちゃうのは寂しいかもしれないけれど・・・でもね、お姉ちゃんはどこにいたっていつもいつも、紫苑のことばかり思っているから。紫苑がもう二度と、怖い思いをしないように、苦しい思いをしないように、神様に直接お願いしに行くから。ずっと、お姉ちゃんは紫苑を守り続けるからね。心は、絶対に離れないから。姿は見えなくてもいつだって紫苑の傍にいるから。だから紫苑、生きてね。ここで、たくさんの人の手をとって生きてね。自分の道に迷っても、命を迷ったりはしないで。紫苑の命は、疑う必要もないくらい、尊くて大事なもののよ」

紫苑は顔をぐしゃぐしゃに歪めて、姉の、涙をこらえた表情を見

つめていた。まだ子供であろうと、紫苑にだってこの与えられた言葉の意味は理解できる。だが、まるめこむような優しい言葉は、幼い心に釈然としないもやもやと悲しみと罪悪感をもたらしただけ。それは紫恋が、紫恋自身の人生を考えていないからにほかならない。守るという言葉を、紫苑は受け入れられなかった。頷くことなどできなかった。なにかが激しく間違っている。そう紫苑は感じて、違和感を言葉にすることはできなくて、ただ嗚咽をもらすだけだった。首をいやいやと横に振り続ける紫苑の頬に手を当てて、紫恋は溢れ出る妹の涙を拭った。もう自分は、二度とこの子の涙をふいてあげることが出来ない。この子が、自分で他の誰かの手をとってくれるのを祈るしかないのだ。震えながらぎゅっと襟をつかんでくる小さな手に視線を落として、紫恋は気付いた。十一の少女とは思えないほど細く小さなつくりをした腕、その手首は、うつすら青く変色していた。きつと手枷をはめられていたのだろう。弱く傷つきやすい紫苑の皮膚は、ちよつとのことですぐに痣になってしまふ。

か弱いこの子を残していかなければならないのは辛い。この子を守るのは、いつだって自分だった。何にかえても守り抜くのが義務と思ってきた。たとえ、命にかえてでも。それは、記憶をなくし新たに生まれ変わった五歳の時からずっとそう。生まれたばかりの紫苑を、心の奥そこで眠った『何か』が、守りなさいと本能にうったえかけてきた。

この手を離して紫苑はどこに行くのだろう。どこに行きつけるのだろう。きつとたくさん泣いて、たくさん苦しむことになる。けれども、生贄に自分になるという決意は少しも揺らぐことはないのだ。

「ごめんね、紫苑。悲しい思いをさせてごめんね」

細くやわらかい紫苑の髪の毛を、優しく梳いた。何度も何度も、髪感触を覚えるように梳くうちに、だんだん自分の目に涙が溜まってくるのがわかった。だから、紫恋は立ち上がった。これ以上の悲

しみを伝染させないために。

「・・・・・・・・」

涙に濡れた紫の瞳が、呆然と見上げてくる。もう、直視ができなかった。見たら、堰が切れてしまう。くると後ろを向いて、紫恋は歩き出した。牢まで案内する見知った村の男の手が、そつと背中にあてられた。

「・・・・・・・・ずるいよ」

足が止まった。

「ずるいよ、お姉ちゃん」

独り言のような、かすれた呟き。泣き叫んで駄々をこねられるより何倍もの破壊力がそれにあつた。堰が、切れる。もう振り向けない。

「さようなら紫苑」

冷たい石が積み上げられた壁を見つめて、崩れるように体は折れた。

紫瞳の娘が神へ捧げられるのは、赤い月が、また一段と赤くなる三日後の晩だそうだ。涙の別れから、二番目の夜が訪れた。二晩しか経っていないというのに、なんだかとても遠いことのように感じた。

事件がおきたのはその晩のことだった。

頭まですっぽりと布団をかぶり、顔だけ出した状態で、紫恋は壁にもたれかかって上の窓をじっと見上げていた。時のたつのを唯一知ることの出来る小さな窓からは、昨日より一段と赤く輝きを増した月がのぞいている。いよいよ明日、山の神様へ捧げられる。世界はそのことをわかつていっているのだろうか、おちつかなげにざわざわと木々をゆらして騒いでいた。

布団のはしをきゅっと掴みなおす。重たい手枷がうつとおしい。逃げる気がないだからこんなものは必要ないのに。これもまたしきりの一つなのだろうか。

紫苑は今どうしているのだろう。そればかりが頭をよぎる。これで唯一の巫女姫候補となったのだから手荒に扱われているわけはないだろうが、もとより丈夫な体ではないのだから、精神が病んだら外にも影響が出ていないか心配だった。

風のうるさい音で独りの寂しさと多大なる不安をまぎらわしていた時、突如、牢の外から人の声が聞こえてきた。それに敏感に反応し、そちらに意識を向けて耳を澄ますと、どうやら地下牢に下りるための入り口で番人と誰かが言い争っているらしかった。その口論は長くは続かず、やがてなにやら殴るような物音が聞こえて、一瞬しんとなる。そして直後、かつかつと地下牢に続く階段を下りてくる何者かの足音が聞こえてきた。おそらく番人の男ではない。布団を掴む手をきつく握り締めて、紫恋は身構えた。

侵入者が牢の格子の前に立つ。明るい赤い月光に照らされた人物の正体に、あつと紫恋は驚き、同時に戦慄した。

「葵……！」

それは間違いなく、葵だった。興奮気味に息をきらし、彼は格子に片手をかけた。彼のもう片方の手には、なにか太い棒……。おそらく丸太のようなものが握られていた。それですぐに状況は察せら

れた。葵は、番人を殴り気絶させたか、あるいは殺して、紫恋に会いにきたのだ。後者でないことを祈りたいが、どちらにせよ大変なことをしでかしたことにわりはない。

「葵、あなたなんてことを」

「どんな罰則も覚悟のうえだ。どんな目に遭おうとも、お前にあって伝えなきゃならないことがあったんだ。お前が命を投げ出してまで紫苑を守ったっていうのに、俺が罰則を恐れててどうする」

「葵まで巻き込むつもりはなかったのに・・・」

酷い目に遭うのは、自分だけであってほしかった。しかし葵は、それを聞いて顔を歪めて、格子を叩いた。

「お前はっ！何でこんな状況でまでそんなことが言えるんだよ！？
なんでお前は・・・お前、は、こんな時まで人のことばかり・・・」

ずりりと格子を支えに、葵は力なく座り込んだ。紫恋は被つていた布団を剥いで俯く彼に歩み寄った。格子の隙間からそつと手を伸ばして、彼の頬に手をそえる。すると葵は凶器を手から離し、空いた手のひらを紫恋の上に重ねた。

「最後まで心配してくれてありがとね葵」

「礼なんか言うな！！俺に礼なんて言わないでくれよ紫恋！俺にはそんなもの言われる資格なんかないんだ。今までずつとずつと、お前に何もかもを隠してきた。巫女姫の孫って立場で聞き知った、この村の秘密もお前ら姉妹の秘密も全部全部。なんで礼なんて言うんだ。頼むから恨んでくれよ。恨まれなけりゃ俺はどうやってお前に謝ればいいのかわからないじゃないか」

そうか、葵はわざわざ謝罪をしにくれたのか。あんな混乱の中で、まともに言葉も話さず別れたのがどうしても心残りだったのだろ。しかしここまでやってきてくれた事実とその打ちひしがれた姿が、どんな謝罪の言葉よりも彼の罪悪感を伝えているようだった。

「わかってるよ、葵。言わなくたって、わかってる。葵が優しくしていただって私たちのことを考えてくれていたこと、ちゃんと知ってるから。確かに赤い月が出た始めは、戸惑って葵のことを疑ってしまっただけけど……でも、もう充分葵の気持ちは伝わったから。私たちの幸せを守ってくれてたのよね、だから、お礼をいうわ」

「ごめん紫恋……お前の代で生贄の要求があるなんて思ってたんだ。今さらいいわけじみたこと言いたくはなかった。だけど、ごめん、紫恋。助けてやれなくて、ごめん。黙ってて本当にすまなかった」

葵の頬にそえた手に葵の涙が伝い落ちた。思えばこれが、初めて彼の涙を見た瞬間かもしれない。葵は、泣かない人なのだと思っていた。いつも笑っている人だと思っていた。その彼をこんな顔にさせているなんて、自分のほうが彼によほど酷い仕打ちをしているようにも思えた。

「紫苑は今どうしているの？」

「俺の家で預かることになった。涙が枯れ果てるくらい毎日泣いて臥せってるけど、安心しろ。体調自体が悪化してるわけじゃない」
「そう……よかった」

葵は俯いていた泣き顔をあげて、喉を震わせながら紫恋の瞳を見つめた。

「お前が好きだ、紫恋」

「葵・・・」

「ずっと昔から、お前のことが好きだ。誰よりも大切だった。どう接していいかわからなくなっただくらい、お前のことが好きだ」

「ありがとう、葵。私も、葵のことが好きよ」

「・・・ばか・・・そういう意味じゃなくってさあ・・・」

重ねられた手が熱をおびる。流れ落ちてくる涙も、温かい。

「俺はお前とずっと一緒に生きていきたかった。お前に、一生俺の隣にいてほしかった。たとえ妹が一番だったとしても、それもひっくるめて俺はお前を愛して守って、俺の力で幸せにしてやりたかった」

そうか、そういうことだったのか。本当に、いまさら気づいた。きっとそれは、親友の千世が小悟さんを想う気持ちと同じものなのだろう。

「ごめんなさい。私、全然気づかなかった。だって葵は、近くにいてくれるのが当たり前な人だったから。兄妹みたいに慕うのが当然の存在だったから。だから考えもしなかったの。ごめんね、ごめんなさい。私、葵のこと好きだけど・・・でもどうしっただって、やっぱり紫苑のことが一番大切なんだわ」

こんなに泣いている葵を前にしても、自らの選択に後悔することできないのだ。やはり酷いのは葵ではなく自分だ。

「私は紫苑を失ったら生きていけないの。過去が空虚となった時、私は紫苑だけが心の支えだったの。その時から紫苑の存在が私の総てなの。紫苑のいない世界に私は今さら生きられないし価値を見出

せない。けどあの子は違うわ。きつともつと広い世界を生きることが出来るはずよ。今まで狭いかこの中にいたあの子は、これからいくらでも羽ばたいていけるはずよ。だからこれからどうか葵の想いを、紫苑に与えてあげて。あの子はまだ、一人では立ち上がれないから。私の分まで紫苑を愛して、守ってあげて」

肩を大きく震わせながらも、葵は何度も頷いてくれた。だからもう、何も思に残すことはない。きつと紫苑は、葵に支えられながら生きていけるだろう。

「・・・最後に巫女姫様にもお礼を言う機会はあるのかしら」

ふと思いついた言葉だったのだが、それを言った瞬間葵がはっと息をのんだため、思わずこちらも息を詰めた。

「紫恋、お祖母様に礼なんか言うな。俺が言う権利なんかないとは承知の上だが・・・お祖母様にだけは礼なんか言うな。お前はたぶん、誰よりもあの人を恨むべきなんだ」

「何言ってるのよ葵！あの方は、狭間を守ってきた巫女姫様で、なにより私の悲惨な過去を、母の自殺の記憶を封印してくだつた恩人なのよ!？」

「嘘なんだよ紫恋!!」

突如声を荒げて格子を叩く葵。びっくりと、声が喉の奥でとまった。

「全部全部嘘なんだよ！お祖母様がお前に教えた五歳前の過去は、全部村にとって都合がいいように塗り替えられた嘘なんだ。あの人はお前等姉妹がこの村から逃げ出さないように、十一年前真実を知ってしまったお前の記憶を消して村に繋ぎとめたんだよ！なにが母親の自殺の記憶を消してくれた恩人だ!!嘘ばかり教えやがって

「！！違うんだ紫恋、お前の母親は自殺でいなくなっただんじやない。お前の母親はお前が五歳の時、紫苑を産んですぐお祖母様……に――」

一気に言葉をまくし立てていた葵の言葉が、突然きれた。そしてずるずると葵の体が格子にもたれかかって倒れていく。紫恋は、反射的に鼻を覆った。いつだったか嗅がせてもらった覚えがある、甘ったるいにおいを感じとったからだ。それは巫女姫に教えてもらった、遠くの地より取り寄せたという催眠の効能を持つ香だ。

目を見開いて、紫恋は葵の背後より現れた、香と蠟燭を持つ巫女姫と向き合った。

「……我が孫ながら愚かなことよ」

「巫女、姫、様……葵は、ただ私のために……どうか厳しい処分は……」

「村人たちの手前、お咎めなしというわけにはいきません。ですが、この子にはこれから紫苑の擁護を任せるつもりゆえ、行き過ぎた処罰はしないつもりです」

ゆらゆら揺れる蠟燭の火に照らされた巫女姫の厳しい顔が、座り込む紫恋を見下ろしている。気まずい沈黙が訪れた。いったいいつから巫女姫はいたのだろう。話をどこまで聞かれたのだろう。

「……失った真実を知りたいか、紫恋」

どくと紫恋の心臓が高鳴った。

「全ての記憶を取り戻して召されたいのなら、私はそなたの記憶の封印を解きましょう」

失った父母の記憶を取り戻せる。紫恋の心は揺れた。さつき葵が言っていたことが本当なのだとしたら、母が目の前で自殺したというのは嘘であり、記憶を取り戻しても心が壊れてしまうことはないのかもしれない。だがもし・・・それと同じくらい、もしくはそれより酷い過去だったとしたら？

紫恋はこくりと唾をのんだ。ある一つの、途方もなく恐ろしい可能性を見出してしまったのだ。葵が眠る直前に言った、十一年前すでに紫恋が生贄の真実を知っていたということ、それから紫恋の母親は自殺ではなく、巫女姫様に・・・と言いかかった言葉。そこから予想されること。

——母親は十一年前、姉妹をつれてこの村を逃げようとして、殺されたのではないか？娘たちが生贄となる可能性を持つのだという真実を知って、助けようとしたのではないか？しかし見つかって殺された。そう・・・巫女姫の手の者に。そして紫恋は、巫女姫に記憶を封じられて、村に留められた・・・
紫恋の沈黙を了承と受け取った巫女姫が、そつと手をのばしてきた。記憶の封印が、解かれる。

「いいえ、巫女姫様」

伸ばされた手が、止まった。

「けっこうです。私はなににも知らないまま逝きます」

「な・・・なぜ」

「私は、貴女が好きですから。貴女を、ずっと尊敬していましたから。この気持ちを、醜く変えて死んでいきたくなどないのです。最期まで貴女のことを好きでありたい。恨みたくはないのです」

そう、真実も大切だけれど、それでも愛してしまうのが今の気持ちなのだ。

「巫女姫様。私は、幸せでした」

しわの刻まれた彼女の目が見開かれる。その目から、光るものが一筋流れた。そして彼女はこちらに背を向けて去っていく。

「・・・また、その顔その声で、その言葉を聞く事になろうとは」

その巫女姫の呟きは、果たして誰のことを言っていたのだろうか。

だがもうどうでも良い。最後に彼女の涙が見れた、それだけで満足だった。過去に何があったとしても、彼女が自分のために流してくれたあの涙は嘘ではない。大切に、思われていた。それがわかれば充分だった。

第二章 鬼神と七鬼

一段と濃い赤へと姿を塗り替えた月が、厳かに世界の空気を支配する。昨夜まで落ち着きなく木々を揺らしてざわめいていたのが嘘のように、世界は静まり返っていた。

重い夜だった。そう、初めて赤い月が出た日の夜によく似た、胸が締め付けられるような息苦しい夜だ。

「・・・・・・ああ」

上座にて、脇息に片膝をつきもたれかかった一人の青年が、嘲笑まじりのためいきをもらした。うなじに届くほどの長さの髪が、主の造り物めいた玲瓏たる顔をさらりと流れた。頭にすえられていた手が顔を覆い、彼の表情を下座に座る面々から隠した。それでも、下座にて彼を凝視する四人の目からははつきりと判断できる。彼は、口の端をつり上げて酷く冷淡な笑みを浮かべているのだ。

「来たな」

男のものとは思えぬほど美しく長い指の隙間から、漆黒の瞳が妖しい光をおびて輝く。他の四人の表情が、それぞれが抱える思いに従い微妙に変化した。それは各々少しずつ違うものではあれど、どれも緊迫した硬い表情であることに変わりはない。

「じゃ、迎えが必要だな」

下座に座る、燃えるような赤い髪の方が声を発した。

「俺が行く。いいよな？」

一応問いかけではあるのだが、男は上座の人物が返事をする前にとつとあぐらの状態から立ち上がった。

「白水仙^{しるすいせん}」

上座の青年の視線が、すぐ近くに腰を据えた真白い男へ向く。

「お前も行け。想真^{そしん}一人にまかせておいたら何をしでかすか分からないから」

「かしこまりました」

名指しされた男は一礼し、背中を流れる純白の長髪を揺らして立ち上がった。先に立ち上がっている赤い髪の男は舌打ちをし、彼の、白髪とさほど差のないほどに白く透き通った肌の女のようなつくりの顔を、忌々しそうに一瞥した。

「信用ないな。んな心配しなくたって、贅姫^{にえひめ}はちゃんとこの城に、あんたのところに連れて来るさ」

「泣き喚く女に情が移って逃がすかもしれないと懸念されているでしょう」

「馬鹿にすんのも大概にしてくれねえかな白水仙」

紅い瞳がじろりと氷色の硝子のような瞳を睨みつけた。口調は意識したようなおどけた風ではあるが、表情のいらだちは抑えきれていない。

「贅姫に情が湧くことはそりやあるだろうさ。だが贅姫の意思と世界の均衡、どちらが大切かなんざ考えるまでもなく答えは出てる。そんなこともわかんねえ奴がどうして鬼導^{きどう}の名が名のれる」

「なるほど、それはそれは結構な心構えで。非礼を詫びましょう」

穏やかで優しい口調は、より一層赤髪の男をいらだたせた。

「くだらない口論をしている暇があつたらさつさへ行け」

冷やかな上座からの声に赤髪の男はもう一度舌打ちをして、足元に横たわる、黒い布で包まれた刀を持ち上げた。

「私も行くわね」

「お前はここで待て」

「はあっ！？どうしてよ」

発言を一瞬で却下された女は、その美貌をためらいもなく不満をありありと表す形に歪めた。

「深艶^{みえん}、お前は後宮に戻って仕度を整えろ」

「仕度って・・・」

「決まってるだろう。今宵、生贄の娘を迎えるための・・・な」

女の表情がさらにいまいましそうに歪んだ。迎える。彼のその言葉がそれだけの意味に納まるものではないことを、彼女は充分理解できていた。ただ後宮の一室に入れるという意味合いではないのだ。その、先がある。女として、同じ性別であるからこそ、彼女にとつてこれからやってくる娘を陥れるまねをしなければならぬのはどうにも辛いことだった。

「・・・全部終わったら、牢に繋いだ二人をとつと解放しなさいよね」

「お前に言われなくてもそのつもりだ。桜里^{おうり}、お前にいたっては言

「う必要もないな」

「・・・はい」

幼い少女の声が、歳を分からなくさせるほどの無感動な様で返事をした。

下座の四人が動き出す。己の役割を遂行するために。

「ああ、待つて待つて。僕も行くから」

この本殿ではめったに耳にする機会がない声がかかった。四人の動きが一斉に止まる。上座の青年の目がずっと細まり、突如どこからともなく現れた彼の姿を睨みすえた。

「鬼導として僕も行かないとね、新たな贅姫をお迎えに。異論はないよね？^{みつき}魅月」

につこりと、上座から向けられる鋭い視線をまるで気にしていない様子で彼は微笑んでいた。柔らかい空気を纏ったような雰囲気、だがしかしそれだけではない何かを彼は背後に背負っていた。

「・・・好きにしろ」

一層冷淡に、はき捨てるように上座の青年はそう言って、頬杖をついたまま横を向いた。

「とにかく早く連れてこい。そうして・・・全てを早く終わらせるんだ」

赤い月の光に照らされた夜の山道を、一行は列を成して進む。松明の明かりは風のない空気に静かに揺れている。無言の中、踏みならされていない山道をざくざくと歩く男たちの足音だけが、静寂を守る禁忌の山に響いていた。二列に並んで歩く男たちの真ん中には、小ぶりの輿が担がれている。若い娘がはいる分には都合のいい大きさの輿だった。屋根がしっかりついており、窓は存在していない。中の人物が簡単に出られないように、輿全体に縄が張り巡らされていた。

輿の中で、紫恋^{しん}はじつと目を閉じ暗闇の中にいた。外から聞こえる足音と、それにあわせてかたかたと輿がきしむ音、膝の上においた手首にはめられた枷の鎖がわずかにたてる音。それらにじつと耳を傾けながら、暗闇の視界に浮かぶのは愛しい人たちの顔だった。意識しなければ出てくるのは泣き顔だ。だから、無理やりもつと昔の記憶を、笑顔に満ち溢れていた過去の彼らを思い出す。

紫苑の笑顔は本当に可愛らしかった。姉の自分が言うのもなんだが、あの子はきつと美人に成長するはずだ。性格も素直だ。きつとあの子の周りには人が集まるだろう。きつと、これから先、一人で泣くことはないと思いたい。大丈夫、葵は紫苑を守ると約束してくれた。そう、葵。彼の明るい表情も好きだった。いつも傍で支えてくれたことは、本当に感謝している。葵と最後に会った夜、思わぬ告白をされたのには驚いたし、すまなく思った。もし赤い月が出なかったならば、自分と葵の未来はどうなっていたのだろう。葵は実の兄のように思ってきたからいまちぴんとはこないが、もしかしたら夫婦として歩むことがあったのだろうか。たくさんの子供に囲まれて、共にしわしわに老いるまで一緒にいる未来が存在したのだろうか。そうだ、夫婦といえば、千世は愛しい小悟さんとうなるのだろう。おそらく祭りが行われるはずだった今日、小悟さんは村に帰って来ているだろうから、一年ぶりに会えただろう。こんなことになって、祭りは中止になってしまったけれど、どうか千世の隣には愛する人がいて欲しいと願ってやまない。

輿の揺れが、止まった。

そつと、紫恋は思考の闇から目を覚ます。目を開けたら、少しだけ浅い闇が視界に広がった。輿に巻かれた縄をはずす音が聞こえる。とうとう、到着したようだった。生贄の娘の行き着く場所へ。

左の壁がはずされて、外の少し冷たい空気が肌を撫でた。橙の松明の明かりに照らされた壮年の男と視線がぶつかる。男の手に促されるように、紫恋は輿を降りた。足枷の鎖の長さに合わせて小股に歩を進め、男に腕を引かれていく。男たちは、鎮痛な様子ながらも少しほつとしているようだった。紫恋がこの土壇場において、少しは泣き叫ぶだろうと予想していたのだろう。

心配しなくても、紫恋にもはやそんな気はさらさらなかった。覚悟は最初から出来ていたし、いざ輿を降りたところで、今さら無駄にあがく気にはならなかった。大切なものを守る、そのためならば、自分の足はためらうことなく前へと進むことができる。しかし、これから自分に待ち受けるものが詳しく解らないということについての恐怖はあった。

生贄や人柱といえ、その方法は生きたまま土に埋めるとか深い水に沈めるとか、首を落として血を捧げるとかを想像するのだが、最後に巫女姫から教えられた、紫瞳の娘を神のもとへ送る方法は、そのどれでもなかった。それは、あまりにも不可解な説明だった。山奥にある深い洞窟の突き当たりに、娘をくくりつけて置き去りにする。ただ、それだけだというのだ。それは餓死をするか熊などに喰われるのを待つのか、と訊いたら、巫女姫は否と答えた。何日も放置されるのではないのだ。なぜなら、娘は次の日の朝には、忽然と洞窟からその姿を消すのだという。血の一滴、肉の一欠けらも残すことなく、始めから何もなかったかのように。それは神が攫っていったとしか考えられないのだと。

生きたまま沈められるのも恐ろしいが、消える理由がわからないというのも充分に恐ろしい話だった。出来れば苦しまず、楽にあの世へ連れて行かれることを願いたい。

男たちに囲まれるようにして歩いていくと、すぐに話に聞いた洞窟は姿を現した。人の手が入ったのではないかと思うほどに大きな洞窟だった。屈む必要もなく入り口の穴は一行を迎え入れる。そうとう奥行きがある。向かう先は真っ暗だ。男たちが持つ橙の明かりを頼りに紫恋は進んだ。心臓が、徐々に高鳴っていく。

「……腕を」

洞窟の最奥、高い赤茶色の土壁の前で、まとめ役の男が紫恋に向き直った。言われたとおりに紫恋は枷で繋がれた両腕を差し出した。男はその腕をとり、土壁の真ん前に設置されている太い一本の柱まで紫恋を誘導し、土壁の方を向き柱に背をつける姿勢で紫恋を座らせた。そのまま腕をあげさせられて、頭の上で両腕が柱にくぐられた。なるほど、この状態で放置をされるということか。一通りの作業が終わり、紫恋の身動きが取れなくなる。少しの間、男たちが沈んだ表情で紫恋の周りに立ち尽くす。

「すまない」

誰かが呟いた。紫恋は、小さく首を振って儚く笑った。

「いいえ。これは私が決めたことです。ありがとうございます皆さん」

後ろですすり泣くような声が聞こえた気がした。そうして一人、また一人と去っていく。最後の明かりがとうとう去って、紫恋は月の光も届かぬ真っ暗闇の中に一人ぼっちになった。目を開けているのか閉じているのかもわからなくなりそうな闇。鼓膜がおかしくなりそうなほどの無音な世界。一体、明け方までに自分の身に何が起きるというのだろう。

しばらくの間、紫恋はじつと柱にもたれ息をひそめていた。そろそろ男たちが村にたどり着き、巫女姫に報告をしている頃合ではないだろうか。

特に何か変化はない。突然後ろからおっかない形相の神様に喰われるかも、などと思い、かろうじて動く頭を後ろに向けてちらちらと様子を見てみるが、あるのは闇ばかりだ。心臓が、緊張と恐怖にとくとくと嫌な速さで鼓動する。

その時突然、カラリと小さな音がした。思わずびくりと過剰に反応してしまう。音は、どうやら土壁の方から聞こえてきたようだった。土が剥がれ落ちた音だろうか、と自分を落ち着けようとしたとき、再びカラカラと、乾いた土が落ちるような音がする。

なに、なに、と心臓がどくどくと音をならし、くぐられた腕が小刻みに震えた。闇の中目を見開き、前方を見つめてじつと固まった。

そして―― ついに、神は、来た。

神だと、紫恋はそう思った。目の前の暗闇に、突如まばゆい光の線が縦に一筋、土壁を割るように現れたのだ。息をのむ間に、光は徐々に太さを増していく。紫恋は思わず目を細めた。それは太陽が目の前に現れたのではないかと思うほどに眩い光の洪水だった。それでも、現れるだろう神の姿を目に納めようと、紫恋は目を必死で開けようとした。だが金色の光はどんどん視界に広がり、やがて紫恋を包みこむ。目が焼かれるような思いがし、耐え切れず目を瞑った。それでも瞼の裏まで明るい。やがてだんだんと、頭の奥まで白い光が浸透してくるような心地がした。体も、なんだかふんわり浮かんだような心地がする。

ああ……そうか、これが自分に与えられた死なのか。神様も完全に悪いお方ではないのかもしれない。生贄に与える死の苦しみは、最小限で済ませてくれるようだ。

さようなら紫苑。そう呟いたのを最後に、紫恋の意識は白い光の中に溶けるようにして失われた。

死んだら人はどうなるのだろう。そう考えたことは何度かある。もちろん答えなんかわかりっこないけど、想像はいくらだって出来ることだった。やはり、三途の川を渡ってあの世とやらにいくのだろうか。向こう岸では先祖様が待っていてくれたりするのだろうか。ならばもしかして、記憶にはない父母にも逢えるのかもしれない。逢ってその口から、十一年前の真実を聞かされるのだろうか。しかし、生贄となって死んだのではそれはかなわないのかもしれない。愛しい妹と引き離すような残酷な神様に、永遠に仕えることになるのかも。いや・・・そもそも、その後などないのかもしれない。ずっとずっと未来永劫、闇の中で眠り続ける無の世界なのかも

「・・・・・・・・ん・・・・」

頬に、ざらりとした砂の感触。ぼやけて歪んだ視界。そう・・・視界、だ。光のある、視界。二つの目で見ることの出来る、世界の姿。

「・・・・・・・・え・・・・・・・・？」

手を地面に突き、紫恋は起き上がった。砂が頬にひつついてぼろぼろとこぼれ落ちるのを、呆然としながらも手で払い落とす。そのまま自身の腕を見た。手枷ははめられたままだが、もう柱にくくりつけられてはいない。

混乱しすぎて何も考えられなくなっている頭を必死に回転させ、紫恋は自分の置かれている状況を把握しようとあたりを見渡した。今、自分は洞窟の外にいた。だが、洞窟の入り口とはまったく別の、知らない場所だった。近くにぼつぼつと木々が生えており、少し離

れたところからは鬱蒼と樹木の茂る林が続いている。反対を向いた遠くには、山が見えた。そこで紫恋はおかしいと気づく。自分は山の頂上付近まで連れてこられていたはずなのに、今自分は山を仰いでいるのだ。そういえば、今いる場所は明らかに平地だった。さっきまでのでこぼこした山道ではない。

紫恋はさらに後ろを振り向いた。そして、あつと小さく声をもらす。唯一見覚えがあるものがそこに存在した。赤茶色の土壁だ。高さも幅も、洞窟で見たものと同じだった。そして最後に、上を見る。紫恋の目が、まん丸になった。

「月が青白い色に戻ってる・・・」

さっきまで世界を支配していた赤い月ではない。美しい青い光だった。だがなんだか、普通の月光よりもずいぶん明るい気がする。こんな夜でも、周りの環境がくつきりと見えるのだから。

思考がめぐる。そして出た結論は。

「死後の世界に来たのだわ」

信じられないがそう思うしかないではないか。さっきのとてもない光に包まれた直後にこのわけのわからぬ状況。きっと、自分は死者の国へとやってきたのだ。後ろの赤茶の土壁は、きっとあの世とこの世を隔てる扉なのだ。

しばし躊躇した後、紫恋は決めた。とりあえず、ここを離れてみよう。もしかしたら誰か同類がいるかもしれないではないか。幽霊に会うのは怖いが・・・自分も幽霊であることを棚に上げてはいけないだろう。左を見ると、林がある。紫恋はその林に、はつきりと人が踏みならしたのであろう道があるのを発見した。行こう。そう決心して足を踏み出す。

ぴんと、足枷の鎖がはってつまづいた。死者の世界に来る際に、

どうせなら外れてくれればよかったものを。ためいきをついて、鎖の長さの限界の歩幅で歩き出した。

それにしてもおかしい事態だ。死者となった実感がまるでない。もつとこう、足をなくして宙に浮くとか、虹色の道があるくとか、そういう摩訶不思議なことはないのか。さっきの光は、生贄を求める神ではなかったのか。もうこの際、ここに呼んだ責任を取って迎えに来て欲しいと思わずにはいられなかった。月の光が遮られる林の道は、途方もなく恐ろしい。

細いため息を何度となくついていたとき、ふと周りの林で、何か複数の気配がざわりと蠢いたのがわかった。思わず足がすくんで動きが止まる。耳を澄ませてその正体に勘付いた途端、紫恋は出来る限りの速さで小走りに駆け出した。

——獣だ！！

幽霊だろうが余裕など持てはしない。本能が危険だと察知した。走り始めた途端、林の空気は一気にざわつきだした。左から、右から、後ろから、獣の唸る声と草を踏む足音が聞こえ、徐々にはあはあという獣独特の荒い息遣いが聴こえてくる。たくさんの視線が肌に突き刺さっているのが感じ取れる。恐怖に押されてとにかく無我夢中で林道を走った。息が乱れて心臓がひりひりと痛んだ。この身が死んだものとは到底思えなかった。

目の前の高い草を一気に体当たりで突き抜けた瞬間、紫恋の目に違う光景が飛び込んできた。川だ。ごうごうと盛大に音を立てて水が流れている、それなりに幅のある川が、行く手を阻んでいた。草履が砂利の転がる川原を踏んで音を鳴らす。汗を額に浮かべながら、紫恋は川を上流から下流まで見渡した。橋は存在しない。向こう岸に渡れるような岩も木も見当たらない。これでは前に進めない。

まさか、これが三途の川というやつなのか。だったら川に入つて向こう岸に……いやいやどう考えても無理だ、流されて溺れる。第一おそらくこの激流が三途の川であるわけがない。

ぐるるるるる……唸り声が耳朵を打った。はじかれた

ように振り向いて息をのむ。獣が、とうとう追いついて林をぞろぞろと出てきていた。紫恋はそれらの姿を見て言葉を失った。紫恋は追っつけているのは野犬か、最悪なら狼か熊、と予想していたのだが、目の前に現れたのはそのどれでもない、見たことのない生き物であつたのだ。形は狼の骨格に似ているのだが、体毛が見るからに太く硬い針のようなとがった形をしており、額には角のようなものが一本生えていて、目は黄色くきらきらと光っていた。この世のものとは思えない、言葉で表現するならば、魔獣というべき恐ろしい生き物。それが十数体も唸り声をあげ、目の前に迫ってきていた。じりじりと紫恋は後ずさる。獣はそのたびに少しずつ間合いを詰めてきた。背後はすぐ激流の川。絶体絶命だ。死んだ身にさらに死が待っているのか。いったい運命はどこまでこの身をいたぶれば気が済む。

「おいおいお前等、まだ喰うなよ。こんなところでふらつく女は希少なんだ」

人の声が化け物の背後から聞こえた。誰がいる。しかも一人ではない、数人いる気配がする。幽霊仲間か、そう期待に胸が高鳴ったが……林から姿を現した声の主を見た瞬間、その期待は砕け散った。

人の形をしているが、それは人ではなかった。薄汚れた変わった形の装束を着ており二つの足で歩く生き物だが、まるで人に犬の血を一滴落としたかのような、不気味で醜悪な顔をしていた。ぞろぞろと出てくる。数はだいたい魔獣とほぼ同じ。容姿は人と違って、性別は男と判断できた。皆下卑たにやにや笑いを浮かべて、じりじりと脅すように迫ってくる。笑い方が酷く人間じみているのが逆におぞましく、吐き気がこみ上げてきた。

「あああなたたちは……何？」

怯えた様子を見せると、彼らはくつくつと嘲笑した。そして一人が一気に間合いを詰めてきた。

「そつちこそこんな場所で何やってんだお嬢ちゃん。ええ？手枷に足枷までつけて」

「ひっ……いやっ……！」

あごの下を容赦なくつかまれ上を向かされる。男は紫恋をじつとなめるように観察した。

「ほお上玉だな。どこぞの娼館から逃げてきたのか？」

「……っ……な……」

「お頭あ、でもそいつ妖気が全然感じられませんぜ」

「ああまったくだな。最下級の一族の出か。だがこの見目なら充分買い手がつくだろうさ」

値踏みするような視線に全身が総毛だった。会話からして、こいつらは人を攫って売り物にする商売をしているのだ。もうわけがわからない。ここは……ここはどこなのだ。死後の世界でなぜ人狩りが行われている。

「ははっそんな怯えるなよ嬢ちゃん。どうせこついうの慣れてんだろ？どこに逃げてても一緒さ。安心しろよ、どこぞの男にちゃあんと高く売り付けてやつから。たっぷり可愛がつてもらえ」

「やつ……いや離して……！」

「いいねえその顔。まだ子どもだが充分そられる。どれ……ちよいと商品の味見といこうか」

男の獣じみた黄ばんだ眼が怪しくぎらついた。周りの男たちも一

層下卑た笑いを響かせて近づいてくる。男の手が、紫恋のあごの下から首を伝って移動し、着物の襟にかかった。次の瞬間。びりつと布地が一瞬にして縦に破られた。腰でくくっていた帯が落ち、前がはだけて外気に触れる。

「い・・・やああああああああ！」

悲鳴が口をついた。すぐにその口は隣の男の手でふさがれ、くぐもった声しか出なくなる。正面の男に押し倒されて、川ぎりぎりのところにある大きな岩に背中を打ちつけた。手が無数に伸びてきて、身体を自由を奪われ岩に押し付けられて起き上がることも抵抗することも出来なかった。吐き気がするほど醜悪な笑みが眼前にいくつもあつた。恐怖と嫌悪感で涙が溢れる。むせかえるような獣の臭い、無遠慮に触れてくる鋭い爪の生えた手。全てが全身で拒否反応を示した。

お頭と呼ばれる男が、なぶる様にじつくりと紫恋の足の先から太ももまでを撫で回し、着物の裾をたくしあげてきた。触れられた箇所が腐敗したような錯覚に陥る。

「んんっ・・・うう・・・」

助けを乞うても声にならない。動くのは指の先だけだ。

頭の男が紫恋の顔の隣に手をつき、真上に覆いかぶさった。醜く歪められた顔が目前に迫る。そして男はにやりと犬に似た口をつりあげて、紫恋の太ももの裏を掴んで持ち上げた。気が遠くなりそうだった。いつそ気を失ったほうが楽かもしれない。もうだめだ。絶望が諦めを連れてきた、その時。

「ぐっ・・・！！？」

突然真上の顔が目を見開いて、太もを掴む手が震えて力が弱まった。紫恋の口を押さえていた別の男の手も外れた。びくりと紫恋も驚きの表情で男を仰ぎ見つめ返す。男は目を飛び出さんばかりに剥いて、眼球も口も腕もびくびくと痙攣しだした。そのあまりの形相に凍りついていると、ぽた、と生温かい液体が、外気に晒された腹の上に落ちたのを感じ、彼女はそろりと視線を下に落とした。そして目にしたものものに小さく息をのむような悲鳴をあげた。

覆いかぶさる男の腹から、きらきら輝く鋭利な刃物の先が飛び出していたのだ。それは丁度、下に転がる紫恋には刺さらない程度の絶妙な力加減で男の背中から突き刺さり、貫通しているのである。

気付けばもう手足を押さえていた男たちの手はなく、体は解放されていた。だが紫恋は、男の腹から突き出た刃物・・・否よく見れば尖った氷柱つばのように見える切っ先を見つめて固まってしまった。

「ああまったく、くだらない方達ですねえ」

男の背中の後ろから、声がした。それはこの殺伐とした場に不似合いな、優しく穏やかな口調だった。紫恋はようやくはつとして、男の下から這い出ようと身をよじった。すると這い出るより前に、男の体が横から蹴り飛ばされて吹っ飛んだ。反射的に目で追うと、男が氷柱が突き刺さったまま背中から地面に落ちたのを見てしまった。三角錐の形の氷柱が男の腹からさらに太く飛び出て流血が散るのを、はつきりと紫の瞳が映し出す。

「なんとも貴方にお似合いな死に様ですよ」

男を蹴り飛ばした人物は、微笑を含んですらいる物言いいで男に言い放った。紫恋は初めて見たこれほどの無残な死体に少しの間意識をとられていたが、強い視線を感じて正面を仰ぎ見た。

神様が、来たのだろつか。今度こそそう思った。男を笑顔で殺し

て見せたのは、それはそれは美しい、人とは到底思えないほどの麗人だった。月光に照らされて銀色にも見える長い純白の髪、雪のように白い肌、そして、氷か硝子をはめ込んだかのような繊細な瞳。高い背丈。性別のわからぬ整った顔立ち。白い装束には、まるで花の模様の如き返り血が散っている。

「あなた、は、禁忌の山の神？」

破られた着物を前でかき寄せてそう問いかけると、麗人はにっこりと月も恐れ多いと隠れそうなほどの妖艶な笑みを浮かべた。

「いいえ、私は貴女を迎えに来た鬼導の一柱です。ああ・・・詳しくはまた後ほど。まずは、貴女に不埒な真似を働こうとした愚か者を排除しなければなりませんから」

少々お待ちください。そうにこやかに言っ、白い麗人はくるりと体の向きを変えて、少し距離を置いたところで身構えている男たちや魔獣と向き合った。頭の男をあつさりと殺されて、男たちは顔を引きつらせて白い人物を凝視していた。

「ててててめえ・・・なにもんだ」

「頭の悪い質問ですねえ。私の容姿や妖気の質で、私が何者かくらい判断できないんですか」

「・・・ひ、氷狼一族の戦士か」

「ああ、少しでも期待した私が馬鹿でした。そんなことしか判断できないで、おまけに赤い月が元に戻ったこの状況においてその娘が誰なのかも分からないなどと、呆れると言っより嘆かわしいですよ。貴方たちのような下賤の部族が生きていたところで、鬼にはなんの利点もありませんね。むしろ鬼の一族の聖域におられるのが目障りです」

どこまでもにやかな口調で言っている方で聞いている方は混乱するが、それは容赦なく男たちを見下した言葉だった。紫恋には内容がさっぱり理解できなかったが、どうやら男たちは何か驚愕の真実を悟ったようだった。

「まさか……贅姫……！？じゃ、じゃああんたは」

「よかったですね、最期に真実を知ることが出来て」

「ひいつ!!」

男たちが一様に悲鳴を上げ、彼らに従う獣たちからも甲高い狂つたような悲鳴が上がつて夜の空氣が震えた。彼らの足が、一瞬にして凍りついたのだ。透き通つた分厚い氷がぴしぴしと氷結する音を奏でて彼らの動きを封じた。

「やめてくれ頼む！！すまなかつた！反省する二度としねえ！！鬼神への忠誠もこれまで以上に」

「さようなら」

紫恋は目を見開いて、眼前に繰り広げられる超人的光景を見つめていた。目の前に立つ白い麗人の長い髪がふんわりと浮いたと思つたら、周囲の上空に鋭くとがった太い氷柱が無数に空気の中から生まれてきた。さつき頭の男を殺したものと同じだ。上空を埋め尽くすほどにぎっしり生まれた氷柱のとがった先は、全て男と獣たちに向いていた。これから起こる事を予想できないわけがなかった。だが、制止の声も驚きのあまり口を出ることはない。腰を抜かした状態で、白い衣の背中と奥で絶叫する彼らを凝視した。

[illegible]

断末魔の叫び声が木霊する。目を瞑ることが思考に上らず、紫の瞳は男たちに向かって放たれた氷柱を映し出す。

赤い光景を見ると思っていた。だがその直前に、彼女の視界は闇に包まれた。目を瞑ったのではない。目は見開いたままだ。闇は、背後から両目を覆った手が連れてきた。喉の奥で悲鳴があがった。

「見て欲しくない光景だね」

耳元で囁かれた声。ため息交じりの男の人の声。背後は激流の川のはずなのに、突然後ろから現れて紫恋を包んだ腕。背に感じる人の温かみ、目に触れたひんやりとした指。

「・・・酷い仕打ちだね白水仙^{しろすいせん}。もう少し手を抜いてもよかったんじゃないかい？ 姫は一応無事だったんだし」

「何甘いことを仰ってるんですか。これくらいの処分は当然ですよ」
「氷狼の御子は恐ろしいね。まあ今さら何を言っても取り返しがつかないけれど。さあ、姫」

目を覆っていた手が外れる。奥に広がっているだろう惨劇を目で追う前に、頬を包まれて横を向かされた。背後から現れた人物と間近で向き合う。

美しい、人だった。白い人物も綺麗だが、また違う美しさを持った人だった。漆黒の髪と瞳を持った、穏やかな顔をした若い男の人だ。ただ右目の周りに不思議な黒い模様が描かれているのが常人に比べて変わっている。その優しい笑顔は白い人物と同じようだが、こちらのほうが裏がないように思えた。

「・・・ああ」

紫恋の顔を見つめる目が、ふっと歪んだ。形のよい眉がひそまっ

た。

「やっぱり・・・君が来てしまったんだね」

「え・・・？あの、あなたは？」

「初めまして贅姫。僕の名は詩依^{うたい}。鬼神に選ばれし精鋭の衆、鬼導の一柱だよ」

そう言って彼はにっこり笑った。とても、哀しそうな笑顔だった。

第二話

「二エヒメ…?」

それは自分のことを指す言葉なのか。ひたすらとまどう紫恋の表情を見て、詩依と名乗った青年は彼女の頬を両手に包んだまま、首を傾げて苦笑した。

「そう、君のことだよ、紫の瞳を持つ外界の娘。僕らは魅月・・・鬼神のところへ君を連れていくために迎えに来たんだ」

「・・・キジン?」

「そう、鬼神。鬼の一族の王。僕らはその側近であり、鬼を導く存在、鬼導と呼ばれる者なんだ」

「鬼の、一族・・・」

説明された言葉は、どれも分からないものばかりだった。常人とは明らかに異なる姿や力を持つ彼らが何者なのか、どうして自分をその鬼神とやらのところへ連れていくのか、紫恋の疑問は山のように生まれた。

鬼とはよく伝説にあるような、目がぎょろりと飛び出して口が裂けるように大きく、鋭い牙と爪と頭には角を持つといった異形のもののことではないのだろうか。そう・・・例えば、今視界に入らないところで無惨な姿に変わり果てているであろう彼等のような。醜悪な見目の彼らの方が、よほど鬼と呼ぶにふさわしい気がする。ならば、彼らの言う鬼とは何かの揶揄だろうか。しかしたった今、白水仙という者が見せた残忍で不思議な力を考えれば、人とは違う生き物なのだと疑わざるをえないだろう。

破られた衣をかき寄せる両手にぎゅっと力を込めて、紫恋は目の前の優しい顔の青年をじっと見つめた。彼に触れられている頬はひ

んやりと冷たくて、その手に人の温かみは感じられなかったが、確かに柔らかい他人の肉の感覚を感じ取ることが出来る。彼はただの人ではない、かといって幽霊であるとも思えない。そして、どこどくと心臓を打ち鳴らしている紫恋自身の体も、もはや幽霊なのだと思うことは不可能だった。これはあまりにも生々しい、現実の生きた姿であり、取り巻く夜の澄んだ空気も川の音も、自身の呼吸も鼓動も血液の流れる肉体も、それに人として変わらぬ感情も、全てが虚像でも失ったものでもない本物であるのだと認めざるを得なかった。

「私は、生きているの？」

「ああ、生きているよ」

「・・・生贄に、捧げられたのに？ 光に、神様に、連れてこられたのに？」

呆然としたままの紫恋の問いに、詩依はすつと整った眉を少し歪め泣いているような哀しげな表情になり、まるで自嘲のような笑みを浮かべた。

「君は生きているよ。死者ではない。もちろん、僕たちもね。君が見た光は神のお迎えではなくて、世界の狭間に亀裂が生じた際に発生したものに過ぎない。君は生きた体のままに、こちら側にやってきただけなんだ。・・・残念ながらあちら側にとっては、君は消えてしまった存在なのだから死んでしまったことになるんだろうけれど」

「わから、ない。あなたは何を言っているの？ あなたの言うこちら側とはどこなの？ どうして私は、ここで生きているの？ 私は・・・私はどうなるの？」

「詳しい話は後ほど城に戻り、全ての事が片付いたらお話ししましょう。ここはあまり良い場所ではありません」

隣に立つ白水仙が、紫恋の止まることのない疑問の言葉を遮った。そうだね、とそれに頷いた詩依は腰を上げようとする。だが彼は見つめていた紫恋の顔から視線を上げて奥の光景を再び目にとると、顔をしかめてため息をついた。

「白水仙、とりあえず君がやったんだから、責任もってあれを何とかしてくれないかな。この子の目に触れさせたくないし、この鬼の領域にあれを放置はまずいよ。血の臭いに釣られて、ますます厄介なが増えても困るだろう」

「もちろんきちんと処理するつもりですよ。あんなもの、跡形もなく消し去ることくらい容易です」

中性的な声音の美声がさらりと答えて、白い彼が斜め後ろで動いたのを紫恋は感じた。直後、惨劇が繰り広げられているだろう方向から、ぴきぴきと氷が張るような音、もしくはなにか壁にひびでも入るかのような音が聞こえてきた。何が起きているのか激しく気になったが、詩依に顔が動かないように両手で包まれているために状況の把握が出来ない。だが、とても嫌な予感を感じた。残忍な犯行を跡形もなく消し去る行為を、彼らはまたしても人外を超えた力で実現させようとしているのだ。

甲高く鳴り響いていた音が止まった。一瞬、場に静寂が訪れる。その直後、まるで割れ物を床に叩きつけたかのような破壊音が大音量で響き渡った。そして流れる川から、重い石でも投げ落としたかのようなボチャンという音が無数に聞こえてきた。

心臓が跳ね上がった紫恋はひとつと短く悲鳴を上げ目を見開いて、顔をしかめる詩依を凝視した。しばらくすると顔を固定していた彼の手の力が弛んだのを感じて、そろりと後ろを振り返る。目は、串刺しにされた悲惨な姿を晒しているだろう化け物達を探した。だが、そこにあつたのは凄惨な光景などではなかった。目に飛び込ん

できたのは、月光にきらきらと輝いている氷のかけらが大小入り乱れて散らばっている、思わずはっとしてしまふほどに一見すると美しい光景だったのだ。

あっけにとられてきらめく河原の様子を見つめた紫恋だったが、少しの間の後、その氷の正体に気がついて戦慄した。これは白水仙という者が生み出したただの氷ではない。これはあの化け物たちの凍りついた肉体の欠片なのだ。全身を氷に変えられた後、生き物だったとは思えないほどに粉々に砕かれて崩壊し、欠片となって飛び散っているのだ。あまりに非現実的な力、あまりに非人間的な残酷な処置に、思わず吐き気がこみ上げてきて、口を覆う。

「ごめんね、呼び寄せて早々見せたのがこんなもので。もう少し早く君を見つけられたらよかった」

「・・・これが、鬼の力？」

「そうだね、白水仙は強い。細かいことを言えば彼は氷狼一族の出身だけれど、それでも彼が鬼導である以上は鬼の一族の力ということになる」

詩依は、そつと優しく、紫恋の手足を戒めている枷に触れた。

「君を、守る力だ」

枷を詩依の長い指が撫でた途端、重く硬い頑丈な物質に、突如変化が訪れた。まるでそれは始めから脆く砂で固められた物体であつたかのように、細かい塵となってさらさらと紫恋の手足から逃げていったのだ。目の前で見せつけられた力に、ただ言葉を失うしかなかった。

「行こうか」

そつと、子供をあやす様な優しい言葉がささやかれ、ふわりと肌触りのよい漆黒の羽織が、彼女の小柄な身をすっぽり包みこんだ。化け物たちに容赦なく着物を破られあられもない姿になっていた身が隠れたことに、紫恋は小さく安堵した。

そんな彼女の前に綺麗な手が差し出される。彼女はその白くほっそりとした手と、その主のおだやかな微笑をかわるがわる見つめた。白い彼はともかく、この右頬に模様のある彼の纏う空気は優しく、穏やかで、向けられる視線は慈愛すら感じられた。警戒を解くように、彼は促しているのだ。紫恋はぴくりと上げかけた腕を、しばしそのまま固まらせて考えた。彼から向けられるこの甘い誘惑のような視線には、なにか裏に意図があると感じずにはいらなかった。こんな状況において、警戒心を緩められるほどに紫恋の心は図太くものんきでもない。この地獄のような場所から助け出してくれるのはありがたいが、自らを鬼と名乗る彼らについて行って、自分が無事でいられる保障はどこにもないのではないか。

固まる紫恋に、再度詩依は首をかしげて苦笑して、差し出していた手をそのまま伸ばして彼女の腕を掴んだ。ぐつと、多少強引に引っ張られて彼女の腰が浮く。だがすぐに、伸ばされかけた膝はぐくりと折れて、紫恋はおかしな格好のまま片手を地面に付くことになった。立ち上がりたくても立ち上がれない。完全に腰が抜けていた。

「当然か。ごめんね、怖い思いさせて」

「ひゃあっ！」

思わず間拔けな声が出た。背中と膝の裏をすくわれて、まるで自分に重みがあることを忘れるほどに、いともあっさりと紫恋の体は詩依の細身の体に横抱きにされたのだ。彼の整った美麗な面差しが目の前に来て、紫恋は視線をさまよわせた。

「おおおろしてください」

「今の状態じゃ歩けないだろう。それに、城までは少し距離があるから鬼の足を使ったほうがいい。思わぬ事態に時間も遅れてしまったことだし。急ごうか、白水仙」

「そうですね、きつと魅月もいらだっているでしょうから」

詩依と白水仙が一步動いた。体を支える腕に力が加わったのを感じた紫恋は、反射的に彼の黒色の衣をぎゅっと掴んで息を詰めた。だが、詩依は二歩目を踏み出す前に、何かを思い出したようにあつと声を発した。

「そついえば想真君はどこにいったんだろう。贅姫を一番に見つけるって張り切っていたのに」

「ああ・・・どうせ見当違いなところをうろろとさまよっているんでしょう。頭が足りないんですからしょうがないですよ」

「姫を見つけたこと連絡しないと。まだ探しているかもしれないだろう」

「放っておけばいいんです。自業自得です」

「・・・相変わらず仲悪いんだね君たちは」

「氷狼と神威の血は相容れないと昔から決まっているんですよ」

「流れる一族の血が違えど、今は同じ鬼導の仲間で、鬼の一族に身をおく者同士だろう。少しは協力したほうがいい。ほら、想真君に連絡を出して」

会話から察するに、どうやら鬼の仲間はまだ一人いるらしかった。白水仙は大仰にため息をつき、右手を横にさあつと一振り薙ぐ。

またしても紫恋の目に、奇怪な光景が飛び込んできた。薙いだ白水仙の手から細かいきらめく氷の粒と冷氣が生まれたかと思ったら、青白いそれらは一点に集まりうねりながら固まって一つの造形物を現したのだ。狼。氷で出来た、透明に冷え冷えと輝く大きな狼だった。その不思議な獣は硬質そうに見える身をしなやかに獣らしく動

かしてみせ、生みの親である白水仙の周りをなつくように一度くりと回る。白水仙は氷の狼の頭を一度撫でて、ため息混じりに命じた。

「想真のところへ行って伝えなさい。あなたがのろのろしている間にこちらで仕事は片付いた。とつとと城に帰ってくるようにと。そうですね、骨が折れない程度に噛んでやってもいいですよ」

最後に不穏な言葉を付け足された命令を預かって、狼は言葉が分かったというように一度たしかに首を縦に振って頷き、くるりと体をしならせて跳躍し林の中に消えていった。

紫恋があっけにとられて消えた方向を見つめっていると、くすりと頭上から笑い声が聞こえた。

「綺麗だろう、氷狼一族の生み出す使い魔は。それにしても想真君も哀れだな」

視線を上げると、苦笑する顔も美しい彼と視線がぶつかる。

「想真君にもいずれ会えるよ。きっと、彼は君の味方になってくれる。守ってくれるはずだ」

「・・・私は、無事でいられるんですか？」

「大丈夫、守るよ」

横抱きにされたまま、耳元で柔らかい声音が囁かれる。

「命はね」

何か引つかかる言い回しであった。命は。まるで命以外で何か守れないものがあるともいうような。

紫恋が眉をひそめると同時に、詩依は助走をつける前のように、半歩片足を引いた。

「しっかり掴まっけていてね」

「え——」

視界が一気にぶれて体が宙にふわりと浮いたのを感じた。自分の長い髪が風にあおられて顔にばさばさと打ち付けられたが、両腕は髪をはらう余裕など一切なく、気付けば精一杯の力で、自分を抱く彼の首にしがみついていた。紫恋は、顔を引きつらせたままに下を見た。地面が信じられないほど低い位置に存在する。かと思えば急速に近づき、体への振動と共に再び地面は遠のいて、夜空へと近づいた。

思わず詩依の顔を間近で凝視してしまった。一人を抱いた状態で、こんなありえない跳躍を何度も繰り返して驚異的な速さで道を進む彼は、まったく苦にもなっていないかのごとく平然とした表情を保っていた。すぐ隣では、白水仙も同じように跳躍して付いてきている。紫恋は度重なる非現実的な事柄に、もはや思考が悩むのをやめてしまっていることを感じ取った。

「……………一応、訊いておくけれど」

風を切る音にまじって、ひっそりと囁かれた詩依の声が聞こえてきた。

「君の、母親の名前は？紫恋」

「え……………」

心臓が跳ねた。まさか、そんな質問をされるとは思わなかった。母親の名前など、知ってなんになるというのだろっ。十一年前、姉

妹を残して亡くなってしまった、ただの女の名前など。

「わ、分かりません」

「分からないだって？母親の名前だよ？」

当然、詩依は驚いた顔をした。そんな回答は予期していなかったのだろう。だが、紫恋は嘘は言っていない。

「・・・子供の頃の記憶が、なくて。両親の顔も名前も知りません」「なぜ両親がいないのか、理由は知っている？」

「それは・・・その・・・自殺した、と」

「自殺だって？」

紫恋は口にした言葉を、一瞬訂正しようかとも思った。本当は、自殺ではない。最後の葵の叫びが脳裏をよぎる。だが、訂正の言葉はぐっとのみ込んだ。母親は巫女姫の陰謀により殺されたのかもしれないという可能性を、口にしたくはなかったのだ。言葉にしてみたら、それはきつとより真実味をおびた可能性として自分は認識してしまう。

そう聞かされています、と紫恋は消え入りそうな声で答えてから、口を閉ざした。詩依は何か思案するように押し黙った後、静かに、そうか、とだけ呟いて足を進め続けた。果たして彼に何か思うところがあったのか、その声では判断することは出来なかった。

だが、紫恋は彼に妙な違和感を感じた。何が、と彼の横顔をちらりと見た瞬間、はっとする。

自分は、彼に名前を名乗っただろうか。彼は今さっき、紫恋とはつきり名を呼んだ。知っているということは自分は名乗ったのだろうが、しかしいつ？覚えがなかった。あの混乱の中、そんな些細なことまで記憶は持ちこたえていない。

まさか最初から紫恋のことを知っているわけがあるまいし、きつ

と混乱の最中彼に名を教えたのだろう。そう勝手に解釈して、彼女はそんなことはすぐに思考の奥底にしまいこんで前を見つめた。

月に照らされた夜の景色が、規則的に繰り返されて揺れ動く。青白い色に戻った月は、やはり自然と安心感を与えてくる。この月の変化に、自分はもしかして関係しているのだろうか。この奇妙な世界、奇妙な彼女らにとつて、自分はどのような存在であるのだろうか。贅姫、その名で呼ばれた自分が行き着くところとは、一体。

すでに死んだはずの身の行く末を案じて、紫恋はそつと瞳を伏せて己に言い聞かせる。怯えるな。自分は一度は死んだ身だ。これは死を受け入れることを決めた身なのだ。これから先、何が待ち受けようが、死を望むことのできた自分にこれ以上怖いものなどありはしない。そう無理矢理心を奮い立たせて、一つ深いため息をはいた。やがて、横を流れる木々と山の景色ばかりだったところに、目を奪われるほど大きな建造物が姿を現す。

大きな月を背後に背負い、その建物は世界の中心に位置しているというかのように、堂々と威圧的にそびえ立っていた。人を脅かす強風さえも、やすやすと吸い込んで消し去ってしまうかのような黒い城。美しい月光に照らされても闇の色を失わない、強大な、鬼の住処。

贅姫に選ばれた娘がかならず行き着くその場所は、今また、新たな少女の数奇な運命の幕開けを迎えるために待ち構えていた。

第三話

自分の眼は本当に真実を映し出しているのか。

紫恋は驚愕の表情で口を開けて、闇夜の中ゆらりと佇む巨大な建造物を見上げた。

十六年間山々に囲まれた穏やかな田舎で過ごしてきた彼女は、当然噂に聞いたような天下人の住まう豪華な建物など見たこともない。過去一番立派だと思った建物は修行に通っていた社である。ゆえに目の前にそびえ立つ鬼の城は、彼女にとって現実に存在していることを疑いたくなるほどの強烈な印象を与えてくるものであった。

言葉を失って硬直したままに、紫恋は大人しく詩依の腕の中に納まっていた。超人的な跳躍を披露してここまでやってきた詩依と白水仙は、城がはつきりと見えるところに着地してからそつと互いに目配せをして頷いた。

紫恋の視線は少し間をおいたところに蔵かにそびえている、黒い門に向いた。複雑な模様が全体に彫られた黒塗りのそれは、どう見てもこの城の入り口、正門であると思えない。これから硬く閉ざされているこの門が開いて、この城は自分を迎えるのだろうか。そう紫恋が考えた矢先、視界がくると横に移り変わる。驚いて彼女が目線を上げると、詩依の穏やかな顔が目に入った。

「ここから入ることも可能ではあるけれど、それでは後々不都合なことがおこりそうだからね。君の姿はなるべく大衆の目には触れさせたくないんだ」

「全ては鬼導の手で秘密裏に片付けます。貴女の今後のことを考えれば、今夜中に全てを終わらせてしまうのが一番良い」

困惑した顔で紫恋が首を傾げると、詩依の視線は彼女の目を見られないとでもいうかのように、静かにはずされた。彼の横顔に罪悪

感のような気配を感じ取った気がして、紫恋の胸がざわりと嫌な予感に打ち震える。一時治まっていた警戒心が一気に疼き出した。

「・・・終わらせるとは」

「後宮側の第三門から入ろう。そこが贅姫の部屋に一番近い」

質問の言葉は遮られ、紫恋は否応もなく詩依によって運ばれていく。紫恋は一瞬、暴れてこの腕から逃げ出したいとも思ったが、しかしすぐにその焦燥を押さえ込み、身を硬くして息を詰めた。彼らから逃げ出すことなど、無理であることくらいこの短い合間に思い知らされていた。彼らはきつと、敵ではない。守ると言ってくれたし、実際に化け物からは助けてくれた。だが、なにか紫恋に後ろめたいものを隠している。紫恋の身を守ると誓いはしても、彼らは決して紫恋を逃がしはしないのだろう。自分たちの思惑を成し遂げることがきつと第一なのだ。

鬼の城の敷地は、正面から見た高さに見合う程のとてもない広さを誇るらしかった。正門からずっと続いている高い城壁は、鬼の足を使って移動したところぐるりと一周する気配もなくまだまだ先へと続いていく。どこまで続くのだと紫恋が唖然としてみると、正門よりはだいぶ小さな・・・といっても充分に立派ではある門の前で、詩依と白水仙の足は止まった。

白水仙が先に門へ歩み寄り、閉ざされた両開きの扉の割れ目に何事かを呟きそつと触れた。すると、門は人の力が加えられているわけでもないのに奥へと開きだした。ぎぎぎとかすかに鈍い音を出して三人を迎える城内への入り口。紫恋は息をのんでその向こう側の光景を観察した。

外側は黒く厳つい姿の威圧的な城だったが、その中側は予想に反して綺麗なものであった。温かみを感じる炎のゆれる灯籠が、長く続く廊下に等間隔にぽつぽつと並び、青白い月光に照らされる廊下をさらに明るくしようと煌いている。詩依に横抱きにされたまま、

丁寧の手の加えられた庭を横切り建物に近付けば、天井から柱から床、全てが真新しいものであるかのように美しいのが分かった。細かな花模様の木細工の施された廊の手摺り一つ見ただけでも、この城が途方もない労力と贅を極めて造られたものであるのだと窺えた。詩依と白水仙が履いていた下駄を脱いで、艶めく木質の廊の床に上がった。とうとう、鬼とやらの住処に足を踏み入れた。紫恋の頬に、冷たい汗が一筋伝う。かたかたと震える手は、思わず目の前の黒い衣を掴んでいた。

「ごめんね、なんの説明もなしに連れてきて。怖いよね？」

怯えを敏感に感じとつたらしい詩依は、紫恋にとっても優しく穏やかな声音で話しかけてくる。怖いかなどと、そんなの当たり前だろうと紫恋は言いたかったが、緊張によって言葉はうまく出てこず、ただ深く頷くしかなかった。

「・・・今宵だけ。今宵だけ、我慢して。それで全てが終わるから。一晚耐えれば、君は自由になれるから。そうしたら、詳しい経緯を説明するし、君の意思を尊重する。約束だ」

「ひと・・・ばん・・・だけ？」

詩依の表情が形容し難い複雑な微笑に、歪んだ。そこに曖昧な優しさを取り繕っているような気配を感じ、紫恋の背筋がぞくりと震えた。

「お二方、ご苦労様でした。おかえりなさい」

突如、後方から女性の声があがった。詩依の顔に意識がいつていた紫恋はびくついて、思いつきり首をひねって視線を声の主へ向かせた。

「ああ、ただいま深艶^{みえん}。お出迎えありがとう。多少の問題はあったけど無事に贅姫は連れてきたよ」

「そうですか。では、この娘が・・・」

紫恋は目の前に現れた女性の姿を見て、白水仙や詩依と出逢った時の様に目を見開いて呆然とした。凜とした立ち姿を見せる彼女は今まで逢ったどの女性よりも可憐で美しい女性であったのだ。歳は二十代半ばといったところだろうか、大人の色気を存分に漂わせていながらも、その白くなまめかしい肌は少女のようにみずみずしい。漆黒の長い髪を鮮やかな赤い紐で複雑に結び上げており、身につけている衣は真紅に白い花が咲いた模様の、見慣れている普通の着物とは違う、形や装飾の変わったものであった。風変わりな格好ではあるが、凜とした完璧な容貌、完璧な均整のとれた身体の彼女にはその姿がよく似合い、艶やかで妖艶としか言いようがない。そして気になるのが、漆黒の瞳を中心に顔の右半分を描かれている黒い模様。模様の形は少し違えど、それは詩依の顔にもある特徴と同じであった。

この女性もまた、彼らの仲間。人ならざるものであるのだと、紫恋は悟った。

驚いた表情で女性を見つめた紫恋だったが、深艶と呼ばれたその女性もまた、紫恋の顔を見た瞬間はつとした表情になった。彼女に息をのまれ酷く動揺されたのを感じた紫恋は、自分の顔に何か付いているのだろうかと頬に手をそえてみたが、特に何もおかしい気配は感じられない。とまどったまま彼女と見つめ合うと、少しの後、彼女は紫恋を抱き上げている詩依へと、物問いたげな目を向けた。

「・・・っ・・・この贅姫は」
「深艶」

詩依が、はつきりと彼女の名を呼んでにつこり微笑みかける。

「気を利かせて気配を殺して入ってきたんだけど、その必要はなかったくらいに今宵の後宮は静かだね。皆どうしているんだい」

「え・・・お、女たちは皆、桜里おつりの力によって眠らされています。朝まで、何があっても目覚めることはないでしょう。あの、それよりその」

「君は魅月に準備を命じられていたよね。もう出来ているのかな？」

「は・・・い。全て滞りなく。あの、」

「ここにくるまでに姫は下賤の部族にからまれてしまつてね。助ける際に少し流血の惨事があつて。もちろん姫は無傷だけど、返り血の匂いが酷いからしつかり湯浴みをさせてあげてね」

頼んだよ深艶、と彼は笑顔のままにたたみかけるようにそう言った。明らかに、何か言いかけた彼女の言葉をふさぐかのように。彼女は言葉を探すように一度押し黙ってしまった。だが逡巡した後、彼を凝視したまま、とまどうようにはいとだけ応えた。

「もう、一人で立てるかな？」

不思議なやり取りを傍観していた紫恋は、突然話をふられて慌ててこくこくと頷いた。そこでようやく、紫恋の体は抱っこから解放されて、初めて足が彼らの住処の床を踏む。詩依にかけてもらった大きな羽織の前端をきゅっと掴んで、一瞬ふらついた体をなんとか落ち着かせた。

そして今一度、紫恋は自分のことをじいつと観察してくる女性を見上げた。そんなに背の高いわけではない紫恋は、すらりと伸びた足を持つ彼女を、どうしても見上げる形になる。絶世の美女に強張った顔で上から見下ろされるのはかなり恐ろしいものがあるが、かといって視線が外しづらいほどに真剣に見つめてくるので、見つめ

返さないわけにもいかなかった。

「深艶、この贅姫がどうかしたんですか。別に、特に何の変哲もない普通の娘でしょう」

白水仙が、不審気にそう尋ねた。

問われた深艶は、思慮したように眉をひそめて、何かを言いたげに口を開いた。だがその薄紅の唇から言葉がこぼれるよりも前に、詩依がずっと彼女に歩み寄り、彼女の肩に手を置いて耳元で何かを囁いた。何を言っているのか紫恋の耳には届かなかったが、だが目に見えて詩依の言葉を聞く彼女の表情が変化していったのは分かった。まるで心配事を見透かされてなだめられているように。

やがて詩依が彼女の肩を軽く叩いて離れると、彼女は釈然としないう表情でおもむろに紫恋に向き直った。

「初めまして贅姫。私は深艶と申します。みづ・・・鬼神に選ばれし鬼導の石柱。あなたは？」

「え？」

「あなたの、お名前は？」

「し、紫恋、です」

「・・・シレン・・・ね。歳は？」

「十六です」

「そう・・・十六」

深艶は紫恋の全身を上から下まで目を通してから、小さくため息をついた。

「確かに血の匂いが酷いわね。顔も土で汚れているわ。まず湯屋に向かいましょうね」

「それじゃあ、後は深艶に任せるよ」

「はい、お二人も・・・頼みますね。それから白水仙、あなたもその血の匂いなんとかしなさいよ。その返り血の咲いた衣もね」

「お氣にかけていただきありがとうございます」

「少しはやり方を考えなさいよ。来たばかりの贅姫の前で」

「私は鬼導として、最も効率のよい方法で任務を遂行しただけですよ」

「ああそう、そうでしょうね」

はあつと再度ため息をついた彼女は、氣の毒そうな目で紫恋を見た。

「行きましょう」

「え、はい」

そつと深艶の手に背を押されて、紫恋は一步前に足を踏み出した。だがその直後、風に一度髪がなびいたと思った瞬間に、心臓を揺さぶられるような悪寒に似た衝撃が紫恋の全身を襲った。

「——うっ・・・！！？」

体が瞬時に総毛立ち、背筋が下から粟立つ感覚。視界がぐらりと歪んでこめかみにきんとした痛みが通過した。瞬時にこみ上げてきた吐き気に、口を覆ってその場にがくりと崩れて手をつく。あまりにも突然の異変。だが紫恋は、即座にこの原因が自分の体にあるわけではないのを判断できた。それは、一方向から感じる、特別で、途方もなく恐ろしく身に突き刺さってくる気配によって。抵抗するすべもない程の、強大な、殺意とも憎悪ともとれる視線。普通は感じることの出来ないはずのそれが、まるで形となって襲い掛かってきているかのような衝撃。

目を見開いてがたがたと震え出し、紫恋はぎこちなく首を横に向

けた。長い長い回廊の先、その曲がり角。悪意の根源を感じ取る、その場所には。

紫恋は、吐き気を飲み込むようにこくりと喉をならした。その紫の瞳に映るのは、漆黒の闇が変化したような人の形。遠くにいるはずなのに、まるで目の前で心臓を握り締めてくるかのような、圧倒的な存在感。その闇には輝くものが二つ。金と銀がちりばめられたその輝きは、残酷で恐ろしい、二つの瞳の光だ。

「最低……!!」

叫ぶような深艶の声が頭上から響いてきた。その瞬間、闇の影は回廊の角をすべるように移動して消えていった。紫恋の体が、縛り付けられていた何かから一気に解放される。だが恐怖の余韻と震えは止まらなかった。

「最低！最低よあの子！！ただの人の身にあんな剥き出しの邪氣を中てるなんて！」

激怒した声を張り上げて深艶が足を踏み鳴す。そしてすぐさま彼女は紫恋の前にしゃがみこんだ。震え続ける紫恋の体がぎゅっと抱きしめられる。

「ごめんなさい、本当にごめんなさい紫恋。あんなので、ごめんなさい」

紫恋の耳元で囁かれる彼女の声もまた、震えている。懺悔するように繰り返される謝罪の言葉。あんなの。あんなのとは、今の、闇の人物のことか。酷い眩暈のせいで姿はよく見えなかったが、だが紫恋は直感であれが何という名のものか、分かったような気がした。詩依たちに紫恋を連れてくるように命じた、彼らの主人。

「・・・困ったものだね。本気なのかい？魅月・・・」

詩依のため息交じりの呟きが紫恋の耳朵をそつと撫でた。

「ああああの、一人でやりますから！」

「そんな遠慮しなくていいのよ」

「遠慮っていうか、その、人にやってもらうなんて慣れてないですから・・・っ」

着ていたものを本当に遠慮なく剥かれて裸にされた紫恋は、桶と布を持つ深艶から体を隠そうと必死だった。紫恋の体を洗う気満々といった彼女から、なんとか布だけでも奪い取る。しぶしぶといったように彼女は紫恋が自分で体を洗うことを了承し、手に持った桶でたつぷりと溜められたお湯をすくった。温かく湯気の立つそれが、優しく紫恋の肩からかけられる。村娘の紫恋はこんな贅沢にお湯を使つて体を洗うことはめったになかったので、温かな湯に身を包まれる久々の感覚に、ほつと安堵の息をもらした。

背中譲らない、という深艶の頑なな言葉には逆らうことが出来ず、結局彼女に背を向けて体を洗うことになった。紫恋は手に持った布で、お腹を必死にこすり続けた。お腹には、さつき襲われた犬の化け物から浴びせられた返り血がこびりついていたので、赤く溶ける色と独特の嫌な匂いに、紫恋は顔をしかめる。

「・・・ねえ、一つ訊いてもいいかしら」

背後から、艶のある声音がかけられた。

「は、はい」

「紫恋、あなたには歳の離れたお姉さんがいたかしら？」

「お姉さん・・・？いえ、そんな話は聞いたことが」

「ならお母さんは？お母さんの名前は？」

「母の・・・？」

紫恋は眉をひそめた。それはさっき詩依にも訊かれたことだった。肉親の存在は、ここではそんなに重要なことなのだろうか。

「わかりません」

紫恋は、詩依に答えた時と同じように返答した。幼い頃の記憶が封印されていて、わからないのだと。

「私はずっと、妹と二人で暮らしてきました。それ以外の肉親のことは、一切何も知らないんです。あの、なんでそんなことを・・・？」

「・・・いえ別に、ちょっと気になったただけなの。思い出したくない記憶なら、もうこれ以上は詮索しないわ。ごめんなさい気にしないで」

「はあ。あの・・・私も、訊いてもいいんでしょうか」

紫恋は背を洗っている深艶に、おそろおそろ声をかけた。

「・・・今、答えられることならば」

背後からは、少しためらいがちな返事が返ってきた。今はまだ、答えられることが限られているようだ。

今宵だけは我慢して欲しいと詩依には言われたが、彼女からこの

状況を少しでも知ることが出来るだろうか。訊きたいことなど、数え切れないほどある。むしろ分かる事がここに存在しないのだ。場所も、人も、常識も、全て何かが狂っている。

全てを知りたい。そこでまず一番に紫恋の脳裏をよぎったのは、さつき現れた暗い闇の存在だった。

「さっきのあれは・・・あれが、鬼神という方ですか？」

「そうよ。あの最低男。あれが私たち鬼の王」

「最低男・・・深艶さんも、その鬼神って人の側近、なんですよね？」

「ええ、あのバカの側近なんて、ちつとも誇れることじゃないけれど」

自分の主人に対する言葉としては随分な物言いである。彼女の属する鬼導と鬼神とは、普通の主従関係とは何か違うのだろうか。

「・・・何なんですか、鬼神って。贅姫っていうのも、鬼っていうのも、一体何なんですか。ここはどこなんですか」

疑問は一つあげたら止まらなくなった。背を洗う深艶の手が止まった。彼女は、返答の言葉を慎重に選んでいるようだった。

「あちらとこちらは表裏一体となった世界」

深艶は唐突にそう切り出した。ぽつぽつと、探るように話は進んでいく。

「この鬼の一族の領域、その世界の裏側にあるのが、あなたが生まれ育った場所。『狭間村』で、合っているわよね」

「どうして、村の名前・・・」

「歴代の贄姫は、みんなそこからやってくるからよ。狭間村。人界において妖界の狭間に最も近い村。遙かなる昔、崩れかけた二つの世界の均衡を支えるために、こちらからあちらへと渡って封印を守った妖しの巫女がいたらしいの。その彼女の子孫は妖界との狭間の近くに村を築いた。繰り返される人との交配によって妖しの血は薄くなっても、わずかに狭間から漏れ出す妖界の気による影響で、そこではたびたび特殊な力を持つ娘が生まれるの。珠玉の紫の瞳を持つ娘がね」

「・・・私？」

「そう。こちらの空気は、あちらに棲む生き物や土地には強すぎて耐えられない。重なり合う二つの世界は、どちらがどちらを失っても成り立たないまるで一つの存在であるけれど、でもけっして交わりあうことは許されないの。常に世界の狭間は遮断されていなければならぬ。だからこちら側の我々は、力を持つものとして封印の力を守ってきた。世界に四つ存在する狭間、その一つを守っているのが、四大家族の一角、私たち鬼の一族。そしてその封印の最大の要が、鬼の王である鬼神なの。他の三つの一族と違って、鬼はほぼ鬼神のみで封印を支えているといっている。それで均衡は充分に保つことが出来ているの。だけど・・・一つだけ、問題があつて」

語られる不可思議な言葉の羅列に呆然と聞き入りながら、紫恋は首を後ろに向かせた。そこには、ひどく真剣な顔をした深艶の顔があつた。

「鬼神の代替わりの時に、封印は揺らいでしまうの。原因は鬼神の封印の力の継承方法にあるのだけれど・・・とにかく、鬼神が交代すると封印は一時期決壊してしまう。世界が悲鳴を上げるのが最も顕著に現れるのが、あなたも見たでしょう？赤い月」

「・・・赤い月が出て・・・私は生贄に捧げられることになったんです」

「そう、生贄に、ね。赤い月のままではいずれどちらの世界も崩壊してしまう。だから世界の均衡をもう一度取り戻すため、ここで必要とされるのが狭間村の紫の瞳の娘。妖界の気と人の血を携えて生まれるその娘には、生まれつき力が備わっているの。崩れゆく世界の均衡を、鎮めることのできる力が。その娘が狭間の亀裂をくぐってこちらに来れば、まずひとまずは亀裂は閉じて世界は再び遮断される。でも・・・それだけではだめなの。要となる鬼神の封印の力が安定しなければ亀裂は再び生じてしまう。だから・・・だから、やってきた鎮めの娘、贄姫は・・・新たな鬼神に・・・」

深艶の言葉はそこで途切れた。彼女の表情は、そこまでが限界とといったように苦々しく歪められていた。

「私は・・・これからどうなるんですか？今宵だけ耐えてと詩依という方には言われましたけど、一体、今宵なにが」
「ごめんなさい、これ以上は」

深艶は静かに首を振った。肝心なところで言葉を濁されては、紫恋の言いようのない不安は募る一方だった。もう少しなにか聞き出せないか。そう紫恋は考えをめぐらせて・・・一番重要なことを、確認していないことに気が付いた。

「・・・一晩たったら自由になれるというのは本当ですか」
「ええ、そうね。今宵、あなたが贄姫としての役目を無事終わらせられたら、あなたは贄姫という立場から解放されるわ」
「なら・・・そうしたら・・・」

紫恋の胸がとくと高鳴った。そう、紫恋にとって最も重要なこと。それはまぎれもなく紫恋の世界のほとんどを占めている、大切に途方もなく愛しい存在。

「帰れますか？妹のところへ」

求めることなど、たった一つ。紫苑をもう一度抱きしめられるなら、他に何も欲しはしない。

全てを捨てて、覚悟を決めてここへ来た。けれども今、こうして自分は生きている。そして、これからも命が続くというのなら。死のあきらめに、再び希望の光がさしてしまった。

だから急速に膨らむ願いが瞬時に折られるのは、心を串刺しにされるかのような酷く残酷な痛みを味わうことになる。

動揺に揺れる深艶の瞳、そして、硬く口を閉ざして俯く辛辣そうな顔。紫恋の期待は静かに、だがはつきりと碎かれてゆく。

冷たくなった滴が髪からゆっくり伝い落ちた。それは新たに生まれた温かな滴とじんわり混ざり合い、冷えた肢体を伝って流れていた。

第三話（後書き）

私信

リンさんへ

メッセージありがとうございます。これからも応援に励まされて頑張ろうと思います。まだまだリンさんにとって見覚えのある単語や設定がチラチラと出てくると思うので、楽しみにしていただけに幸いです。

後ですね、メッセージの方で感想を送っていた場合、返信が必要でしたらアドレスを添付して欲しいのです。アドレスはちよつと・・とお思いでしたら、『小説評価／感想』の方から感想をお送りください。お願いします。

また来てくださるのを心よりお待ちしております！

第四話

蠟燭の明かりが揺れていた。それに合わせて部屋の中の家具が落とす影も、ゆらりゆらりと揺れ動く。まるで人が動いているようであるけれど、今この部屋に佇むのはたった一人だ。

小柄な少女一人に対して用意されたのはあまりにも広い部屋だった。生まれつきお偉い御身分の人間ならばそうは感じないのかもしれないが、小さな村の簡素な家で育った彼女には、無駄とも思える空間の使い方であった。部屋に足を踏み入れて目の前に広がる圧倒的な光景に固まった彼女、紫恋は、部屋を見て回ることもなく扉の前でひたすら立ち尽くしていた。

その部屋は紫恋にとつては風変わりとしか言いようなないものであふれていた。比較対照が巫女姫の社しか思い当たらないのだが、それでもこの城、この部屋は変わっている。部屋といえば下は畳、四面のどこかには必ず障子の出入り口があり、天井は木製の板が張られていることが一般的であろうに、この空間は紫恋の固定観念をことごとく無視した造りとなっている。

下を向けば、目に映るのは艶やかで暖かみのある木の板が美しく敷き詰められた様子。さらに少し奥には見ただけで高級なのが窺える豪華な大きな絨毯が敷かれている。壁には金銀の色がちらちらと瞬いており、可愛らしく描かれた小花もあれば堂々と描かれた花の渦もあるといった、もはや一つの芸術作品である。天井までもが、一面に花のような水のような模様が彫られており、どこまでも手を抜いていない。右手の壁には、まん丸の形をしたそれはそれは大きな窓が一つ、取り付けられていた。壁自体が広いので大きさを錯覚しそうになるが、円の直径はおそらく紫恋の背丈よりも大きいのではないだろうか。窓にはめられているのは、紙で出来た障子のようなものではなく、硬質そうな半透明の物質だった。前に巫女姫に見せてもらったことのある、硝子製の小瓶によく似ている。木枠で隔

てられたそれは一つ一つ色が違い、窓というより綺麗な絵の役割が大きいような気がした。

そして、紫恋は後ろを振り向く。眼前にそびえるのは無駄に大きな扉だ。部屋の出入り口が引き戸ではなく、前後に開く木製の両開きの扉というのは何だか違和感があったが、この風変わりな様式の空間の出入り口としては不思議としっくりときた。

紫恋は無言のまま、扉の二つの取っ手部分を見つめた。硬く閉ざされたその扉は、今その取っ手を押したところで開くことがない事を彼女は知っていた。背中を押されて部屋に無理やり入れられた直後にこの扉は閉められて、それからがちゃりと不穏な音が向こう側から聞こえたのだ。それから扉をいくら押しても引いても、叩いても蹴っても叫んでも、開くことはなかった。完全に、閉じ込められてしまったのだ。赤い月が出た晩地下牢に入れられた時の再現のようではあるが、あの時の方がまだましであつたと思う。この目も眩む豪華な部屋と暗い地下牢、用意された環境は雲泥の差であるが、あの時は自分から望んで囚われ人となつたのだ。それなのに、今はまったく状況がつかめない。訳の分からぬまま、丁寧で優しい対応だが強引にこの場につれてこられて、身支度を整えられたと思つたら、いきなり一室に引張つていかれて閉じ込められている。もはや事の成り行きに呆然とするしかない。

とりあえず分かつたことは、今は成り行きに身を任せるしかないということだった。どうやら出逢つた彼らは紫恋に対して害意があるわけではないが、かといって紫恋の意向を聞いてくれるわけではないらしい。今は彼らの目論みの中に身を置くしかないようだ。

「……賛、姫……」

彼らが言つ自分への呼び名を、紫恋はそつと呟いてみる。湯屋にて深艶という女性から聞かされた摩訶不思議な説明が、頭の中を駆け巡つた。

一気に説明された言葉の数々は一つ一つが疑問に思うことばかりであり、とても信じがたいものであった。今まで普通に暮らしてきた狭間の土地や歴史に、とんでもない秘密が隠されていたなどと。紫の瞳についてだって、これは遙か昔に狭間の地を護った大巫女の血を濃く受け継いだ証であり、とてもありがたく誇りに思わねばならないものであるのだと何度も聞かせられてきたのだ。ただ、少しだけ特別な血を受け継いだまでのことと思っていたのだ。それをそんないきなり、隔てられた世界からの気の影響によるものなの、紫瞳の娘には世界の崩壊を救う力を持っているのだと大層なことを言われたところで、戸惑うしかなかった。

「一体何なの？贄姫って。私って何なの？」

呟いたところで答える声は当然ない。一体、この閉じ込められた状態で彼らはどうしろというのだろうか。『贄姫』は世界の狭間に生じた亀裂を封じるためにここにやってくるものらしいが、それ以外にも残された義務があるらしいことは深艶の説明から窺い知ることが出来た。それが、彼等の仕える『鬼神』とやらに関係するのだとも。

鬼神。その言葉を口にした瞬間、頭に浮かんたのは先ほど遭遇した闇の人影だ。まだ思い出すだけで体がぞくりと戦慄する。あれほどの明確な悪意をぶつけられたのは初めてであった。最低男、あの馬鹿、などと深艶は散々なことを言っていたが、たしかに紫恋にとつて害のある存在であることは否定できない。その鬼神に、贄姫である自分は関わらなければならないのか。

今宵で贄姫としての義務を終わらせれば、自由にしてもらえると約束された。その肝心の義務とは何なのかについて口を閉ざされたのが気になるが、おそらく鬼神の世界を隔てる封印の力を安定させる・・・というのに繋がるのではなからうか。このように閉じ込められている状況で何が出来るのかは分からないが。

夜が明けたら自由に。そう考えたところで、気が晴れることも希望を見出せることもなかった。

「紫苑・・・」

ずるずると扉にもたれかかってうずくまり、紫恋は膝に顔をうずめた。深艶によって何回も丁寧に梳かれた髪が、身を包む柔らかな薄い衣をさらさらと音をたてて軽やかに流れる。

恐怖よりも、戸惑いよりも、今紫恋の心を苦しめているのは途方もない悲しみであった。このおかしな状況から解放されたところで、二度と妹に会えることはない。これから紫苑のいない世界で、一人この謎の世界で生きていくしかない。

妹を護ることだけが生きがいのようなようだった紫恋にとって、それはあまりにも絶望的な状況だった。湯屋にて一旦止まったと思っただ涙は、簡単に堰を切って溢れてくる。死ぬことよりも、喪失感を抱えて生きていかなければならない現実のほうが、紫恋にとっては辛かった。

帰りたい、と胸中で幾度も繰り返すが、その願いを聞き届けてくれる神などいないのだと思い知る。生贄になると決めた時から、紫恋は神を敬う気持ちを捨て去ったのだから。ならば自分で切り開くしかないのか、方法も分からぬがそんなことを思考に上らせた時、一つの光景がよみがえった。赤い土壁。あちらの土地で見た最後の光景、そしてこちらの世界にも存在したもの。二つの世界を隔てる壁。きつと、あの向こう側には愛しい人たちの住む村があるのだ。あの、向こう側にもう一度行けさえすれば・・・

紫恋は立ち上がり、そわそわと落ち着かなげに部屋を見渡した。行きたい。行ってもう一度確かめたい。あの赤い土壁のところに。いつまでもこんな閉じ込められた膠着状態のままは我慢できなかった。

一歩一歩足音を忍ばせながら、紫恋は広い部屋をさまよった。蟬

燭の暖かな明かりに照らされた部屋を、じつと注意深く観察する。ここから出るとしたら、と考えたところで、出入り口は二つ。硬く閉ざされた扉か・・・それとも、右手にある大きな丸い窓か。あの絵のような窓は果たして開く仕組みなのかどうかは怪しいが、試してみる価値はあるかもしれない。

しかしそれよりも、最も紫恋の目を引いたものがあつた。それは部屋が一番奥に組み立てられていた、白い大きな布で覆われた一角だつた。最奥は上座のような一段高い造りとなっており、そこに美しく細工の施された木で組まれた四つの柱が立っている。その囲われた中を隠すように、薄い白布が柱から柱へと掛けられていた。部屋の中に組まれたもう一つの空間。紫恋にとってはもちろん見たことのないものである。だがなんとなく、紫恋はその用途を予想することが出来た。部屋の奥にあることからして、寢床と考えるのが妥当であろう。

堂々としつらえられたそれに圧倒されつつ興味を引かれた紫恋は、段を上つて近づいてみた。橙の炎の色にやんわりと染まつた白い布、中心にある割れ目におそろおそろ手を伸ばし、そつと布を持ち上げて、隠されていた中の空間の様子を覗き見る。そして。

「――！！」

完全に、紫恋の体は硬直した。思考も、一瞬驚きのあまり停止してしまつたようだつた。布を持ち上げる手が、徐々に嫌な汗に湿つていくのが分かつた。

まん丸になつた紫恋の瞳に映る光景。それは彼女が予想した通り、明らかに寝るために用意された空間だつた。だがその形式が、あまりにも想像とかけ離れたものであり・・・且つ、嫌な予感が一気に全身を駆け巡る程の衝撃的なものであつたのだ。

白い布で囲われた中は、それに負けないほど真白い布団がふうわりと敷かれていた。その布団の大きさは、それなりに広いこの囲わ

れた空間を埋め尽くすほどの大きさである。つまりは、一人分に
ては明らかに大きい。それもそのはず、布団は二組を隣同士ぴつ
りとくっつけて用意されているのである。そして紫恋を最も固ま
せた原因となったもの、それは二つちよこんと置かれた枕だった。
これを首の下に置けば、確実に首は痛くなるであろう硬質な高い枕
だ。それが、二つ。・・・二つ。二つ、だ。枕は一人に二つも
いらぬであろうに、それは当然のように二つ並んでいる。そう、
この寝床は二人のために用意されたのだと言っているようなもの
である。

黒く艶めく枕たちを見つめる紫恋の背に、冷たい汗が伝い落ちる。
その汗が着ている衣に吸われたのを感じた時、彼女は今初めて意識
して、自分の着ているものへと視線を落とした。

事態に呆然としている間に、深艶によつていつの間にか着せられ
たこの衣。深艶自身も風変わりな格好をしていたが、その彼女が用
意したからだろうか、今紫恋が着ているものもかなり変わった形や
質感の衣である。例えて言うなら・・・そう、物語に出てくる天女
か、はたまた深海の乙姫か。ゆるやかに体を包む衣の生地は透け感
があつて、淡く甘い桃色に染まつている。深艶の着ていた濃厚色で
重量感のある着物と比べて考えるに、おそらくこれは寝巻きに違
ない。寝巻きにするにはもったいないほど美しい装束・・・だが、
それに包まれた己の体を見て、紫恋は綺麗だなどと思うよりも前に、
盛大に冷や汗をかくこととなった。

微妙に腕や胸元や足が透けている。体が丸見えと言うわけでは決
してない。だが、隠すべきところはなんとか隠れているが、その他
が淡い薄桃色の下に透けて見えている様は、自分で見ただけで充分
いやらしさを感じさせるものであった。

・・・まさか。

紫恋の縮んでいた心臓が、徐々に早鐘を打ち始める。深艶と顔を
合わせてからの記憶が、急速に頭を駆け巡った。お湯で洗われ磨か
れた肌、何度も何度も丁寧すぎるほどに梳かされた髪、そして仕上

げに体に塗られた香油。それから着せられた、このあられもない寝巻き。

何のために？ そう考えると視線はすぐさま目の前の二組の寝具に注がれた。答えなど、目の前にあるのではなからうか。

ぐるぐると思考がめぐる。深艶にさつき言われた、贅姫としての義務はきつと今宵終わるという言葉。あの時はその真意が見当もつかなかった。しかし今紫恋の心は、奈落の淵に立たされているのかのとき恐怖を伴い、一つの予想を打ち立てている。贅姫という立場の紫恋は、鬼神という男を中心にして起こった問題に関連してここに連れてこられた。贅姫が鬼神の特別な力とやらを何とかすることが出来るのだとしたら・・・その、方法とは。

「・・・・・・・・逃げなきゃ」

まず頭に浮かんだ言葉を呟き、それが鼓膜を震わした瞬間、紫恋は一気に我に返ったかのように目を見開いてきびすを返した。手離された白布が再び寝床を囲い隠す。彼女はその忌まわしいとしか言いようのない光景を二度と振り向くことはなく、目的に向かって直進した。目をつけたのは丸い形の大窓。扉は硬く封鎖されているのだ、外へと通じる可能性があるのはこの窓だけである。

窓は残念ながら手を伸ばしたもう少し先の、それなりに高い位置に設置されていた。紫恋はすばやく部屋を見渡し、近くに置かれていた小ぶりの戸棚に目をつけた。すぐさま彼女は下に敷かれている敷物をずらすと物音を立てないように引つ張る。慎重に戸棚の位置をずらして窓の正面まで持つてくると、紫恋はそこに足を掛けて上った。どうにか窓の淵に腕がかかることが出来たので、弾みをつけて彼女は一気に窓をよじ登った。幸い丸い大窓は外側に出っ張った造りをしており、円形の内側は足場の確保が余裕であった。色鮮やかな窓の右端に木の細工のようなものを発見したため、紫恋は汗ばんだ手で焦りながら細工をいじりだす。細工はかちゃかちゃと小

刻みに動き、この窓が開く仕組みである可能性を伝えてきた。

早く、早くと胸中で唱えながら謎の細工をいじっていると、ついにかちんという音を立てて細工の一部が回った。そして窓が小さく軋む音を立てて外側へ開きだす。歓喜の表情で紫恋はいきおいよく窓を押して首をのぞかせた。しかしその直後に目にした光景は、あまりに絶望的な景色であつた。

「ひっ……!!」

息をのんで彼女は乗り出した身をひっこめた。見えたのは眼前、否、眼下に広がる城外の庭であつた。今の今まで完全に紫恋は忘れていた。この部屋に着くまでに、幾つか階段を上ったということを、そう、冷静に考えれば、ここは窓から飛び降りられるほどに低い位置にある部屋ではなかつたのだ。

呆然と紫恋は、下できらめいている篝火たちとそれらに照らされた庭の木や石畳を見つめた。あれらは遠すぎる景色ではない。だがしかしここから飛び降りたら骨が折れるか、最悪打ち所が悪ければ死ぬだろう。かといってこの嫌な予感しかない部屋で時が過ぎるのを待つのも辛い。どうしよう、という言葉以外、もはや頭には浮かぶことがなかつた。

頭を抱えて高鳴る心臓の音を感じた時、静寂を保っていた部屋に、突然ひゅうつと細い風が入り込む音がした。紫恋はその音が今よじ登っている窓からではなく、なぜか背後から聞こえた気がして、後ろを振り向こうとする。しかし視線が風の正体をとらえる直前、今度は大窓から強風がなだれ込むように室内に入ってきた。あまりの強さに部屋の床に転げ落ちそうになり、慌てて彼女は窓の淵を掴んだ。しかし体の安定を確保したと思つた瞬間、視界が一気に暗転した。

部屋に灯されていた蠟燭の明かりが風で全て消えたのだ。暖かみのあつた室内は、今は暗くて何も見えない。さっきまで煌々と輝い

ていた月は今は雲に隠されているらしく、本当に微弱でしかない明るみが空に垣間見えた。

動揺して部屋を見渡した紫恋だったが、もちろん見えるのは闇ばかりだ。・・・いや、違う。入り口の扉がある辺りに、きらりと光るものが見えた。吸い寄せられるように紫恋はその光を見つめる。そしてその光が記憶にある恐ろしい光の姿と一致した瞬間、小さく悲鳴を上げて口を覆った。思い出ただけでこみ上げる吐き気と恐怖心を飲み込むために。

光は二つ並んでいる。そしてその場にあるのは夜の闇よりも濃く威圧的な黒い影。冷たい二つの光がずっと細まった後、暗い闇はゆっくりと紫恋に近づいてきた。

「あ・・・あ・・・」

紫恋の全身が総毛立ち、がたがたと震えだす。足は本能のままに後ろへと下がったが、すぐに窓の淵にかかってこれより後退するとは不可能だった。丸い出窓の上から、彼女は近づいてくる闇をただ見下ろすしかない。目を逸らすことを許さないような獣の如き輝く瞳に、震える体は縛り付けられた。

影と二つの瞳の光は、彼女と少し距離を置いたところで立ち止まった。闇の中でもはっきり分かる、こちらを睨みつけてくる眼。酷く伝わってくる憎悪ともとれる悪意。紫恋を見上げるその影は、彼女を恐怖と絶望で嬲るかのようにしびしびと動かなかった。そしてしばらくした後、ふっと影は嘲笑した。

「ここから逃亡しようとはいいい度胸だな」

低く、しかし以外にも若く聞こえる男の声音が闇の空気を震わせた。

「それとも死ぬ気だったのか。そこから飛び降りたところで確実に死ねると思えんが」

紫恋はぎゅっと窓の淵を掴んで身を縮めた。声など、一つも出ることが出来なかった。

「・・・降りて来い」

冷徹な声音で命令が下された。だが当然、窓から降りてこの影と対峙する度胸など紫恋にはない。ぎこちなく彼女は首を横に振って、落ちそうになるほど窓の淵ぎりぎりまで体を後退させた。その態度を見た影の男は、嘲笑の色を濃くしたようだった。

「ならば飛び降りてみる。運がよければ助かるだろうさ」

やれるものならやってみると声はあざ笑う。紫恋は眼下の景色を再び見つめた。飛び降りて助かるか死ぬかは分らない。だがしかし、飛び降りなかったらもつと悲惨な事が待っているだろう。ならば、覚悟を決めるべきだと思った。下には木も生えている、そこに落ちれば助かる可能性はある。

愛しい妹の名を心で呟き、紫恋は決心して体の向きを変えた。そのまま曲げていた足にぐつと力を込め、視界が窓の淵から外へと飛び出す・・・その直前で、紫恋の体はぐつと止まった。

「・・・まさか本当に飛び降りるとはな。度胸があるというより馬鹿なのか」

男の声は背後から耳元で聞こえてきた。紫恋は背後を振り向く事が出来ず、ただ蒼白になる。長い腕が、紫恋の体をすっぱり包んで窓に引き止めていた。たった一瞬のことだった。何が起きたか理解

するだけの余裕はなかった。男は紫恋が振り返った一瞬のうちに窓に上って紫恋を捕らえたのだ。

「骨が折れたなら今宵抵抗を押さえつける労力がなくて済むが、だ
がここまで引き上げるのも面倒だ。落ちるのはやめておけ」

決して紫恋の身を案じたわけではない発言が冷たく彼女の耳元で囁かれる。男の腕の中で震え続ける彼女は、ようやく一つの名を口にした。

「・・・鬼・・・神・・・？」

「ああ」

男の腕が動き、冷たい大きな手に首元を掴まれて紫恋は上を向かされた。白い喉元がぴんと張る。その無防備となった首筋に、背後から柔らかいものが触れた。首筋を生温かい舌が伝う。ぞくりと背をのけぞらせる紫恋の反応を愉しむかのような嗜虐的な笑みが気配で伝わってきた。

「死ぬなら義務を終えてから死ね。俺が封印の剣を納めておくのはもう限界だ。早く鎮めろ・・・なあ、贄姫？」

紫恋の細い首に、鋭い痛みが奔る。柔らかな肌に容赦なく噛み付かれ、恐怖と苦痛の叫びが短く暗い闇に響き渡った。

第五話

窓の向こうに広がる月光を隠した夜の景色が大きくぶれた。必死で頭を振つてもがく紫恋だったが、首筋にたてられた鋭い齒は、柔らかな肌から離れることはない。背後から覆いかぶさる影を何とか突き飛ばそうと伸ばした腕は、易々と背後の大きな手に掴まれてしまった。掴まれた腕からは、相手のひんやりとした冷たい体温が伝わってきた。それはそのまま彼女の背筋をぞくりと伝って粟立たせ、涙腺を刺激する。

「やつ……い……た……」

噛み付く力は、肉をえぐる程に強い力というわけではなかった。これは紫恋を傷付けて食い殺すのが目的ではなく、じつくりと恐怖を与え、力では敵わないのだと思い知らせるための行為なのだ。だが無論、恐怖と混乱に陥った彼女には、相手の意図をそんな冷静に分析する余裕などあるわけがなかった。ただただ怯え、もがいて暴れる。それは相手の嗜虐心をさらに増幅させるだけの行為であるというのに。

少しずつ少しずつ、肌に加えられる力は強くなっていった。紫恋がそれに反応して身をよじり、泣き声の入り混じった悲鳴をあげれば、背後からは愉しむような嘲笑の息がかかった。苦しむ反応を試されているかのように首に力は加えられていく。手首も徐々にぎりぎり締め上げられて、もはや彼から逃げることは不可能であるのだと思い知らされた。

丸い出窓の上、外に半分身を乗り出した状態で、紫恋は苦痛に歪めた顔を俯かせた。ぼやけた視界に遠い橙の光がちらつく。涙が下へぽとぽと落ちて消えていった。

暴れても無駄なのだと知って紫恋が俯いたまま肩を震わせると、

ようやく首に喰らい付いていた歯は離された。それすらも小さく息をのみ、彼女は身を固まらせた。背後に重なる男の顔は、きつと振り向けばすぐそこにある。暗闇の中、冷酷で恐ろしい光を宿した瞳が紫恋の眼を捕らえるのだろう。それを想像しただけで、体は動かなかった。口から声にならない悲鳴が吐息となつて流れ出る。

「そうして怯えていればいい」

嘲笑を含む低い声音が耳元で囁かれ、紫恋の全身がびくりと痙攣したように震えた。くつくつと、押し殺したような冷徹な笑い声が耳朵を撫ぜる。

「どうせ今宵で全てが終わる。泣いても叫んでも誰も助けに来ることはない。まあ・・・せいぜい愉しませてもらおうか、こんな」

手首を掴む男の手が離されたと思ったら、肩と胸を無遠慮にわし掴まれた。

「貧相な体でもな」

「い・・・やあぁっ・・・!!」

悲鳴は直後に息をのむ音へと変わる。紫恋の視界が一気に回った。ろくに月明かりもない暗闇のために、見えるのは依然として黒い影ばかりではあったが、確かに視界は逆さまになったと感じた。突然引っ張られて痛む腕、腹を圧迫するごつごつとした感触、そして頭に血が上っていく感覚。

担がれた、と思つた瞬間には、男と一緒に窓から室内へと落ちていくのを感じた。衝撃で再び強く腹部を圧迫されて、思わず咳き込む。だがそんな紫恋の様子を気にとめる素振りもなく、彼女を肩に担いだ男は荒々しい歩き方で部屋の奥へと進んでいく。紫恋は反射

的に握っていた彼の背の衣をひっぱって暴れるが、返ってきたのは男の鋭い爪に、掴まれている箇所を突き刺さされた痛みであった。

「や、やだ、いや離して、離して……いやっ――」

男の向かう場所を察した紫恋は、いよいよ悪寒が全身を包んだ。何も見えない闇の中、男の腕が動く気配。次に聞こえた布が擦れる音。さつき蠟燭の明かりの元で見た邪悪な光景が脳裏をよぎる。いやだ、と叫ぼうと思うよりも前に、担がれていた身体は乱暴に投げ落とされた。

どすん、という音と共に、全身に奔る鈍い痛み。手に感じたのはふんわりとした布団の感触だが、柔らく沈むわけではない。投げられた衝撃ですぐには身動きがとれず、紫恋はうめいてなんとか視線だけでもさまよわせた。

視線はすぐさま、彼女を見下ろす冷たい瞳の光とぶつかった。目を見開いて、逃げようと身を起こした紫恋だったが、腰が浮くよりも前に上から強い力で抑えつけられ、あっけなくその身体は布団へと沈んだ。ほとんど吐息に近いものしか出ない悲鳴をあげて、彼を突き飛ばそうと暴れるが、やはり両腕を掴まれて抵抗らしい抵抗など出来なかった。足もがいているうちに男の足が割って入ってきてもはや身動きも満足に出来はしなくなった。

「……っ……どうして？ どうしてこんな……あああなたは、あなた……」

「どうして、だ？」

顔のすぐ真上で声がする。男の表情は、闇が濃いせいでこんなに近くでも分らないが、きつと嘲りを含む冷淡な笑みを浮かべているのである。事は声から窺えた。

「・・・鬼導の奴等から聞かされていないのか？」

両腕を一つにまとめて掴まれた。空いた男の片手が腰に触れたのを感じ、身が強張る。

「お前は捧げられたんだ。贄姫として、この俺を鎮めるために。お前は、ここに来たその時から俺の所有物。意見も拒否もお前に許しはしない。贄姫はただ黙って、鬼神の意向に従っている」

「従っているって・・・あなたは、私に何を・・・？」

「決まっているだろう。贄姫としての義務を果たしてもらうまでだ」
「な・・・」

するりと衣擦れの音が聞こえた。腰に巻いていた薄い帯が解かれたのだと知って、ようやく紫恋は相手の目的が明確に晒されたと理解した。必死に身をあちこちによじるが、圧し掛かる力には抗えない。突然、ひやりとした冷たい感触が胸元に触れた。彼の手が襟元を掴んだ、と思った直後には乱暴に引っ張られ、襟が大きく肌蹴たのを感じた。上半身が外気に晒され、ぞくりと粟立つ。まだ、暗闇であるのはましなのかも知れなかった。見られずに済むし、こちらもきつと恐ろしいのであろう鬼神の顔を直視しなくて済む。だからといって恐怖と嫌悪感が消えるわけではないが。

「ま、待つて！お願い待つて下さい！まず話を」

「黙れ。話す時間など必要ない。今宵お前を抱けば俺の内に納めた封剣は鎮まり、全ての面倒事が片付くんだ。とっとと終わらせろ」

「抱・・・！？な、そんなの聞いてません」

「ああ・・・奴等、あえて言わなかったんだろう。お前が怖気づいて自害でもしたら困るからな」

そうか、深艶が湯屋にて口ごもったのはそういうことだったのか。

ようやく紫恋はあの時の彼女の気まずそうな表情の意味に合点があった。

冷たい手のひらに胸のふくらみをなぞられる感覚に、背筋が弾かれたようにびくりと反る。ねじった手首は片手だけで掴まれていると言っのにびくともしなかった。熱の感じられない手で身体を弄られ、胸元の柔肌に再び牙をたてられた行為からは、じっくり髑つてやるという冷酷な鬼神の意志が強く伝わってきた。

「ひっ・・・う・・・ねが、お願いだからやめてくださ・・・」

「安心しろ。今夜の記憶は、そう長く引きずることはない。今宵で最後、本当に全てが終わる。お前が義務を果たし終えたら、その時は」

男の唇が紫恋の耳に直接触れた。

「お前は用済みだ。目障りなものを傍に置くのは俺の主義じゃない。だから全ての記憶ごと・・・捻り潰して殺してやるよ」

「――！！」

初めて、これほどまでに鮮烈な死の恐怖を与えられた気がした。生贄になるのには自ら志願したが、あの時はすぐ目の前に大切なものが存在したから、心に使命感が燃えていたからであつた。だが今この状況は明らかに違う。逃げ場も無い、選択肢も与えられない、心の拠り所も存在しない、ただ一方的な死の宣告だつた。

驚愕に震えた紫恋の反応に、鬼神がにやりと笑った気配がした。そしてカタカタと震える背中に、大きな手が回された。次に鬼神のもう片方の手が、彼女のふくらはぎを下からなぞりあげる。そのまま手は彼女の恐怖を掻き立てるようにじわじわと太腿へと上がっていき、軽やかな寝巻きの裾をたくし上げて、細く白い足を外気に晒していった。

「いや、やめて離して！やあああああ——！！」

両手で力いっぱい押したところで男が動くことはない。肩に触れた感触からは相手は細身であることが知れたが、これが男の力、もしくは鬼の力なのだろうか、抵抗が彼の前ではいかに無意味であるかを心の底から思い知らされた。暴れれば暴れるほど、泣き叫べば泣き叫ぶだけ、彼を刺激し行為を誘う事にしかないのだ。

じわじわといやみたらしく足を撫でられる感覚に、紫恋は周りの布団を引つ掴んで必死に身をよじり、押し掛かる体から逃れようと何度も試みた。その必死さは、彼にしてみれば滑稽で仕方がない様なのだろう。あざ笑う声が頭上からは聞こえてきて、悔しさに涙をこぼして唇をかんだ。

手を闇の中ばたばたと暴れさせていると、ふいに布団の感触とは違う薄い布をその手に掴み、紫恋ははっとした。これはおそらくこの寝台を四角に囲う白い布だ。ぎゅっとそれを掴んだ瞬間、ふいに下半身の浮き出た骨盤にまで彼の手が伸びてきて、思わず紫恋は大きく仰け反った。その結果。

「あ……」

ぶちっ、という何かが引きちぎられる音が聞こえ、同時に手で思いつき引つ張った薄布が一気に張りを無くして紫恋の手を滑っていく。柱から柱へと渡っていた白布は、引つ張った衝撃で落つこちたようだった。

瞬間、闇しか見えていなかった紫恋の視界に急激な変化が訪れて、彼女ははっと息をのんだ。囲いが取り払われた寢所に、一気に淡い光が訪れたのだ。それは紫恋がいた世界よりも遥かに明るい色を放つ月光だ。いつの間にか雲に隠れていた月は姿を現しており、部屋の中を青白い光で満たしていたのだった。

目をいっぱいに見開いて、紫恋は仰向けのまま固まった。暴れることを忘れて、光の中、今ようやく見えた鬼神の姿を凝視した。

紫の瞳に映し出されたのは、想像していたのとはまったく違う・
・・とても、美しい男だった。鬼神、などという仰々しく空恐ろしい名で呼ばれる男のことだ、紫恋は自然と醜い化け物の容姿を想像していた。なのに実際のその姿はあまりにも意表を突いたものであったのだ。

彼は、一見ちゃんとした人の形をしていた。出逢った詩依や深艶と同じような漆黒の髪をした男。男、と表現するよりは、青年と表現したほうがよいのかもしれない。見た感じずいぶん若い。おそらく三つ上だった葵と同じくらいではないだろうか。その顔立ちは、今まで見たどんな人よりも整っている、整いすぎていて造り物めいた恐ろしささえ感じられる程の端整なものであった。あの鬼導の三人も人並みはずれた美しさだったが、目の前の彼とは少し部類が違う。彼の顔立ちには甘さがなかった。人が安心して惹かれる種の人ではないのだ。冷たく、孤高な、立ち入ることが許されないと本能的に感じてしまう程の絶対的な存在。今はもう不気味な光を失っている彼の黒い色の瞳。その右目の周りには、詩依と深艶にもあったような黒い模様が描かれている。おそらく鬼の一族の特徴であるのだろう。

生き物であることを疑いたくなるほどの彼の顔を硬直して見つめる紫恋は、しばらくして微妙に眉をひそめた驚きの表情に変わった。今までの流れですっかり『冷酷で恐ろしい鬼神』の印象が頭に定着していたのに、目の前にある彼の表情は、それとは少し違った様子であったからだ。

彼は、驚いた表情をしていた。紫恋ほど大げさな驚愕の表情というわけではないが、切れ長の目をかすかに見開き、すつと息をのんで固まっていた。さっきまで余裕で紫恋をあざ笑っていた様子から比べれば、突然の大きな変化である。

なぜ、と呆然とした思考をめぐらせると、自身が彼の姿を今よう

やく見たのと同じく、彼も今ようやく紫恋の顔をはつきりと見たのだと言う事実が気が付いた。鬼神はあきらかに、紫恋の顔を見て驚き・・・動揺、しているように窺えた。驚かれたことに驚いて、紫恋もうつと息を詰める。

一瞬場が膠着した後、彼女の剥き出しの腰に触れていた鬼神の手が、恐る恐るという表現が似合う様で彼女の頬に触れた。冷たい手に顔を撫でられて、予測不能な彼の行動に紫恋はとまどったまま、覆いかぶさる彼の顔を見つめ返す。そうしているとふと、彼のその表情や顔立ちに、見覚えがあるような気がしてきた。どこで、と困惑した頭の片隅で思い返そうとした時、彼の引き結ばれていた唇がゆっくり開いた。そして、彼の低い声が、月光の差し込む張り詰めた空気の寝所に波紋を生む。

「シキコ・・・?」

彼の唇が、呆然とそう呟いた。

独り言なのか、質問なのかは紫恋には判断出来ない。

「え・・・?」

紫恋は小首をかしげ、困惑の声をもらした。すると途端に、彼女に腕を回し覆いかぶさっていた彼は、弾かれたように身を起こした。あまりに機敏なその反応にひっと小さく息をのんで、紫恋はやつと自由になった身体を半分起こした。そこで半裸の状態にされていたことにはっとして、慌てて布団を手繰り寄せて胸に押し当ててから、再び彼を仰ぎ見た。

立ち上がった彼は紫恋の顔を今一度見た後、すばやい足取りで寝所を降りて去っていった。漆黒の衣を翻し、足音を響かせ、まるで走って逃げるように。扉を壊れんばかりに荒々しく開いて、鬼神は嵐のように外へ行ってしまった。突然の事態に、紫恋はぐるぐる回

る頭で啞然とその後姿を見送った。

「……………どうして……………」

紫恋が最後に見た、彼の表情は。

「怯えて……………?」

意外すぎた表情が、混乱した脳裏にやけにはつきりと残っていた。残酷で非情な最初の様子からは想像も出来ない、最後の彼の顔。驚愕とも動揺とも違う……………あれは畏怖の眼差しであったと思う。鬼神という特別で尊いのであろう存在が、たった一人の非力な娘の顔を見て、怯えた。

「紫恋!!」

血相を変えたような女性の声が、紫恋の耳に飛び込んできた。ぐらぐらと眩暈にゆれ始めた彼女の視界の景色に、動く人影がぼんやりと映し出される。重たくなってきた瞼をこらえて人影に焦点を合わせようとしたところで、紫恋の身体がぐらりと糸が切れたように倒れた。布団に倒れこむ前に駆け寄ってきた女性に抱きとめられて、彼女に全ての体重をゆだねた。

「しっかりと紫恋!! あの子と何があったの!？」

「……………深……………え……………ん……………さ……………」

動揺した深艶の声が、紫恋にはやけに遠くぼんやりと聞こえた。冷たい汗が額からつうつと伝う感覚も、何だか自分の肌ではないように、身体も心も麻痺してしまったようだった。だが、深艶の品の良い香りと、彼女の温かさだけはすごく近い。安心感が一気に心を

埋めていった。

「あの子があなたを殺める事のないように、扉の向こうですっと待機していたのよ。なのに・・・あの子いきなり部屋を飛び出してくるんだもの。見たことがないくらい慌てた様子だったから、本当に何があったのかって驚いて・・・」

朦朧とした意識の中、紫恋は彼女の声がどんどん震えていくのを感じた。やがて、紫恋の胸元に、ぽとりと一滴温かいものが落ちる。

「ごめんなさい・・・ごめんなさい紫恋。贄姫の義務を黙っていて騙す真似をしてしまったわ」

ぐったりとした紫恋の身体は、涙を流す深艶にきつく抱きしめられた。

ああ、そうだ、この時ようやく紫恋は思い出した。さっきあの鬼神の驚いた顔に見覚えがある気がしたのは、深艶を連想したからだ。彼女にも初めて会った時に驚いた顔をされたから、無意識にそれを思い返したのだ。それに、なぜだろう、纏う雰囲気は全然違うのに、深艶と鬼神はどこか似ているような気がして――

「紫恋？紫恋！？」

深艶の声が遠のいていく。

緊張と恐怖心の糸がいきなり切られ、紫恋の意識は眠りをむさぼる様にして途絶えた。

第六話

『お姉ちゃん』

声が聴こえる。可愛らしい女の子の声。世界で一番大好きな女の子の声が。

どこにいるの？と自分は辺りを見回した。そこは光が天からも地上からも溢れ出て空を満たす真つ白な世界。素足が温かくも冷たくもない光の地に浮かんで、ふわりふわりと迷いさまよう。視線を揺らして白い世界を見渡すが、そこに人影らしきものは発見するこゝとが出来なかった。目に映るのは、ひたすら続く不変の光の世界だ。ああ、なんて優しいんだろう。まるで神様の果てしない慈愛に抱かれていたようだ。柔らかに身を包んでくる光に、ふっと思わず笑みがこぼれた。

だが口元が緩んだと同時に、ちくりとその胸に突き刺さった小さな痛み。それに息を詰めて胸元を押さえると、心に眠っていた違和感が疼きだす。神様？自分はどうしていまだに———そんな言葉

を唱えているのだろう？だって、自分は……神様がどれだけ酷い存在であるのかを思い知ったというのに。

『お姉ちゃん……』

ぼんやりと、世界を震わす頼りなげな声がする。きつとあの子は自分を探している。涙をぼろぼろ流して手を伸ばしているに違いないのだ。早く見つけてあげないと。あの子を護るのは自分の義務なのだから。

前に進んでいるのか分からなくなりそんな鈍い感覚と微かな目眩。白光の中、必死にもがいて愛しい小さな妹の姿を捜す。早く、早く、この光が消えてしまわないうちに。この声が届かなくなってしまいう前に。あの子の、手を。

瞼の裏側に蘇る妹の姿を真白い空間へと思い描き、手を伸ばす。

すると、伸ばした指の先に触れた空間が、ゆらりと不安定に震えた。歪んだ空間は渦を巻き、中心に出来た亀裂がだんだん大きくなってゆく。ぽっかりと開いた穴からあふれ出るのは、白とは間逆の黒い闇だった。闇はあつという間に穢れなき光の世界を飲み込んでゆき、悲鳴をあげて後ずさる身体にまとわり付いてくる。困惑して絡みつく闇を振り払おうともがいていると、ふいに腕が冷たい手に掴まれた。掴んできた手を視線でなぞると、そこに映ったのは闇の色よりも濃い、漆黒の人影だった。息をのんで固まっているうちに、目の前の人の姿が徐々にはつきりと浮かび上がってくる。見えてきたのは造形物であるかのような男の顔だった。凍てついた眼差しで、じつとこちらを見つめている。

そう・・・そうだ。これが自身が行き着いた『神』なのだ。自身が捧げられた『神』という残酷な存在なのだ。

男の形の良い唇が小さく何かを呟いた。声は聞こえない。しかし短い言葉であったのは分かる。彼はもう一度同じ言葉を呟いた。そう・・・どうやら三文字の言葉を。

ぎり、と突然腕を締め上げる手の力が強まった。あまりの痛さに悲鳴をあげて、精一杯の大声で思いついた大切な名前を叫んだ。

『紫苑』

世界が一瞬して切り替わった。

呆然とした思考の状態で、まず目にしたものは自身の片腕であった。何もない空間に、何かを掴むように伸ばされていた。腕を掴む手はもはやなく、まとわり付くのも闇ではない。柔らかな、光だ。光といってもさっきまでいた真白い幻想的な光ではない。とても見慣れた、現実感のある朝の陽の明るみだ。

ぼうつと伸ばした自身の腕を見つめて、紫恋は今ようやく自分が夢から覚めたのだということを理解した。汗ばんだ片腕をそつと下ろして、どくどくと妙に高鳴る心臓の上に置いた後、仰向けに寝て

いた上半身をゆっくりと起こした。視線を左右に振って、さらに前後の景色も確認する。彼女はそこで血の気がさあつと引いたのを感じた。

彼女の四方を囲むもの、それは白い布だった。見覚えは、ある。蠟燭の明かりの下と自然な日光の下で見えるのでは印象が違いはするが、これは間違いなく、昨夜忌まわしき出来事があつた場を囲つていた布だ。そして、その時紫恋が引きちぎって床に落としたはずの布であつた。今は元の様に修復されてきちんと柱から柱へと渡っているが、今紫恋が寝かされていた場所は、気を失う瞬間にいた寝室と同じ場所であることが窺えた。その証拠に隣を見れば、きちんと整えられた、誰も寝た形跡のない布団が敷かれている。

やはり、全て現実だったのだ。あの悪夢の夜は。・・・いつそ本当に悪夢であつて、いつか目覚めて救われる事が出来るのならどんなに良かっただろう。目が覚めて、思いつきり紫苑を抱きしめることが出来たなら、どんなに。それが叶わないのだと、身を囲む現実の光景は酷く鮮明に朝日に照らされて目に飛び込んできて、事実を突きつけてくる。

次に紫恋ははつとして視線を身体に落とした。着ているものが、変わっていた。気を失つた時は、薄く透け感のある薄桃色の装束を無理やり脱がされかかったあられもない姿であつたはずだが、今は違う。風変わりな形であるのは同じだが、ちゃんと透けない、上質な光沢のある白い寝巻きがきつちりと着せられていた。これをおそらく着せてくれたのであろう女性を思い、彼女は小さくため息をついた。

おそろおそろ、紫恋は白布の割れ目を横に引いて、細い隙間から目を覗かせた。見えたのはやはり昨夜と同じ、無駄に広くて豪華な装飾の部屋の風景だ。人影がないのを確認して、彼女は立ち上がつて寝所からそつと出てみた。

「・・・深艶さん？」

小さな声で、とりあえず今ここで呼べる唯一の名前を口にしてみる。しかし、返ってくる声はなかった。

眠りに落ちる時は青い月光に満たされていた部屋は、今は朝の明るい日の光が差し込んで、重厚感が少しだけ軽減されていた。しかし一人ぼっちで佇むとあまりに広すぎて居心地の悪い部屋である。ちちち、と外で鳥のさえずる声が聞こえた。左を向けば、昨夜脱走を試みた大きな丸い出窓がある。昨夜紫恋によって全開にされた窓は、今はしっかりと閉められていた。引きずって土台にした柵も元通りにされている。

一段高い寝所の下に並べられていた靴に足を通し、紫恋は部屋の出入り口に向かった。昨夜は堅く鍵をかけられていたが、果たして今はどうだろう。たぶん今もかかっているのであろうなとは思いつつも、彼女は取っ手部分を押してみた。すると、なんとあっさりと向こう側へと開くではないか。予想外なことに思わず息をのみつつも、彼女は部屋の外へと顔を出してみた。

目に映るのは、長く続く廊下だった。反対側を向いても廊下が続いている。大きな美しい細工の入った窓が等間隔に壁に並び、日光が差し込んでいても明るく暖かみがある。どこにも人影はなかった。耳を澄ましてみても、鳥の声は聞こえても人の声は一切聞こえない。昨日もそうだったが、この城は無駄に広大なわりには人があまりいないのかと思ってしまうほど人の気配が感じられない。深艶さん、ともう一度小さく声を発してみても返事はなく、廊下は穏やかな静けさを失わなかった。

紫恋は心を奮い立たせて、廊下に足を踏み出した。昨日深艶に案内された道順をなんとか思い出しつつ、角を曲がるたびに人がいないのをよく確認して歩いていく。もしかして、このまま外に出られるのではないか。そんな思いが頭にちらついた。外に出て・・・あの、赤い土壁のところに。きっとあの向こう側には見慣れた景色が存在しているのだから。

誰に出会うこともなく、紫恋は順調に階段を降りてゆく。そうして一階の廊下に出ると、壁がなくなつて、見上げれば真つ青な空が広がっていた。いっそう明るくなった廊下を、角に隠れながら隠れながら進んでいく。

「もう、本当にどうなっているのよこれは」

急に数人の話し声が聞こえてきて、紫恋の心臓が一気に跳ね上がった。今まさに曲がろうとしていた角の向こう側から、女性が話しながらぞろぞろ出てきたのを視界に捉え、あわてて引き返して太い柱に身を隠した。女性たちは紫恋には気付かなかったようで、わいわいと会話を途絶えさせることなく廊下を通り過ぎていく。まさかの事態に焦りつつも、紫恋は彼女たちの会話にじつと耳を傾けてみた。

「こんな時間まで誰一人目覚めなかったなんてどうかしてるわ。しかもみんな一斉に同じ頃合に起きるだなんて。朝餉の準備が間に合わないじゃない」

「偶然じゃないわよね、こんなの」

「噂に聞いたのだけど、なんかどうも桜里様のお力おつりによるものらしいわよ」

「鬼導の？たしかに桜里様ならそれくらいやってのけるだろうけど・

・桜里様が動いたって事は、もしかして」

「鬼神、よねえどう考えても。しかも赤い月が出て三日後ってことは、やっぱりそうでしょ」

「贅姫」

聞き覚えのある言葉に、ぴくりと反応してつい身を乗り出す。

「ねえ、どうなったのかしら」

「どうなつたつて・・・そんなの決まっているじゃない。もう全部、片付いたに違いないわ。鬼導の方々によつてね」

「哀れよねえ、今回の贅姫は。あの魅月様^{みづき}に当たっちゃったんだもの。どんな最期だったのかしら」

「そりやあもう、凄惨なものだったんじゃない？赤子なら首を落とされて生き血をすすられ、少女なら辱めを受けた後に首を絞められ殺されるのよ。あの鬼神ならやるでしょ、それくらい」

「いやだ、そこまで想像させないでよ。本当にありそうだから怖いわ」

「でもまあ、その娘のことを思えば殺されておいたほうがよかったんじゃない？魅月様の後宮で贅姫として生きていくことが、よほど酷つてものだわ」

「それもそうね」

苦笑の入り混じった高い声音が、廊下の向こうへと消えていく。

紫恋は柱の影で、しばらくしゃがみこんだまま呆然としていた。

「・・・今のつて、私のこと？」

彼女たちは、この城に仕えている身なのだろうか。話からして、贅姫は昨夜鬼神によつて当然殺されたものと思われているらしかつた。だがしかし、紫恋は実際にはこうして生きている。やはり昨夜出会ったあの美しく冷淡な鬼神の、突然逃げ去った行動は、誰も予想しない奇怪なものであつたのだろう。

殺されておいたほうがよかったと彼女たちは言っていたが、そんなの冗談ではないと紫恋は思う。あんなわけの分からないままに辱められて殺されるなどたまったものではない。かといって生きていくにしても、鬼神の城に住むのも恐ろしい話である。

「紫苑・・・会いたいよ・・・」

妹への執念のみで泣きたい気持ちを奮い立たせ、紫恋は柱を支えに立ち上がった。たぶん、昨日詩依に抱えられたまま入った門はもうすぐ見えるはずだ。よし、見つからないように急いで、と意気込んで柱の後ろから身を出した。

「そのあなた」

ふいをついて背後から声はかけられた。瞬時に凍りついたように硬直する紫恋。

「そんな寝巻きの格好で何をしているんです。まったく、はしたないにもほどがある。ここをどこだと思っているのですか」

「・・・す、すみません！」

声はあきらかに年配の女のものだった。冷や汗が全身を伝いつつ、紫恋は女に背を向けたまま謝っておく。

「鬼導のお力が使われたことによって今後宮はどこも大慌てでしょう。あなたもさっさと着替えて持ち場に向かいなさい。まったく」「ははい、そうさせていただきます」

運良く、女は紫恋のことを女中の一人と見なしたようだった。こはなんとしてもごまかして乗り切らないと。焦りつつもそれを悟られないように気をつけて、紫恋は足早に去ろうとする。だが、しかし。

「お待ちなさい。あなたの名前と役職名を名乗っていきなさい」

肩に手を置かれ、引き止められてしまった。ひくりと顔を引きつ

らせつつ、適当にうまい言い逃れをしなければと思考を回転させる。とりあえず愛想笑いのような笑みを浮かべて、ぎこちなく後ろを振り返った。背後の人物は、やはり年かさの女であった。凜とした風格が、どこことなく狭間の巫女姫を思い起こさせる。綺麗なしわ一つない蒼の装束を纏う彼女。その髪と瞳は黒く、右の瞼から頬にかけて描かれている黒い模様。この城の者であるなら当然なのだろうが、彼女も鬼であるのだろう。

綺麗な方だ、と思いつつ彼女と目を合わせて言い逃れの言葉を紡ごうとした途端、ひっと女性は悲鳴をあげた。紫恋は驚いて言葉を引っ込める。女性は紫恋の瞳を仰天しながら見つめた後、思いつきり叫んだ。

「贅姫——！？」

それはそれは、半分裏返ったようなとてもない大声で。その声につられるように、ざわざわと辺りから人の気配が近付いてきた。

なんで贅姫だとばれた、と凍りつき、すぐに紫の瞳のせいであると結論に至る。あっという間に廊下のいたるところからたくさん女性が近寄ってきた。

これは最悪だ。本能的に捕まってはまずいと思い、紫恋は思いつきり駆け出した。廊下はすでに人で溢れているため、手摺りを越えてそのまま庭へと逃走する。誰か捕まえて、そんな女性の声が後ろで聞こえた。振り向けば、鬼と見受けられる女たちが大慌てといった様子で追いかけてきていた。胸中で大絶叫しながら紫恋はひたすら走った。長くて走り辛い裾を、はしたないなどとは構わずたくし上げて、美しい庭園を駆け抜けてゆく。

するとちよつと行った所で、すぐに門が見えてきた。昨日入った門である。全速力で近寄っていく紫恋だったが、しかし直前になつてぴたつと足を止めた。門の前には男が二人、番をしているではないか。その男たちは追われる彼女にすぐさま気付いて、思いつきり

不審そうな顔を向けてきた。後ろを向けば、迫りくる女たち。門からの脱走は無理と即座に判断し、彼女は門から離れるように前へと駆け出した。

・・・が、そんな怪しい行動の少女を、門番二人が黙って見過ごすわけがない。すぐさま門番は紫恋に向かって走り出した。門番も、やはり鬼。そして男だ。本当に一瞬で、信じられない速さで門番は彼女に追いついた。肩を強く掴まれて後ろに転倒し、紫恋はあっさり捕まってしまった。腕を容赦なく後ろに締め上げられて、あまりの痛さに悲鳴をあげる。捕まって自分はどうなるのだ、と絶望しかかった時。

「彼女を離さない。その娘を誰だと思っているのですか」

凜とした美声が空気を震わせた。はっとして顔をあげると、いつのまにやら目の前には白い麗人が佇んでいた。真白い長髪を背に流し、真白い衣を纏うその人は、そこに立っているだけでも常人とは違う特殊な雰囲気放っていた。昨夜、化け物を惨たらしく殺めて紫恋を助けた、あの彼だった。

「し、白水仙様しろすいせん・・・!!」

彼の硝子のような瞳がずっと細まり門番たちを睨みつけると、すぐに拘束の手ははずされた。追いついた女たちも、白水仙様だわ、と驚いたように口々にざわめきあふ。白い彼は、息を切らして集まった大勢の者に向かって、ただ一言静かに言い放った。

「散りなさい」

たったそれだけで、女たちも門番も深々と一礼してからその場を素直に去っていった。その間、紫恋はぼかんとした顔で白い彼の麗

しい顔を見つめていた。去っていく群衆を見送っていた彼の視線が、ずっと紫恋を見下ろした。鋭くはないが、だが目線を外すことが出来なくなるほどの威圧感が感じられた。

ありがとうございます、とお礼をいうべきかと彼女は思ったが、だがこの逃走していたのを発見された状況で言うのもおかしい話である。結局・・・鬼に捕まったことに変わりはない。

「城から逃げられると思ったんですか」

冷や汗をかく紫恋とは対照的に、いたって冷静で穏やかな声がかけられる。

「・・・こ、試してみようかと」

「馬鹿ですね。昨夜の一件で我々の力は理解していただいたはずですが」

「・・・はい、ほんとそうですね・・・ごめんなさい」

「勝手に部屋から抜け出されては迷惑です。まあ、こうなった落ち度はあの阿呆にあるとはいえ」

「は、はあ・・・すみませんでした」

彼の口調はあくまでも穏やかで、顔には微笑すら浮かんでいるのに、なぜだかとてもなく圧迫されているようだった。言い返す気力など一切湧かない。というより、出来ないかと直感で理解できる。

彼は縮こまった紫恋を見て、盛大にため息をついた。それから両手で彼女の腕を掴み、彼女を立たせて引き寄せた。

「義務も果たしていない身で、どこかに行かれては困るんですよ。その辺で死なれては、魅月だけではなくあなたの妹にも迷惑がかかるんですからね」

「それは・・・どういう・・・？」

「鬼神の力が安定しないうちに贄姫が死ねば、また赤い月が出て新たな生贄の娘がやってくるということです。あなたの妹も紫の瞳を持っているのでしょうか？深艶姫から伺いました」

「私が死んだら・・・妹が？そんな・・・」

「嫌なら大人しくしててください。それにしてもまったく・・・予想外なことばかりで計画が丸つぶれですよ。本当なら昨夜で全て片付いていたはずなのに。一体何があったというんですか」

氷をはめ込んだかの如き眼が、紫恋の困惑する顔を見下ろしてじつと凝視する。まるで責められているようにも観察されているようにも見える眼差しに、彼女はこくりと緊張気味に喉をならした。

「魅月はあなたを抱くことも殺すこともしなかった。昨夜あなたの部屋を出てからというものの、ずっと私室に閉じこもっています。声をかけても返事もない。まったくもおかしな事態ですよ。どうしてあなたは義務を逃れて、無傷で生きているんでしょうね？昨夜、魅月と何がありました」

「魅月って・・・あの鬼神のこと、ですよ？何がって言われても、そんなの私が訊きたいくらいで。私は・・・何も・・・」

「何も？何もないわけがないでしょう。あなたの部屋に行く直前まで、魅月はあなたに義務を強いるつもりでいた」

「ほ、本当に私は何も。ただ、顔を合わせただけで」

嘘ではない。たしかに月明かりの中で顔を合わせただけなのだ。そうして、あの鬼神は急に態度を変えて部屋を出て行った。だが目の前の彼は、疑いの眼差しで見つめてくる。どう説明したらいいのか、と途方にくれていると、いきなり状況を打破する大声が聴こえてきた。

「し——ろ——す——い——せ——ん——！！っざっけんな

こんにやろうがあああ——！！！」

白水仙の背後から、足が近付いてきているのが見えた。高らかに宙に跳んで、足は彼の白髪の手に向かつて一直線に向かつて来る。当たるなあ、と紫恋が半ば呆然としながら、彼の肩越しに飛んでくる足を見つめていると。

白水仙の手が紫恋の肩を抱き寄せて、横に華麗に避けた。本当に華麗という言葉が似合いすぎる程の身のこなしだった。彼は後ろを一度も振り返ってはいないというのに。

直前まで二人が立っていた位置に、ずざざーっという豪快な音を鳴り響かせながら、人が落下した。着地に失敗したようで、落ちてから派手に一回転して倒れ伏す。しーんと、場にしばし沈黙が訪れた。綺麗に整えられていた砂利と芝生の模様が、蹴散らされて若干可哀想なことになっている。だが、最も被害が大きいのは、倒れ伏す人物なのではなからうか。

呆気にとられつつ砂利に頭を突っ込んだ人物を凝視すると、その人は次の瞬間、叫びながら跳ね起きた。

「よけんなばつか野郎——！」

「あんな奇声を発しながらの攻撃が当たるわけがないでしょう。本当に馬鹿ですよ、あなたは」

「その哀れむような目えやめろ——！ほんと腹立つお前！」

「なんで気配を消してこっそり忍び寄らないんですか。おもしろくない」

「なんでお前を楽しませなきゃいけないんだよ。今はただ、お前が姫を苛めてたから焦って突っ込んだまでだ！」

「……苛めてとは……何を馬鹿なことを」

「姫さん怯えてたろうが。なあ姫さん？怖かったよなあ！？こいつに捕まって尋問されたんだろう！？」

紅い瞳が、真剣な眼差しでぎろりと紫恋に向いた。急に話を振られたところで紫恋は言葉に詰まり、目の前に立つ長身の青年を見上げて固まった。深紅の瞳に、燃える様な赤い髪。白水仙の耽美的で妖艶さのある顔つきとはまったく種が異なるが、こちらもとても整った顔立ちである。服装も紅と黒の配色が鮮やかな、軍の総大将のような出で立ちであり、白水仙と並ぶと何もかもが正反対な印象を受けた。ただ、白水仙と唯一同じなのが、鬼らしき特長が見られないということだ。

「・・・私は門番に捕まった彼女を助けただけなんですけどね。誰かさんが彼女の部屋の鍵を掛け忘れたばかりに起きた騒動の尻拭いですよ」

うつ、と赤髪の彼の顔が引きつる。

「いやだつてさ・・・俺が番をしてた朝方、姫さん夢にうなされてたからこりやまずいと思つて、慌てて桜里ちゃん呼びにいったわけだよ。あの子なら対処できるだろうからさ。でもなかなか見つからなくて、それではたばたしてる隙に・・・なあ。だつてそんなちよつとの間に部屋を出てくとは思わなかったわけ」

「それはそれは大変でしたねえ結構な言い訳で。ほんと、贅姫の事に関して役に立っていませんよねあなた。昨夜も見当違いな場所を捜しまわっていたようですし」

「あれは・・・しょうがないだろ。姫さんからはまだ妖気が感じられないんだから、捜すのは運だったろうが。つーかお前が寄越したあの狼なんなんだよ！伝言の後思いつきり噛み付きやがつて！見るこの歯形！！一晩たつてもくつきり残つてやがる」

「私の造る使い魔は優秀ですからね。私の意図をちゃんと汲むことが出来る」

「あーもうほんととお前嫌いだわ。なんだその悪びれもしない態度は。

もういいどうでもいいお前は。そんなことより・・・とりあえずは」

つかつかと赤髪の彼が紫恋に近付き、目の前に立った。思った
ら、彼女の体は腕を広げた背の高い彼に、一気に抱きすくめられた。

「姫さん無事でほんとによかったああああ——！！！」

「えっ・・・きゃああ！！！」

いきなり大の男に抱きしめられて頭をグリグリと撫でられ、紫恋
は大いに焦った。もがいてはみるが、彼の抱擁はなかなか強く腕か
ら抜け出すことが出来ない。

「ああああのちよつと」

「何やってんの想真そま！その子から離れなさいってば！！！」

ごん、という鈍く痛々しい音が場に響いた。すると紫恋を抱きし
めていた腕の力が急速に弱まり、彼は赤い頭を抱えて悶絶するよう
に倒れた。

「・・・深艶さん」

倒れた彼の後ろから現れたのは、拳を握り締めた深艶だった。眉
を吊り上げて顔をしかめていた彼女は、紫恋と目があつたとたんに
安堵を全開にした表情で微笑んだ。

「紫恋！！よかったわ無事に見つかったて！！！」

「ひゃうっ！！！」

紫恋の顔が埋まった。何に。それは深艶の豊満な胸にだ。昨夜の
気を失う直前に覚えたのと全く同じ、彼女の良い香りが強く鼻腔を

刺激する。

「いきなりいなくなつて心配したのよ。ここはまだあなたにとって絶対的に安全な場所ではないの。だから、勝手にふらふらしてはだめよ」

「は・・・はい。あの深艶さ・・・くるし・・・」

「本当にごめんなさい紫恋。何回謝つたつて謝りきれないわよね。私たちの行いも、昨日の愚弟の態度も」

「ちょ、深艶姐さん踏んでる踏んでる」

足の下から聞こえた声に深艶が視線を落としたことで、なんとか紫恋は息が吸えた。

深艶に踏みつけられていた彼は、盛大にため息をつきながら立ち上がった。

「いきなりすまんかったな姐さん。嬉しくてつい」

「紫恋、混乱させてごめんなさい。まずはあなたに全てを話さなければいけないわね。この世界のこと、贄姫のこと、鬼神のこと、なにもかもを」

頭を下げる二人を交互に見つめながら、紫恋は困惑しきつた表情でこくこくと頷いた。あまりの急展開に感覚が追いついていかなかったが、とりあえず状況の把握が必要であるとは思った。話してもらえるというなら、まずは聞こう。

「・・・その前に、あの兄弟を解放しなくていいんですか？」

白水仙が放った言葉に、二人がはつとして頭をあげた。

「そうだった。なあ姐さん、状況説明の前に、会ってやって欲しい

やつがいるんだ。姫さんのこと、ずっと心配してた子猫ちゃんにな」

「・・・子猫？」

「そう。・・・って、まだ俺姫さんに名乗ってなかったよな。俺は想真。この白いのや深艶姐さんと同じ、鬼導の石柱だ。よろしくな」
「よ、よろしくお願いします」

差し出された手に反射的に紫恋が触れると、大きな手はぎゅっと彼女の手を包み込むように握って引く張った。

「じゃ、行きますか。檻に繋がれちゃった哀れな子猫を助けに」

何が何だか分からぬまま、紫恋は想真に引きずられるようにして歩き出した。多大な緊張感と不安に怯えつつも、予想外な明るい雰囲気にかすかな安堵を感じながら。

第七話

向かう場所はだんだんと薄暗く、人の気配のない静寂に満ちた様子になってきた。きよろきよろと辺りを見渡してみると、目に映るのはとても殺風景な天井や壁ばかり。殺風景と言っても、通常の城や社などと比較すればいたって普通の造りなのだろうが、この豪華絢爛な鬼の城においてはとても飾り気のない場所であると言えるだろう。

ようやく人々の姿が見えなくなつた、そう思つたところで、紫恋は小さく安堵のため息をついた。右手を大きな手に包まれて引つ張られるままに、彼女は城の廊下を歩き続ける。紫恋の手を引く赤髪の彼は、彼女のため息の理由を察して苦笑しながら振り向いた。

「ごめんな姫さん。居心地悪い思いさせたな」

「あ、いえ、大丈夫です」

本当は内心全然大丈夫というわけではなかったが、紫恋はそう答えるしかなかった。

あの逃走しようとした門からここに至るまでになかなかの距離を歩き、まるで迷路を辿るようにしてきたわけだが、それまでに紫恋はたくさんの視線に晒されてきた。廊下の角を曲がるたび事に人の姿が沢山あり、その彼等の視線はどれも一様に廊を進む一行に向いた。一番前に行く想真、そして紫恋と並んで歩く深艶、後方で少し距離を置いて付いてくる白水仙、三人とも他の人々と比べると各段に目を引く容貌だったから当然なのかもしれないが、だが視線が最も集中したのは他でもない、おどおどしながら想真に引つ張られる紫恋であった。物珍しそうな、観察するような眼差しが無遠慮なまでにちくちくと突き刺さり、ざわめきの中間こえてくる言葉は「あれが？」や「なぜ」といった驚きに満ちたものばかりであった。自

分がここにおいてとても異端の存在であるかのようで、紫恋はずつと冷や汗が止まらなかった。幸い紫恋を囲む三人はそんな彼女の心情をすぐに察したため、できる限り人のいない道筋を選んでくれた。とはいっても時間が経つたびに人の数はどんどん増し、誰とも出会わないというのは不可能に近い状況になっていったのだ。

「・・・このお城、人があんまりいないんだと思ってました」

「ああ、昨夜の様子からだと思つのも無理ないな。昨夜はな、贅姫が来たことで騒ぎにならんように、桜里ちゃんが城中のやつら皆を深い眠りに誘つたからあんなに静かだったんだ」

「桜里ちゃん・・・？」

「あれ、まだ姫さん会ってないんだ。桜里ちゃんも俺らと同じ、鬼導のお仲間さ。性格がちよつとあれだが、可愛くつて神出鬼没な嬢ちゃんよ」

「はあ・・・あの、このお城って本当に・・・鬼の城、なんですね。変わった人？がいっぱいいて」

人の後に疑問符をつけてしまったのは、人と呼ぶべきなのか判断が難しい見た目の者を沢山目にしたからだ。昨夜遭遇し襲われた化け物ほど恐ろしいと思えたものはいなかったが、肌に鱗が付いている者、異様に毛深いのが形は人の姿である者など、他にも多種多様な外見の者と大勢出くわした。紫恋の先ほどの冷や汗の原因はじろじろと見られたことの他に、その異様な光景に縮み上がったのもあげられる。

「そっか、姫さん側の世界では、姫さんみたいな姿の奴しかいないんだっけ。でもここにはいろんな姿かたちをした一族がいっぱいいるからな。俺でも初めて見たときはびっくりした見た目の奴もいるし」

「この鬼の城は四大家族の中でも随一の規模を誇る大きさですから

ね。それゆえ仕えている者の数も多く、鬼に従属する一族からやって来る者も後を絶たない」

後ろからの白水仙の言葉にも、はあ、と思わず間の抜けた感嘆の声をあげた。すると想真はそれまでの笑みを苛立ったように引きつけて白水仙を睨み、俺が話してんだから入ってくるなと悪態をつく。それに白水仙は大仰にため息をつき首を大げさに横に振った。当然、想真は余計に苛々したようだった。この二人、本当に仲が悪いらしい。

「とにかく！この城にいるのは鬼だけじゃないってことさ姫さん。支配下に納まる一族の数も四大の中では鬼が一番だし、この城は人の往来がとにかく激しい。おそらく仕えている奴の半数近くが他一族の出身さ。で、んなこと言ってる俺も他の出身。後ろの白いのも同様。鬼つてのは、黒髪黒目で右目周辺に生まれつき黒い紋を持つ一族のことだ。深艶姐さんみたいな」

ちらりと紫恋が視線を横に上げると、深艶の魅惑的な微笑を拝むことができた。彼女の長い指が、紫恋の髪に柔らかく触れて肩を優しく抱く。

「城全体ではそうでも、後宮はまた少し違う空間なのよ。後宮に暮らす女の多くは鬼の一族。彼女たちの下で仕える他一族出身の女たちも、人型の姿の者ばかりだから。そんなに怖い見た目の者はいないわよ」

「後宮つて・・・」

「これからあなたが暮らしていくことになる場所よ。朝あなたが目覚めたあの部屋が、あなたに割り当てられた後宮の一室。あそこは代々贅姫に与えられる部屋でね、後宮の中でも最も広くて、静かな位置にある部屋なのよ。・・・本当は、使用するのは昨夜のみであ

つたはずなんだけど、こんなことになっちゃったから・・・あなたにはもうしばらく、ここに滞在してもらうことになるわ」

「そう・・・ですか。あの、後宮って、王の后やそれに仕える女官が暮らす場所ですよ？私は・・・そこでどういった立場になるんでしょうか」

思い出すだけで眩暈がしそうなあの豪奢な部屋を与えられるなど、ただの女官の一人と数えられるのでは当然ない気がした。深艶は少し言葉に詰まるかのように思索した後、紫恋の頭をそつと撫でた。

「・・・贅姫は、贅姫よ。それがあなたの後宮における地位。普通なら、その名は絶対的な地位の高さと安全を約束されるものなのだけれど・・・ね、魅月の後宮においては、そうもいかないかもしれないわ。鬼神が鬼神だけに、後宮の常識が捻じ曲がっているところがあるから」

「でも、とりあえず今のところは姫さんが魅月の唯一の妃ってことなんだから、後宮での立場は一番上だろ」

さらつと付け足された想真の言葉を聞いた途端、歩き続けていた紫恋の足はぴたりと固まった。それを見て、想真は紫恋の手を離してはつと自らの口を抑え、深艶は手で顔を覆ってため息を付き、白水仙は呆れたといったように顔を横に向けた。

「想真・・・！」

「す、すまん姐さん。つい。わああ姫さんそんな固まらんでー！驚かせて悪かったー！」

がくがくと想真に揺さぶられる紫恋は、目を見開いて硬直していた。あまりにも突然に衝撃の事実を告げられ、思考の処理が追いつかなかった。妃。自分の立場を示す名が、妃。鬼神が鬼の王である

のなら、その王の女は妃・・・つまり、はっきり言えば、昨夜絶対的な拒絶の意を向けてきたあの青年の妻になるということか。紫恋は、贅姫というのは鬼神に捧げられるただの生贄であるとしか考えていなかった。そんな妃などという立場に祭り上げられるなど想定外である。

言葉を失って立ち尽くしていると、長い指がそつと両頬に触れ、顔を上げさせられた。

「・・・順を追って話そうと思っていたのに、突然驚かせてごめんなさいね。紫恋、妃って聞くと戸惑うかもしれないけれど、でも気にすることではないのよ。それはあなたがしばらく後宮で居場所を確保するためだけに用意された、ただの名前。慣わしとして贅姫に与えられる地位。それに深い意味はないの。あなたが魅月の妃らしくなる必要はないのよ。・・・妃、なんて、魅月にとっては鬱陶しい存在でしかないんだわ。だから出来たことならあなたには、明け方すぐにここから解放して安全な場所に移してあげたかった」

鬱陶しい存在。その通りなんだろうな、と紫恋は理解できた。贅姫は、鬼神の所有物。昨夜彼は嘲笑しながらそう言った。彼にとつて、贅姫は不必要な物を扱うに等しい存在なのだろう。

「・・・ありがとうございます。深艶さんの心遣いにはとても感謝します」

「お礼なんて言われたら・・・本当に私、あなたに頭が上がらなくなっちゃうわ。弟の不始末は、私も責任を負わなければならないことだと思ふもの」

「弟？」

きょとんとした顔で深艶を見つめると、その眼差しを受けて彼女はこくりと苦々しそうに頷いた。

「まだ言ってなかったわよね。昨夜のあの最低最悪な態度をとった馬鹿は、私の異母弟なの。情けないことに」

「え……ええっ!？」

紫恋は目を丸くして驚いた。昨夜のあの酷い態度をとった彼と、目の前の可憐で優しい女性が、まさか異母姉弟だとは。嘘、と心の中で思ったものの、だが納得できる節はあった。昨夜気絶する直前に、深艶と鬼神はどこか似ている気がすると、確かに紫恋は思ったのだから。雰囲気は全然違っても、人並み外れた美貌と特殊な存在感が共通点を感じさせたのだ。なるほど、深艶が鬼神に対している遠慮のない言葉を発していたのは、異母姉であつたからということか。

「魅月が贅姫を擁護しないって言うのなら、私があなたを護らないと。鬼の王家に生まれた者として当然のことだわ」

「そんな俺だって! 鬼導に名を連ねるからには」

「想真、あんたはちよつと黙ってなさい」

「……はい」

「立ち話はそれくらいで。話はまず牢から二人を出してからにしませんか。こんな陰気くさい場所にいつまでも留まっけていても仕方がない」

白水仙がそう切り出したことで、紫恋は深艶に背を押され再び歩き出した。

「あの、二人つていうのは……？」

「鬼導に属する兄弟よ。鬼導つていうのは、鬼神自らが選抜して側近とする精鋭の衆なんだけれど……その一番のちびっ子がね、魅月にたてついて怒らせたものだから。魅月に牢へ放り込まれてしま

ったの。兄の方は第一人を牢に入れさせるわけにはいかないと言って、自ら一緒に牢に入ったのよ。ほら、あの先の突き当たりの一角」

視線を先に延ばしてみると、光のあまり差し込まない薄暗い廊下の奥に、最奥を遮って隠している扉が見えた。

「その子は、なんで鬼神にたてついたりなんて」

「あなたのためよ、紫恋。贅姫を傷つけないように、必死に懇願したの」

「私の――？」

想真が扉を開ける。そこから廊下の最奥までには少しだけ空間が存在し、一番奥の右手側に、牢屋らしい格子が見えた。

牢の目の前に紫恋は立った。廊下の小さな窓から差し込むわずかな光が、牢の中の人物を照らし出す。そして彼女は、木組みの格子の向こう側からの視線と対峙した。

紫恋はすつと息をのんだ。それがどういう感情によってなのか、うまく表現することの出来ない心地で。あえてあげるなら、純粹な驚き、それから、感嘆、とでも表現できるかもしれない。囚人という立場が、あまりにも似合っていないと思える姿がそこにあった。わずかな光でもきらめく程の神々しい金の髪、翡翠をはめ込んだかのような美しい緑の瞳、まるで穢れを知らないかの如き、無垢であどけない、しかし神の御子であるのかと思うほどに可愛らしい、幼い少年。そして、そしてなにより気になるのが――

「贅姫・・・？」

少し震えた幼子の声が静かな牢に響く。紫恋は、自分が目にしてある少年の、信じがたいそれを、本物かどうか見定めたくなくて格子に手を伸ばした。

「姫さんいかん!!」

指先が格子に触れる直前、想真にいきおいよく手首を掴まれた。びつくりして顔をあげると、焦った表情の彼の顔が近くにあった。

「この格子には妖力を封じるための結界が張られてるんだ。むやみに触れたらこう・・・ビリビリーっと痺れて、たぶん姫さんなら気を失っちゃう」

「ご、ごめんなさい知らなくて」

「これ解くのはこいつのお得意芸だから」

そう言つて想真が親指で白水仙を指し示す。その時点で、すでに白水仙は格子に手をかざして何事かをぶつぶつと呟いていた。経のようにも聞こえる彼の声に耳を傾けていると、ふいに空気が変化したのが紫恋にもはっきりと感じ取ることが出来た。今まで無意識に感じていた緊迫感が、一気にぶつりと断たれたかのような感覚が肌を襲った。白水仙の声がやみ、彼の手がそつと格子の出入り口に触れる。すると格子はあっさりと手前に引かれ、牢は解放された。

その次の瞬間

「二エヒメ——!!」

キンとするような甲高い叫び声をあげて、牢に囚われていた少年が飛び出してきた。それはそれは素早い身のこなしで。紫恋がはつとして身じろいだ時には、すでに両腕を伸ばして跳び上がる少年の姿は目の前にあった。

「きゃっ!!」

受身を取る隙もなく、紫恋は前から突っ込んできた力に任せて派手に尻餅をついた。痛い、と思いはしたが、すぐに意識は胸に感じるあったかい少年の熱の方に引っ張られた。小さな手はぎゅうつと力強く紫恋の背中の衣を掴んでおり、顔は彼女の肩に埋められている。突然のことに驚きつつも、彼女は小さな少年の背中をぽんぽんと叩いた。

少年の顔が上げられる。美しい緑の瞳が、じっと紫恋を見上げた。うるつると潤む大きな眼。人の母性本能を見事にくすぐるその姿が記憶にある紫苑の姿に重なって、紫恋は胸が小さく疼いたのを感じた。

「よかった。よかった贅姫が生きてて。俺、鬼神は本当に贅姫を殺すつもりなんだって思ってた。やめさせたくてもここから出られないし。俺、すつごくすつごく心配で・・・」

少年の目に溜まった涙がボロボロと頬を伝い落ちた。

「私を、助けようとしてくれたの？」
「ん」

大きく頷いた少年。こんな小さな少年が、あの冷たい眼をした鬼神に、自分のために意見してくれたというのか。目の前の真剣な表情だけで彼の思いが充分伝わってくるようで、紫恋は心が熱くなった。

「ありがとう」

そう言って、紫恋は少年の金色の髪をなでた。美しく輝く金糸のそれは、驚くほどに柔らかかった。まるで猫のような。・・・・子猫。そう、子猫だ。

紫恋は、気になってしょうがなかった少年の頭のそれに、ようやく手を伸ばした。少年の金髪の髪からちょこんと出ている、猫に似た二つの耳に。

両手でむぎゅっとそれぞれ掴んでみると、本当に猫の耳を触っているのと同じ感触がした。これは少年の体に実際に付いているものなのか、と疑うと、触っている猫耳がピクピクと動いた。

「ほ、本物？」

「んゝ何が？」

「耳。なんで、こんな」

「半猫族だから」

紫恋の問いに答えたのは、初めて聞く声だった。凝視していた少年の猫耳から視線を外して顔を上げると、少年の後ろにはいつの間にもやら初めて見る男が立っていた。声をかけられてようやく居ることに気が付いたのだ。あまりの気配のなさに彼女は驚くしかなかった。

少年の背後に佇む彼は、とても背が高くすらりとした肢体を持つ男だった。紫恋に抱きつく少年と同じ、金の髪に緑の瞳、そして頭の左右には猫に似た耳。

「・・・いつここに」

「さつきからずっと。弟と共に牢の内に居た」

「え、嘘・・・」

全然気が付かなかった。

一目彼を見ただけでこの少年のお兄さんであることは判断出来るものの、少年と彼は雰囲気というか存在感が違いすぎた。ぱっと目を惹く弟と対照的に、兄の方は印象も気配もとても薄い。彼の容貌は注意して見たらあくなく整った顔をしていたが、年齢が非常に判断

し難かった。おそらく紫恋よりは上である、という程度だ。

「姫さん、気付かんのも無理ないって。こいつの天然の気配の薄さはもはや一種の才能だから」

想真が笑いながら長身の彼の肩を叩く。彼は無表情のままに、紫恋と少年を見下ろしていた。

「・・・耳」

「は、はい」

「耳、離してやってくれ」

「えっ・・・あ、ごめんなさい!」

少年の耳を掴みつばなしだったことに気が付いて、紫恋は慌てて手を開いた。少年にもごめんなさいと謝ると、幼い彼の顔はにっこりと微笑んだ。

「平気だよ。贅姫の手えあつたかかったし」

「その耳、本物のあなたの耳なのね」

「うん、半猫族だから」

「はんびようぞく・・・」

「兄ちゃんも俺も半猫族出身だから耳がこの形なんだよ。でも鬼導になったから今は鬼の仲間なんだ。俺の名前はね、稀那まれなっていうんだよ。歳は八才」

「稀那君、ね。私の名前は紫恋」

たった八才で鬼導なるものに入っているとは。ただの子どもではないのだろうか。紫恋がそのあどけない笑みをじっと見つめていると

「・・・綺鏡ききょう」

突然ボソツと呟く声がした。

「え」

「自分の名は綺鏡という」

「は、はい。綺鏡さんですね」

「さんはいらない。あんたは贅姫で自分は鬼導だ」

「はあ・・・」

感覚が掴めないが、鬼導より贅姫の方が偉いものなのか。

「あんたが生きていてよかった。もし殺されていたら稀那が荒れた」

「ああ確かに。稀那を怒らせたら厄介だからなあ」

「ちよつと二人とも。稀那の心配じゃなくて紫恋の身の安全を心配しなさいよ」

「や、そりや当然一番に心配してたのは姫さんのことだけどさ。ただ与える被害の大きさは稀那の方が上だろうから」

「そんなことない！・・・と思うもん。俺は今修行すつごくがんばってるし！」

「稀那。油断してはいけない」

口論が飛びかい出した様子を、紫恋はぼうつと座ったまま見物していた。すると、じつとこちらを見つめてくる刺すような視線を感じ、恐る恐る彼女は顔を向けた。そこには凍てついた氷に似た双眸があった。白く玲瓏とした顔には笑みはなく、じつと観察するような眼差しを紫恋に注いでいた。

彼は、白水仙は、紫恋が無傷で生きていることを喜ぶよりも怪しんでいるのだ。あまりに冷たく見下ろされる視線に、ぞくりと彼女の背筋が粟立った。

ふいにその時、ぎい、と木の軋む音が牢の間に鳴り響いた。そこ

にいる者全員、音のした扉へと目を向ける。向こう側から開かれた扉、そこに立っていた者の姿を確認した瞬間、皆おのおの驚きに目を見張って声をあげた。

「鬼神……」

稀那が戸惑ったように呟いた。

紫恋は思わず稀那をぎゅっと抱きしめ、身を強張らせた。まさかこんな突然顔を会わせることになるとは思っておらず、紫恋の心拍数は一気に上昇した。

扉を押したままの状態で、全身黒衣を纏う青年は足を止めていた。昨夜見たのと印象は同じ、造り物めいた顔を持つ彼は、自身の目の前にいる彼らを見た瞬間、思いつきり不機嫌そうな表情をあらわにした。そして視線を牢の前に集まる六人にさまよわせた後、最終的に紫恋へと視線が止まった。

紫恋は呼吸さえ忘れて、吸い込まれるように彼の漆黒の眼を見つめ返した。彼の眼から感じられるのは、あからさまな苛立ちや憎悪だがじつと見つめているうちに、そこに少しだけ異色の感情が垣間見えたような気がして、紫恋は首を傾げた。それは昨夜に見たのと同じ、畏怖と拒絶の眼差しのようにも思えた。もっと深くにあるものはなんだ、と以外にも紫恋の好奇心が疼く。だが彼はくつと眉間にしわを寄せた瞬間、体の向きを変えて迷うことなく去っていった。扉が乱暴に閉まる音が響いて、続いて走るような足音が聞こえだんだんと遠のいていく。しんと牢の間に奇妙な静寂が訪れた。

「……なんだ……あいつ……」

想真が啞然として首をひねった。

「たぶん……稀那と綺鏡を解放しようと思って来たんじゃないか

しら」

「鬼神自らか。はあ・・・なんていうか、あいつらしいっていや、あいつらしいのか」

「鬼神、もう俺のこと怒ってないのかな」

「おそろくね。・・・さっきの様子から見て、きっと今あの子が一番ひっかかっているのは・・・」

全員の視線が紫恋に降り注がれた。

「・・・訊きたいことはいろいろあるけど、まずは私たちが紫恋に説明しなきゃいけないわよね」

「だな、とりあえず場所を変えよう。牢屋じゃあんまりだし・・・
っておいこら白水仙？」

一人で扉に手をかける白水仙に、想真が怪訝な顔をした。呼び止められた白水仙は平然として顔だけ振り向く。

「私はこれで失礼します。魅月のことが気になりますので」

「これから姫さんへの状況説明があるっていうのにか」

「説明に五人も必要ないでしょう。後のことはお任せしますよ」

「いいけどさ。なんか、ちょっと姫さんに対して薄情じゃねえか」

「・・・私から言わせていただくに、贅姫に傾倒しすぎるあなたもどうかと思いますよ。ともかく、私は魅月の一番目の鬼導。なによりも魅月を第一に優先するつもりです。では、失礼」

白い姿が扉の向こうへ消えていった。想真が苦々しくため息をついて頭をかく。

「姫さん、あれのことは気にすんな。ひとまず場所を移すから、ついてきてくれ」

「は、はい」

「行こつ 贅姫」

満面に笑みを浮かべる稀那に手を引かれ、紫恋は立ち上がる。導かれるまま牢の間から出て廊下を進めば、暗さに慣れた目は周りの明るさに少しだけ眩んだ。

紫恋はついきよろきよろと辺りを見渡す。何もかも珍しい風景の中、彼女は無意識に視線を巡らせ探していた。今まで誰とも仲良くやってきた自身に対して、初めて明確な拒否を示した青年の姿を。

第八話

鬼の美と華へのこだわりは、よほどのものなのだ。降り注がれる光に思わず上を見上げた紫恋は、ふとそんなことを思ってみた。

案内された部屋は紫恋に与えられた贅姫用の部屋に比べたら狭い所だった。だがしかし、床に点々と褥が敷かれたその簡素な様はどこか懐かしくて、とても心地の良い趣の感じられる空間であった。場所としては狭くても、上を見れば二階まで突き抜けるほどの高さがあるので開放感がある。沢山の天窓から光が差し込み、互いに交差して部屋の銀系のきらめく壁を照らす景色は、まさに計画し尽くされた美の様式だ。

綺麗だ、と紫恋は純粹に思った。普段ならばこのような景色、時間を忘れて見入ってしまうところなのだが、状況が状況なのでそのものんきに上を見上げてばかりはいられない。だがしかし、周りの景色に目を行き届かせる程度には自分は冷静になれているのだ、と彼女は妙な心地で納得していた。なんと言うか、ここから無理に逃げ出そうとすることが得策ではないことがよく分かったから、あきらめに近いのかもしれない。それに、あまりこれ以上取り乱すことは鬼導の彼らに申し訳ないとすら思えた。

紫恋の左隣には、澄んだ緑の瞳でじいっと彼女を見上げる稀那が座っている。その小さな体はぴったりと紫恋の左腕に寄り添っており、小さな掌は、彼女が寝巻きを隠すために借りた大きな朱の羽織を掴んでいた。金髪がふわふわと揺れて、ちょこんと出た猫耳がぴよぴよこと動いている。なんとも可愛いその仕草、そして稀那が純粹に懷いてくれている事に、紫恋は不安な心が幾分か癒されているのを感じた。彼のお兄さんの綺鏡は、部屋の入り口付近の太い柱にもたれるように立っていた。気を抜くと本気で存在を忘れそうなほど気配がない。目の前に座した深艶からも想真からも、気遣いの念が言葉を発さずとも痛いほどに伝わってきた。ここで沈みきった

暗さ全開の様子を彼らに見せるのは情けないような気がしてならなかった。元より紫恋は自分はどうなっても構わない覚悟を持って身を捧げたのだ、せめて今は精一杯引き締めた顔を上げて彼らと向き合いたい。

紫恋がぐつと膝の上で拳を握り彼らの語りを聴くために身構えていると、想真がふつと眉を下げて困ったように微笑んだ。

「・・・姫さん。そんな無理せんでいいんだよ。鬼導の前で姫さんが遠慮することなんかない。不安なら不安な顔すりゃいいし、泣きたきゃ泣けばいいんだ。俺たちは姫さんの力になるためにここにいる」

「そうよ紫恋。私たちの前で気を張る必要なんて無いんだから。苦しいのなら、どうか自分一人で溜め込まないで、私たちに甘えればいい」

「贅姫、はい肩の力」

ぐつと強引に稀那に肩を押されたことで、がくんと紫恋の肩は落ちた。気付いていなかったが無意識に相当肩が強張っていたらしい。肩の力が抜けたことで、紫恋の無理に張っていた気が緩む。辛く困惑する状況とは別に、不意をついた優しい言葉のせいで涙腺が決壊しそうになった。だが向き合おうと決めた以上、今はまだ彼らに涙を見せたくはい。こみ上げた熱いものはぐくりと飲んで押し戻した。

「・・・ありがとうございます。私は、大丈夫ですから。話を進めてください」

「ん、分かった。じゃあまず・・・とりあえずは」

想真が背筋をぴんと伸ばして真剣な表情になる。深艶も同様だ。

「姫さん！昨夜は陥れるような真似をして本当にすまんかった！こ

の通りだ!!」

想真が勢いよく両手を床について、頭をぐつんと打ち付ける音を響かせて土下座をした。深艶も両手について深々と頭を下げっており、稀那も腕を離してちょこんと頭と耳を下げている。綺麗も立ったまま頭を下げていた。当然紫恋はうるたえる。

「あああの、頭上げてください。もう充分、あなた方のお気持ちは伝わってますから。別に恨みに思うつもりもないですし」

「いやいや姫さん。俺らはまだ正式にこうして頭下げて謝ってないし。そこはしっかりけじめつけんと」

「けじめは、分かりましたから。とりあえず床から頭あげてください」

ずっと額を床にくっつけていた想真が、顔をしかめながらゆっくりと上体を起こした。

「・・・姫さん、もっと怒ってくれていいんだぞ。世界の均衡のためとはいえ、俺らは姫さんの心も体も犠牲にさせようとしたことに変わりはない。命はなんとしても助けるつもりではいたが、もし魅月が本気になったら護りきれぬ確証はなかった。悪意がなかるうが鬼導として姫さんを恐怖に陥れて危険に晒すしかなかったんだ」

「でも・・・結局私はこうして無事に生きていて、確かに怖い思いはしましたが体は全くの無傷なんです。・・・あなた方にも事情があるのは理解しました。それでも私のために心を痛めてくださっていることも充分伝わっています。だから、それについてはもういいんです」

想真と深艶が互いに驚いた風に目配せをした。きつと少しは紫恋が泣き言を言うだろうと思っていたのだろう。おそらく少しくらい

愚痴をこぼした方が、彼らの心中は納得がいくのかもしれない。そうは感じたものの、紫恋は彼らに文句を言う気にはなれなかった。偽善的すぎる態度のようにも思えたが、自分自身で納得しているために文句の言葉が思いつかないのだ。

「うーん・・・結果的には何事もなく済んだからそう言ってもらえるんでしょうけれど・・・」

「なんか、心苦しいな。姫さん優しすぎだ。だがしかし、結局何で姫さんは無事で・・・その、まだ、外界の体のまま何だ？」

「えっ・・・」

「鬼と一晚契りを結んだ贅姫は、体が妖の属性に取り込まれるもんなんだ。見た目が変わる訳じゃないが、寿命が鬼と同じくらいには延びるし、老いるのも遅くなる。でもまだ姫さんからは妖気は全く感じられない。昨夜魅月は姫さんに手を出さなかったんだろう？」

何で？と想真は本当に不思議そうに首を傾げて訊いてきた。紫恋は昨夜のことを思い返して、彼と同じように首を傾げてしまった。手を出されなかった原因など、こっちが訊きたいところだ。

すると深艶が想真の後頭部をいきなり叩いた。かなり痛そうな音がした。

「もう、この馬鹿！紫恋が困ってるでしょ。分からないことくらい察しなさいよ。だいたいあんたが質問してどうするの。まずは私たちが紫恋に話さないといけないでしょう」

「・・・だったな。贅姫への説明も鬼導の義務。では気を取り直して最初から話すとしよっか。まずはこの世界の基本から」

頭をさすりながら一つ咳払いをして、想真が人差し指で右膝の前の床をトンと突いた。

「——東に龍王を護りし神威一族。南に鳳凰を護りし夢創一族。西に白虎を護りし氷狼一族」

右から手前、そして左へと指を移していく想真は、最後に紫恋の前に指を置く。

「そして今俺たちが居るのが、北。玄武を護りし鬼の一族。城外の連中には鬼神一族と呼ぶ奴もいる。現在この四つの一族を柱に世界は成り立っていて、まとめて四大一族と呼ばれているんだ。各一族が住処としている地は聖域と呼ばれている。その理由としては、四大の領域の土地にはそれぞれ龍王、鳳凰、白虎、玄武の四霊獣が眠っているからだ。あ、別に実際の化けもんが寝てるわけじゃないから安心してな。奴等が生きてたのは途方も無い昔、今は実態を持たない霊体だから。四霊獣が東西南北に眠る理由としては、そこが高濃度の気が集中する場所、あちらとこちらの世界の狭間への出入り口があるからだ」

「私が、ここへ入ってきた？」

「そう。姫さんが入ってきたのが、四つある狭間の一つ、鬼が封印を護っている出入り口だ。四大一族は聖域の澱みない気で満たされる環境を与えられる代わりに、四霊獣を安らかに眠らせるために領域の平穏を護ることと、こちらの空気が裏側に漏れないように狭間を封印し続けることの義務がある。・・・で、姫さんがここに連れてこられた経緯ってのが・・・」

想真がちらりと隣に座る深艶の顔を窺った。彼女は一度彼に頷いてみせた。

「紫の瞳の娘がここにやってくる理由は、昨夜に湯屋で大体は話したわ。もちろん、確信には触れない程度でね。紫恋、昨夜語ることの出来なかった話の続きをするわ。鬼神と贄姫の関係性について」

「・・・私は、目障りな鬼神への生贄。それだけではなかったんですか」

「あの子がそう言ったのね。違うわ紫恋。断じて違う。贄姫は本来、誰よりも大切にされなければならない尊い存在なのよ」

眉を寄せた真剣な彼女の表情は、どこか悲しく辛そうにも見えた。鬼神の異母姉としてきつと思うところがあるのだろう。

深艶は語った。鬼神。鬼の一族の頂点に立つ鬼の王。鬼神となつた者はその瞬間から、重大な役目を独りで背負うことになるのだとそれは世界の狭間を封印するための要、封剣の鞘として身を差し出すことだった。封剣とは実際に手で握つて物を斬る道具とは違う。封剣は、結界と鎮めの妖力の結晶。代々鬼神から次の鬼神へと体内へ移し変えられてゆくもの、鬼神という鞘があつて成り立つものであるのだ。封剣が無事に存在することで、狭間に亀裂が入ることはない。だがしかし・・・それは代替わりのたびに揺らぐ、脆く繊細な剣であるのだ。一度鬼神の体に鎮められた封剣は、新たな鬼神の体にすぐには適応しない。必ず剣は暴れ、鞘を拒絶する。その歪みはそのまま狭間の亀裂を生むことに直結するのだ。だから、鎮めの力が必要になる。鬼神が代わるたびに、稀有な血を継ぐ紫の瞳の娘が呼び寄せられる。荒れ狂う封剣を鎮めるために、贄姫は鬼神の妃として鬼神の傍に置かれるのだ。ゆえに贄姫は尊ばれる。鬼のために全てを捨ててやって来た娘を皆感謝する——本来ならば。

「歴代の鬼神は皆、やって来た贄姫を大切にしたわ。すでに正妃や側室、子供まで持つ者がほとんどであつたけれど、それでもどの女性よりも贄姫は特別視された。ごく稀に鬼神が女であつた場合は、最愛の親友として慈しみ、彼女を優れた鬼と惹き合わせたそうよ。でも・・・魅月は違う。あの子は、全てが異例だから。・・・一番早い方法だったの。封剣を鎮め、あなたを役目から解放する方法。鬼神と贄姫が、一夜の契りを結ぶこと。それで全ての問題が片付い

たの。でも結局、私たちの計画は潰れたわ。魅月はあなたに義務を強いることはなく、封剣はまだ不安定なまま。あなたを城外に住まわせることも叶わなくなってしまった」

「あの・・・昨夜は無事でも・・・剣を鎮めるためにはつまり、いつかは私は鬼神と・・・そうしなければいけないってこと・・・ですか？」

「や、姫さんそれは違うぞ。なんていうか・・・絶対に契りを結ばなきゃならんわけじゃないんだ。他にも一応方法はある。『長期間近くで共に暮らし続ける』ってのがな。ただ魅月は贄姫を傍に置く気が一切ないようだったから・・・」

やはり結局は、いつか・・・といってもきつとそう遠くもない内に、鬼神に身を捧げなければならぬのだろう。紫恋は静かに吐息をついた。案外、動揺はしなかった。それよりも諦めと、覚悟の念がざわざわと心を支配する。

これも紫苑のためだ。紫恋は心中でそう自分に言い聞かせた。義務を果たさなければ狭間に再び亀裂が生じ、せつかく守ったあの子の平穏を脅かすことになる。紫苑には、一生あちら側で幸せに生きて欲しかった。そのためなら、紫恋はなんだって耐えてみせると思うことが出来た。そうやって無理にでも、理由を見つける。心のより所がなければ、きつと精神が参ってしまう。

「ねえねえ想真っ！」

幼い少年の声が、沈んだ場の空気をわずかに払拭した。

「ちぎりをむすぶってどういうことなの？俺、イマイチよく分かんないんだよ。鬼神は贄姫になにをするの？」

「・・・稀那、お前にはまだ早い。黙っとけ」

「何でだ！子ども扱いするなよ、俺だって鬼導なんだぞ」

「言ってもきつと理解出来ねーよ。とりあえずそういう事があるんだって思っとけ」

「そういうことってなに。わっかんないよそれじゃ。だって、だってさ、贅姫はそれ嫌なんでしょ？そうすると傷つくんでしょ？だったら俺はそんなの反対だもん！贅姫にはここでずっと暮らして欲して欲しい。俺、絶対絶対贅姫のこと守るから！」

叫ぶように言い切った稀那は、紫恋の腰にぎゅっと抱き付いた。子どもなのに、その力は案外強かった。

「稀那。贅姫嫌いのあいつの後宮にずっといて、姫さんが幸せになれるか？」

「……俺が守るもん」

紫恋の朱の衣に顔をうずめて、少年は頑なに意見を曲げない。子どもによくある意固地なわがままのようにも見えたが、しかしきつと彼の守るという言葉は本気なのだ。

稀那の丸まった背を見て、想真が一つため息をつく。

「まあ、ここで討論しても姫さんの今後が変わる訳じゃないんだけどな。結局は魅月が姫さんをどうするか的心思によって決まるんだ。今あいつが何を考えてんだか、俺にはさっぱり理解できん。昨日まではあんなに姫さんに殺意抱いてたくせに……今は何なんだ？さっきの、姫さんを見るあいつの顔……あんな顔は初めて見たぞ」

紫恋はじつと床の木目を見つめながら、今一度謎の行動に出た青年の姿を思い起こした。濃い殺意と敵意を、月光の下で畏怖へと変化させた、彼の表情。なぜ彼があの時逃げるように去ったのかは分からない。だが……きっかけは顔を見合ったことだった。そう、

あの時、彼はたしか妙な言葉を呟いたのだ。混乱していた記憶から、懸命にそれを探し出す。そうして思い出したのは、三文字の言葉だった。

「ああそうだ・・・シキコ」

小さく呟いた紫恋。だが言った直後、場の空気が硬直したのを彼女を感じた。

首を捻っていた想真も、俯いていた深艶も、紫恋に抱きついたままだった稀那も、佇む綺鏡も、一斉にはつとした表情で顔を上げて紫恋を凝視した。その反応に、思わず彼女は口を押さえて動揺する。

「・・・なんで姫さんがその『禁句』を知ってるんだ？」

「え・・・禁句？私はただ・・・昨夜鬼神がそう呟いたのを聞いただけ」

「呟いた！？魅月が？それを禁句としたのはあいつなのに。何だっ
てあいつが姫さんにそれを」

「彼が部屋を去る直前、月明かりで顔を見合わせた時に、言ったんです。シキコ・・・って。あの、何なんですか、シキコって」

紫恋が想真に視線を向けると、彼は固い表情で、深艶に目配せをした。

「それは『禁句』だ。俺がまだここに来る前の出来事だから詳しくは語れない。深艶姐さん、その時城に居たあんたは『その当時』を知ってるだろう？なんか分かるか？」

話を振られた深艶は、じっと紫恋の顔を見つめて押し黙っていた。彼女の拳はぎゅっと膝の上で握られている。

「深艶さん・・・？」

「そういうことだったのね・・・やはり魅月も、私と同じことを思っただわ」

「姐さん、同じことって？」

「・・・似ていると、思ったのよ。紫恋を初めて見た瞬間に。『彼女』に、あまりにもよく似ていると。一瞬本人かと錯覚しそうなほどに」

「シキコって、女の人の名前なんですか？」

深艶は頷く。そして彼女は、紫恋が思いもよらないことを口にした。

「それは、私と魅月の父に捧げられた前贄姫の名よ。そして・・・

－ 魅月が、殺した女性の名」

一瞬、思考が停止した紫恋。その言葉が脳内で理解出来た瞬間、息をのむ。

「殺した？あの鬼神が・・・前贄姫を？」

「ええ。もっと正確に言ってしまうえば、あの子が殺したのは彼女だけじゃない。鬼神の御正妃であつた実の母親の命も奪つたの」

「実の、母親まで・・・」

「それが、魅月が異例の鬼神と言われる所以。あの子は十歳の時に突然、母と贄姫を同時に殺めるといふ事件を起こしたの。本当に・・・あの時の城は大混乱だった。今思い返しても、ぞっとするくらいに。鬼神の御正妃と贄姫を殺した反逆者として魅月は父の鬼導に命を狙われたけれど、あの子は力で鬼導を捻じ伏せたわ。鬼導を三名も、殺した。まさか十歳の子どもがそんな力を持つてるとは誰も思わなかったから、油断した結果がそれよ。他にも立ち向かった者は沢山居たけど、生きて帰れた者は何人いたことか。事件があつたそ

の日からあの子に白水仙が付くようになって、誰も敵わなかったのよ。……そこまで血塗られた結果になったのは、言ってしまうば父のせい。父が事態の收拾に動かなかったから。溺愛していた贅姫を失ったことで精神が追いやられて、彼女のために造った紫の宮に引きこもったからよ。魅月を殺すこともかばうこともせず、ただ傍観した。私と魅月にはまた母親の違う兄が二人いたけれど、その二人が魅月に夜襲を仕掛けて返り討ちに遭い、瀕死の状態で城を追われた時だって、父は動かなかったわ。魅月は力で周囲に自身の存在を認めさせて、この城に居場所を築いていったの。皆あの子を恐れて、一ヶ月としないうちにあの子へ刃向かう者はいなくなった。・……あの子はたった十歳で、鬼神と呼ばれるようになったわ」

「正確には鬼神じゃなかったんだけどな。まだ封剣は父王にあったから。それでも周りは魅月を鬼神と呼び、あいつの近くに集まった俺たちは鬼導とされた。魅月が本当の意味で鬼神となったのは十日前、あいつが二十歳になった日だ。紫の宮に無理やり押し入って父親を襲撃し、封剣をその身に受け継がせた。だから今姫さんが呼ばれることになったんだ」

「魅月が贅姫を極端に嫌悪する理由は、きっとあの子の過去に関係しているの。十年前に起こした事件にね」

「……どうして……鬼神は前の贅姫は殺したのに、私には手を出さなかったんでしょうか」

「分からないわ。十年前の事件には、触れることが出来ないから。シキコの名を魅月の前で口にしただけで酷い咎めを受ける。その名が禁句であることは城中の暗黙の了解となっているけれど、魅月と彼女、そして御正妃の間に何があったか知る者はいないの」

紫恋は怪訝な顔をして床を見つめ続けた。話が進むにつれて、ますます訳がわからないことになった。普通ならば、鬼神は紫恋の体を使った後に、ためらいなく殺していたはずなのだ。今の話が本当なら、血塗られた過去を歩んできた彼にとって紫恋を殺すことなど

ためらいなく出来たはず。それなのに。

「どうして私にあんな顔を・・・？前贅姫も母親もお兄さんも父親も手にかけることが出来たのに、なぜ」

「・・・ん？ちよつとまった姫さん。父親ならほら、今もいるだろ？」

「え・・・？」

小首を傾げる紫恋。だつて魅月の父の前鬼神は十日前、襲撃を受けたと聞いたばかりなのに。

紫恋の反応を見て、想真もおもいつきり首を捻った。

「姫さんが狭間を通つて一番最初に会つたはずなんだけど、あの人言わなかったのか」

「あの人つて」

「詩依様だよ」

「は・・・い？」

「うん、だから、魅月とここに居る深艶姐さんの父親つてのは、詩依様のことだよ」

深艶を見ると、彼女は肯定するように頷いた。紫恋の思考は混乱しすぎてもはや停止した。脳裏に浮かぶのは、深艶とたいして歳の変わらないように見えた優しい青年の姿。

自分は鬼導の一柱だと紫恋にためらいもなく言つて見せたあの彼が・・・息子に正妃と贅姫を殺され地位を追われた、前鬼神。

理解、不能。しかし紫恋は、ようやくこの城の見えない歪みの一端を垣間見た気がした。

第九話

白いうなじに添って揺れる彼女の赤い髪紐を、斜め後ろからじつと紫恋は見つめていた。廊下を歩いていく二人の間には、どこか気まずいような沈黙が漂っていた。正確には気まずいといっても、紫恋が前に行く深艶に対して一方的に感じているのである。窺える深艶の顔は少しばかり俯きがちで何かを考え込んでいる様子であった。その考えていることに關して、紫恋は正直なところ尋ねてみたい気持ちに疼いているのだが、しかし気軽に訊ける内容でもないことは充分感じ取れているためなかなか口が開けない。さきほどこの城の上層部の歪んだ人物関係を聞いたばかりで、深艶と二人になれば当然出てくるのは彼女自身への疑問だった。

あの鬼神と深艶の父親である前鬼神は、詩依。そう想真に言われた時、紫恋はすぐには信じられなかった。当然であろう、詩依は見た感じ本当に優しそうで穏やかで、陰惨な過去など窺えもしないような青年であつたのだから。噓、と否定の言葉を呟いて眉をひそめてみたが、皆の顔は至極まじめであり、冗談ではないことを伝えてきた。想真はこう続けた。鬼は見た目で歳は判断できないのだと。肉体は長きに渡って若いままの時を維持する一族であり、特に詩依のような優れた力を持つ鬼は早い段階で老いが止まるのだそうだ。ああ見えて、百は超えているらしい。絶句した紫恋を見て、想真は苦笑した。そして彼は頭を抱えて首をもたげ言つたのだ。

「びっくりするだろ、その関係。でもさあ・・・驚いて戸惑つてんのは、俺たちも一緒なんだな、実は。正直、誰もが魅月は父親殺しをするだろうって思ってたからさ。なのにあいつは詩依様から剣は奪つても命は奪わず、自分の鬼導になるよう命令して・・・信じられないことに詩依様はそれをあっさり承諾したんだ。そっからは周りの動揺お構いなしに平然と鬼導として振舞うもんだから、こつち

はどうしていいのかわつかんねえんだなあ。魅月も詩依様も何考えてるのかさっぱり理解できない」

彼の言葉には紫恋也大いに同感であった。何をどうすれば、追いやった父親を自分の配下につけようなどと思えるのか。詩依にしても、正妃と贅姫を殺した息子に仕えるなどあまりに理解しがたい行為である。命惜しさに仕方なく・・・そう考えることもできるが、しかし詩依の姿を思い起こしてみると、どうにもその理由はしっくりこない気がした。

謎の思惑が渦を巻く中、深艶は一体なぜそこに身を置くのか。気にならないわけがなかった。肉親の間で血なまぐさい騒動が起きたのになぜ、彼女は鬼導として元凶である異母弟の側にいるのだろう。ふいに深艶が振り向いて紫恋を見た。じつと彼女の顔を見つめていた紫恋は、はっとして視線を落とす。すると深艶は、小さく苦笑した。

「気になるんでしょう？私がなぜ鬼導としてここにいるのか」

「・・・はい、すみません」

「謝ることじゃないわよ。私の鬼導入については、周りみんなが疑問視したことだから。理解しがたい行動であるのは自覚しているわ。正直、私自身もいまだに時々迷うことがある。でもそれでも・・・信じてみたいと、思ってしまったから」

「信じてみたい・・・？」

「ええ。あの子を・・・魅月を」

眉をひそめた紫恋を見て、深艶は肩をすくめた。

「そう言つとみんなに不審そうな顔をされるわ。でもあの子のこれまでの歩みを思えば、その反応が当然なのでしょうね。・・・十年前、御正妃と贅姫、そして魅月に刃向かった鬼導も殺された時、多

くの者が魅月を恐れて城を離れたわ。二人の兄まで返り討ちにされて、その母君であつた一の御側室も城から逃げ去つたのを機に、王家に縁ある者は皆城の外へと移つていった。私の母も、例外ではなく」

「深艶さんのお母様つて・・・」

「父、詩依の二番目の側室だつた。鬼の中でもまあそれなりの名家出身のお方よ。母は周りがどんどん城から去つていくのを見て、当然自身も逃げることを選択したわ。娘の私を連れて生家に帰ろうとしたの。でも、私はそれを拒否した。母は泣いて叫んで一緒に来るよう説得してきたけど、私は最後までこの城に残る意志を曲げなかつたの。結局母は侍女だけを連れて生家に帰つたわ」

「そこまで頑なになる必要があつたんですか？」

「うーん・・・今思い返せば、自分でもよくあれほど意固地になれたなつてちよつと感心するわね。当時私はあなたと同じ十六歳で、きつとすごく思い込んだら一途になれる若さで溢れてたんでしょね。周りの言うことに耳を貸そうとしなかつたから。でも・・・中傷の声は、やっぱり多少こたえたけれど」

「中傷？」

「私が鬼の姫つて立場上、直接言ってくる者はいなかつたけれど、でも裏でみんな私を馬鹿にしたのは知ってるわ。姫であるというつまらない自尊心など捨てて、さつさと逃げればいいのにつて。いっつ弟に殺されるか分かつたものではないのに、身分にこだわつて城に残り続けるなんてどうかしてるつて」

「酷い。深艶さんがここに残つた理由は、そんなことではなかつたのでしょうか？」

「そうよ。でも残忍で非道という印象が定着した魅月を・・・信じてみたいなんて言葉、誰も信じはしなかつたから」

「何なんですか、その深艶さんの信じたいことつて。そんな状況で、何を信じる事が出来たんですか」

「・・・魅月の、本当の姿を」

「本当の、姿？」

深艶は頷く。複雑そうな苦笑を浮かべながら。

「魅月はあなたには散々な態度ばかりとるから、きっとあなたには理解しがたいと思うわ。でもね、私は知っているから。惨劇が起こる前の、あの子の姿を。母親も居住区も違ったからあまり会う機会はなかったのだけれど、それでも時々顔を会わせた時のあの子は、本当に、普通の子だった。王家直系の御子とは思えないくらいに。惨事を起こすなんて考えられないような、大人しくて地味で・・・孤独な子だった。あの気持ちをなんて言葉にしたらいいのか分からないのだけど・・・そうね、妙な親近感を覚えたとも言うのかしら。だから私は魅月が突然起こした事件を、恐れるよりも疑ってしまっただの」

「もしかして深艶さんは、鬼神は潔白であると思っていますか」「完全に潔白であるとも思えない。現に魅月は、自身の手で母君と贅姫を殺したと認めているから。でもその裏には何かあったんじゃないかって思いたいのよ。鬼神の座を狙うために起こした事件ではなかったのだって・・・そう、信じたいの。待っているのよ、私は。あの子の口から真実が語られるのを。そして・・・父の謎の意図を汲むことが出来る日を」

紫恋は困惑して俯いた。深艶の言うことは、確かに理解しにくい話である。あの鬼神を思い起こせば、突然惨劇を繰り広げても全然不思議ではないと思えてしまう。だが、彼女の中では違うのだろう。彼女は鬼神の違う側面を知っていて、そちらの方を本当の彼だと思っているのだ。

ふと、紫恋はさつき別れた鬼導の面々を思い出す。想真も稀那も綺鏡も白水仙も、自らの意志で鬼神に仕えているようだった。鬼神を恐れている風でもなかった。彼らもまた、紫恋の知らない鬼神の

姿を知っているから彼の元に集ったのだろうか。

「ああ、ごめんなさいね紫恋。こんな曖昧な表現じゃ、なおさら理解なんてしてもらえないわよね。でもいいのよ、それで。結局魅月があなたを邪険に扱っているのは変わらないんだもの。あなたは魅月に対して警戒するべきなんだわ」

「・・・でも私が生きてるって事は、私も信じてみてもいいんじゃないか」

「え？」

「鬼神に皆さんが信じる姿があることを」

深艶は、きょとんという表現が似合うような顔をした。

「紫恋・・・あなたはあんな態度をとった魅月を信じられるというの？」

「いいえ、全く。だって私はまだ何も知りませんから。でももしこれから鬼神が私を殺さず見逃したのだとしたら、私も少しは鬼神と向かい合あうことがあるかもしれないじゃないですか」

今は本当のところ、鬼神に対しては少しの疑問と多大な恐怖しか感じていない。深艶の気持ちも鬼導の彼らの思いもあり理解はできない。けれどもしばらくこの城に居なければならぬのなら、傍に居て護ると誓ってくれた彼らのことを、知ろうとしてもいい気がした。仮とはいえあの暗い眼を向けてくる青年の妻となったらいいのだ、彼に違う顔があるというのが欠片でも感じられたら、何か状況は変わるのかもしれない。

一人頷く紫恋を見て、深艶はどこか呆れたような感嘆したかのようなため息をついた。

「・・・あなたも、結構変わった子だわ」

「え、私ですか」

「ええ。普通の女の子ならそっちには行かないでしょうね」

「そっちってどっちのことですか。私はいたって普通の人間だと思うんですが」

思いつきり首を傾げる紫恋の頭を、苦笑する深艶の手が優しく撫でた。

「いいえ。あなたのような心は、なかなか他の人は持ち合わせていないと思うわ」

「それは・・・褒められてます・・・？」

「半分、ね。その姿勢は、悪く言ったら無防備なのかもしれない。この今の特殊な後宮においては不適切なのかもしれない。でも、なかなか素敵な性格だわ」

「え、素敵だなんてそんな！えーっと・・・危機感、ちゃんと持っているつもりですよ。ただ、深艶さんや他の鬼導の人達があんなに優しくったので、少し気が緩んだように感じます」

「信頼してもらえたようで嬉しいわ。どうやらあなたは今まで、人に不の感情を抱いたことがなさそうね」

「村の人たちはみんないい人ばかりでしたから」

「・・・あなたを生贄に捧げても？」

囁くような彼女の声に、ふと紫恋は息を詰める。瞬く間に、脳裏にあちら側での最後の記憶が駆け巡った。小さく息を吐き出し、紫恋は彼女の顔をしっかりと見上げて答えた。

「——はい、深艶さん」

意識して微笑を浮かべながら。

廊下の窓から入った風が、二人の髪をゆるやかに遊んで流れてい

く。深艶の赤い髪紐が白い顔の前で一度揺れた。彼女は、どこか果然とした眼差しで紫恋の顔を見つめていた。

「・・・どうか、しましたか深艶さん」

「お姉さま」

「は？」

「私のことはこれからお姉さまと呼んで、紫恋。」

「お、お姉さま・・・ですか？」

「そうよ、あなたは立場的に私の義理の妹なんだから」

「それはそうかもしれませんが、でも」

「お願い」

深艶の美しい指が、そつと紫恋の頬に触れた。その時の彼女の表情は、なんだかとても悲しそうで。

「・・・その笑顔とその声で、深艶さんと呼ばないで」

呟くような彼女の言葉、その意味することを悟って、紫恋は言葉を失ったまま、頷いた。きっと今の微笑が似ていたのだ。彼女の記憶の中にある、前贄姫の姿と。この顔はそんなに深艶の忌まわしい記憶を引っ張り出してしまふのだろうか、そう思うとなんだか少し切なかった。

だが紫恋が落ち込みかけるより前に、はつと深艶の視線が上がった。彼女の視線は紫恋の背後の何かを捉えたようで、一気に見開かれた。驚いて紫恋も後ろを振り向いたが、だがその目に映ったのは何の変哲もない明るい廊下であった。

「先に部屋に入っていて紫恋。この先の角を右に曲がればすぐあなたの部屋だから」

深艶は急に早口でそう言って、元来た方向へと小走りで走りだした。

「え！？深え・・・お姉さま！？」

「すぐ戻るから！部屋から出ては駄目よ！！」

一度振り向いてぴしりとそう言い残し、深艶は廊下の一番手前の角を曲がって行ってしまった。取り残された紫恋は彼女の突然の慌てようにしばし呆氣にとられながらも、向きを変えて廊下の向こうへ進むことにした。また朝のような騒動になっても困るので、とりあえずあの落ち着けない部屋にこもって彼女の帰りを待ったほうがいいだろう。

廊下はまっすぐ行つた先は突き当たりで、そこからまた左右に分かれている。言われたとおり角を右に曲がった紫恋は、数歩いったところでぴたりと足を止めた。少し先、右手にある大きな贅姫用の部屋の扉の前に、女の人たちが集まっていたのだ。数は三人、いずれも背が高くすらりとした美しい体型であり、艶やかで華やかな装束に身を包んでいた。彼女たちは紫恋に与えられた部屋の扉の間から、じいっと中を覗き込んでいるようだった。謎の光景に戸惑って立ち尽くしていると、女性の内の一人が紫恋の存在に気が付いた。

「ねえ、あれ・・・」

一人が囁いた言葉に他の二人が反応して顔を扉から離れた。三人の視線が紫恋に集中し、彼女たちはあつという表情を浮かべた後、静かに近寄ってきた。いきなり逃げるわけにもいかず紫恋が固まっていると、彼女たちは目の前までやってきてじいっと観察するような眼差しで見下ろしてきた。三人とも、深艶ほどではないがとても綺麗な女性だった。黒目黒髪で右目周辺にある紋、間違いなく鬼の

一族である。とても美人ではあるのだが、彼女たちの視線が徐々に歪んだ色を帯びていくのを敏感に感じ取り、紫恋の背筋はすと冷えていった。

「紫の瞳・・・あなたが魅月様に捧げられた贅姫ってわけ」

棘のある声音と眼差しが降り注がれて、紫恋は半歩足を引く。すると、一人が腕を伸ばして逃げようとする肩を掴んだ。

「ふうん・・・これが、ねえ。魅月様が心変わりして生かしたって聞いて、どんな絶世の美女なのかと思えば」

「なによ、全然たいしたことないじゃない。小さいし胸もないし・・・貧相な体」

無遠慮な言葉に、思わず顔が赤くなる。そりゃあ確かに、目の前の色気を振りまく彼女たちに比べれば紫恋の体は貧相だ。だが狭間村においてはいたって普通であつたし、こんな風に不躰に評価をされたこともなかった。

「な、何なんですか一体」

「ねえ教えてよ。あなたみたいなのがどうやって魅月様をたらしこんだの？」

肩を掴む手に、ぎりぎりど力が込められた。彼女たちの口調はどこか優しいのに、底冷えするような悪意が混ざっている。

「鬼神になられてから、魅月様はどこかおかしいんだもの。あなたと一晩過ごした後は特にそう」

「魅月様がわざわざ部屋まで足を運ばれて会いにいらっしゃるなんて、普通じゃ考えられないわ。ここまで案内した私たちがどんな気

持ちだつたか・・・ねえ、分かるかしら」

「案内?・・・あの、痛いです」

肩が碎かれる思いがし、必死で身をよじる。すると別の女性の手に腕を締め付けられ、逃げる事が出来なかった。彼女たちの害意の程が判断しづらいが本能的に危険だと感じた。

すると突然、部屋の扉が軋む音をたてて開かれた。力が加わったのは部屋の中から。その音がした途端、紫恋を締め付ける力が一気に解かれた。はっとして、紫恋は廊下に現れた人物を凝視した。嫌な高鳴りに震えていた心臓がその瞬間に一気に頂点に達することとなる。呼吸すら止めて目を見開き、部屋から出てきた彼と視線を交えた。

明るく柔らかな日差しに満たされた空間において、漆黒の装束を纏う彼はいつそう存在感が増して見えた。相対した瞬間に、すつと細まる彼の双眸。黒い眼に宿る光が、紫恋の身を捉えてその場に縛り付けた。

「下がれ」

低く発せられた命令は、三人の美女たちに向けられたもの。三人は一瞬目に見えて不満そうな顔をしたが、すぐにその言葉に従って紫恋から離れていった。最後に一度睨みつけるような目を向けてきた後、彼女たちは彼の横を通り越して向こう側へと消えていく。

その間、現れた鬼神の視線は紫恋から外されることはなかった。凍りついたような空気が流れる中、一步彼が足を出す。心臓が早鐘を打つが、紫恋の足は動かなかった。ゆっくりと彼は近づいてくる。無表情を保った中にも、苛立ったような冷たい色を宿した顔で。そうして沈黙の中、手の届く距離で二人は向かい合った。頭一つ分以上背の高い彼をこわばった顔で見上げる紫恋の首筋。無防備に晒された細い首に、まるで当然のように彼の手は伸びた。ひやりとした

冷たい指が首筋に触れた途端、ようやく彼女の体がびくりと反応した。

反射的に後ずさると、彼の手がしっかりと紫恋の首を掴んで、そのまま横の壁に彼女の背中を押し当てた。決して乱暴ではなく強くもない力ではあるが、あがいても彼の手から逃れるのは不可能であるのは判断できた。苦しさではなく恐怖で震えだす手で彼の腕を掴むが、うまく力が入らない。彼が腰をかがめ、整いすぎた顔が彼女の真正面に来る。

「……答える。お前は何だ」

鋭く睨む彼の眼差しはさっき会った時とは違い揺らいでいない。代わりにそこには焦燥に似た何かが宿っていた。

第十話

首を掴む鬼神の手には、力は込められていない。これはまだ、ただの脅しだ。彼は殺すことを目的としてはいないはずだ。だがしかし、きっと彼がその気になればこの首など簡単に握り潰してしまえるのだろう。

まだ、死ぬわけにはいかない。紫恋は震えて座り込みそうになる足に懸命に力を入れて、鬼神の目を見た。まだ贅姫としての義務を果たしていないのだ、ここで殺されたら次に紫苑までが犠牲になってしまう。

まっすぐに顔を上げた紫恋の態度を意外に思ったのだろう、彼はふと眉をひそめてもう一度囁いた。

「答える」

お前は何者か、というその問いに、彼がどんな答えを期待しているのかが分からなかった。ただ、この世界において紫恋の立場を現す名は思いつく限り一つしかない。

「に、贅姫・・・です」

紫恋が恐る恐るそう答えると、彼の表情はいつそう険しいものになった。しまった、と思った瞬間には、首にかかる手に少し力が込められた。喉元を圧迫されて思わず身じろぐが、それはより首が窮屈になるばかりであった。だがしかし、まだ息は出来る。声も出せる状態だ。

「そんな当たり前のことは訊いていない」

ぞつとするほど低い声が目の前で囁かれた。漆黒と紫が触れ合い
そうなほど近い距離で視線を交えた。

いやだ、まだ、死ねない。紫恋は圧迫される喉を一度ならして、
言葉をさがした。

「・・・たしは・・・私はあなたに捧げられた生贄で・・・紫瞳の娘
で・・・紫恋という名で・・・それだけです。それ以外に私には何
も」

それ以外はすべて捨ててきたものだ。巫女姫候補の立場も、紫苑
や葵や他の多くの友人たちとの関係も。もはや紫恋を表すのは、そ
んな数少ない言葉しかないのだ。しかし鬼神の求めている答えは、
そのどれでもないようなのである。

彼の瞳がわずかに動いた。その視線は紫恋の瞳から、顔の各部分
を観察するように動き、さらには長く伸びた髪と朱色の羽織に包ま
れた体に向いてから、再び紫の瞳へと戻った。

「その眼も、その顔も、髪も、声も、表情も仕種も。お前の全てが
気に食わない。お前を昨夜見た時からずっと俺の内側が静まらない。
・・・お前は何だ。何故その姿形をしている。何故・・・俺に捧
げられたのがお前なんだ」

彼の口調にだんだんと感情的なものが混ざりだしたのを紫恋は感
じた。瞳もそうだ。まるでどこか焦っているかのような鋭い光に満
ちていく。無意識なのか意図しているのか、首を絞める手にもまた
少し力が込められた。苦しさに若干息が乱れてくる。しかし脅しを
かけられても、彼の言うことが理解しきれないことには答えようが
ない。

「わ・・・からない。私は妹の代わりに身を差し出しただけ。私は何

でもありません。一人の村娘として・・・何も知らずに、狭間村で生きてきただけのただの人間です」

「狭間村・・・」

その言葉に、鬼神の手がぴくりと震えた。村の名前に反応したことを不思議に思い、そこでふと紫恋は深艶の言葉を思い出した。『歴代の贅姫は、みんなそこからやって来る』。そう、紫恋はもちろん、今までの贅姫は皆狭間の村の生まれなのだ。ならば当然、鬼神が殺したという前贅姫もまた。

——ああ、もしかして。

紫恋の頭に確信めいた予感が浮かんた。彼が今見ているのは、紫恋の姿と言うよりは、紫恋に重なって見える別の姿なのではないか。闇に包まれた彼の過去に埋もれる人なのではないのか。

「・・・シキコ？」

思わずその名が口からこぼれ出た。そしてすぐさま口にしたことを後悔した。だが、もう遅い。『禁句』は彼の耳に届いてしまった。彼の目が見開かれた。そしてその整えられた顔が、一瞬にして苛立ちと憤怒の表情に歪む。それと同時に、紫恋の呼吸はとうとう止まった。首を絞める力にはもう加減の程は見られない。碎かれてはいないので本気の力ではなくとも、死に至るには充分な力であった。必死に空気を求めても、肺に一切入ってこない。彼の細身の腕を掴んでも、その手から逃げ出すことは出来なかった。冷たい汗が全身に浮かび、視界は自然と涙でばやけてくる。今度こそ本当に殺されると思った。死ねない、紫苑のためにまだ死ねない、そう心で唱えたところで、抗う力も徐々に無くなっていく。

「あつ・・・」

絞り出すような苦悶の声が喉から出た。自分の耳にもかろうじて届くほどの儚い声だった。だがそのうめき声を出した瞬間、紫恋の呼吸を止めていた力が急速に緩んだ。鬼神は何故かはっと我に返ったような反応で、首から手を離したのだ。

冷たく感じられる空気が急速に肺になだれ込んでくる。ひゅう、という苦しげな呼吸音を出し、彼女の膝はがくりと折れた。床に手をついてうずくまり、掠れた咳を繰り返す。しばらくその場には、彼女の咳の音のみが響いていた。彼は動かない。彼女は呼吸を整えるので精一杯で顔を上げることは出来なかったが、丸めた背中に強い視線が突き刺さっているのを感じ取った。

しばらくするとだんだん紫恋の心拍数も呼吸も整ってきた。咳の音が止み、一瞬沈黙の間が訪れた。彼女は床についた自分の汗ばんだ手を見つめて固まった。顔を上げたら次に何をされるのだろうかと思うと、怖くて動くことが出来ない。だが躊躇する時間はすぐに終わった。

まるで紫恋の呼吸が整うのを待っていたかのように、彼の手が彼女のあごを掴んだ。そして彼女は強引に上を向かされる。

「目障りだ」

目が合った瞬間、吐き捨てるように彼は言った。

「お前の存在全てが目障りだ。ここにいるというだけで腹立たしくてしょうがない。俺は・・・俺はお前なんか傍にいないことを絶対に認めない」

「私を、殺すの？」

紫恋は、口をついて出た言葉が、意外なほどに無感動な物言いであることに内心驚いた。だが、それも当然であるとすぐに納得した。自分は別に彼に殺されることに怯えているのではないのだ。彼に今

殺されて、紫苑の身が脅かされることを恐れている。それでは本当に自分が何のために身を差し出したのか分からなくなってしまふ。

「・・・殺されたいのか？」

彼は、怯えて必死で命乞いをする様子のない彼女を不審に思ったのだらう、眉をひそめて彼女の目を見下ろした。

「私はまだ、死ねません。同じ紫の瞳を持つ妹のために、私はまだ死ぬわけにはいかない。殺すなら・・・贅姫の義務を、終わらせてからにして下さい。全て終わったなら、殺せばいい。お願いだから妹まで私と同じ目にあわせないで」

「お前、死ぬのが怖くはないのか？」

「怖いんです。でも・・・私は、ここに来るときにすでに一度死にました。命よりも大切なものがあつたから迷わなかった。あの子が守れるならばもうそれでいい。もう私のことはどうでもいい。だから・・・」

この世界で紫恋が生きる意味はないのだ。鬼導の彼等の優しさに触れても、それが紫苑の姿を思い起こした時の感情に勝つことがあるだろうか。

鬼神の視線が奇異の物を観察するかのようじつと降り注がれた。紫恋もまた彼をまっすぐに見つめ返す。多少の怯えは隠せなくても、決意を込めた眼差しで。彼の目がずっと細まる。今までに見せた表情と少しだけ違う、どこか悩んだような、戸惑ったような、複雑な表情が見える。それが彼の印象とまたずれたものであり、彼女は彼を見つめ続けた。

そうして観察していると、彼は一目見た印象よりもずいぶん若い顔立ちなのだと分かった。全てのものへの拒絶と威圧感を纏う圧倒的な存在感であっても、彼は鬼の頂点に立つ者としてはやはり異

例の若い青年であるのだ。

彼の手が、彼女のあごを離れた。そして、その細く大きな手は、彼女の腕を強く掴む。彼女は小さく息をのんだ。次の彼がどんな行動に出るのか身構える。

「何してるの」

いきなり、緊迫していた場にはあまりにもふさわしくない声音が響いた。軽やかな、女・いや、少女のような声が。

彼も彼女も、お互いから視線を外して声のした方向に顔を向けた。そしてそこにいる人物を目にした瞬間、鬼神は紫恋の腕をあつさりと離れた。彼女が彼を再び仰ぎ見ると、彼もまたじろりと彼女を一瞥する。だが次の瞬間には、彼は彼女に背を見せて歩き出した。現れた人物の隣を素通りして、廊下の角を曲がって見えなくなってしまう。突然興味を無くされたかのように立ち去られて、紫恋は座り込んだまま呆然と彼を見送った。そして次にはっと、現れた一人の少女へと目を向けた。

少女を見た瞬間、紫恋は少し啞然としてしまった。そこに佇む少女は、優れた職人が生み出した人形なのではないかと思うほどに美しい容姿をしていたのだ。造り物めいた、という点では鬼神と雰囲気似ているかもしれない。無表情の少女の顔は白く、頬はほんのり桃色に染まっている。ゆるやかに波打って伸びた長髪は漆黒であり、右目周りにある模様からして鬼だとは思うのだが、一つだけ違うところがある。それは、瞳の色。見ていると吸い込まれそうに見える、蒼い瞳が双眸にはめ込まれていた。そして桜色の変わった形の装束を纏う少女の手には、木製の小箱が抱えられている。

歳は紫苑と同じくらいだろうか、そう思ったが、少女は表情も雰囲気もずいぶんと大人びていて、年齢がよく分らなかった。そして幼い中にも妙な色気が感じられる。もしかしたら紫苑より上かもしれない。

「・・・いつまで座っているの」

幼さを含んでいるがとても淡々とした声音が呟かれる。そこでようやく紫恋は床から手を離して、壁を支えにゆっくりと立ち上がった。

「あ、ありがとう助けてくれて」

「別に。私は何もしていない。ただこれを持ってきただけ」

「それは・・・？」

「贅姫の装束」

少女は視線を抱えた箱に落とした。紫恋はまだ、白い寝巻きに朱の羽織を纏っただけの姿なのだ、気を利かせて持って来てくれたらしい。

「部屋に入って」

どこまでも淡々と少女は言っ、先に贅姫の部屋へと入っていく。紫恋は言われるがままに少女の後を追って部屋へと入った。何度見ても広すぎて呆れなくなる部屋。少女は磨かれた紅色の棚の上に木箱を置いて、蓋を開けた。そこからまずは小物のようなものをいくつか取り出して並べていく。紫恋は少女の後ろで、ものめずらしく綺麗なそれらを黙って見つめていた。

この少女は何者なのだろう、そう疑問が浮かぶものの、少女の独特の雰囲気といそいそと準備をしている様子に、なんとなく声をかけるのをためらってしまう。装束を持ってきてくれたということは女官見習いのような子だろうか。だがしかし、着ているものや少女自身が放つ空気が何となくただのお手伝いさんではない気がした。するとしばらくして少女は首を振り向かせて紫恋を見上げた。

「一人なの？」

「え？」

「何故側に誰も付いていないの」

「えっと・・・さっきまで深艶さんと一緒にいたのだけれど、なんだか急に用を思い出したみたいでどこかに行ってしまった。それで、部屋で待つてるようにって」

「そう。なら深艶姫が戻ってくるまで私はここにいるわ」

そう言つて、少女は紫恋の後ろに回つて朱の羽織を脱がせた。どうやら着替えを手伝ってくれるらしい。ありがとう、と紫恋が礼を言つた直後、少女はふと小さく眉を寄せて手にした朱の羽織にそつと顔を近づけた。そして眉間のしわをいつそう濃くする。

「采女うねめの匂いがする」

「采女うねめつて」

「鬼神に群がる女たち」

淡々としていた少女の口調が、そこだけ少しいやみつぱいものに変つた。鬼神に群がる女・・・そう聞いて思い浮かんだのは鬼神と一緒に居た三人の美女たち。

「彼女たちが・・・采女？それって女官のようなもの？」

「一応は女官の内に入るけれど、実際はそんなじゃない。鬼神に媚びて色目を使うのが仕事。良家から送り込まれた女たち」

「・・・側室？」

「違う。鬼神はどの女も側室という地位にはあげない。どの女も特別視しない。そうやって気まぐれに目に付いた采女を何人も弄ぶ。だから采女たちは躍起になつて鬼神を取り合う」

幼い少女が口にする言葉ではないことを、少女は平然と口にする。もはやそれがここでの常であるというかのよう。紫恋は言葉を失った。つまり、ここには采女という鬼神の妃の立場を狙う女が沢山いて・・・鬼神は気まぐれに選んで手を出しているのか。なるほど、あの三人の美女たちが紫恋に敵意を剥き出しにした理由がようやく分かった。後宮の常識が狂っていると言うのも、なんだか分かる気がした。彼女たちにとっては、紫恋は鬼神が生かすことを決めた鬼神の妃。たとえそれが仮の立場であったとしても、彼女たちにとっては気に入らないものであったのだろう。

ため息をつく紫恋を見た少女は、ふと紫恋の首元に目をやった。

「首、絞められたの？赤い痕がある」

「ええ、さつき」

「采女に？鬼神に？」

「えっとその、鬼神に」

「首を絞められたのに殺されなかったの」

「ええ・・・途中で手を離されて。昨日と同じように。どうしてもしらね」

首を傾げてみると、少女は不思議そうに紫恋を見上げた。

「鬼神は自分に有害と判断した者は迷わず処分する。考え直したことは一度もない。なのにあなたは生かされた。・・・奇跡だわ。昨夜も絶対一騒動あると思っていたのに何もなかった。せっかく城中の者に多大な力を使ったのに、そんな必要はなかったくらいなもの」

「奇跡・・・そこまで言われるほど珍しいことなのね。あの、力を使っただけなの？」

「城の者全員を深い夢に落としたの。おかげで私も昨夜は力尽きて動けなかった」

「・・・城の者全員って・・・あなたは一体何者なの？」

「私は桜里^{おつり}」

桜里、その言葉を繰り返してみると、思い当たる名だと気が付いた。

「まさか、鬼導の？」

「そうよ。私は鬼神に選ばれた六番目の鬼導」

「あなたが。あの、ちなみに歳は」

「十歳」

今度こそ紫恋は絶句した。紫苑より一つ年下。雰囲気も言葉使いもとてもそうは見えないのに。驚いて目を見開く紫恋をよそに、桜里は箱に向き直ってそこから装束を取り出した。一目見ただけで上質そうだと思える生地は、淡い藤色に染まっている。ところどころには藤の花模様も咲いていた。

「紫の瞳にはとても合いそう」

「・・・すごく綺麗。私にはもったいないくらいだわ。ありがとう」

「別に。選んだのは私じゃない」

「そうなの？」

桜里は頷く。そしてその可愛らしい顔にふと奇妙な表情を浮かべてから、ちらりと扉の方を見つめた。

「さっきこの箱を私に渡して、この部屋に急いで行くようにと指示したのは――」

「お父様！―」

叫ぶような声が、中庭の見える廊下に響き渡った。ぜいぜいと息を切らし、声の主、深艶は、追ってきた人物の姿をようやく目に捉えることが出来た。

呼ばれた彼は立ち止まり、彼女と少しの距離を置いた所で振り返った。彼の肩ほどまでの黒髪が揺れ、涼やかな風が漆黒の衣を翻して通り過ぎていく。彼女もまた乱された髪を押さえ、向かい合った彼の顔をまっすぐ見据えた。

いつもどおりの穏やかな微笑を顔に浮かべる彼を、深艶は正体の見えない幽霊と相対しているかのような顔で見つめた。

第十一話

一見知らない者からすれば、それは見目麗しい同年の男女が見つめあっている光景だ。どちらも立っているだけで華のある姿に、加えて背景は隅々まで手を抜くことなく整えられた広大な中庭。澄み渡る青空。なんとも絵になる様である。

が、穏やかに見えるその二人の間にある空気は、決して穏やかなものではなかった。彼女は緊張に震えた手を抑えるように両手を胸の前で組み、彼の方はただ微笑を浮かべて無防備に風に身を任せながら立ち尽くす。

いつだってそうなのだ。危つく奇妙な関係は、打ち破って壊して前に進むことだって可能であるはずなのに、いつも彼は微笑み一つでそれを避けて彼女から遠ざかっていく。彼は確かにそこにいるのに、まるで実体のない幽霊のように何も見えない。何も察する事が出来ない。その柔らかい微笑みは崩れることがなく、その優しい声音で何かを語ることもない。それでも彼女は裏にある本心を見つけようと追って追って・・・そうして彼を相手に足掻くのが如何に無駄であるかを思い知ったのだ。だから彼女はこの城で待ち続けることを決めた。いつか時期が来るその時まで。来るのかも分からぬその時が、来ることを信じて。

厳しい表情で直立する彼女を見た彼は、それまで浮かべていた微笑をさらに柔らかくするように笑みを作って首を傾げた。

「そんなに髪も衣も乱して走っていたら、また女官長殿に叱られてしまうよ、深艶」

笑いを含んだ言い方はどこまでも無邪気に聞こえるが、深艶にとっては彼のそういう様は最も苦手とするものであった。

「お父様。私はもう、あの女官長にびくびくと気を使っていた、姫であつた私ではありません。いつまでも子ども扱いしないで頂けますか」

深艶はあえて棘のある口調と言葉を意識した。弱気になるな、この人の空気に支配されるなとひたすら心の中で繰り返しながら。しかしその試みが彼の前で成功したことなど今まで一度だつてありはしなかつた。

口にした瞬間に、深艶はその声が緊張と気迫負けをした情けない響きになっていることを自覺してしまつた。冷たく返事をしたところで彼の表情は全く変わることはない。ただ穏やかさしか伝わらない微笑みを浮かべて深艶を見ている。ああ、見透かされている、そう彼女は思つた。父の前で、真実を探る手前で、弱気になつてしまふことを見透かされている。それを無理矢理隠して強気で向かい合おうとしていることも、見抜かれている。彼には勝てないと彼女が心の奥底で諦めてしまつていることも、また。

なんて無様で滑稽な様。そう深艶は己を笑つた。紫恋と話していた時、彼の姿が一瞬廊下の隅に見えたことでつい衝動的に追つてきてしまつたのだが、いざ彼に追い付いて目の前に立つたところで、高揚した意志は急速に縮こまつていく。

十年。

それが彼と彼女の間にあつた空白の時間。顔を合わせる事も言葉を交わすこともなく過ぎた月日。

彼は十年間ずっと、この城の中央部より北東に位置する『紫の宮』に引きこもっていた。魅月の起こした事件によつて荒れる城の中、深艶は何度も何度も彼に会うため紫の宮に足を運んだが、彼は一度として会つてくれる事はなかつた。ようやく姿を見ることが出来たのは十日前。魅月がとうとう紫の宮に押し入つて鬼神の地位を奪つたことによつて。深艶はその時、鬼導として魅月に協力する姿勢をとつてはいたものの、実のところは傍観していたと言つていい。他

の鬼導の五人は魅月の父親殺しを疑つてはいなかったが、深艶はなぜか予感していたのだ。魅月は父を殺さない。それは十年間弟を信じたいと願っていた故の願いだったのか、何か根拠のある確信だったのかはうまく表現できないのだが、とにかく彼女の中に父が殺されてしまうという思いはなかった。そして、その予感通りに、彼は生き残った。十年ぶりに父と会った時の記憶は、十日前のものと思えないほど今でも鮮明に思い出すことが出来る。全く変わっていない青年の姿のままの彼。少し痩せたように見えたが、その顔にあるのは十年前の記憶にあるのと同じ、優しい笑み。

深艶だね？紫の宮から出てきた彼にそう最初に声をかけられたとき、深艶はぞくりと背筋が震えたのを覚えている。

ようやく会えた嬉しさに、ではなく、それは底知れない恐怖でだった。彼が浮かべるその笑顔が、柔らかく懐かしいものであるそれが、あまりにもその時の状況に合うものではなかったからだ。どうして彼は、十年ぶりに会う娘に、十年間会うのを拒み続けた娘に、何事もなかったかのように微笑みかけられるのだろう。どうして何事もなかったかのように、魅月の鬼導になることにしたなどと口にできるのだろう。

困惑して戸惑って、結果深艶は悟った。自分の知らない真実は確かに存在するのだ。魅月も父も、何か秘めた過去を抱えているのだ。その事実が、彼女はどうにも悔しくてならなかった。自分は彼等の娘であり、姉であるというのに。たしかに王家は普通の家族とは違う。血縁であったとて心の結びつきは希薄であるし、大勢の思惑が交差するゆえ騙し合いも憎みあいも起こるものであった。けれども深艶は、自分が彼等に歩み寄ろうと努力しているという自覚はあったし、彼等がそれに気付いていることも分かっていた。それなのに、自分には何も知らされないのだ。彼等に受け入れてもらえている風でもなければ、鬼導としてここにいることを否定されている風でもない。放置、傍観されているのだと感じるたびにこの城での己の存在意義を疑いたくなった。

彼に言いたいこと、訊きたいことは数え切れないほどあるのだ。彼の視界に入るためにずっと必死だった。なのに今ようやく二人きりで彼が向かい合ってくれたというのに、それらを矢継ぎ早に口にする事ができなかった。何のために彼を追ってきたのか分からなくなりそうになる。何のために自分はここに留まり続けているのか忘れさせられそうになる。

気をつけないければまた飲み込まれる。深艶は無意識のうちに拳を硬く握っていた。こんな機会、次にいつ訪れるか分からないのだ。彼は鬼導の役目以外の時間は常に紫の宮に閉じこもってしまう。鬼導となった者は城の中央区域に部屋を持つのが義務とされているのだが、彼だけは例外であるのだ。まあそれは彼と魅月の過去を考えれば当然の流れであり、二人が離れて暮らすことに異を唱える者など誰一人いない。彼が鬼導として生きていることへの危機感を訴える声はよく耳にするが。

深艶は必死で瞳に感情を宿らすまいと内心の動揺を押し殺した。しかし彼女が心を固めるのを、彼は待たなかった。

「彼女は、無事だったようだね。さっき元気そうな姿を見かけて安心したよ」

彼、詩依はにこやかにそう言った。先に会話を始められた彼女は、しまったと思ひながらも頷いた。

「ええ、怪我一つなく済みました。魅月は彼女に手を出すことなく突然部屋を出て行ったものですから」

「うん、そっか。彼女にとってはこれからが大変なんだろうけど、とりあえずよかったよ。どうやら泣き喚いて悲観に暮れているようではないみたいだし、あの子はそれなりに覚悟を持ってここに来たんだろうね。あれなら、しばらくは城でもやっていけるだろう。鬼導ともうまく付き合っていけそうだし、頼んだよ、深艶」

「お父様！」

彼の語尾に被せるようにして深艶は声を荒げた。すでに彼の空気に乗せられそうであることを察したのだ。

「あなたは、最初から分かってらしたのですか。贅姫が殺されないということ。だから、昨夜は……」

昨夜、紫恋を守るために深艶は部屋の外で待機していたわけだが、そこに詩依の姿はなかったのだ。贅姫を迎えにわざわざ紫の宮から出てきたというのに、役目が終わったらいつのまにか姿が見えなくなっており、彼女を守ろうとするそぶりは見せなかった。

もしかしたら、騒ぎは起きないことを彼は知っていたのではないのだろうか。そう深艶は疑いの眼差しを向けたのだが、彼は相変わらず微笑を崩さずに首を振った。

「いや、昨夜は僕も部屋の近くにいたんだよ。君が気付かなかっただけで。だって魅月が本気で暴れたら、君だけじゃあの子を守れないだろう」

「……本当ですか、それは」

「本当だよ。嫌だな、どうしてそんな怖い顔をしているんだい」

「あなたのその笑顔が嫌いだから。あなたの言う本当が、どこまで本当なのか読めないからです」

詩依の目が、少しだけ細まった。だがそれが笑みなのか困惑によつてなのか、意図が全く読めない。それがまた不気味にも感じたのだが、彼女はここで踏み込むしかないとは決断した。

「お父様。あなたはやはり、どこかで確信してらしたのではないですか。魅月が、贅姫を……いえ、紫恋を殺すことはない。紫恋

の姿を見て、あなたは何か思うところがありませんでしたか」

「・・・さあ？ 魅月は昔から何を考えているのか分からない子だからね」

「とぼけないください！ かつて『あの方』の最も近くにいらしたあなたが、気付いていないわけがない。紫恋はあまりにも似ているでしょう、『あの方』に――紫祈子様しきこに！！」

今や誰もが口にしなくなった彼女の名前を、よりにもよって詩依の前ではつきりと言つてのけるのはおそらく深艶だけであろう。

紫祈子。十年前魅月に殺された・・・とされている、前贄姫。そして詩依の最愛の寵姫であった人。詩依は彼女を失った事により心を病んで彼女の宮に引きこもり続けたと言われているため、当然今では魅月だけでなく詩依の前でも彼女の名を口にするような命知らずな輩はいない。

だが、深艶は彼に対してそんな風に氣遣うつもりはなかった。それで彼が傷付いたとしても、自分だって充分辛い経験を踏んできたのだと思えばおあいこなのだ。それに、彼を前にして彼を氣遣うほどの余裕はない。むしろそんな様子を見せたら負けるに違いなかった。

とはいえ、その名を口にすることで空気が変わったことに深艶は内心小さく動揺した。彼の笑顔は崩れていない、だがしかし・・・目が笑っているように見えなかった。

「・・・久々に、その名を聞いた気がするよ」

「私も久々に口にした気がします。贄姫として来たのが紫恋でなかったら、おそらくこれからも口にすることはなかったでしょう」

「紫恋・・・か」

「あの子を見て、あなたは何を思いました？」

「そうだね・・・確かに似ていると思つたよ。顔も声もふとした仕種もとてもよく似ていた。でも、それだけだよ。彼女は紫祈子とは

全く違う人間だし、何の関係もない。ほら、初めて君が彼女を見て驚いた時、僕は言っただろう？紫の瞳の娘は皆元を辿れば血族、似ていることがあってもなんの不思議もないと。だから別に、僕はなんとも思っていないよ」

「なんとも思っていない？本当にですか？本当にあの二人は『偶然に』あそこまで似ていると言うのですか。わたしは偶然で済ませられるようにとは思えないのですが。あなたは常に紫祈子様を傍らに置いていましたね。彼女から何か、聞いてはいないのですか」

「さあ、何も。彼女はあまり向こうの世界のことを話さなかったからね」

「・・・そうですか。ならばもう一つ。紫恋の存在が魅月になにか影響を及ぼす可能性を考えはしませんでしたか。昨夜魅月が彼女に手を出すことなく立ち去ったこと、私は予想外のことには驚きました、が、あなたは違ったのではないですか。あなたは・・・あなたは、魅月と紫祈子様の間に何があったのかを知っている上で、魅月と同じ顔の少女に手を出さないことを分かってらしたのではないのですか！？」

とうとう言った。深艶の背筋がぴんと伸びたまま凍りつく。十年間ずっと知リたかったことは、ただそれだけなのだ。この言葉を、一言肯定さえしてもらえればそれでいい。魅月が紫祈子や実母を殺したのが、魅月自身が望んで思いついてやったことではないと分かるだけでも充分な前進に繋がるのだ。魅月の鬼導であり続ける意味がまだあると思えるのだ。

呼吸さえ忘れて、彼女は彼の言動を一つとして見逃すまいと見つめ続ける。彼は今、ただ静かな感情の見えない眼差しを深艶へと向けていた。いつまで続くのかと思うほど、深艶にとっては長い沈黙の後。彼は、小首を傾げて言った。

「——さあ？僕は何も、知らないよ」

風がざあつと中庭を駆け抜けた。まるで深艶の心情を表すかのよう。木の葉がかき乱れる音の中、彼女はただ目を見開いて立ち尽くした。声は、出なかった。本来ならば怒りの声をあげて追及すべきなのだろうが、もはや彼女は声に出すべき言葉が見つからなかった。

それはあまりにも想像していなかった答えであり、最も、あつて欲しくなかった答えであつた。その答えは明らかに嘘であるのに、何も反論する気が起きなかった。彼の目は、また笑みを浮かべたそれに戻っている。だから、分かつてしまった。

彼は何も教えてくれる気がないのだ。どんなにしつこく質問したところで、真実には辿り付けない。結局・・・放置される状況は今までと何も変わることはない。

「ああそういえば、そろそろ紫恋のところに戻ったほうがいいんじゃないかな。さっき、魅月が采女と一緒に彼女の部屋に向かったみたいだから」

「・・・え」

呆然としていた深艶は、その言葉でようやくはつとして、ぎこちなく首を元来た方向へと向けた。

「それって紫恋が危ないって事・・・」

「いや心配はないと思うけどね。さっき桜里に声をかけておいたから。でも何かあつたら大変だし、君が行ったほうがいいんじゃないかな」

いったい彼はいつからこの中央区域に顔を出していたのだろう。普段めつたに紫の宮から出てこないのに、なぜ彼は今日ここにおいて、魅月の行動を先回りしているのだろう。

「じゃあ僕はもう行くね。魅月と紫恋のこと、頼んだよ深艶」

軽やかに去っていく彼の背中を、彼女は止める気も起きずにただ見つめた。ああ、私も行かなきゃ、そう思ったところで、なかなか体は動かなかった。受けた衝撃は、自覚した以上に辛く苦しく心を蝕んだらしい。熱くなっていた胸の内は今や凍ったように冷たくて砕けてぼっかりと大きな穴が開いているようだった。

「……知らないはずがないのに」

かすれた声が小さく口から零れ落ちる。彼が何も知らないはずがなく、むしろ誰よりもこの城にあった闇を知っているはずなのに。そうでなければなぜ鬼神の地位を追いやられるような屈辱を与えられても、平気な顔でこの城に居ると言うのだ。

深艶は、詩依がとても温和で優しい人物であることは知っていたが、同時に鬼神としての心構えを完璧に兼ね備えているということもまた、知っていた。一族のためなら時に恐ろしいほど冷酷な判断を下すこともあったし、常に周りに敵を作らないように、笑顔を浮かべながらも酷く冷静に上手く物事に対処していたのだ。そう、彼は決して弱くなかった。他の者からすれば鬼神としては頼りなげに見えたかもしれないが、深艶は彼の秘めたものを敏感に感じ取っていた。だから彼女はそんな彼が十年間も沈黙を貫いてきたことにも疑問を抱いていた。最愛の女性を失った、ただそれだけで十年も引きこもるほどに彼は弱くはなかったはずだ。鬼神として魅月になんらかの対処をしたはずだ。

なにもしなかった事にもまた、理由は存在するはずだ。

現在の事態も、彼は予測していたのだろうか。そんな気もしてきた。かつて紫祈子と出逢った事で人が変わったように執着を見せた彼が、紫恋の見た目に対して驚きを見せていなかったことから、も

しかしてそつくりの贅姫がやってくることも彼の予想の範囲内だったとしたら。

ああ、果たして自分がここにいることに意味はあるのか。くらりと眩暈が深艶を襲った。考えすぎて、緊張しすぎて、頭の容量が限界を超えそうだ。ふっと足の力が抜けて膝が折れる。だが座り込むより前に、肩を支えるように背後から腕を回された。驚いて後ろを振り返り、彼女は目を見開いた。

「綺麗・・・」

「大丈夫か。顔色が悪い」

金の髪と翡翠の瞳、猫に似た耳。感情のない声と無表情。それをいつも崩すことのない彼が、そこにいた。

深艶は凍っていた内側が、一気に熱くなるのを感じた。

「え、え、え、あの、いつから」

「始めのほうからずっと。貴女が血相変えて走っていくのを見たから追った」

「み、見られてたの」

「・・・顔色、戻ってきた」

顔まで熱くなっていることにはっとして、深艶は彼から視線をそむけた。そして周りを見渡してから、いつも彼と一緒にいる姿がないことに気が付いて首を傾げた。

「稀那はどうしたの」

「『任務』に向かった。閉じ込められてた三日間分だ」

任務。その一言の意味するところを悟って、深艶は複雑な表情を浮かべながら、一緒に行かなくてよかったのかと訊いた。すると彼

は、今回の場所は自分は入っていけない領域であると答えた。彼女はそれ以上彼に訊くことは出来なかった。彼の心情は、たとえ無表情でも充分に伝わってきたのだ。

「・・・私も、戻らなきゃね。こんなところでぼんやりしてられないわ。ありがとう綺鏡」

そう言って深艶の顔に笑みが宿ると、彼の手がそっと彼女の肩から離れた。彼女の視線は無意識にその手を名残惜しげに追う。彼が一步後ろへ下がるのを見て、彼女は紫恋の部屋に向かおうと歩き出した。

「貴女はここに居ていい」

ぼそりと呟かれた言葉に、彼女の足がぴたりと止まった。

「貴女は今の鬼神にとっても贅姫にとっても必要な存在だ。鬼導にとっても貴女は必要だ」

波もないような静かな海を思わせる瞳が、ただまっすぐ深艶を見ていた。

「貴女がここにいる意味はある」

白い頬を、一筋温かいものが伝う。いつもいつも彼はそう。そっけない物言い。簡素な言葉。だが深艶にとってはそれだけで充分なのだ。

彼女はくるりと向きを変え、再び彼の目の前に立つ。そして鬼導にしては飾り気のない彼の衣を掴んで、彼の胸に顔を押し当てた。彼の体が一瞬硬直したのを彼女は感じた。その無表情はどうなった

のか、少し気になったが顔は上げなかった。

「――深艶姫」

彼にしてはめずらしい、困ったような声が聞こえた。だけど深艶は彼の襟を掴んで離さない。

「姫って呼ばないでと何度言えばいいの」

「こんなところ誰かに見られたらどうする・・・深艶姫」

諫めるような声。けれども力づくで引き剥がすようなそぶりはない。彼の手はただ、両脇で握られている。

気が落ち着くまで、もう少しだけ。彼の胸の中、深艶はそっと濡れた瞼を閉じた。

第十二話

色とりどりの硝子で装飾された大きな丸い窓がゆっくりと外の空気を押して、その向こう側の風景を丸い形に映し出す。ひゅうつと涼しい風が生暖かい春の空気と共に部屋に入り込んできた。

紫恋は心地よさにふっと思わず頬を緩ませ、目に見えた光景にわあっと感嘆の声をあげた。が、すぐに、自分はそんな陽気さを楽しむほどのんきな状況に置かれているわけでもないことを思い出して、開いた口を手でふさいだ。すると今度は下から小さくため息が聞こえてきた。彼女が振り向いて視線を落とすと、そこにいるのは呆れた顔でこちらを見上げる少女。

「・・・その窓はそうやってよじ登って景色を眺めるためにあるのではないわ。あくまで採光と装飾性を考慮されて取り付けられているものよ」

幼い声音でなんとも可愛げのないことを言う。表情も十歳の女の子にしてはあまりにも大人すぎていた。年下にそうやって真剣に怒られて、と言うか呆れられていることに、紫恋はえへへと曖昧に苦笑を返すしかなかった。

紫恋が座っているのは、大きな丸い出窓の上。昨夜脱走を試みたのと同じ窓である。そしてそんな彼女を部屋の中から見上げるのは今、恐い眼をした青年ではなく蒼い眼を瞬かせている桜里であった。ちなみに紫恋が窓によじ登っているのも昨夜のように逃げようとしているわけではなく。純粹に外の景色が見たかったのである。この落ち着けない部屋で独特の雰囲気少女と二人きりでじっとしているというのはなかなか気分が落ち込みそうであったのだ。どこかに行っただけでまだ帰ってこない深艶から、部屋の外に出てはいけなうと言われているために、外を眺めるためにはこうするしかなかった。

た。この部屋の窓はこの大窓一つだけなのだから。昨夜は恐怖と混乱で冷静さを欠いた状態に加えて月の隠れた暗闇だったために、外の風景はあまり把握していなかったのだが、今こうして改めて日の下で窓を開くと眼前には素晴らしい景色が広がっていた。

この辺りは後宮と一まとめに言われているが、実際は幾つかの大きな建物が寄り集まっており、全て廊下で繋がっている構造であった。紫恋に与えられた贅姫の部屋があるこの区域は特に大きく高い建築物が集まっており、見渡す限りに呆れるほど無駄な装飾がほどこされている。贅姫の部屋は最上の三階に設けられており、窓からの眺めはかなり良かったのだ。すぐ下を覗けば、完璧に計算し尽した様に美しく整えられた緑と花の庭が広がっている。視線を奥へと移していくと見えるのは黒い瓦が美しい、背の低い建物が立ち並んでいる様子でありもつと遠くを見ようとすれば行き付くのは高い高い壁。鬼の城を取り囲む、威圧的な黒い城壁である。

「ここはお城の中でも端っこの方にあるのかしら」

城壁は近い位置にあるわけでもなかったが、この城の規模を思えばこの距離は近いと言えるのではなからうか。紫恋が何気なく呟いてみたことに、桜里はこくりと頷いた。

「そうね。後宮は城の北側に広がっているから。目の前に見えているのが北壁よ。ここは後宮二十三区の中でも中心となる第十八区域だから、ほら右斜め側に小さく門が見えていると思うんだけど、あれがここから最も近い北壁第三門よ。・・・門番は常にいるから、勝手に抜け出すのは不可能だとは言っておくわ」

「あ、はい・・・それはもう、充分に分かってます」

今朝方すでに痛い目に遭ったのだから。というのはまた呆れた顔をされそうだから黙っておくことにした。

それにしてもこの桜里という少女、無愛想で物言いはきついが、きちんと答えてくれる辺りはまじめである。根はいい子なのではないだろうか。歳相応に見えないのは気になるものの。

「それにしても後宮だけでこの広さだなんて凄いね、鬼の城って後宮の土地だけで私のいた村の集落がすっぽり入ってしまいそうよ。他の場所は一体どうなっているの？」

「こんな風に無駄に土地を使って華やかに飾っているのは後宮にしか見られないわ。城中央の本殿も確かに広いけど、後宮ほどではないわね。まあ本殿とここは廊下で直接繋がっていて大きな中庭を共有しているから、境目は曖昧だけれど」

女が寄り集まる場所というのは昔からいろいろ複雑で厄介な事情が多いから広い土地と幾つもの離れた建物が必要なのだと桜里は語る。それはそれは言っている内容と合わない幼さを残した声で、お経の如く淡々と。それがなんだかおかしくて、紫恋はついこそつりと苦笑を浮かべた。

話によると、この城は東西南北で居住や利用者が分けられており、雰囲気は各々だいぶ違っているとのことであった。中央の最も荘厳に構えられた本殿は鬼神や鬼導の住まう場所であり、そこを中心に北壁まで続くのが広大な後宮である。東壁一帯は鬼の一族や地位信頼の高い部族の者のみ使用が許可される修錬場や書庫などの施設、並びに城仕えの彼等の居住空間があるそうだ。これらは立ち入る者が制限される区域もあるらしく、全体的に雰囲気も上品で雅やかなのだという。対して、賑やかで活気に溢れているのは南壁の中央にある巨大な正門から西壁にかけての一带。この辺りは鬼の一族の配下にある部族の者たちの往来が盛んであり、必要な物資、献上品のやり取りもほぼそちらで行われているらしい。配下の一族においていずれその一族の中心を担うであろう者は、若い時に行儀見習いとして城仕えに出されることが多いらしく、また鬼に自分たちの一族

を売り込むために有能な闘士や術士を送り込むこともあって、そういった彼等の宿舎も立ち並んでいる。各地から来た下働きの侍女たちも大抵は西側に住み込みで働いているらしい。北や東と違い、土地の使い方には無駄がないし装飾性も少なく、機能と効率性が第一。村育ちの紫恋にはきつとこちらの雰囲気のほうが合っているだろう。だが贅姫である紫恋には残念ながら縁がないらしい。

基本的に鬼神や鬼導などの要人の世話をする女は鬼の一族であったり名の知れた一族の娘なのだそう。そういった彼女たちは後宮や東側に部屋を与えられており、与えられる待遇も西側より格段に良い。鬼の名家出の采女などがまさにいい例である。まあ現状において采女は女官とは実のところ違うようではあるものの。

「大体の配置はそんなところだけど・・・ああ、でも一箇所だけ独立した特別な場所があるわ。城の北東に位置する、紫の宮。あそこは今や城の中にあるもう一つの城といったところかしら」

紫の宮、小さく反復してみると、そこが深艶たちから話に聞いた特別な建物であったことを思い出した。鬼神であった詩依が、溺愛した前贅姫のために造らせた彼女の宮。そして、十年前から今現在に至るまで、彼が住居としている場所。紫の宮は今でも他者の立ち入りを固く拒んでいるのだそう、詩依と鬼神は静かに一線を引いた場所にいたのである。

紫恋は自分の身につけている衣へと視線を落とした。今まで身につけたこともないような美しく上質そうな藤色のそれは、詩依自らがわざわざ桜里に手渡したものだという。彼は普通に考えればあの鬼神を恨んでいて当然のはずなのに、こうして鬼導として紫恋に接しているのだ。わけが分からない事態なのだと思わずにはいられなかった。

「また、詩依さんに会う機会があるといいのだけど」

「それはどうかしらね。あのお方は任務以外はほとんど紫の宮から出てこないから。その任務だって、詩依様に来る依頼は少ないもの。前鬼神を呼び寄せるなんて恐れ多いこと、なかなか上の連中にだつて出来はしないわ」

「上の連中？」

「領主の家の者たちよ。ああ、ここは四大の一角である鬼の城なだけあって、上というのは当然鬼のこと」

どうやら鬼の一族の中でもまた上下関係は存在するらしく、それを決定するのは基本的には有する力の強さだった。鬼にも他より飛びぬけて血が濃く能力が高い鬼が生まれる家系が存在し、そういった家系は鬼の領域の各地に屋敷を構えて領主として一帯を治め他族を管轄しているのだそうだ。身分の区分けがあるのはどこの世界でも変わらないらしい。

「歴代の鬼導も名家出身の者がほとんどなの」

「桜里ちゃんも？」

紫恋がそう訊いてみると、途端に桜里の表情はむっと険しくなった。正直、人形のようなすまし顔よりこちらのほうが歳相応に幼く見える。

「彼等みたいな呼びかたしないで。子ども扱いしないでよ」

「えっと・・・彼等っていうのは」

「想真と稀那。ちゃん付けで呼ばれたのなんてここに来て初めてよ。あなたは贅姫なんだから桜里と呼べばいいわ」

「そう、ごめんなさい。でもあなたのこと呼び捨てなのはなんだかしっくりこなくて。他に呼び方はないのかしら」

「・・・他には桜里様や桜里姫としか呼ばれたことがないから。別に、あなたがちゃん付けで呼びたいならもう否定はしないけど」

様や姫を付けられて当然の環境で育ってきたのか。やはりこの少女は雰囲気表しているように、ただの十歳の子どもとは違うらしい。

「じゃあ桜里ちゃんね。別に子ども扱いしているわけじゃないのよ、本当だからね。それでその・・・桜里ちゃんも名家出身の・・・鬼なの？」

実はずっと気になっていたのだ。桜里は鬼なのかどうか。だって彼女は普通の鬼のように黒髪で右目周辺に模様が刻まれていても、瞳の色が違うから。

桜里はその海のような蒼い瞳で紫恋を見上げていたのだが、そう問われた途端にすつと視線を落として考え込んだように沈黙した。

「あ、あの、何か事情があるならいいわ、言わなくて。ごめんなさ
「鬼よ」

「い・・・そう、鬼なのね」

「月鳴の屋敷。鬼の中でも王家に次いで一、二を争う名家。私はこの現当主の娘なの。二年前にこの城に上がって鬼導となつてからは、一度も帰っていないけど。目がこんな色なのは、母が夢創一族の方だからよ」

「夢創一族って、四大一族の一つの？」

「そう。黒い髪に白い肌、そして蒼い瞳。他人の精神の域に入り込んで操作する事を得意とする一族。私は鬼よりそちらの血を濃く引き継いだの。他人を夢から通じて操作する事が出来る私の能力は夢創の能力と似通ったものがある。ただ鬼の血も混ざっているからその力は他の誰とも違う特殊なものなの。でも・・・そんなの今の私にはどうでもいいことよ。今の私は鬼の枢軸である鬼導なんだから」

「凄いのね、桜里ちゃんって。それほど良い生まれなら道理でそれ

だけしつかりしているはずだわ。私よりもよっぽど大人っぽい雰囲気なんだもの。ねえ、やっぱり鬼導って力が強くなければならないものなんだろう？桜里ちゃんや稀那君ってその歳で鬼導に選ばれたってことは、二人は相当秀でた才能があるってことなのかしら」

紫恋は感心してそう問いかけた。だが、桜里の視線は窓の下側の壁に固定されたままだ。上から窺えるその表情は何の感情も見えない人形のようなのである。子どもの見た目とは間逆のその雰囲気は、やはり違和感を感じると共になんだか空恐ろしい気がした。

「……ただの子どもであつたなら、ここには居ないわ。普通の子どもとして生きてこれなかったから、そんな場所は失くしてしまつたから、だから私たちはここに居るのよ」

「桜里ちゃん……？」

桜里の蒼い瞳は白い壁を映しているが、紫恋は彼女がもつと違う何かを見ているように感じた。彼女の言つた、ただの子どもとは違うこれまでを思い返しているのか。その眼は美しい光を宿しているのにどこか暗い。同じではないか、そう紫恋は思つた。さっきの鬼神の眼と同じなのではないかと。本人が思い返したくないことをその意に逆らつて映してしまつていてのではないかと、そんな気がした。

これ以上は詮索しないほうがよさそうだと口をつぐんで、紫恋はそつと外の景色へと顔を背けた。風にゆっくりと流される雲を見つめると、ふと愛しい妹のことが頭に浮かんだ。あの子のあの澄んだ瞳も今、後ろの少女のように暗い陰を宿しているのだろうか。そう思うと罪悪感が一層増して、勝手に気分が落ち込んでしまった。

小さなため息と共に頭を垂れると、ふと視界の端に人が駆けていくのが見えた。反射的に目で追うと、その人の後に続いてもう数人の女性が同じ方向へと走つていき物陰へと消えていった。なにやら

ざわざわという不穏な声が遠くに聞こえてくる。何だろうと不思議に思って、紫恋は窓の淵を慎重に掴んで身を乗り出した。そして目を細めて遠くに焦点を合わせてみる。すると第三門のところに、わらわらと人が集まって来ているのが見えた。

「どうかしたの？」

下から桜里の不審そうな声がする。紫恋は視線を人だかりに定めたまま、首を傾げた。

「門の前に人が集まってるの。あれ何かしら」

「門の前に……？」

とん、という軽い音が床に響いた。それに気付いて後ろを振り向けば、出窓の上にすでに桜里が上っていて紫恋はぎょっとした。少女とはいえ、やはり鬼の脚力は常人とは違うらしい。桜里は何事もなかったように窓の淵へと近寄って、紫恋の下から顔を出した。

「あれって……まさか、もう帰ってきたのかしら」

「帰ってきた？」

「……いや、そんなはずない。三日分の任務がこんなに早く終わるわけが……」

紫恋が難しい顔をした桜里と門前を交互に見比べていると、いつしか人だかりに変化が生じた。人の壁の真ん中が割れて、黒い衣を纏った男たちが先を急ぐように人を押しのけて進んでいく。紫恋はその男たちの後に続いて歩く小さな人影を見つけて、眉をひそめた。まるで人々の視線の中心にいるように見えるその小さな姿には、なんだか見覚えがあった。次の瞬間、限界まで細まっていた紫恋の目は一気に見開かれる。

「うそ・・・！」

弾かれたように紫恋は向きを変えて、窓の下に引きずっておいた棚に足をかけ床に下り、駆け出した。外に出てはいけないという忠告は衝撃的な光景のせいでもはや頭から飛んでおり、迷わず扉を開けて廊下へと飛び出ていく。小さな窓が続く廊下からでは外は見えないため、感覚的に門に近い方角へと足を進めて、廊下の突き当たりにあつた大きな窓に駆け寄って顔を出した。まさかと思つた光景が本当かどうか確かめるために下を見る。その瞬間、紫恋は背筋が一気に凍りついた思いがして息をのんだ。

「稀那君！」

窓から一步後ずさる。衝動的に下階へ向かうとした足は、いきなり衣を掴まれたことによつて留まつた。

「落ち着いて贄姫」

「落ち着けて桜里ちゃん！だつてあれ」

「自力で歩けているなら平気よ。それに、あれはほとんどあいつの血じゃない」

揺らぐことのない淡々とした口調は、紫恋を余計に困惑させた。

平気だなどと思える状況ではないはずだった。眼下にあつたのは信じがたい光景。さっきまで優しく可愛らしく微笑を見せていたあの金髪に翡翠の眼の猫耳少年が・・・全身真っ赤に染まりながらふらふらと歩いているのだ。ここからでも、それが血であることははっきりと分かる。それも尋常ではない量の、だ。

「頭押さえてる。怪我しているのよ」

「・・・ああ、だから早く帰ってきたのね。今回の任務は難しいと聞いていたけど本当だったみたい。大丈夫、あいつならあれくらいの怪我どうってことない。あの血は、ただの返り血だから」

返り血。そうであつたとしても一体あの少年に何があつたというのだ。窓の下を凝視していると、人の波を押し分けるようにして、黒い髪が多い中にひととき目立つ金の髪がもう一つ現れたのが見えた。稀那の兄の綺鏡だ、と思った瞬間には彼は弟の小さな体を抱きかかえて窓から見える範囲から姿を消してしまった。後にはざわめく人々だけが取り残されている。紫恋は呆然とその様子を見つめて立ち尽くしていた。

「何が・・・起こつたの？どうして、稀那君が。任務つて、一体」

「全ては鬼神のため。鬼神の護る聖域を侵す者を排除するために、あいつはあいつにしか出来ないことをやったまで」

「なに、それ。どうして稀那君みたいな小さい子が、あんな血まみれになつて・・・」

「あいつの鬼導としての逃れられない宿命よ」

「紫恋！こんなところにいたのね」

はつと顔を上げると、廊下の遠くから深艶がやってくるのが見えた。それを確認して、桜里はずつと握っていた紫恋の衣から手を離してくるりと向きを変えた。小さな背中が去っていく。紫恋がその背をじつと見つめていると、数歩行ったところで蒼い瞳は今一度振り向いて紫の瞳を見上げた。

「私たちは拾われたのよ、鬼神に。そうして命も未来も全てを捧げた。だからなんだってするわ。私たちは・・・鬼神の所有物だから」
「所有物」

聞き覚えのある言葉。そう、彼に嘲笑を込めて言われた言葉だ。贅姫は鬼神の所有物であると。それは相手を貶める言葉であつたはずだ。なのにこの少女はそれを当たり前のように口にして、事実を受け入れている。まだ幼いから意味を解していないということではないだろう。全て解つた上で、彼女は鬼神に仕えているようだった。稀那もそうだというのか。あんな血まみれになるようなことをさせられても、自らの意志で鬼神の物として鬼神に仕えているのだろうか。わからない、と紫恋は去っていく黒いふわふわの長髪を見つめて固まっていた。所有物という立場を受け入れられるほどに、あの若き鬼神を慕う理由があるというのか。彼に拒絶の眼差ししか向けられていない紫恋にはまだその感覚は飲み込めない。

「・・・紫恋、大丈夫？ごめんなさい遅くなつて」

深艶の白い指がそつと紫恋の頬にそえられて、彼女は心配そうに屈みこんで顔を覗き込んできた。気のせいだろうか、彼女の目元が若干赤い気がする。

「深え・・・じゃなくてえつと、お姉さま。今、下で・・・」

「ああ、稀那ね。大丈夫よ命に関わる程ではないから。あの子の怪我については心配いらないわ」

「桜里ちゃんにもそう言われました。でも、あれを見て大丈夫だなんて思えません！一体何があつたんですか。稀那君はまだあんなに小さいのに、あんな血まみれで帰ってきて！桜里ちゃんだってまだあんな歳なのに酷く冷静で言っていることもよく分からなくて」

戸惑いをそのまま深艶にぶつけると、彼女もまた戸惑つたような表情を浮かべた。

「二人とも、それぞれ特殊な環境に身を置いてきたのよ。詳しい事

情を話す事は可能だけれど、でもそれは本人たちにとって勝手に話して欲しくないことかもしれないから、知りたいなら本人が語るのを待ったほうがいいわ。ただ、稀那は特別でとても厄介な力を体内に抱えているし、桜里はね、魅月の従兄弟であつてとても厳しい環境で育つたものだから色々複雑な心を抱えているの。あまりむやみに過去を掘り起こすことはしないほうがいいと思うわ。決していい話ではないから」

「従兄弟なんですか、桜里ちゃん」

「私とは関係してないわよ。彼女の生家の月鳴家はね、魅月の母君・・・御正妃だつた十六夜様いざよいの生家でもあるのよ。十六夜様の弟が今の月鳴家当主であり、桜里の父親ということ。桜里は当主の命令でここにやって来てね・・・まあその、色々事情が複雑なのよ」

それは確かに複雑そうだと紫恋は思った。つまりその当主は、実姉を殺した甥の元へ自分の娘を送つたということだ。普通の父親ならばそんな鬼神のいる城に幼い娘を寄越しはしないだろう。桜里の異常なまでに子どもらしさを欠いた様は、そういう複雑な環境によつて形成されたものなのかもしれない。

鬼神に拾われたと桜里は言っていた。あの冷たい鬼神は紫恋には見せない別の面を持つているのだろうか。鬼導の彼らが自ら傍に居たいと思うほどのものを持ち合わせているのだろうか。

紫恋の胸が小さく疼く。それは果たして好奇心によつてなのか、不安によつてなのか。だが一つはつきりと思つたのが、きちんと話してみたいということだつた。鬼導の面々ともそうだが、なによりも一番、不安定な殺意と敵意を向けてくるあの青年と。

第十三話

蒼く輝く月が夜色の空に上り始めた頃から、後宮は一段と華やかさを増したようであった。橙の温かい灯火が廊下に点々と並んで、行き交う人々の影をゆらゆらと磨かれた床や柱に映し出す。楽しそうな女の高い声が遠くにいくつも聞こえてきて、また他にはどこかあわただしく会話する声も聞こえてきた。朝とは少し趣の違う賑やかさ。眠りに落ちようという雰囲気はまだどこにも見受けられない。静まり返っていた昨夜とは全く違った様子の夜の後宮。だが、きつとこれが本来のこの姿であるのだろう。

まるでお祭り前のよう、そんなことを紫恋はぼんやりと思った。涼しい風がふわりと彼女の佇む廊下を通り抜けていく。頬にかかった髪をそつと耳にかけて、彼女は窓の外から目を離して奥に長く続く廊下を見つめた。賑やかな声は若干聞こえてくるものの、見渡す範囲に人は見えない。贅姫の部屋の周辺ならば一人で歩いても平気だろうと深艶には言われたために、こうして部屋より少し離れた廊下の窓際に立っているのだが、なるほど確かにこの辺り一帯は人が通らないので安全である。昼間の鬼神の件のように、わざわざ贅姫に会いに来るもの以外は立ち寄らないだろう。だからと言って絶対安全というわけではないのだろうが、遠巻きに見える華やかさが紫恋の居る空間とはまるで別世界に存在しているようで、ここだけが隔離された異空間のように感じられる。それが今は彼女にとっての救いだった。

ここでの自分の立場を暗示しているよう、そんな事を思っただけ自嘲の笑みがこぼれた。あの鬼神にとって疎ましい存在である自分は、こうして孤立と異物扱いの立場で外の様子を見つめるしかないのだ。

「……苦しい……かしら」

自らの心に問い掛けるように呟いてみる。だがすぐにはつとして首を横に振った。いけない、夜の空気のせいかな、なんだかまた沈みかけている。苦しいと普通誰もが思う状況に置かれているのだろうが、自分はそう思っただけで嘆き悲しんではいけない、その資格はない、そう紫恋は自らに自戒を刻んだ。全て自分が望んで選択した道なのだから。その先で・・・先があるとは思ってなかったとはいえ、理不尽な扱いを受けても、それはもまた自分が選んだ運命であったのだろう。自分はここに無理やり連れてこられたのにこの状況は何なのだ、と泣いてわめいて不満と悲しみを訴えても、きつと鬼導の彼らは優しく受け入れてくれるだろう。だがそれで一番呆れるのも紫恋自身であるのに違いなかった。

悲しみ続けるのも疲れてしまった。地下牢に閉じ込められてからこれまでたった数日だが、気力を使い果たすには充分だった。ここに来てようやくひとまず休息したところで、なんだか思考回路が重くて仕方がない。何も考えたくない、そんな気分だ。元よりここでは今、紫恋の意思はあまり優先されないのだから。全ては鬼神の意思で決まる。

廊下に動きがないのを確認して、紫恋は再び窓を見た。しかし焦点はどこか合わなくて、ぼんやりと温かい光の輪郭を視界に浮かび上がらせる。窓のふちにしなだれかかって、ぼうつと彼女はうごく光を瞳に映した。

それでも苦しいと自覚してしまうとすれば、それはあの青年の眼差しのせいだろうか。脳裏に浮かぶ、彼の自分に対する視線。あんな風にただ一方的に嫌悪されるのは生まれて初めてだった。過去に誰かと喧嘩したことが一回もなかったわけではないが、それはこちらにも融通の利かなかった部分があった時である。だが喧嘩したとしても、ほぼ例外なく相手とは自然と和解が出来たのだ。これは傲慢になると思うが、紫恋は今まで誰かに決定的に嫌われた試しがないのである。いや紫恋自身が勝手にそう思っているだけなのかもしれない。

れないが、しかし思い出す限り恨まれたままの人物というのはさっぱり浮かんでこない。誰とも当たり障りなく付き合える、簡単なようだが実際は難しいことだ。だが紫恋にはそれが自然体でこなせた。ゆえに嫌われることの感覚に人一倍慣れていないのだ。

それは幸せなことかもしれないが、この状況下ではただ危うい心でもある。深艶が懸念した部分であつたが、紫恋本人はまだそれを理解してはいない。理解出来ぬまま、ひたすら彼の敵意に戸惑つて胸にもやもやとした苦しさを抱えて・・・彼に興味を持つのだ。その行き着く思考が普通とはずれていることにもまだ彼女は気付かない。

「お待たせ、紫恋」

優しく名を呼ぶ声。はつとして振り向けば、そこには灯りを手にした深艶がいた。

紫恋の顔が、さつと緊張で硬くなる。その様子を見た深艶は、苦笑とも戸惑いとも思える表情で首を傾げた。

「安心して、紫恋。今夜は、ないわ」

「・・・ない」

「ええ、ないわ。それが良い事かは分からないけど・・・とにかく今夜はゆつくり休んでちょうだい」

紫恋は深くため息をついて頷いた。そのため息は安堵でもあり、困惑でもあつた。

今夜は、ない。鬼神が贅姫の部屋に来ることは、ないということだ。なんとなくそんな気はしていたのだが、いざ深艶からはつきりそう言われると体中の力が抜けて座り込みたくなるほどだった。ひとまず今宵の安全は確保できた。だが深艶の言う通り、それが良い事かは分からない。紫恋にとっては早く『義務』を終わらせた方が、

紫苑の安全にも繋がるしこの城を出る許可も下りるために、良いことであるのかもしれない。焦る心と畏怖の心、二つの思いがぐるぐるとせめぎ合う。

「部屋に戻りましょうか。着替え、手伝うわ」

「すみません、お世話になってばかりで」

「もう、だから来たばかりの贅姫がそんなこと気にするんじゃないの。もっと人を使うことに慣れなさい紫恋。・・・明日からは、私も付きつきりではられないから」

「明日から？」

「鬼導への依頼は山のようにあるの。鬼神が代替わりしたここ数日は特に。あなたにはとにかく信頼できる女官を付けるから安心して鬼導の面々にもあなたに気をかけるよう忠告してあるから」

「依頼って・・・あの、もしかして、お姉さまも昼間の稀那君みたいに・・・」

今でも鮮明に思い出す、幼い少年の血まみれの姿。あれが『任務』の常だとしたら、深艶もまた、そんな危険な場に赴くのであろうか。そう危惧すると、彼女はやりわり笑って首を振った。

「私は大丈夫よ。昼間のあれはちよつと特殊な事例であつただけ。稀那の任務は・・・少し、過酷なものが多いから」

安心して。そう深艶は繰り返した。さつきから何度も言われるその言葉に、紫恋は口をつぐんだ。これ以上心配を見せても、余計に彼女に心配を与えるようだ。動じない強さを持てと暗に言われている気もした。

一步一步進むたび、深艶の持つ灯りが揺れて、二つ並んだ影も揺れる。橙に染まった廊下の中から、紫恋は点々と並ぶ小窓一つ一つを覗きながら歩いた。向こう側の風景が区切られながら垣間見える。

ちょうどここからは、少し離れた建物の渡り廊下が明るく照らされて目立って見えた。うごめく人影、華やかで楽しい霧囲気、それらをぼうつと眺めていると、ある一つの窓に差し掛かった途端に紫恋の足がぴたりと止まった。硬直した紫恋の視線は、窓の向こうの一点に吸い寄せられるように集中した。深艶も振り返って怪訝な顔で紫恋を見た後、倣うように視線を小窓に向けた。そして見えた光景に、深艶は頭を抱え込んで顔をしかめた。

紫恋はただぼうつと、まるで絵を見ているかのような心地でその光景を見つめた。視線の先にあるのは、沢山の黒髪が寄り集まっている様子。目立つ漆黒の衣を纏ったあの青年・・・が、沢山の女性たちに囲まれている姿であった。やや遠くて横向きのために彼の表情は窺い知れないが、特に女性たちへの拒絶の様子は無い。むしろされるがままに導かれている感じだ。

「あれが采女ですか」

「・・・の、一部よ」

ため息交じりの声はほとほと呆れた様子である。紫恋は不思議な彼らの様子にじつと視線を注ぎ込んだ。彼女たちは鬼神に酷いことをされはしないのだろうか。ああやって彼を取り囲むのだから、おそらく彼は彼女たちには陰惨な眼を向けないのだろう。拒絶されているのはやはり紫恋だけなのだ。

何なのだろう、彼は。恐ろしくて、不思議な人だ。そして、ここにいる自分も何なのだろう。こうして遠くから彼を見つめる自分の存在とは。彼にとっての贅姫とは。

ふいに、彼の横顔が動いた。そのことに気付いた直後、紫恋は小さく息をのむ。彼は、こちらを見ていた。こんなに離れていて、しかも覗いている窓は小さいというのに、確かに彼はこちらを見ていた。その視線に囚われるように紫恋も見つめ返す。ぼんやりとしか見えない彼の表情。その瞳に宿っている感情は、果たして。

先に視線を外したのは彼だった。顔を背けた途端、彼は女性たちの中から一人を引っ張って肩を抱き、建物の中へ足早に姿を消してしまった。うごめくきらびやかな女性たち。灯りにぼんやりと浮かぶ鮮やかな装束の色たちを、紫恋はただただ呆然と見つめていた。

その日の晩は寒くも暖くもなく、風が少し心地よいと感じられるほどの、眠るには最適の環境であった。しかし紫恋は目を瞑ったまま、何度も何度も寝返りを打った。そのたびに柔らかな良い香りのする布団にふんわりと体が沈む。そして、ため息と共に目を開ける。さつきからその繰り返しであった。

「眠れない・・・」

呟いた言葉に返事する声は当然なく、虚しく夜の空気に溶けていく。

ごろりと仰向けになって、うつろな視線を真上に向けた。見えるのは包み込むような白い天蓋の布。そして隣をちらりと見れば、ぽっかりと空いた寝所の空間。誰も居ない布団。

眠れるわけがなかった。こんな広くて豪華で落ち着けない部屋で、布団はふわふわ過ぎて慣れないし、昨夜の恐怖も思い出されて気持ちが悪まらない。今までは隣に必ず居た妹の姿もはや無いのだ。

体も心も疲れきっているはずなのに、無防備に眠りに落ちることへの抵抗があるようだった。ぎゅっと目を瞑って何も考えないよう努めてみても、ふとした瞬間にこれまでの様々な光景がよみがえってきて思わず目を開けてしまう。しばらくして紫恋はあきらめたように身を起こした。乱れきった髪を撫で付けて、するりと布団から抜け出して白布の外へと出て行く。閉じられた丸い大窓からは、綺麗な月光が降り注いでいた。きつと今夜の月も美しいのだろう。こ

んな丑三つ時、この辺りに人など居るはずがないだろうから、少しくらい抜け出してもきつと大丈夫だ。

扉を慎重に押して顔を出してみれば、廊下はしんと静寂が支配する真夜中の独特の空気に満ちていた。もう遠くからのざわめきは一切聴こえない。皆眠りに落ちているのである。世界から置いてきぼりをくらったかのような不思議な感覚にとくと胸を高鳴らせた後、紫恋はふらりと廊下に出て行った。点々と並ぶ灯りを頼りに、豪奢な天井やら壁やらを眺めていく。耳鳴りがしそうなほどに静かすぎるため、自らの足音と呼吸音がやけに大きく聞こえてつい忍び足になった。

記憶を頼りに歩を進めると、やがて思った通り天井に大きく窓の付いた場所に出た。見上げればちょうど青白い月が窓の真ん中に納まっている。なかなか絶景のお月見場所ではないか。

青い光が満たす空気の中、紫恋は壁にもたれてしゃがみこみ、やや欠け気味の月を見上げた。この世界の月は本当に綺麗だ。人の心を癒す魔力でも持っているのではなからうか。

「・・・元気に、してますか？」

離れていても見上げる月は同じだとはよく言われる台詞だ。世界の裏表が違っても、この言葉は通用するのだろうか。だがしかし、彼らにとっては紫恋はもう死んだ存在である。それを思うと悲しくて悔しくて仕方が無い。生きていると知らせることも出来はしないのだ。

やはり夜の空気は心を沈ませる、そういうな垂れた時。ふいに近くで衣擦れのような音が聴こえてきた。突然のことにびくりと肩をはねて、紫恋は音のした方角へ目をやった。見つめた先は月光の届かない暗闇。だがそのぼんやりとした闇の中、動いた黒い影があった。誰か居る。思いもよらぬことに動揺しながら紫恋は立ち上がった。闇が濃くて相手の姿がはっきりと見えない。

「誰ですか？」

相手は答えない。代わりに相手はゆっくりと近づいてきたようだ。月光の中にまず足が浮かび上がる。そして徐々に相手の輪郭が青白い光に浮かび上がった。衣が見えて、髪が見えて、背丈が知れて、そして俯きがちな顔が上がって容姿が確認できた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！」

紫恋の開いた口からは、言葉でなく空気がもれた。驚きを通り越した感情にいきなり突き落とされては無理もなかった。無意識に彼女の足はじりじりと後退を始める。背筋は一気に寒くなったというのに、嫌な汗が全身に浮かんできた。この後退が無意味であることは分かっている。本気を出されたら一瞬にして間合いを詰められて抵抗など捻じ伏せられて終わりだ。だが体は本能的に逃げの体勢に入ってしまう。

「ど、どうして」

今宵は、ない。そのはずであったのに。なのに目の前には見間違えようもない彼、鬼神の姿があるではないか。先ほど紫恋の見ている中で采女の一人と後宮内に入っていたというのに。今夜はずつとその女性の部屋にいるものだと思っていたので、これはあまりにも不意を付いた事態である。

彼は片手を壁に付けた状態で、また一步紫恋に近づいた。反射的に紫恋も一步下がる。

「ままま待つて下さい鬼神。は、話を。まず話を」

そうだ、彼ときちんと話しをしておかなければと思っていたのを忘れてはならない。今相手にその意思があるかは分からないが、言葉も交わさず義務だけを強いられるのはどうしても嫌だ。しかし何から話そう、紫恋が混乱した頭をさらにぐるぐる引っ掻き回していると、突然目の前の彼の体が膝からぐりと崩れて傾いた。彼は壁に付いた手に体重をかけるようにしてずるずるとしゃがみこんでいく。整った顔が黒髪に覆い隠されて見えなくなった。

紫恋は後退を止めて、崩れた彼の姿を見下ろした。彼の肩は大きく揺れていた。呼吸が乱れて苦しいのであろうことがはっきりと分かる。壁に付いた手も、よく見れば爪を立てて壁を引っ掻いていた。そしてもう片方の手は黒衣の胸部分を鷲掴みにしている。

「・・・胸が苦しいの？」

返事はない。こちらを見る様子もない。彼はただ苦しげに呼吸を繰り返しておりその場から動く様子はなかった。

一体こんな夜中に彼に何が起こったのだろうか、紫恋はうずくまる彼を凝視したまま、どうすればよいのか分からず立ち尽くした。ふいに、封剣という言葉が脳裏をよぎった。鬼神が代々体内に受け継ぐ剣は、そのままでは鞘の体を拒絶して暴れると聞いた。それを鎮めるために贄姫が呼ばれるらしいが、紫恋はまだその義務を終えていない。目の前の彼の異変はもしかしてそれが原因なのだろうか。

ごくりと喉をならして、彼女はゆっくりと鬼神に近寄った。苦しんでいるとはいえ相手は敵意をむき出しにしている鬼。安易に近寄るべきではないのかもしれないが、だが放っておける状態でもない今の彼ならば襲い掛かってくることもなさそうなので、少しくらい警戒を解いてもよいだろう。腕があと少しで届かない程度の距離まで近寄ってから、彼女はおそろおそろ彼の顔を覗くようにかがみこんだ。

紫恋の衣擦れの音に反応するように、俯いていた彼の顔が少しだ

け上がった。乱れた黒髪の隙間から彼の瞳が見えた。一瞬こちらに視線を送ったかのように思えたのだが、よく見るとその瞳は紫恋を見ているわけではないようだった。まるで高熱に浮かされているようにぼんやりと焦点は合っておらず、心ここにあらずといった状態だ。不機嫌で威圧的な、紫恋の知る鬼神とは全く雰囲気異なる青年の表情がそこにあつた。

「あの、私誰か呼んできます。ここで待ってて下さい」

彼に聞こえているのかは分からないがとにかくそう言い残し、紫恋は立ち上がった。どうやら思った以上に深刻な状態のようだ。紫恋がなんとか出来る話ではない。この辺りは人氣が少ないが、少し走れば誰か夜勤の者がいるに違いなかった。助けを求めるしかないだろう。

紫恋は急ぐために駆け出そうとした。だが彼の隣をすり抜けようとしたその時、踏み出そうとした足は何かにつまずくようにして止まった。勢いの付いた体はそのまま固まった足を中心に前のめりに倒れた。ごん、という鈍い音が床に響く。直後襲ったぶつけた膝の痛みに悶えながらも、彼女は動かない自分の片足を振り返った。そして、その足首をしっかりと掴む彼の手を確認した瞬間ぎよつとした表情を浮かべた。彼はかがみこんで俯いたままの状態だが、その手はしっかりと紫恋の足を掴んでいた。冷たかった彼の手は、今は酷く熱い。間違いなく彼は高熱をだしているのだ。

「は、離して！すぐに誰かを呼んで来るから・・・！」

足首を引いても、彼の手は離れない。痛いほどに彼の手の力は強かった。紫恋は両手で彼の手を無理やり開こうと試みたが、驚くほど彼の手は硬くちつとも動かすことが出来ない。

ため息をついて、彼女は謎の行動に出た彼の肩にゆっくりと手を

伸ばした。こちらを向かせて言葉をきちんと伝える必要があるだろう。彼の乱れがかった黒い衣にそつと触れる。その上からでも彼の異様な熱が伝わってきた。とその時、呼吸以外は動かなかった彼が、突然肩に置いた手首を掴んだ。一瞬のことに彼女が反応すら出来ないでいるうちに、足首を掴んでいた方の彼の手は彼女の後頭部へと回った。

紫恋の視界が大きく揺れた。引き寄せられた、と感じた時には目の前にあつた彼の美麗な顔。しかし焦点が合わずにぼやける、それほどまでに近い距離。熱い吐息を感じたのは一瞬。後ろ髪を掴む手につけられた力。そして直後訪れた、噛みつかれるほどの衝撃。

「んっ・・・？」

息をのむ、だがしかし上手く息は吸えなかった。口をふさがれたのだと理解したのは息苦しさを感じてから。唇に感じるのは知らない感触。熱くて呼吸がままならないそれは、妹の頬に口付けた時よりも柔らかい。そしてなにより、紫恋自身の内側も外側も火がついたかのように熱さがこみ上げてきた。

紫恋は目を大きく見開いた。これは、この行為は一体。いやこれなんなのかさすがに十六にもなって知らないわけがないが、だからこそ余計に理解が出来ない。だってこれは・・・本来特別な関係の男女がするものであつて。

「やっ・・・!!」

弾かれたように顔を逸らす。だが後ろ髪も手首も掴まれたままで身動きはほとんど取れなかった。唇が彼の熱から離れたのはほんの一瞬のこと。すぐさま後頭部に力が込められ、引き戻される。今度はさらに深く伝わってくる熱。まるで噛みつくようになされたものは、もはや恋人同士の甘い逢瀬のそれとは程遠い。空気を求めて口

を開ければ、彼は貪るようにさらに深く入り込んでくる。息苦しさに喘いでも、彼がそれを気に留める様子は微塵もなかった。紫恋の体から力が抜ける。獣のように求めてくる力に抗いきれず、彼女の体はそのまま後ろに押し倒された。長い黒髪が床に散らばる。彼の肩を押し返そうとした両手はあっさりと捉えられた。魂を根こそぎ吸い取られるのではないかと思えるほどに長く、幾度も繰り返された口付けは、やがて彼の体がぐったりと弛緩することによって終わった。

紫恋の上に覆いかぶさったまま彼は彼女の肩に顔を埋めた。彼女はようやく自由になった唇で冷たい夜の空気をせわしく吸い込んだ。そしてずっしりと押し掛かってくる彼の下から抜け出そうともがいたが、彼を押しつけるより前に彼の顔が上がった。ゆつくりと彼は状態を起こす。そしてまるで昨夜の再現のように、紫恋と彼は月明かりの下で顔を見合わせた。

彼に馬乗りの状態でいまだ手首を押さえつけられたままであるので紫恋は逃げ出すことが出来ない。そして彼はと言うと、そんな彼女を見下ろして・・・硬直していた。驚いた顔は昨夜同様、しかし昨夜のように逃げ出すのではなく、転がる紫恋を見つめたまま固まっていた。妙な沈黙が二人の間に流れた後、彼は呆然としたように呟いた。

「なんで・・・お前がここにいるんだ？」

まるで今初めて紫恋の存在に気が付いたという様子だった。彼は困惑する紫恋の顔をじっと見つめてから、自分の手が彼女の手首をしっかりと掴んでいることにはっとして、勢いよく後ずさった。

紫恋も弾かれたように起き上がる。その顔は月明かりの下では分りにくいが真っ赤であった。もう何がどうしてこんなことになったのかまるで理解が出来ない。感情すらも付いてこない。

「な、なに・・・どうして、あんなこと。体調が悪かったんじゃ・・・」

・
「体調・・・？」

彼も混乱を極めたといった表情で眉をひそめる。そして彼は何かを確かめるように自分の胸に手を当てた。その次に、指で唇をそつと触れた。彼の目が小さく見開かれる。直後彼は紫恋を睨みすえた。だが彼は彼女に手を出すわけでもなく、ただ唇に触れた後の手で拳を作っただけであつた。

睨む眼には再びこれまでのような敵意と拒絶の意が見える。だがそれに等しいほどの戸惑いもありありと伝わってきた。紫恋がそれをまっすぐに見つめ返すと、彼はすつと目を細めて何かを言いたげに口を開きかけた。しかし、結局彼の口からは何も出はしなかつた。代わりに彼は顔を引きつらせるようにして口を引き結び、呆然とする彼女の隣を大腿で横切つていった。

一瞬ふわりと彼の独特の香りが鼻をくすぐる。暗闇に彼が消えていった頃、ようやく紫恋はぎこちなく彼の去つた方角を振り返つた。真っ白な頭。思考があえて停止することを求めている中、彼女の手は無意識に自分の唇に触れていた。まるで夢であつたかのような感覚、むしろ夢であつて欲しいという願望。しかしそれを真っ向から否定する、熱と感触の鮮烈な記憶。

声にならない声で紫恋は叫び、壁に頭を打ち付けた。何だつたのだ、何だつたというのだ一体。彼は紫恋だと認識しないままにあんな行為に及んだのだろうか。たまたまそういう気分だつたから誰でも良かったのか・・・などと推測してみるものの、色々と腑に落ちない点が多い。

いまだ何か得体の知れない感覚に陥っている唇を押さえ、腰の抜けた体を壁にくっつけて、彼女は一人悶々とうな垂れた。

思い出すたびに熱くなる体を抑え、眠りらしい眠りにつけたのは、もう空が薄紫に染まり始めた刻であつた。

第三章 錯綜する思惑

まだ夜が明けきらない寢所に響く、小さなうめき声。動くたびに布団が擦れて鳴る音。隣で眠っていた女が、うなされる青年の名を呼んだ。しかし彼の目蓋は閉じたまま。名を呼ぶ声に反応は示さなかった。

今彼に聴こえている声は、ここにいる女の声などではないのだ。彼の奥底に眠っている声が、光景が、彼の目蓋の裏の闇で狂ったように巡っていた。

酷く醜い、一人の女の顔がある。

いや、女は本当は美しいのだ。顔立ちは申し分なく整っており、漆黒の髪は艶やかでまっすぐに伸びている。長いまつげが大きな目を飾っている。その奥にある黒い瞳も大きくて、美しくて……とても、冷たかった。

女は誰よりも美しくて、誰よりも醜かった。

彼女の冷たい指先が、優しく慈しむような仕種で頬に触れる。彼女の真つ赤に塗った唇が、言葉を紡ぐ。彼女は笑っている。小さな彼は彼女を見上げて、ただひたすら表情を殺しながら紡がれる言葉に頷いた。何度も何度も。

彼女は、微笑みながら己の所有物に言葉を吹き込み続けた。綺麗に笑いながら、綺麗な声で、傍目ではそこからは想像も出来ないような言葉を。

幾度も繰り返される言葉に、反論もせずに従った。反論するとうことを知らなかった。生まれた瞬間からこの体も心も彼女のモノで、彼女が視界に入る世界の全てを支配していた。

仰向けの体が痙攣したように震えた。汗ばんだ青年は一層きつく目を閉じた。悪夢は彼を闇に引きずり続けた。

花の咲き乱れる光景がある。

一面紫色の花が咲いている。

その中に、笑顔の一人の女がいた。柔らかくて優しくて・・・哀しそうな笑顔だった。

彼女は誰よりも優しくて、誰よりも儚げだった。

彼女の指先は温かくて、触れてくる仕種も注がれる眼差しも優しくかった。彼女は何も言わなかった。ただ澄んだ瞳で小さな彼を見つめていた。

とつくに気付いていた。彼女が見ているのはここにいる自分ではないと。けれどもそれでも充分だった。

殺し続けた自分の心と支配され続けた目の前の世界が、小さく、しかし確かに変化したのを感じたのだ。

やめる。現の体がうめいた。これ以上先を見せるな。映し出される光景を見つめる心が、檻の中で狂ったようにもがいていた。けれども夢はまだ彼を解放しなかった。

景色が変わる。

柔らかく微笑む彼女はそのままに、周りの花景色だけが闇に包まれていく。

暗い室内に記憶は引きずられた。

やめる。誰に懇願するでもない叫びが胸中であがった。これから何が起こるかを知っていた。だが、止められない。もう起こってしまったことなのだ。これは変えようもない過去の事実だ。

小さな己の体に、ずっしりと感じた人の重み。

温かかったはずの彼女の体は、酷く冷たかった。

ぐったりとした彼女の身を受け止めながら、視線は別の女に向いた。

美しくて醜い顔がそこにある。

ふいに頬に触れられた冷たい指。視線を落とせば、優しい顔がそこにある。彼女は言った。最初で最後の願い事を。

閉ざされる瞬間まで見つめ続けた。彼女の瞳を。綺麗な、深い、紫色の――

「……………!!」

目を見開いたと同時に彼は起き上がった。叫びは声にならず、口からはただ乱れた呼吸音だけがもれていた。

「鬼神？ 一体どうなさったの？」

隣にいた采女に肩に触れられて、彼は己が震えていることに初めて気が付いた。苛立ちが一気に心に湧き立った。何に対して苛立っているのかは分からない。悪夢如きにうなされて震えている自分に対してか、あの光景に見た彼女達にか。いや、きっと違う。きっと苛立ちの原因は、あの目障りで鬱陶しい……

無意識に唇に触れる指。思い出したくもないのに脳裏によみがえる、あの驚愕した表情。乱れきった息と長い髪。そして認めたくないことだが、あの少女に触れた瞬間感じた、壮絶な苦しみからの解放感と得体の知れぬ恍惚感。

「あいつのせいでこんな夢を……」

あの容姿、あの瞳が現れたことで、思い出すまいとしてきた事が鮮明に夢となったに違いなかった。あまりにも腹立たしい存在。今すぐにでも壊して視界から排除したくてたまらない。

彼は頭を抱えて背を丸めた。苛立てば苛立つほどに、あの贅姫の眼が思い起こされる。怯えの中にも好奇心を覗かせた、あの紫色の瞳が。爪がくい込むほどに頭を抱えて、必死にその姿を消そうとし

たところで、ますます心に広がっていく不協和音。これは苛立ちだ。彼は言い聞かせる。これは畏怖ではない。苛立ちだ。あの少女に対する。なぜ鬼神ともあろう者があんな何の力もない少女に臆さねばならないのだ。馬鹿げているのだ、こんな状況は。

「くそ・・・入ってくるな・・・入ってくるな・・・」

「ねえ鬼神？本当に・・・今夜の鬼神はおかしいわ。何があったというの？」

とろけるような女の声が耳にまとわりつく。女の細長い指がするりと彼の背を撫でた。彼は顔を上げると女の腕を掴み、力任せに女の体を押し倒した。彼の体の下で、色気を隠そうともしない甘い笑い声があがる。女は乱れた衣をさらに乱すかのように体をくねらせ、その成熟しきつた肉体で彼を誘った。その誘いに流されるまま、彼は目の前の情欲へと意識を切り替えた。ただ体の気の向くままに女の香油の匂いの中に溺れていく。今宵気まぐれに選んだ、名も臍にしか把握していないような女の。

眩暈がしそうなほどの鼻につく香り。甘く恥じらいのない声。手首を掴んでみた時の肉付きの感触。何もかも違う。そう何気なく意識したところで、彼ははっと我に返って動揺した。今、誰と比べていた。比べる必要などないのに。思考に上がることさえ許せない相手のはずなのに。

女の腕が彼の首にすがりつく。彼は女の柔らかな首筋に齒をたてた。快楽と苦痛の織り交ざった声を聞きながら、彼は今度こそ思考を遮断した。

「おはようございます姫様」

「お、おはようございます・・・」

目覚めた直後にこの女性と対面するとはなかなか衝撃的であった。眠気も吹き飛ぶ、とは思うものの、やはり一晩ともに寝付けなかった体はだるくて重い。いつ眠ったのか記憶が曖昧だが、空が明るみだしたのを布団の中で息を殺しながら硬直して見ていたのは覚えている。ほとんど睡眠は取れていなかったが、動揺と混乱の極致においてよく眠れたものだとも思う。

紫恋の目覚めは凜とした女性の声によってやってきた。起きてみれば、傍らに背筋をぴんと伸ばした年嵩の女が座っていた。見た目の特徴で分かる鬼の一族の女性。そして紫恋はそんな彼女に見覚えがあった。昨日の朝の脱走騒ぎの始まり、紫恋を見つけて贅姫！と叫んだことにより人を集めた彼女である。気まずかった。彼女に対して何かしたわけではないとは自覚しているものの、彼女の独特の威圧感ある空気が向かい合う者を恐縮させるのだ。

彼女は凜々しく整った顔をまっすぐに紫恋に向け、鋭い眼光でじつと紫恋を見据えた。鋭すぎてまるで睨んでいるかのようだった。

「……昨日はまともにご挨拶も出来ずに申し訳ありませんでした。深艶姫から良い侍女を探すよう仰せつかったものですから。申し遅れました、私は後宮内の総取締役を務めております、女官長の椿つばきで御座います」

「女官長さん……だったんですか。あの、すみません昨日はその……お騒がせを」

「お城入りしたばかりということで、あれには目を瞑る事と致しましょう。二度目は決してないように。今朝は早くから深艶姫もお出掛けで御座います。騒ぎを起こされては困りますよ。おとなしくなさっててください。御用はすべてこの者へ仰ってください。今日より姫様付きの侍女となります」

椿が視線を背後にやった。彼女ばかりを見ていた紫恋は、そこで

初めて彼女の後ろにもう一人控えていることに気が付いた。椿に促されて、一人の少女が進み出た。肩の位置で切りそろえられた黒髪、黒い瞳の面積が大きい印象的な目、右目周辺の黒い模様、ふっくらとした桃色の唇が可愛い、なんとも愛くるしい人形のような見た目の少女だった。歳は紫恋と同じくらいか、少し上といったところだ。侍女となった少女は、にっこりと微笑んで手をつき、一礼した。

「お初にお目にかかります、紫恋様。本日より身の回りのお世話をさせていただきます、ユウと申します。新参ゆえ至らぬ点が多いとは思いますが、どうぞよろしくお願い致します」

鈴のように軽やかな声で挨拶され、紫恋は戸惑ったように頭を下げた。田舎育ちの村娘がいきなり姫様扱いでは、戸惑って当然である。

「ユウは先日お城入りしたばかりの身。後宮のどの派閥にも属しておりませぬゆえ、信頼できませんよう。他に条件のそろった娘が見つかるまでは、ひとまず姫付きの侍女は一人ということで我慢なさってください。それではユウ、後は頼みましたよ」

「かしこまりました、椿様」

いまだぼうつとした頭で、紫恋は颯爽と去っていく椿を見送った。紫恋が呆けているうちに、既にユウはてきぱきと身支度の準備を整えていた。それにはつと気が付いた紫恋はあわてて手伝おうと布団から抜け出たのだが、ユウはそれをやんわりとした仕種で、しかしきっぱりと断った。紫恋としては自分の身支度くらい自分でやりたいところではあった。昔から両親のいなかった紫恋はそういう点で甘えるということに慣れていない。むしろ妹の世話に懸命であったほどのだから。しかしかといってユウの仕事を奪ってもいけない

のだろう、そう思つて紫恋はおとなしく彼女のされるがままに従うことにした。

本日の着物は萌黄の色。黄みがかかった緑の色合いがとても美しい代物だった。そしてやはり動き回るのが気おくれしそうなほどに上質な絹の織物である。もっと簡素なものでいいのに、そんなことを呟くと、ユウは驚いたように首を振った。

「なに仰つてるんですか！紫恋様は鬼神が唯一このお城に妃として置かれている、大事な贅姫様ですわ。そのようなお方に粗末なものを与えるなんて、鬼の一族の名折れというものですわ」

「・・・妃・・・ね。私は、たぶんそんなものではないのよ。贅姫としてここで暮らす上での立場がそうであつたとしても、あの鬼神にとつてはきつと・・・そんなんじゃ・・・」

いいかけた言葉は、ふと思い起こされた記憶によつて途切れた。いまだ鮮明によみがえる、昨夜の熱い、熱が。

「紫恋様どうか耐えましたの？お顔、真っ赤ですわ」

「ななな何でもない！何でもないの！とにかく鬼神にとつて私は必要性がないのよ。ただ、まだ私が・・・その・・・義務を、終えていないから。だからしかたなくこのお城に置いてもらっているだけ。義務を終えたら、私はここから出て行くことになると思うの。きつとその方がお互いのためよ。まあ・・・私が無事生きていたらの話だけど・・・」

「必要性が、ない？私にはそうは思えませんわ」

後ろで帯を整えるユウが、至極まじめにそう言った。紫恋が不思議そうに振り向くと、やはり真剣な彼女の表情がそこにあつた。

「紫恋様。私は昔、孤児として身寄りのない暮らしをしておりまし

た。そのうちに地方の鬼の領主様のお屋敷で働かせていただけたことになって。先日お城に上がるまでは一度もここに足を運んだことはありませんでした。しかし、鬼神、魅月様のお話は遠く離れた地でも常々耳にしておりました。実のお母上や先の贅姫を殺め、父や兄を追いやって鬼神となりました。その類稀なる強靱なお力で崇められていると共に、誰からも恐れられていらつしやう。私も、恐ろしかった。そして実際にあの方を遠巻きに拝見して・・・やはり、お噂通りの非情さを持ち合わせたお方であるように思いました。きつとあのお方は、必要性がない相手を容赦なく切り捨てることが出来るでしょう。そうでなければ生き残れなかった世界で生きてこられたのですわ」

「それでも、私はまだここで生かされてる。だから私は彼に必要とされていると言っの？」

「その通りですわ。本気で邪険に思われていたなら、失礼ですが、紫恋様はきつともう既に、鬼神の手によって・・・」

必要と思われる、紫恋にはその言葉がどうにもしっくりこない気がしてならなかった。彼に嫌われていることはまず間違いのないのだ、そんな彼が果たして自分に必要性を感じているのだろうか。義務という点では必要性はあるだろう。だがその義務すら拒否して微妙な距離をとっているのは彼の方だ。ならば、贅姫としての役目云々以外に、彼が紫恋を生かす理由があるのだろうか。

「あの、唇、どうかなさいました？」

ユウが首をかしげて見つめてくる。紫恋は自分の手が知らず知らずのうちに唇に触れていたことに気付いて思いつき動揺した。あわててなんでもないので取り繕ったものの、かなり挙動不審であることはごまかしようがなかった。

昨夜のあの出来事は、忘れたくても忘れられない。いや、忘れた

いなどと言っている場合ではないのだ。乙女にとっての初めての行為をあつさり奪ったという事実はこの際あえて忘れることとしてもあの行為の意味をはつきりさせないとすつきりしなくて気持ちが悪い。そしてこの妙な距離を置く理由もはつきりさせて欲しかった。

話し合いたい、彼と。だが冷静に考えるに、あの不機嫌で冷徹そうな彼が紫恋と膝を向かい合わせて話し合うことなど在于り得るのだろうか。きつと無い。それどころか今度こそ殺される可能性すらあるのだ。むやみに動いてまた深艶に心配をかけるのも気が引けた。どうすることも出来ない、そうためいきをついて紫恋は肩を落とした。

ユウは本当に手際よく着付けを行うと、次に紫恋の長い髪を丁寧に丁寧に梳き、片耳の上辺りに軽やかな音の鳴る花形の飾りを取り付けた。さらには紫恋にとっては巫女の仕事のような特別な時でしかほどこしたことの無い化粧までも。薄くお願いという紫恋の頼みに、おしろいをたつぷりと用意してかまえたユウは渋々といったように頷いた。大きな鏡の前でなんだか本当のお姫様のように整えられていく自分と、紫恋は妙な心地で見つめ合った。まったくもっておかしなことになったものだ。生贄の村娘がこんなお城でこんな格好をさせられているなんて。腕のいいユウのおかげで見れる出来栄えではあるが、采女たちのような匂い立つ程の色気や存在感は出ない。村娘から出ようはずもない。これでは主役は紫恋ではなく萌黄の衣に咲く桜模様ではないか。

考えると女としてはいささか落ち込むものがあり、紫恋はそつと鏡の中の紫の瞳から視線を外した。下に目をやると、化粧道具一式の箱の隣には布に包まれた四角いものが置かれているのが見えた。一瞬箱かと思ったが、よく見ると微妙にでこぼした形から積まれた本であることが分かった。

「ユウ、それはなに？」

「ああ、これは東殿の書庫よりお借りしてきた書物です。鬼やこの世界の歴史についてまとめられたものなど、色々集めてみました。

紫恋様が退屈なされないようにと思ひまして。ですが……まだ、今の紫恋様ではお読みになれないようですね」

「読めない？ 一体どんな本なの」

紫恋は布の結び目を解き、積まれた本の一番上のものを手にとつてみた。分厚く重い本をぱらぱらとめくつてみると、それはどうやら鬼の一族の歴史について記されたものであるようだった。

「……とても詳しく書かれているのね。ここで暮らしていくのなら、こういったことも知っておかなくちゃいけないわね。こつちの本は……行儀作法についてのもの？ こつちは地理学ね」

一つ一つ手にとって見てみると、ふと目の前のユウが酷く驚いた顔をしていることに気が付いた。

「し、紫恋様……その文字、お読みになれるんですか？」

「ええ、読めるわよ？ 文字はお世話になっていた巫女姫様から教えていただいたから」

「違いますわ紫恋様。その文字は紫恋様のいたお国の文字ではなく、……鬼の術式文字なのです。それは鬼の一族の血を持つ者や、鬼と主従契約を結んだ者、または鬼と……男女の関係、を持った者でなければ、読めない文字なのですわ。だから私、紫恋様はまだその文字をお読みになれないとばかり……」

それを聞いて紫恋も驚いた。本に書かれてある文字は、本当にそんなに頭に入り込んできたのだから。ユウに言われて初めて、紫恋はその文字がこれまで使ってきた文字とは違うものであることに気がついたのだ。

外界のままの体である自分がなぜ、そう首をかしげた瞬間、昨夜のことが思い当たった。鬼の彼との……息苦しいまでの口付け

が。まさかあれが原因なのだろうか。あれだけで・・・いやあれだけと一言で済ませられるほど軽い口付けではなかったにしろ・・・鬼の文字が読めてしまうものとはいささか驚きである。彼が王家の血を持つ鬼神ということも関係しているのだろうか。

思いだすと表情がいまだに奇妙に引きつった。顔も熱い。ユウがまた不思議そうな顔をしてこちらを見るので、紫恋は慌てて本を読むふりをして顔を隠した。

それからしばらくは、部屋でユウと二人きり、本を読んだり会話で情報を得たりして時間をやり過ごした。こんなことをしていて良いのかと思うほどに、穏やかな時間だった。ユウの持ってきてくれた書物はとても勉強にはなったのだが、ずっと文字ばかりを目で追っているのは少しばかり疲れてしまった。暖かい日和もあって、なんだか眠たくもなってくる。思わず大きなあくびが出てしまった。

「退屈でしょうか？何か新しい物をお持ちしましょうか？」

「いえ、大丈夫。でも難しい史書は読んでも疲れちゃうね・・・」

「でしたら紫恋様、東殿の書庫に行ってみるのはいかがでしょうか。あそこは他にないほどに規模の大きな書庫で、おもしろい物語や画集などもたくさんありますの。今日は中庭の桜もとても綺麗に咲いておりましたし、気分転換にお花見をしつつ」

「まあ、いいわねそれ」

外の様子は知っておきたいものがある。紫恋は難しい本をたたみ、椅子から立ち上がった。

廊下に出ると、部屋よりもずっと澄んだ空気が肌を撫でた。どこもかしこも陽気な春の空気に満ち足りている。ユウに連れられて、紫恋は城の東側に位置する書庫へと向かった。東殿の書庫に行くには一度本殿と後宮が共有する大規模な中庭を通って、東殿の渡り廊下を経由するのだそうだ。

中庭にはたくさんの桜の木や花々が植えられているそうで、この時期はとても華やかなのだとか。

すれ違う人々からは、時々好奇の視線が送られた。ぱっと身ではこれといって目立ちはない紫恋だったが、目を見られるとやはり正体が知られてしまうらしい。紫の瞳は贅姫の特徴である。観察するような視線に耐えかねて、紫恋は自然と下を見ながら歩いた。外に出ないほうが良かったのだろうか、とも思ったが、しばらくここで暮らすのなら慣れることは必要であるのだろう。ずっと部屋に引きこもっているわけにもいかない。ある程度の耐性と強さがここではきつと必要になってくるだろう。

床の木目を見つめながら歩いていると、ふいに鼻腔をかすかにくすぐる香りが漂ってきた。つられるように紫恋が顔を上げると、そこに見えたのは淡く儂く、夢のように美しい光景だった。

「黄色の・・・桜・・・？」

「御覧になるのは初めてでしょうか。あれは双桜といって、鬼の一族の領域でしか見られない桜なのです。一度桃色の花を咲かせた後に、このような薄黄色へと変化するのです。普通の桜より花の命が長いのですよ」

「綺麗・・・もつと側で見てみたいわ」

桜は桃色であるという概念を打ち壊されたのはなかなか衝撃的だった。だが、これはこれで大変美しい。中庭の芝生を踏んで一番大きな双桜へと近づいた紫恋は、その途中でふと足を止めた。桜の下に、誰かが座っていたのだ。

ちらりと見えたのは淡い景色の中でも存在感を損なわない黒い着物。とくと、紫恋の心臓が高鳴った。一度止まった足を、ゆつくりと足音を忍ばせるように進めていく。そうして見えてくる漆黒の髪。しなやかな体の線。そして・・・

紫恋は言葉を失って、見えた彼の表情を凝視した。

涼しい風が淡い薄黄色の花びらを舞い上がらせる。まるで夢のような華やかな風景。桜が作る木陰の下で、彼は……。鬼神と呼ばれる青年は……。微笑んでいた。

夢かと思った。嘘だと思った。絶対にない、想像も出来ないと思っていた彼の表情が、視線の先に確かにあるのだ。無愛想で凍てついた顔つきしかしないのだと思っていた、その彼が。優しいと、素直に認められる、そんな穏やかな表情で。

彼の片手が動いた。彼の体の向こう側、わずかに覗いた金色の髪の毛。その上に置かれた彼の手。まるで慈しむような、そんな仕種と表情で。

紫恋はぼうつとその様子を見つめていた。夢でも見ているかのよう。だが、その夢は彼が視線をこちらに向けた瞬間に覚めることになる。彼は少し離れた場所で立ち尽くす紫恋に気が付いた瞬間、それまでの微笑が嘘だったかのように表情を引きつらせた。瞬時に彼の表情に、緊張のような敵意のような色が宿る。紫恋もようやくはっとして、一歩足を引いて身構えた。

「……鬼神？どーかした？」

突然聴こえたのは幼い声。そして鬼神の黒衣から、ひよっこりと可愛らしい少年が顔を出した。

「あ！贅姫だ！おはよー贅姫！」

「お、おはよう稀那君……」

鬼神の背に抱きつくようにして、その彼の表情などおかまいなしに稀那は太陽のような明るい笑顔でこちらに手を振ってきた。金色の髪の毛と猫のような耳が揺れている。ただ……。その額や腕には、白い包帯がぐるぐると巻かれていて、見るからに痛々しかった。

殺気を放たんばかりに睨んでくる鬼神と包帯に巻かれた稀那。ど

ちらに対しても戸惑った顔を向ける紫恋。妙な間の後、鬼神は稀那を引き剥がして無言で立ち上がった。こっちに来るかといやりとした紫恋だったが、彼の足はそれとは反対側の方向へと向かったのだ。また、逃げられてしまう。そう思った瞬間、紫恋は反射的に叫んでしまった。

「待つて!!」

彼の足が止まる。そして彼はやや驚いたように振り返った。まさか紫恋が逃げるではなく静止の声をかけてくるなど想定外だったに違いない。だが、叫んだ紫恋も自分のしたことに驚きの表情を浮かべてしまった。危険かもしれない。彼の今の表情を見る限りは。だが、さっきの彼の、優しい笑みは嘘ではなかった。あんな表情も彼は持ち合わせているのだ。

「・・・は、話がしたいの、鬼神」

勇気を出して、まっすぐ彼の目を見た。すると彼は、目を逸らした。まるで、戸惑ったかのように。

「お前の顔を見ているだけで煩わしい」

絞り出すような低い声音で彼は呟いた。そうしてまた背を向けた。その瞬間、抑えていた紫恋の中の何かがふいに切れた。ぷちんと音が聴こえた気がした。

「し、紫恋様？」

ユウが小さく制止の声を上げた気がしたが、紫恋はすでに駆け出していた。彼の背を目の前にして、彼女はためらうことなく彼の肩

に手をかけた。彼の肩が大げさなほどに揺れた。思ってもないほどに明確な動揺が伝わってきた。だから彼女は踏み込んだ。彼の黒衣を引っ掴みながら。

「私と向き合って！少しでいいから、私の目を見て話をして！私は、あなたの贅姫でしょう！？」

彼の体が不自然なほどに硬直している。伝染するように、彼の衣を掴む彼女の手も硬くなっていく。

「私の顔が嫌いなら、さっさと義務を終わらせて私を遠ざければいいじゃない。その後なら・・・殺したいなら殺せばいいわよ。だからお願い、逃げないで」

これまで何度も、紫恋はこうして人と向き合ってきた。紫恋自身は意識してこうしているわけではないのだが、自然とこの形になるのだ。相手を捉えて、目をまっすぐに見ることで、例外なく自然と和解に持つていけることが出来たからだ。

だが、彼の表情は引きつったままだった。敵意、殺意、畏怖、混乱、動揺、驚愕、どれともとることが出来る。どれとも違うのかもしない。

紫恋は彼を見上げ、いつそうきつく彼の衣を引いた。その途端、固まっていた彼はようやく動いた。紫恋にとっては最悪の方向で。

「・・・っ・・・うるさい黙れ・・・入ってくるな！！」

「だめだ鬼神！」

「紫恋様！！」

彼の怒声を聞くと同時に彼女の目に飛び込んできたのは、振り上げられた彼の右手。勢いのついたそれがどこに向かうかは容易く想

像できた。彼女はとつさに黒衣から手を離し、腕で顔を覆った。だがそんな防御ではなんの意味もないことは分かっていた。きつく目を閉じ、迫りくる死を覚悟した。

しかし視界を完全に闇で閉ざす直前、彼女は眼前に新たな影が生まれたのを見た。閉じた目を、今一度そろりと開ける。そして大きく見開いた。

「そこまでだよ、魅月」

穏やかな声が、静かにその場を凍りつかせた。

今まさに振り下ろされようとしていた腕は、きつく、絶対的な力で掴み取られている。

その手にまるで力など込めていないかのように、彼・・・詩依は、穏やかな表情を崩していない。その、眼に宿る光以外は。

紫恋の肌を、酷く冷たい汗が伝った。

第二話

この状況は、もしかして相当な修羅場なのではなからうか。

魅月と詩依の関係を表面上しか知らない紫恋でも、それははつきりと分かった。殺伐とした過去がありながらも、今尚微妙な距離をおいて城に居る二人。この二人の間にどういった感情、もしくは思惑があるかは紫恋は知らない。鬼導ですらも知らないのだから、他の誰にも分かるはずがない。だが一応の平穏を保っているので、誰もわざわざ傷を抉る馬鹿な真似はせずに黙って見守っているのだ。

しかし、今こうして向き合う二人は紫恋から見たら一触即発といった状況だった。穏やかな顔をしている詩依だが、それは彼が意図して平然を保っているに過ぎない。魅月が動けば、均衡は簡単に崩れ去る。その崩壊がどれほどの被害に繋がる事態なのかは想像がつかないが、引き起こさない方が良い事だけは確実にわかる。

二人の間に対等に割って入れる人物、と考えて深艶が浮かんだが、あいにく彼女は城外に任務とやらで出掛けてしまっている。少し離れた場所では、ユウと稀那が息をのんだまま固まっていた。二人もまた、安易に動けない状況だと理解していた。今は誰にも助けは求められない。紫恋は意を決して、目の前に立ちはだかる黒衣の端を小さく引つ張った。それに気付いた詩依が、視線を魅月から背後の彼女へと落とした。場をかき乱す様な下手な仲裁の言葉は危険だ、そう思う紫恋は詩依をじつと見上げ、小さく首を横に振った。それだけでも充分意思は伝わったであろう。

詩依は紫恋の強張った顔を見て、逡巡するように視線を魅月に戻した後、背後に置いていた紫恋の肩を抱き寄せた。優しくも思ったより力強い腕に包まれ一歩前に出て、再び魅月と向かい合う紫恋。しかし、その身はしっかりと詩依の護りの中にあつた。

魅月は、目の前の二人へ交互に視線をはしらせてから、忌々しそうに……いや、見たくないものを見たといったように、だろっか

整った顔を引きつらせて目を細めた。

何だろう。紫恋は微かな違和感を魅月に感じた。冷たい眼差しも態度もこれまでと変わりはない。だが、何だろう。わずかに彼が感情的になっっているような、そんな気がしたのだ。

「……僕と彼女がこうして並んでいる姿は、不快な記憶に重なるかい？ 魅月」

囁くような頭上の声に、紫恋は小さく眉をひそめて詩依を見た。よく意味が分からない言葉だった。だが、魅月には明確に何かが伝わったようだった。さっと彼の眼に怒気が宿った。それに合わせるように紫恋の肩を引き寄せる手にもわずかな力が加えられる。

「けれど魅月、冷えた頭でよく見て御覧。この娘は『彼女』じゃないだろう？ この娘は僕の贄姫じゃない。君の贄姫だ。君のためにここへやって来た、君を苦痛から助けることの出来る唯一の……かけがえのない存在だ。そうだろう？ 君の内に居る贄姫とここに居る紫恋は全く関係ないはずだよ。紫恋を傷つけて何になる？」

「……っ……黙れ！ こいつのことでお前にとにかく言われたくない！ 俺の贄姫のことでお前にだけは干渉されたくない！！ こいつは俺への捧げものだ。鬼神が贄姫をどうしようが、誰も口出しする権利はない！！……全く関係がないだろ？ ない訳があるか。どんな容姿であれ一緒だ。贄姫という存在は……その紫の瞳は……どうしようもなく苛つくんだよ。吐き気がする。俺の傍で……生きていると思うことさえ」

「魅月。君は一度も紫恋を見ていないだろう。君はこの娘を見ながら別姿ばかりを追っている。それじゃ何も変わらないよ。別の眼で見て御覧？ 『彼女』じゃなくて、紫恋自身と向き合ってみなよ」

拳を握った魅月の漆黒の瞳が、紫の瞳を射抜くように睨みすえた。

両眼を貫かれるような怒気と殺気にたじろぎながらも、紫恋は彼を見上げ続けた。詩依が後押ししてくれた、向き合いたいという意思を伝えるために。

だが、彼は祈るような彼女の視線を吐き捨てるように視線を外した。再び詩依を睨みすえ、そして一步後ろへと下がった。

「俺に意見するな。お前は俺の鬼導となったんだ。ただ臣下としての役割をこなしていればいい。贅姫の事に関してこれ以上関わるな！」

「駄目かな？」

詩依は微笑を浮かべた。誰もが警戒心を解きたくなるような柔らかな雰囲気だ。そして平然とした様で言ったのだ。

「——『君が殺した贅姫』の二の舞にならないように僕がこの娘を護りたいと思うのは、駄目なのかな？」

場の空気が凍結したかのように思われた。ただ一人、原因である詩依だけが微笑みを崩さない。しかしその彼が間違いなくこの場の空気をしたたかに手中に納めているのだ。

ぞくりと、理由のはっきりしない怖気が紫恋の背筋にこみあげた。それは詩依に対してなのか、顔色を変えた魅月に対してなのか。それとも二人にしか分からない過去からの溝を、垣間見た気がしたからなのか。

魅月は声を荒げて言い返すことはなかった。ただ何かをこっそり挟り取られたかのような、そんな表情で詩依を見ていた。やがて、声を発する行動を思い出したかのように彼は囁いた。

「勝手にしろ。だが俺の意向にまで干渉するな。・・・こいつと向き合っただと？馬鹿馬鹿しい。どんな形であれどうせ近いうちにこの

城から居なくなるんだ。生きていようが死んでいようが。そんな女と向き合ったところで苛立ちが募るだけだ。・・・目障りなんだよ。存在全てが。触れることも、顔を見ることも、何もかもが煩わしい」

最後の言葉は紫恋に向けて言ったものだろう。

表情からも声音からもありありと伝わる拒絶の意。どうしようもなく分かり合えない心。温かい人々に囲まれてぬくぬくと生きてきた紫恋には、知ることのなかったもどかしさと痛みだった。

魅月は紫恋のその時の表情を見て、また少し目元を歪めた。彼は少しの間、彼女の顔を・・・見ることも煩わしいはずのその顔を凝視した後、静かに足を引いた。

ああ、また逃げられてしまう。そう紫恋が思った通り、彼は再び黒衣を翻して背中を向けた。衝動的に彼女の口から言葉が飛び出た。

「さ、昨夜のあれは」

・・・よせばよかった。一瞬で後悔した。せめて引き止めるためのもう少し気の利いた言葉にすればよかったのに。だが紫恋の焦りに反して、意外な事に彼は弾かれたように振り返ったのだった。その表情もまた、紫恋にとっては意外なもので。

「忘れる」

「・・・え」

「昨夜は何もなかった。忘れる。全てなかったことにしろ」

「な、なかったことはない・・・でしょう」

「黙れ。あれは俺の意思ではない。俺がしたことではない！封剣のことがなかったら・・・誰がお前なんかと・・・」

徐々に小さくなっていく声からは、明らかな動揺と後悔の様子が窺えた。彼は表情を隠すように顔を逸らし、今度こそ紫恋の制止の

声を振り切って足早に立ち去っていった。淡い薄黄色の花びらが散る向こうへと、濃い漆黒の背中が消えていく。その背が見えなくなつてから、紫恋はがっかりと肩を落とした。そんな彼女の両肩に、ぽんと慰めるような手が置かれた。

「驚いたな、いいものが見れたよ。……これなら思ったより大丈夫そうだ」

「大丈夫そう……？」

疑問符を浮かべて上を仰ぐと、苦笑した詩依の顔があつた。

「うん、大丈夫だ。やはり、心の本質的な部分はそう簡単に変わるものじゃないだろうね。……昔と、変わってはいないんだ。きっと魅月が気が付くのは時間の問題だよ。もしかしたらもう気が付いているのかもしれない。ただ、認めたいか認めたくないかが昔と違うだけで」

さらに首を傾げる紫恋の頭に、慈しむような仕種で詩依の手が置かれた。彼女のまつすぐに流れる黒髪を、女性的な細く白い指が梳く。

「魅月についてあきらめるのはまだ早いかもしれないよ。でも、最大限の注意も必要だ。さつきみたいな安易な行動は慎んだほうがいい」

「すみません、ご迷惑を」

「まあ、何があっても僕は君を護るつもりではいるんだけどね。……ねえ、君も同じだろう？ 想真君」

「え？」

突然詩依の視線が、右側に移った。つられて紫恋もそちらを見る。

そこにあるのは渡り廊下の大きな柱。誰の姿も見えないその場所の端から、おそろおそろといった風に燃えるような赤い髪の毛が現れた。あまりに特徴的なその色は、それだけで誰かが判断できる。

「想真さん」

柱の陰から現れたのは、やはり名を呼ばれた男だった。深紅の瞳に長身の彼はその屈強な体躯とは裏腹な、どこか情けないような気まずそうな顔つきでこちらを見ていた。足は柱の位置で止まったまままだ。

「・・・さて、彼がいるなら僕はもう戻るとするよ。それじゃあ紫恋、あまり無理をしないようにね。困ったら遠慮なく鬼導を頼るんだよ」

「あ、あの、詩依さん」

「君が早く安息を得られることを願っているよ。じゃあね」

これ以上の会話は拒まれた、そんな気がした。彼は紫恋の頭を今一度ぽんと励ますように叩いた後、軽やかに夜色の衣をなびかせて跳躍した。紫恋が視界の端に屋根に上がった詩依の姿を捉えた直後には、彼の姿は消えていた。現れた時もそうだったが、去る時もまた信じられぬほどの早業であった。

呆気にとられて彼が消えた屋根を見上げ続けていると、やがて彼の気配が完全に消えた頃に、赤髪の彼が近づいてきた。

「すまん、本当にすまん、姫さん。実は少し前から・・・姫さんが魅月に近寄った辺りから見てたんだ」

「想真のばか！なんですつと隠れてたんだよ。今、けっこう危ないところだったんだぞ！」

「わかってるって。だけどあそこに入っていけつてそりゃ無茶だろ

稀那。あんな・・・因縁の親子が睨み合つてるところに入つていつてか？お前だつて一步も動けなかつたろうが。あの二人の間に下手な横やり入れると何が起こるかわからねえ。これだけは関わっちゃならねんだよ」

深い深いため息をついて、想真は腰にぼかぼかと殴りかかつてくる小さな稀那の頬を軽く叩いた。包帯だらけの稀那に氣を使つてだらう、傷のない方の頬にだつた。

ふいに、紫恋の足から力が抜けた。ああ、緊張してたんだ、そう自覚した瞬間には、膝がかくりと折れて緑の芝生の上に座り込んでいた。軽く口論を交わしていた想真と稀那が、はつとした様子で近寄ってくる。稀那にいたつては近寄るというよりは突進に近く・・・やはり想像通り、勢いそのままに小さな体で思いつきり抱きついてきた。なんと言うか、体当たりに近い。白い包帯の上から覗くきらきらした金糸の髪と、ちょこんと突き出た獣の耳が紫恋の眼前いっぱいに広がった。

「ごめんなさい」

「・・・どうして稀那君があやまるの？」

「俺、あの時助けに入らなきゃいけなかつたんだ。鬼導なんだから。贅姫守らなきゃいけなかつたんだ。でも、動こうとしたら詩依様の姿が見えたから・・・近づけなかつた。ごめんなさい、贅姫。俺ね、詩依様だけはだめなんだ。他に怖いものはないよ、でも詩依様だけはなんか怖いんだ。なんでかわかんないけど、怖いんだ」

「怖い・・・？」

魅月と詩依の関係を恐がるのならまだ分かる。しかし詩依だけをそこまで恐がるのはよく分からなかつた。むしろ単純に考えれば恐いのは魅月の方ではないのだろうか。

紫恋が不思議に思いながら柔らかな金の髪を撫でていると、俺も

だ、と上から想真の呟きが聞こえた。

「俺も詩依様はちよつと恐い。いや、恐いつつーか・・・底があま
りにも見えねえから苦手なんだよな。あの常に貼り付けたような笑
顔や声音が、素なのか計算しつくした上でのものなのか、よく疑い
たくなる。あの姿勢は敵を作らねえが、誰かに付け入らせるような
甘さがあるわけでもねえ。・・・上に立つ身分としてよく訓練され
た人だと思う。鬼神であつたことを、ふとしたときに思い知らさ
れるんだ。だが俺にはあの笑みが、あの人の感情や意図の全てを覆
い隠す仮面にしか見えねえ。魅月の鬼導としては、警戒せざるをえ
ない相手だ。たとえ詩依様が同じ鬼導の地位に落ち着いていようが
な。稀那の一族はカンがいいから、そういう危機感には敏感なんだ
よ。な？稀那」

こくりと小さな頭が頷いた。

紫恋には、まだ感覚としては掴めない事だった。彼の穏やかな表
情や言葉には実際に助けられているだ、それらまでもが何か彼の策
略の内にあることだとは思いたくはなかった。しかし魅月に付き従
う身の彼らはそうは言っていられないのだろう。ふと紫恋は、さつ
きの幻覚であつたような鬼神の表情を思い出した。邪気など一切な
い笑顔で金系の髪を撫でていた彼。その慣れた様子からは、あれが
常の稀那と鬼神の関係性であることが窺えた。

「稀那君は、鬼神と・・・仲良し、なの？」

稀那は贄姫のことで鬼神に意見したことで、三日間牢屋に閉じ込
められていた。それによつて紫恋はつきり、鬼神は子どもといえ
ど容赦しない性格なのだと思つていたのだ。だが、さっきの桜の下
での彼の表情と、金の髪を撫でた手つきはその思い込みとは大きく
食い違つていた。

「仲良し、つてのは言えるな。魅月はあるな愛想のない性格だが、稀那には時たま違う顔を見せる」

想真が稀那の頭をくしゃりと乱した。

「本人は絶対肯定しねえだろうが、かなりお気に入りの子猫に違いねえよ、こいつは。だからこいつなら姫さんのことに口出してもお咎めなしかなと思って赤月が昇った時に任せてみたんだが・・・だめだったな。まさかこいつでも牢にぶち込まれるとは予想外。贄姫のことでは誰の意見も聞きやしなかった」

「うん、あれはびっくりしたなあ。あの時はじめて鬼神を心から恐いつて思った。嫌われたかもって思うともっと恐かった。でもね、鬼神は許してくれたよ。昨日の任務のことも、ごめんって」

「・・・稀那君、今さっき鬼神となにをしていたの？」

「お花見だよ！鬼神が誘ってくれたんだ」

「あの日和見のクソ領主にお前を貸したことの、あいつなりの詫び・・・か」

苦笑する想真を見て、包帯だらけの稀那を見る。こんな幼子にながあつたのかと驚くほどの痛々しさだ。

「稀那君・・・痛くない？」

「ん、平気。俺の体は・・・ちょっとね、普通と違うから。こんな傷は今日には治るよ。午後からはまた任務の続きに行く」

「また、そんな怪我を負うかもしれないところに行くの？」

「今日のはそんなに難しくないよ。昨日はね、『相手』がいた場所が妖気の濃度があんまりにも高かったから、俺しか入れなかったんだ。でも今日は他の討伐隊も、兄ちゃんも一緒なんだ。だから、大丈夫だよ」

相手とは、何なのだろう。鬼の領域を乱すもののことだとは何となく理解できる。出来れば人ではなく、獣であることを願いたかった。何であれ、稀那の任務とは大量の返り血を浴びる結果を生むことだとは昨日この目で確認したのだから。

こんな純真無垢な見た目の少年が、そんな危険なことに駆り出されるなんて。そうは思うが、彼らにとってそれは当たり前であり、こんな怪我は今さらであるようだった。ここに来たばかりで、あまつにさえ彼らに守ってもらっている身である紫恋は、あまり安易なことは言えなかった。ただ、無事に帰ってきてね、とお願いするにとくらいしか。だがそれだけで稀那としては充分に嬉しいものだったらしく、不安など一切窺えない輝かしい笑顔を見せてくれた。

「稀那」

「あ、兄ちゃん」

少し離れたところから、弟の名を呼ぶ綺鏡の姿が見えた。紫恋が軽く会釈すると、彼も生真面目に頭を下げた。

「じゃあ俺、そろそろ準備をしにいかなくちゃ。またね、贄姫」

「ええ、怪我のないように気をつけてね。無事に帰ってきてね」

「うんっ！今度は贄姫と一緒に花見しようね！」

ぶんぶんと元気に手を振って、稀那は兄のところへ一直線に駆けていく。だがその途中、思い出したように足をぴたりと止めて振り返り向いた。

「あのね、今日の鬼神、すっごく気分が良さそうだったんだ。鬼神になってからずっと体中の封剣のせいで苦しそうだったのに、今日は全然大丈夫だった。あれってさ、贄姫のおかげだよ？贄姫が封

剣を鎮めてくれたからだよね？だから、ありがとね」

そう無邪気に稀那は笑って、綺鏡の手をとって本殿の中へと消えていった。

残された紫恋は、一瞬固まったまま考えた。

「・・・盗み聞きして悪いんだけどさ、姫さん、昨夜魅月と何かあったのか？その・・・姫さんの気配からはまだ外界の気が感じられるから、そーいうコトがなかったのは分かるんだけど・・・他に何か」

「な、な、なかったです。何も」

「ほんとに？」

「本当です。何も」

何も、を強調したのは、昨夜実際にはあったアレをなかったことにする意思を決定したためだ。

昨夜のアレは・・・あの、口付けは、どうやらやはり鬼神の封剣に関係してのことだったらしい。封剣のせいで苦しんでいる所に、一度鎮めの力を持つらしい紫恋と出くわしたためにああった、そういうことだったのだ。まさか口付けの行為だけでも効果があるとは思ってもしなかった。おそらくそれは鬼神ですら理解していなかったのではないだろうか、彼はあの時理性を失った様子だった。あれは鬼神が望んでいたことではなく、彼の本能がとつさに動いたのだろう。当然であろう、存在全てを忌み嫌う女とそんな行為をしたいなどと思うはずがないのだから。双方の意思に反した事故。なかったことにするしかない。それでも顔が熱くなったのが分かった紫恋は、想真に気付かれないよう思わず下を向いた。

「そつだ、なあ姫さん」

ありがたいことにこの件は軽く流してくれた想真は、いいことを思いついた、とばかりに手を打った。

「午後は俺空いてるんだけど、どうか散歩でもしねえか？俺と一緒に融通きくところ多いし、普段入らない場所にも入れるぞ。賑やかな西殿方面も、こっそり覗くくらいなら大丈夫だし。どうよ？姫さん。行きたいとことかねえか？」

「行きたいところ・・・」

顔をあわせると、にいつと無邪気に笑う想真。その双眸にはまる美しい深紅の瞳を見た紫恋は、思い出してしまった。思えば思うほど、辛くなることなのに。

「・・・赤土の壁」

「ん？何だつて？」

「あの、城外でも構いませんか？」

「・・・どこに行きたいんだ？」

こちらとあちらの世界を隔てる赤い壁のところに。愛しい妹との間に立ちふさがる、あの壁のところに、もう一度だけ。向こう側には二度と行けない事は分かっている。それでも、だからこそだろうか、どうしてももう一度目に焼き付けておきたいと思ったのだ。

それを聞いた想真は眉をひそめてしばし困惑したような顔になり、それからくりと後ろを向いた。ああ、やっぱそれは駄目だったかと紫恋がため息をつこうとした瞬間、彼は大声で呼びかけた。

「おーいあんた姫さん付きの侍女だよな？ちよつと女官長殿に話して欲しいんだけど。姫さんちよつくら借りてくから」

少し離れたところでじつと待機していたユウが、慌てて駆け寄っ

てくる。紫恋はきよとした顔で想真を仰いだ。目が合うと、彼は屈託なく笑った。

「付き合つよ。姫さんの気が済むまでどんだけでもな」

差し出された日に焼けた大きな手は、これ以上ないくらいに優しくて頼もしかった。

第三話

一種のけじめをつけるつもりだった。贅姫としての義務を果たす覚悟は出来ていたところで、紫苑へのどうしようもない未練は捨てられていなかったからだ。心はいつまでも彼方側をさ迷っている。こちら側を向くために、心に一つの線を引く機会が欲しかったのかもしれなかった。

「姫さんの妹さんってどんな子だったんだ？」

「そうですね・・・紫苑は・・・とっても可愛くて思いやりがあって、本当にいい子でしたね。って、すみません姉バカな発言で。でもね、自信を持ってそう言えてしまうんですよ」

あの子のことについて語り出せば、きつときりがない。足りない言葉の諸々は表情に置き換えて、紫恋は顔を上げた。

眼前にそびえるのは、空に真っ直ぐに佇む赤土の壁。左右を荒々しい岩の山が囲っている、なんとも威圧感のある風景である。そつと壁を触ってみると、赤いざりざりとした砂が剥がれ落ちて、風につて散り散りに地面の砂に混じっていった。この壁自体はとても脆いのだ。

こいつ自体は壊そうと思えば壊せるもの、そう想真は言った。だが、力で壁を壊したところで向こう側に繋がることはないのだとも言った。紫恋にもそれはなんとなく理解が出来ていた。この壁に穴をあけて掘り進んだとしても、きつと奥の岩壁に突き当たるだけだろう。ここは亀裂が生じる場所であるだけ。向こう側とを隔てているのは実際は壁ではなく霊気、あるいは妖力といった類の力だ。目には見えないし壊せない。壊すとしたらそれは封剣を抱く鬼神を殺めることだ。

向こう側への未練はある。けれども向こう側への道が開かれるの

は断固として阻止せねばならない。義務を、果たさねばならない。紫苑のために。

「・・・後悔してる？」

わずかに俯いた紫恋に、想真がそう問うた。紫恋は、否定して首を振った。

「いいえまさか。後悔の念はこれっぽっちもないですよ。ただ、今は、このさきどうなるのかという不安と・・・どうにかしなくちゃって意気込みがあるだけです」

「ああ、やっぱり思った通りだな。姫さんは強い。きっと歴代の贄姫の中でもダントツだと俺は思うね。これまでに、自らの意志でここにやって来た娘なんていないに決まってるし、ましてやその立場に最初から使命感を覚える娘なんて皆無だろうさ。鬼神が大切に大切に扱うことで贄姫は徐々に懐柔されていくもんだ。なのに我等が鬼神、魅月サマときたらあの調子で。あいつ相手に意気込める姫さんは相当なつわものだよ。普通ならいくら覚悟して来た娘といえど、あいつの敵意を前にしたら縮み上がって近づくのすら拒むもんだ」

「自分はそんなに強い人間じゃないと思います。ただ、頑固なだけなんですよ。妹に対して。あの子への誓いを守り通したいから。正直な話、たぶん私が見ているのは鬼神じゃなくて妹なんです。そうでなければ私はわざわざ鬼神と向き合おうとは思いません。まあ・・・彼のおかしな言動は多少気にはなるんですけど・・・でも、彼もまた、私を前にして別の姿を見ているようだから、あまりお互い干渉しすぎるのはよくないのかもって思いました。私はただ、妹の絶対的な安全が確保できればそれでいいんです」

想真の気さくそうな雰囲気につられて、紫恋は自然と本音を包み隠さずに出してしまった。

結論としてはそうなのだ。紫苑さえ守ればそれでいい。不可思議な視線を向けてくる鬼神と向き合いたい、などとは思っても、それは言ってしまうえば紫恋が贅姫の義務をとっと終わらせるためには通らねば仕方がない過程であるがゆえだ。これは強いというよりは、かなり自己中心的な思想による結果なのではなかるうか。聞きよによって、鬼神のことはどうでもいいのだと言っている風にとられるなと気が付いた。だが、実のところそれは否定できない事実でもあった。彼の態度や過去が気にはなっても、彼があそこまで紫恋を拒むのなら紫恋はもうわざわざ深いところまで突っ込む気にはなれなかった。自身は世話好きな方である自覚があるが、同時に妙な部分でぎつくりと大ざっぱなことも認めていた。

強いのではない。きつと、紫苑以外がいろいろどうでもよくなっているだけだ。鬼神のことも。口に出して言ったら想真は真面目に怒るだらうから言わないが、紫恋自身の命もだ。

と思うと自虐的な笑みがこぼれてしまい、彼女は小さく俯いた。すると視界の端に、一瞬なにかが光って見えた。よく目を凝らすとそれは小さな丸い玉だった。ただの石かとも思ったが、なぜか紫恋は胸がざわりとしてその玉を拾い上げた。乳白色のそれは、見覚えがあった。

「・・・これ、私の数珠の・・・」

「姫さんの？」

「生贄として山に運ばれる直前に、巫女姫様から数珠をいただいでいて、その一粒なんじゃないかと。ここに来るまで手首に枷と一緒に付けていたんですけど、そういえばいつの間にかなくなってましたね。いろいろあつてすっかり忘れてました」

「狭間を通った際に切れたのか。他には落ちてないのかなー・・・つと、あれそうかな」

想真が少し離れた草むらに駆け寄って、白い塊を拾い上げた。紫

恋も近寄って見てみると、それは確かにもらった数珠であった。糸がぶつとりと切れており、玉は元の半分ほどしか繋がっていない。想真からそつと手渡されたそれを紫恋は両手に包み、静かに胸に引き寄せた。

「思い入れがあるものなんだ？」

「・・・はい。手渡された際に、巫女姫様が言っていたんです。これは紫苑が祈りを込めたものだ。最後にあの子と会うことは許されなかったから、せめて祈りだけでも手元にと、巫女姫様が気をきかせてくださったものです」

「んじゃあ、すっごい大切なものじゃねえか。よし、他のとび散った玉も探そう。それで城に帰ったらもっかい繋げればいい。・・・お、さっそく一個はっけーん！」

しゃがみこんだ想真は、指の間にはさんだ玉を掲げてにいつと笑った。その無邪気な様子に、紫恋もつい笑ってしまった。自然と笑うことが、なんだかとても久しぶりな気がした。

意欲的に玉探しを始めてくれた想真にならって、紫恋も地面を見渡した。玉はどうやら結構広い範囲に飛び散ってしまったているようで、次に見つけた場所は十数歩は離れた地面の上だった。あちらの人々との唯一の思い出の品だ、なんとかすべて見つけ出して繋げなおしたい。真剣な顔になって紫恋は黙々と地面に目をはしらせた。

ふいに、横を向いたまま想真が呟くように言った。

「なあ姫さん。あいつ、魅月のこと、許してやってくれねえか。・・・こんな状況に置かれてる姫さんにこんな事言うのは間違ってるかわかつちやいるがな、どうしても、あいつの鬼導である身としてはそう思っちまうんだ。おかしいんだよ、最近のあいつは。姫さんと会ってからは特に。あいつはここまで理不尽に他人を拒絶することは滅多になかったんだ。俺は九年間あいつの側に付いてきて、あい

つのいろんな顔を見てきた。でも、今のあいつの顔は、俺の知らない顔なんだ。何かしら思うところがあるんだろう」

「そんな、許すも何も・・・私は、別に鬼神に怒ったり恨んだりはしてないですよ。なんだかそんな気力が湧かなくて。あえて言うなら困つてると言うべきでしょうか。とりあえず最後に事態の收拾さえつけば私は満足ですから」

「ああ、うん、姫さんの性格ならそう言ってくれと思ってたんだがな。えーっと・・・何っーかそうじゃなくて・・・許してやってくれって表現が違ったな。見捨てないでやってくれ、の方が近い」

紫恋が地面から顔を上げて想真を見ると、彼の横顔は苦笑していた。

「悪い、変なこと言ってるな。でも出来たらあいつを見捨てないで欲しいんだ。たった二十年しか生きてないガキが鬼神なんて名を背負って、あいつは水面下でいっつも不安定なんだよ。だからって姫さんを傷つけていい理由にはならねえけどな。姫さんの身は鬼導が俺が、絶対に守る。だから姫さんは安心していい。それで、少し余裕があつたらでいい、あいつのことを大目に見てやってくれねえかな・・・お、もう一個発見」

想真が手の中に集めた玉を紫恋に渡した。玉はいつのまにかほとんど彼が集めていた。紫恋の小さな手のひらに、たくさんの玉が転がって光った。

「・・・何だかんだ言っても、好きなんですな想真さんは。鬼神のこと。想真さんだけじゃなくて、稀那君や深艶さんや桜里ちゃんもみんな」

「あー・・・まあ、一応恩があるからなあ、魅月には。俺も含め稀那兄弟や桜里ちゃんは、あいつに命拾われたようなもんだし。鬼神

が鬼神なだけに、あいつの元に集う鬼導もわけありばっかりだ。見た目がこれだけおもしろいくらいばらばらなのも前代未聞だろうな」

「それは、私が深く訊いてもいいことですか？」

「俺についてなら俺は話すよ。姫さんにならいいかなって思う。俺はな、九年前、当時十一歳の魅月に森ん中で拾われたんだ。死に掛けのところをな。正確には殺されかけたところ、か。周り敵に囲まれて満身創痍の状態で、ああもう死ぬなあって時に、偶然あいつと出逢ったんだ。最初はなんだこのちっこいガキはって思ったよ。こいつも巻き添えで殺されるだろうなって。でも、次の瞬間転がったのは俺を狙ってた奴等の死体だった。あいつは返り血を浴びても眉一つ動かさないで、隣には馬鹿みたいに真っ白い男がいつの間にか立ってた。俺の目がおかしいのかと思ったよ。そんであいつは俺を平然と見下ろして言ったんだ。俺と来いって。そんな時のあいつの眼はいまでも忘れられねえ。俺はその眼を見て迷わずあいつの手をとったんだ。あ、白水仙はなんかぶつぶつ文句言ってたけどな。奴はその頃からああたった」

「何が、あつたんですか。敵に殺されかけたって」

「所属してた部族を裏切って抜けようとして、見つかった。脱族は容赦なく殺害が鉄の掟だったから。元の仲間に追われたんだよ。俺は赤ん坊の時に道端に捨てられて、その部族に拾われて育てられた。でも拾われたのは善意じゃない。俺に利用価値があるとふんだからだ。俺の妖気の質と紅い目から、奴等は俺が神威一族の血を引いてると気が付いて、育て上げればいずれ戦力になると思ったんだろ。うな。実際確かに俺は他の奴等より能力に恵まれてた。おかげでよくこき使われてたよ」

「神威一族って四大の一つでしたよね。神威の子どもが捨てられていたなら、見つけた人は神威の領主に届けたりするものじゃないんですか。勝手に他族が引き取っていいものなんですか」

「俺が神威の純血だったら神威に引き取られてただろうな。ってかその前に捨てられてなかったはずだ。俺は半分は違う血が混じって

るんだよ。髪が赤いのが何よりの証拠。純血の神威一族は紅い瞳に真つ黒な髪色をしてるんだ。たぶん俺は、神威の男に遊ばれて捨てられた下女が一人で産んで、育てられずに捨てた子つてところだろうさ。・・・拾った奴等も四大に忠誠誓うような真つ当な連中じゃなかったからな。別に神威に未練なんざないし、そのおかげで今の鬼導の俺がいるからいいんだけど。はい、もう一個」

「想真さんを拾った部族ってなんだったんですか。何だか聞いてると物騒な人たちですね」

紫恋に玉を差し出した想真の手が、一瞬止まった。彼の人の良さそうな顔が、その一時だけ硬くなった。

「・・・姫さんに隠すのはよそうかな。あんまり知られたくないことだけど、魅月や鬼導の連中には話してることだしなあ。・・・
やみからす
闇鴉だつ たんだよ、俺」

「闇鴉？」

「主に暗殺を生業とする戦闘集団。他族間の紛争や間諜に雇われたりもする、闇に生きる部族だ。本来なら一度入ったら抜けられない」

予期せぬ答えに、紫恋は耳を疑った。にこにこと明るく優しい様子の彼からは、全く想像できないことだった。目を見張った紫恋から視線を外すように、想真は彼女の手の上の数珠に目を向けた。そして静かにもう一粒を上に加えてから、ぱつが悪そうに背中を向けて新たな玉を探し始めた。

「あ・・・あの、私、それで想真さんを見損なったりはしませんよ」
「うん、そう言ってくれるって分かったた」

「ほ、本当ですよ？」

「分かってるって。だから正直に話せたんだ。でも、やっぱり後ろめたいものはいつまでたっても消えるもんじゃないから。・・・飽

きてつまらなく感じる程に人を殺してきたんだ。俺の力は他者を傷つけることだけにしか使えなかった」

「想真さん・・・」

「だがまあ皮肉なことに、それは魅月にとって大いに使えるものだったがな。その頃鬼の城は事件が起きてから一年とたつてない時で、魅月は常に誰かに命を狙われていて。複数の闇鴉の集団も暗躍してた。俺の知識や能力は、魅月を守るのにはずいぶんと役に立ってたんだ。むかつく誰かさんは常に否定してくれたがな。で、いつの間にやら俺は鬼導って呼ばれてた」

ちら、と想真が振り向いた。そして紫恋の表情を確認してから、ふっと肩の力を抜いた。どうやら緊張していたらしい。紫恋にそれなりの信頼を寄せてくれていたらしい彼も、自身のそうだった過去を明かすのは不安だったのだろう。

彼は完全に紫恋を受け入れてくれているのだ。ならば紫恋も応えるのが道理というもの。彼の過去はどうであれ、今の優しそうな想真に繋がっているのならきっと何も問題はない。心配しなくても彼への評価は何も変わらない。重要なのは過去の事実よりそれを話してくれたという事柄だ。

なんだか秘密を共有したことで親密になれた気がする。紫恋が小さく笑うと想真も肩をすくめて眉を八の字にして笑った。

その素直な態度に免じて、鬼神を見捨てないで欲しいという彼の頼みは心の端にとどめておくことにしよう。そう紫恋はひそかに思った。既に鬼神に見捨てられている存在の贄姫に何が出来るのはか疑問であるが。

紫恋の手の中には、想真が素晴らしい探索力によって懸命に集めてくれたことで、もう充分に復元出来るほどの玉が集まっていた。もうそろそろ城に戻ったほうがいいのだろうか、と紫恋は土壁を見ながら思った。城を出るとき、ユウは相当慌てた様子だった。というのも想真は鬼導の権限を使ってかなり強引に紫恋を城から連れ出

してくれたからだ。おそらく女官長に話を通るより前に。まだここから離れるのは少々名残惜しかったが、城の人にこれ以上心配をかけさせてもいけないだろう。赤い土壁を目に焼き付けるように凝視してから、紫恋は手の中の数珠を握り締めて祈りを捧げた。

その時突然、きらりとした光が横から目に飛び込んできた。反射的に数珠がまだ落ちていたのかと思ひ紫恋はその方向に首を捻った。だが、その次の瞬間視界に入ったのは数珠の輝きとは全く違う、檸檬な鋭い輝きであった。木の陰から飛び出すように出てきたそれがなんであるか、それを紫恋がよくよく把握するより先に、光が二つ、紫恋に向かって一直線に突進してきた。荒々しい息使いの音が耳に迫る。逃げると頭が警告を発したが、足は凍りついたように動かなかった。息をのんだ、その刹那。

紫恋を襲ったものはその硬質そうな体毛を逆立たせながら横に吹っ飛ばされた。動物特有の甲高い悲鳴があがる。ようやく紫恋は足を引いたが、すぐさまその身は想真によって引き寄せられた。

「妙なやからがあらわれたもんだなあ」

地面に叩きつけられてからすぐさま起き上がった獣を見て、それを蹴飛ばした彼、想真は、首を捻った。

「あの獣、私見たことあります。ここにきて一番最初の夜」

よだれをたらだと滴らせる狼に似た、しかし狼よりも醜悪で恐ろしい見た目の化け物。見間違うはずがない、ここに来て一番最初の夜に紫恋を襲った男たちが従えていた獣だ。

裂けるように大きく開いた獣の口から、耳朵の奥底を打つような遠吠えがあがった。紫恋は全身に鳥肌がたつのを感じた。その瞬間に空気が変わった。

木の陰から、草むらから、岩の間から、そろそろと見覚えのある

化け物たちが這い出てきた。頭に鋭い角を生やした獣たちは、一様にぎらぎらと光らせた黄色い目で紫恋と想真を狙っていた。

「ああ・・・白水仙がやったって奴等の仲間か。飼い主いなくなつて統率とれてねえんだろなあ。こういうのは綺鏡がいりや話が上手くいくんだが・・・そうも言つてられねえな。やる気満々だね、こいつ等」

主の仇だつて分かつてんのかもな、と想真は肩をすくめて紫恋をかばうように前に出た。そして今までその背中に背負っていた、黒い布に包まれた大きな刀のようなものをおろした。

「姫さん、動くなよ。俺を信じてくれ」

背中越しに彼がそう言ったのを聞いた直後、荒々しい唸り声が近づくのを感じた。来る、そう足がすくんだ瞬間、想真はためらうことなく前に出た。

彼の足が一度強く土を蹴って黒い袖が翻った。高く跳躍した彼は一直線に向かつてくる野獣に真つ向から突進した。どん、と鈍い音を響かせて、彼の膝が野獣の腹部に深く沈む。裂けた口からは唾液に混じって赤いものも一緒に飛び散った。間を置かずに今度は二匹が想真に食らい付こうと牙を剥く。だが想真の意識の切り替えの方が格段に早かった。空中で軽々と体を捻った彼はかかとを一匹のあご下の急所に入れて的確に蹴り上げ、間髪いれずに手にした布に包んだままの長いその先端で、もう一匹の首元を突いてから横腹を殴って吹っ飛ばした。飛ばす位置も即座に判断したのだろう、野獣がだまになっている箇所を狙ったように飛ばされていく。飛んできた仲間に叩きつけられて数匹が倒れ、周りの野獣は動揺と警戒が一気に高まったようだった。

次々と目の前で繰り広げられる想真と野獣たちの死闘に、紫恋は

啞然として立ち尽くしていた。動きが早すぎて目がついていかない。想真が怪我をしていないかどうかさえよく判断が出来なかった。それにしても、野獣の数があまりに多すぎる。おまけにどうやら彼等はそこそこ知能もあるようで、体力も普通の狼の上をいつていることが窺えた。想真が強いことは今の一瞬で理解したが、だがこの数を相手に彼は体力が持つのだろうか。

紫恋自身は何も出来ない。むしろ想真のお荷物だ。もどかしさに歯噛みしていると、一匹が想真から狙いを外して紫恋に向かって突進してきた。

「やつ・・・！」

身構えた途端、眼前を黒いものが横切って向かってきた野獣を突き飛ばした。

「きりがねえな」

武具をかまえた想真が紫恋の腰を強く引いた。

「じつとしてて」

言うなり想真は紫恋を肩に担ぎ上げた。視界が反転してぎょっとした時には、紫恋の目はすでに地面から遠く離れた景色を映し出していた。重力に逆らうように高々と跳躍した彼は、空中で親指と人差し指をくっつけて円を作る。首を捻った紫恋は、彼の肩越しに、その指で出来た円の空間が赤く揺らめいたのを見た。

「散りやがれっ！」

吼えた彼は大仰に肺を空気で満たした後、その円に向かって一気

に息を吹きかけた。すると息が揺らめく円を通った瞬間、鮮やかに赤く燃え滾る炎と化して眼下に降り注いだ。灼熱の炎は地面を這うように広がり、群がる野獣たちは慄くような悲鳴を上げて後方に下がった。

再び地面に足をつけた想真は続けざまに炎の息を吹き、二人が降り立った部分を中心に弧を描くように炎の壁を作った。揺れる炎の間から、向こう側で野獣がこちらを窺っているのが垣間見える。じんわりとした熱さと緊張で、紫恋の頬には妙な汗が伝った。

「これであきらめて引き返してくれりゃいいんだが……」

紫恋を担いだまま、想真が苦々しそうに呟いた。野獣はどうやら炎が苦手な様子で、遠巻きにしかこちらを見ていないようだ。もう少しすれば彼等は去るだろう、そう思った矢先。想真がちつと舌打ちをした。なんと炎を飛び越えて、他に比べて体躯の大きな一匹がこちらに向かってきたのだ。紫恋は想真の衣をしっかり掴んで身をすくめた。想真は相手を鋭く睨みすえて、急所を一撃で突くために武具を構えた。

剥きだしの白い牙がぬらぬらと光って二人に迫る。想真が渾身の力を込めて武具の先を野獣の首元に向かって突き出した。だが、この野獣は一筋縄ではいかなかった。想真が驚愕する素早さで野獣は身を捻り、ぎりぎりのところで先端をかわして武具に牙をたてた。びり、と音を立てて武具を包んでいた黒い布が破れる。想真はすぐさま武具から野獣を引き剥がして蹴り飛ばした。燃え盛る炎の手前で野獣はくい止まり、体勢を立て直す。来い、と想真が吼え、野獣が黄色の目をぎらつかせて地面を蹴る。

しかし、突如野獣の身に変化が起こった。野獣の足が、ぴしりと凍結の音を響かせて凍りついたのだ。音はそれだけでは終わらなかった。炎の向こう側からも、凍結の音が無数に聴こえてきたのだ。その場に止められた野獣たちは、狂ったように身を動かして吼える

が、足は全く動くことはない。

想真がずっと息をのんだのが紫恋に伝わった。

「・・・解」

想真が呟くと同時に、囲っていた炎が地に溶けるように消えた。

紫恋はようやく想真の肩から下ろされた。そして彼の見つめる方向を見て、あっと小さく声を上げた。

「何でお前がここにいんだよ、白水仙」

苦々しさを包み隠さない表情で、想真はため息混じりに肩を落とした。凍りつく野獣たちのその後ろには、いつのまにやら真っ白い長髪を背に流した白水仙が佇んでいたのだ。

彼はわずかに眉間にしわを寄せた後、ゆっくりと二人に近寄ってきた。

「あなた方を連れ戻しに来たんですよ。魅月が心を決めたようですからね」

「あ？何をだ」

怪訝な顔の想真の前で、白水仙は腕をくんで言った。

「今宵、魅月が贄姫の部屋に渡るそうです」

紫恋の心臓が、一度大きく跳ね上がった。

第四話

想真のくつきりとした眉が、ぴくりとあがった。

「な、なんだって？」

「一回で聞き取って理解する能力もないんですかあなたは。でかいのはその体軀だけで頭はからっぽですね」

「うっせえ！いつとくが俺が実戦を経て得た雑学はお前なんかよりはるかに上だからな。ってそうじゃなくて！・・・本当なのか？魅月が今夜姫さんのところにつて・・・」

「本当ですよ。私が魅月の私室に行った際に、魅月から直接聞いたことです。まああれは・・・ほとんど自棄になって言い放ったに近い様子でしたけどね。それでも言ったからには実行するでしょう」

白水仙がその氷色の瞳を紫恋に向けた。彼の薄い唇が、ふっと意地悪く笑みをつくった。

「逃げたくなりましたか？」

「いいえ」

きつぱりと言い切った紫恋に、白水仙は少しかり意外そうな顔をした。

紫恋は手の中の数珠をきつく握って白水仙を見上げた。その紫の瞳にもやはり迷いは一切なかった。紫恋はもうその事実に動揺などしない。来るべき時が来ただけだ。

「姫さんはとつくに覚悟できてんだな。俺が驚いてちやしょうがないか。姫さん、俺は何が何でも姫さんの命、守ってやるからな。だから・・・魅月を頼むな」

「はい、信賴してます。想真さん、私、もう一度ここに来ることが出来てよかったと思います。大事なものを改めて思い出すことが出来ましたから」

祈りのこもった白い数珠は、手の中でじんわりと熱を帯びていた。紫恋はこの数珠を手にして、とても大事なことを一つ忘れていたことに気が付いたのだ。紫恋が紫苑の幸せを切望しているように、紫苑もまた、姉の魂が安らかにあることを祈っているということを。紫恋はこれまで妹さえ守ればもうあとはどうなろうと構わないと思っていたのだが、それは紫苑の祈りを踏みにじっていたのだ。紫苑は姉がまだ生きていることなど知りはいらない。けれども、紫恋が扉を隔てた遠い世界で不幸せになることを、紫苑は決して許さないだろう。紫苑のためにも、紫恋は無事に義務を果たして、こちら側で生きていくために前を見据えなければならなかったのだ。

「頑張ります。鬼神とのことも、そこから先も。明日、城から出て行くことになっても、私は前を見て歩いていきます」

「・・・ならばけっこうです。魅月にその旨伝え、交渉するとしみましょう。贅姫殺しは魅月にとってそれなりに醜聞となる。鬼神としての地位にこれ以上傷を付けられませんか。それでは、すみやかに城に戻って準備を整えてください」

「てめーは先に戻つてろ！　たく姫さん前にしてもお前って奴は魅月のことしか考えない発言しやがつて。姫さんなんだと思つてんだ」「重要な存在だとは思ってますが？　魅月の力を盤石なものとするため・・・ですが」

想真が大きく舌打ちをした。あえて挑発するような言葉を選んだのだろう、白水仙はそんな想真の反応を見て愉しそくに目を細めた。雰囲気が悪いと思った紫恋は、取り繕おうと慌てて頭を下げた。

「あ、あの、連絡ありがとうございました。すぐにお城に戻りますね。鬼神と上手く折り合いがつくように交渉をお願いします、白水仙さん」

「さんは結構」

「し、白水仙」

「では私は先に」

白水仙はもう想真のことなど気にもとめない風にひょうひょうと背中を向けた。しかし数歩行ったところで、ふと首だけを振り向かせてもう一度想真を見た。いや、正確に言えば想真が手にする丈の長い武器に。

「・・・贄姫を護る任務においてですら、あなたはそれを抜かないんですね」

武器を握む想真の手がぴくりと動いた。

「とつと行けよ」

「言われなくても行きますよ」

白水仙は首を戻すと跳躍し、すぐに木の陰に見えなくなってしまうた。

紫恋は、ちらりと想真の持つ武器を見た。包んであった黒い布は、さつき野獣の牙によって引き裂かれてしまった。裂けた布の合間からは、黒く艶光した上に黄金の細工が施された見事な鞘が覗いている。

「それ、やっぱり刀だったんですね」

「あ、ああ。ただの刀じゃなくて、妖刀って類のもんだ。刀自身の意思で持ち主を選ぶ。俺は小せえ頃にこいつに選ばれたんだ」

「抜いて戦うものではないんですか？」

「え・・・あー・・・」

何か考えるように首を傾けた想真は、両手で裂けた黒い布を手繰り寄せて鞘を隠した。やがて、彼はにいつといたずらっぽい笑みを浮かべた。

「あーんな雑魚あいてにわざわざ抜くことはねえかなって・・・な。あ、ほら、こいつ抜くと加減できないから、あいつら死んじゃうし？先にあいつ等の飼主殺したのはこつちだからさすがにあいつ等まで殺すのはかわいそうじゃん。だから、な」

明るく言った彼の言葉に、紫恋はなるほど、と頷いた。もしかして彼は闇に生きた過去なだけに、今はなるべく殺生を控えているのかもしれない。

「そんなことよりさ、姫さん。一つお願いがあるんだが・・・俺が闇鴉だったこと、誰にも言わないで欲しいんだ。鬼導にそういう過去の奴がいるって知れ渡るのは魅月にとってあんまり体裁がいいことじゃないからさ」

「もちろん口外なんてしませんよ。せつかく信頼してもらったんですから、裏切ったりはしません」

大きく頷いた紫恋の頭に、想真はぼんと優しく手をおいた。

「ありがとな。贄姫が姫さんでよかった。でも・・・ちよと残念でもあるかな。城から出て行かせるのを惜しく思っちまいそうだ」

「そんな、想真さんつたら」

「あ、俺にもさん付けは却下だ。奴を名前だけで呼ぶのに俺はさん付けとかぜってーやだ！」

「・・・ありがとうございます、想真」

彼は小さく苦笑して紫恋の黒髪をくしゃりと撫でた。

「帰ろっか」

白水仙が早く戻るように声をかけてくれてよかった、と紫恋は城に着いた直後に思った。想真に続いて城の裏門から中に入った、その先に、侍女のユウが心配そうな不安そうな顔で待っているのが見えただけだ。

紫恋は慌てて彼女に駆け寄り、彼女の表情を確認してから小さく頭を垂れた。

「ごめんなさい。女官長に怒られてしまった？」

「少しだけ。私は新参ですから、大目に見ていただけましたわ。ですが椿様は怒るというよりも、紫恋様のことをとても心配しているつしやったのですよ。・・・お聞きになりましたか？今宵のことを」

「ええ、白水仙から」

「・・・紫恋様」

「平気。私は大丈夫よ」

努めて明るく笑顔をつくって、紫恋はユウの手をとった。ユウは、自身の手に触れた手のひらとは別の感触に小首を傾げた。

「これは、一体なんですか？綺麗な石・・・数珠、でしょうか」

「私の大切なものよ。想いと祈りが宿っているの。これがあれば今夜なにがあっても大丈夫だと思えるわ。なにがあっても、切り抜けようと頑張れる。だから夜までに直さなくちゃ」

「まあ、でしたら私にお任せくださいな。こういった細かい作業は得意ですよ」

ユウはばらばらになった数珠を大切そうに受け取って微笑んだ。その顔は、気を使っているのが隠しきれていない。だから紫恋も絶対に笑みは崩さなかった。緊張も不安も顔には出すまい。おそらくユウとの主従関係も今夜で終わるのだ、あまり重い雰囲気で締めるのはよしておこう。

「数珠が姫さん護つてくれるように、侍女さんの願もかけてやっとな。って・・・あれ？」

紫恋の後ろからひょこりと顔を出した想真は、ユウを目にしてふと眉をひそめた。

「なんか侍女さん、こうしてよく見るとなんか・・・なんだろう・・・どっかで会ったことない？」

首を捻る想真を見上げて、ユウはその丸い大きな目を軽く見張った。じっと見つめてくる紅い瞳から逃げるように、彼女は顔を伏せた。

「——いいえ。まさか」

「女性の気を引くにはあんまりにもありきたりな常套句だけでなく、使い所も見事に外していますね。さすがです」

冷やかな感想が近くの廊下の上から聞こえてきた。三人がそちらを向くと、すでに先に戻っていた白水仙が柱に背をもたれて立っていた。その眼差しもやはり氷色の瞳に似合う冷やかなものだ。想真はすぐさまこめかみを引きつらせて声を張った。

「別に口説くつもりで言ったんじゃねえよ！！本当にどつかで会った気がして・・・ああもうお前のせいでよくわかんなくなっただやねえか。もういいよ。悪いな侍女さん、変なこと言って。で、なんだ白水仙」

「任務の依頼が午後になって山のように舞込みました。割り当てを捌くので早く来なさい」

「げ・・・こんな時にかよ。しょーがねえ、姫さんごめんな、ちょっと行ってくるわ。夜は護衛につくから安心してな」

「はい、頑張ってください。私も精一杯尽力しますから」

想真が腕を力強く掲げ、拳を作った。すると後ろから呆れたような白水仙の急かす声がかかる。想真は噛み付くように白水仙に悪態をつきながら庭から廊下にあがっていった。本殿の向こうに消えるまで手を振り続ける想真に応えるように、紫恋は苦笑しながら手を振り返した。

「仲悪いのねえ、あの二人。同じ鬼導なんだからわざわざ争わなくてもいいのに」

「お二人に流れる血がそうさせるのかもしれませんがね。今も昔も、神威と氷狼は不仲ですから」

「四大の二つが？どうして？」

「数百年も昔、まだ四大がそれぞれ頭角を現し始めた頃の話ですが、神威と氷狼の間に大きな戦があったのですわ。夢創も氷狼の側に付いて参戦し、鬼は戦況を見つめながら己の一族の利となる道を進んだ。多くの命が散り、土地も治安も荒れ、酷い有様であったと言われています。戦がひとまずの終焉を迎えてからも、神威と氷狼の仲はあまり改善されることもなく、今に至っているのですわ。四大の地位が確立されてからはさすがに協力せざるをえない部分があるようです、しかし極力関与は控えている様子ですの」

「でも二人とも、自らの出身にはこだわっていないようだけれど」
「ならば血は単なる理由付けですわね。きつとお互い気が合わないだけで、もはや日々の争いを楽しんでいらっしゃるのではないでしようか。……生き生きとした表情になっておいでで」
「ユウ？」

彼等が見えなくなった場所を向くユウの表情は、まっすぐ切りそろえられた髪に一瞬隠れた。声色が少し気になって紫恋が首を傾げると、ユウは再び愛らしい笑みを紫恋に向けた。

「そんな野暮なお話はやめましょう。さあ、準備を整えませんか。誰よりも美しく飾って見せますわ」

参りましょう、そうたおやかに差し出されたユウの手をとり、紫恋は廊下にあがる石段に足をかけた。

体を清められ、髪を整えられ、白い寝巻きと香を身に纏い、軽い化粧をほどこされていくうちに、徐々に緊張していく心地。やや欠けた月が空にのぼり、少しだけ肌寒く感じられる頃合になって、張り詰めた緊張感はある確固な勇気となっていく。

拍子抜けするほどあっさりした報告が伝えられたのはそんな時だった。

「紫恋様……今、本殿からの使いの者より連絡が入りまして……鬼神の今夜の後宮へのお渡りは、ないと」

ユウが部屋の扉の前で、呆然とした様子でそう告げた。紫恋は化粧台に座ったまま目をしばたかせた。広い部屋に、嫌な沈黙がし

ばらく訪れる。

「……………えっと……………それは……………なぜ？」

「鬼神のお体の調子が優れないとのことです。私室からお出になることも、誰かをお入れになることも拒否なさっているそうです。」

困惑した表情のユウとは反対に、紫恋ははつと確信めいた表情を浮かべた。鬼神が突然に体の調子が悪くなるなど、考えられる理由は一つだけだ。それならばなおさら『義務』を後回しにするのは事態が悪化する。

「ねえユウ。私が鬼神の私室に行くのはだめかしら」

「な、なに仰ってるんですか！女性から本殿に赴くなんて、鬼神からの特別な御指名がない限りは許されませんわ」

「今宵は贄姫と時間を過ごすのだと先に決めたのは鬼神でしょう。それに……………私に贄姫の鎮めの力があるというのなら、鬼神の体調不良もなんとかできるしれないわよ」

「そうだとしても……………紫恋様から動かれるのは危険ですわ。昼間のこともありますし、鬼神は今誰の介入も拒んでいらつしやることから相当気が立っているのだと思いますの。無理に近づくのは状況をより荒立てることに繋がりかねますわ。どうか今宵はご辛抱を」

必死で諭すユウは、決して折れることはなさそうだった。たしかにユウの言う通り、無理に鬼神に会いに行くのは危険かもしれない。万が一にも正気を保てなかった彼に殺される可能性があるのだ。

しかし、今夜もまた平行線を辿るのか。そう落胆して俯いた紫恋だったが、ふいに何か予感めいたものが胸に湧いてきた。――

――もしかしたら深夜。

「分かったわ、今夜はあきらめる。なんだかそう思ったら急に疲れが出てきたわ。もう、休むわね。ユウも自室に戻って頂戴」

「紫恋様がお眠りになるまで付いていては駄目でしょうか」

「ごめんなさい、少し一人で考えたいから。あと、鬼導の方々にも、今夜の護衛は一切いらないと伝えて欲しいの」

・・・部屋の近くには誰もいない。引き止められたら不都合だ。ユウは心配そうな表情だったが、紫恋に頑固に言われたら彼女は従うしかない。しぶしぶ分かりました、と頷いた彼女は、両手で大事そうに持ったものを紫恋に手渡した。紫恋の手のひらの上に、綺麗に繋がった乳白色の数珠が光った。

「上手ね、ユウ。ありがとう」

「僭越ながら私の祈りも込めさせていただきました。どうか紫恋様が安寧の中に身を置かれますよう」

深く頭を下げ、彼女は部屋を出て行った。

しんと静まり返った部屋で、紫恋は息を殺すようにして化粧台の椅子に座り続けた。布団に入るつもりはまだなかった。人の気配が消える深夜となるまで、ただじっと時が過ぎるのを待ち続けた。

どのくらいたった時だろうか、軽く睡魔を感じだした頃、深い夜の空気に満たされ始めた部屋に、突然こんこんと小さな音が響いた。外から扉を叩く音に肩をはねて驚いた紫恋は、ようやく椅子から立ち上がりおそるおそる扉に近づいた。

「誰ですか」

「贅姫？僕だよ、稀那」

予想とは違った訪問者に驚きつつ、紫恋はすぐさま扉を開けた。視線を下に落とせば、金の髪に大きな耳を生やした少年と目が合っ

た。にこつと満面の笑みを浮かべた稀那は、そのまま紫恋の腰に抱きついた。突進した、というべきだろうか。

「ただいま贅姫！今日はねえ、いい領主様だったから任務の後でオモテナシをうけてね、今さっき帰ってきたの。任務で怪我はしなかったよ。兄ちゃんも協力してくれたからね」

「よかったわ無事で。おかえりなさい稀那君」

やわらかい金の髪には、つい自然と手が伸びてしまう。ちょこんと乗った耳と耳の間に手を置いた紫恋は、昼間まではぐるぐると巻かれていた稀那の包帯がもうなくなっていることに気がついた。そつと前髪を上げてみると、小さなおでこには傷一つ見られなかった。腕も足も同様で、元気な幼い少年にしては不自然なまでに少しのかすり傷も見られない。昨日の大量に出血していた姿が嘘のようだ。

「・・・本当に、稀那君は傷の治りが速いのね」

「うん、俺の体はね、ちゆりよくって言うのが高いんだって。俺の体に傷がつくと俺の中にある力が困るから。だから多少大きな怪我をしても、血をいっぱい流しても、俺は平気なんだよ」

だからね、贅姫。

屈んだ紫恋の両頬にべたりと手のひらをあて、稀那はその澄んだ翡翠の瞳で、紫恋の目を覗きこんだ。

「だから俺のことは心配しないでね。俺は少しくらい怪我したって、絶対贅姫のこと守るからね。だから、大丈夫だよ」

ああこの子は・・・幼いながらも聡い子だ。紫恋は心底感嘆した。稀那は、紫恋が稀那の身を心配していることを敏感に感じ取っていたのだ。普通、たった八つの子どもで地位や力を手にしていれば、

おごり高ぶって我が身の自信に酔うものだ。弱者の心配など余計なお世話と思つて気にも留めないだろう。だが、この子は違ふのだ。紫恋の心配を取り除くために、わざわざ怪我が治っていることや無事に任務を終えて戻ってきたことを伝えに来たのだ。そしてあまつさえ、もう心配しなくてもいいと言ふ。怪我などすぐ治る体だから心配無用であるという意味で言っているのではない。もし紫恋のせいで稀那が怪我を負つたとしても、紫恋には心配なんてして欲しくないのだと、そう言っているのだ。

そんな台詞をこんな小さな少年に言われたら、余計に心配するなというのが難くなるではないか。

「・・・ありがとう。ありがとう、稀那君」

嬉しいのに、酷く胸が苦しくて、紫恋はそれだけしか言葉にできなかった。

稀那は感情が耳に出やすいのだろうか、大きな猫耳をぴよこぴよことせわしなく動かして、満足げにはにかんだ。

「えへへ、贅姫もありがとね。あの・・・あのさ、俺ね、贅姫のために頑張るからね、だから・・・紫恋姉ちゃん、って呼んでもいい？」

「紫恋姉ちゃん・・・」

——お姉ちゃん。そう愛くるしく呼ぶ懐かしい声がよみがえった。

固まつた紫恋を見て、稀那は耳をしゅんと垂れた。だめなの？そう残念がつているのが言葉にしなくても分かりやすく伝わった。紫恋は床に膝をついて、稀那の体を思いつき引き寄せた。稀那はきよとした顔で、紫恋の腕におとなしく包まれた。

「に、贅姫？」

「しばらくこうさせてくれるなら、いいわよ」

稀那はこくこくと頷いて、それからとても嬉しそうな声で笑って無邪気に紫恋を抱きしめ返した。

あつたかくて、まるで猫のようなお日様の香りのする体に、紫恋はそつと顔を隠した。なんとなく、今の表情を見られなくなかった。

「ねえ、紫恋姉ちゃん。明日もこのお城にいるよね？」

「そうねえ……いられたらいいわね」

「いるって、言ってくれないの？」

「今はまだ、言えないの。明日までに何があるかはまだ誰にもわからないもの。でも、ここで穏やかに稀那君たちと過ごせたのならそれが一番理想的ね」

「一緒にお花見しようよ。あと二、三日もしたら黄色の花も散っちゃうよ」

「そうね、したいわね。来年になった時には薄桃色に染まったばかりの桜を並んで見上げたいわね。できたら、いいわね」

紫恋の寝巻きの背を掴む力が、きゅっときつくなった。

私はやはり、無事で生き延びなければならぬのだなと紫恋は思った。そして少しだけ、このお城に未練というものを感じてしまったのだった。

後ろ髪をひかれるような様子の稀那を言いくるめて本殿に帰した後、紫恋は眠りに落ちた後宮の中にそつと足を踏み出した。

行く先は決まっていた。予感が現実になったとしても動じない覚

悟も決まっていた。誰にも会わないよう気をつけて、と言ってももとその場所は贅姫の部屋から本殿に繋がる人通りの少ない渡り廊下をさらに少し外れた、よほど贅姫に用がない限りは立ち入らない・・・用があったとしてもなかなか立ち入る理由もない場所である。誰にも見つからないことは容易だった。

上を見上げれば、天井には大きな窓。そこから覗くのは昨日ここから見たものよりもやや欠けた月。差し込む光で、紫恋の佇む世界は青白く輝いていた。

「・・・この世界に好きで来たわけではないけれど、この世界の月は好きだわ。あちらよりも遥かに綺麗なの。この場所は格別に素敵な場所よね」

青白い月を見つめていた紫の瞳は、その先をゆるりと移り変えた。

「でもあなたがここに迷い込む目的は、お月様ではなくて贅姫なのよね？鬼神」

姿を見せた闇色の羽織を纏う青年は、ゆつくりと俯いていた顔をあげた。月が二人を見守るように慈愛の光で満たした中、漆黒の瞳はまっすぐに紫恋を見据え、彼と対峙する彼女の姿を映し出した。

第四話（後書き）

就活が終わりました。応援してくださった方々、ありがとうございました！

Re：総さんへ

三回も書き込みしてくださってありがとうございます！ちょうど第四話が打ち終わった頃合いで、タイミングばっちりでしたね！就活ずつと応援していただいて嬉しかったです。挫折しつつもなんとか内定もらえました。

感謝の気持ちは小説でお返ししたいです、続きを早くお届けできるように頑張りますね。またいつでもいらっしゃってください♪

第五話

彼の目は、まるで熱に浮かされたように虚ろだった。左手はその体を倒れまいとするかのように必死で壁にすがり付いており、右手は心臓の上の衣を拳が震えるほどに強い力で握っている。

昨夜と同じだ、そう紫恋は確信した。彼女の心中は極めて冷静だった。もはや妹を守り抜くという信念で固まっている心は、彼を前にしても揺らがなかった。まだ殺されるわけにはいけないので慎重にならねばならない。昼間の詩依の忠告を忘れてはならないだろう。だが、これは絶好の機会でもあるのだ。贅姫に謎の拒絶を向け続ける彼と義務を終わらせるには、もはやこちらから歩み寄るしかない。意識が朦朧としている今の状態はつけ入りやすいだろう。

義務だけで終わる関係というのはまだ少しばかり抵抗はあるものの、彼が意思疎通を拒否するのならもうどうしようもないのだ。紫恋は紫恋の本来の目的を達成させるまでだ。

青白い月明かりの下、元々独特の気配を纏う彼の姿はよりいっそう存在感が不気味に増して見える。常人なら逃げ出したくなるであろうその存在に向かって、紫恋はゆっくりと足を踏み出した。彼の瞳はあいかわらずおっと焦点が合っていないようで、ものが見えているのかどうか怪しい。触れるほどに近づけば、彼の意思よりも彼の体内の封剣によって、彼は動くのではないかと思われた。一瞬紫恋の脳裏に、昨夜の衝撃的な行為の記憶がよぎった。義務を終わらせるために彼につけ入るとは、つまりはああいうことだろう。だが紫恋は首を振って、生まれた動揺を押し殺した。

……一回されたなら、二回だろうが三回だろうがもう同じよ！

こんな瀬戸際において、躊躇などしてはいられない。今まで妹以外には、特に恋愛なんぞに関してはまだ頓着も執着もしなかった紫恋の性質上、これを割り切ってしまうのは驚くほど容易だった。年

頃の娘にしては驚くべきことだという本人の自覚はないものの。

あと少しで触れるという距離まで近寄った時、突然彼の表情に異変が起きた。光を宿していなかった暗い眼が、はっと意識が戻ったかのように見開いたのだ。彼の黒い瞳は、すぐさま目の前の紫恋を射るように見据えた。

「くるな」

鋭い声がかかり、紫恋の体は硬直した。

彼は獣を思わせる獰猛な目つきで紫恋を一瞥し、直後、天からの糸が切れたかのように膝が崩れた。

「鬼神」

「触るな」

彼に差し出そうとした手は、彼の剥き出しの気迫に気おされてぴたりと止まってしまった。

彼はどうやら紫恋を構うよりも、自身を襲う苦しみで精一杯なようだった。顔を上げることも辛いらしく、戸惑う紫恋の表情から視線を外して下を向く。紫恋は少しの間、彼の荒い呼吸音を聴きながら立ち尽くした。彼の様子は、一向に治まる気配がない。

むしろ彼の体力も気力もどんどん落ちていく気がしてならなかった。

「・・・苦しいと感じたのなら、そんなになる前に最初から私のところに渡ればよかったじゃない」

「うる・・・さい・・・っ。見るな、うせろ」

鬼神としての見栄か、自尊心なのだろうか。どうやら弱っている姿を見せたくなかったらしい。しかしこんな風に限界に達してさ迷って来るようでは、余計に格好がつかないのではないか。ともあれ、

彼が感じている苦しみは相当なものであることはよく察しがついた。彼の頑固な意思など捻じ伏せられてしまうほどに、鬼神の封剣は彼の体内を蝕んでいるのだ。

紫恋は小さく呆れたようにため息をつき、その場にしゃがんで彼の顔を覗き見た。

「ねえ鬼神。終わらせればいいじゃない、今夜で、全て。その苦しみも私も、早く捨ててしまいたいんでしょ？」

彼が、わずかに驚いたように顔を上げた。

「私はもう、覚悟ができているから。なるべくなら殺されない方向で事が済んで欲しいとは思っただけだね。でも、あなたの好きなようにしていいわ。抵抗はしない。だから鬼神、あなたもそろそろ覚悟を決めてちょうだい」

気おされないように、紫恋は彼と同じ目線でまっすぐ彼の黒目を見つめた。この瞬間、意志の強さで勝ったのは紫恋だった。彼はぐっと怪訝な顔で眉を寄せ、少し後ずさりするように身を引いた。紫恋はあいた空間を再び埋めるようにじりじりと膝で詰め寄った。はたから見たら、そうとう奇妙な光景である。

が、彼はそんな自分が詰め寄られている姿に耐えかねたのだろう、苦々しい表情を浮かべた直後、胸を押さえていた片手でいきなり彼女の肩を掴んだ。

紫恋の華奢な肩は彼の片手の内に余裕で収まり、そのまま無遠慮な力で彼に引き寄せられた。彼の顔が紫恋の顔に近づく。昨日のことが一気に脳内で再現され、彼女は思わずぎゅっと目を瞑った。

しかし、身構えて待ったところで、彼女の唇には予想した感触は訪れることはなかった。疑問符を浮かべてゆっくり目を開くと、眼前には微妙な表情と微妙な距離で止まった彼の顔があった。彼女が

逃げるそぶりを見せずにそのまま彼の顔を見つめっていると、彼はゆっくりと彼女から顔を離れた。それはそれは複雑そうな表情で。

「……どうして？ 苦しいんでしょう？ ……すれば、楽になるって、昨夜で分かったじゃない」

「……お前の顔を見たら、そんな気がうせた」

紫恋の眉間が、彼に負けず劣らず険しくなった。

「なにそれ。そんなこと言ってる場合なの？ 苦しみに耐えたほうがましだと思うほどに私の顔が嫌いなもの？ だったらもう私の顔を頭巾で覆うなりして見なければいいわよ！」

目を見張る彼の顔を、紫恋は躊躇なく両手で包んで自分の方へ真っ直ぐに向かせた。危険な行動であるのは間違いないかったが、その時の彼の様子が覇気があるとは言い難かったためだろうか、紫恋は迂闊な行動をとっている自覚がなかった。

「はなせ」

「いやよ。だってこのままじゃあなたはまた逃げるじゃない。はっきり明確な結論を出してくれなければはなせない」

「……殺すぞ」

「私を殺す前にやるべきことがあるはずだわ。課せられる義務を果たさないままではいられないほどに、鬼神の地位は無責任なものではないはずよ。ねえ鬼神、私を殺したって、あなたは贄姫から逃れることなんか出来やしない。私を殺せばまたこれと似たような顔の小さな贄姫が現れるだけよ。だったらこうして腹をくくっている私で妥協して義務を果たしたほうがよっぽど効率がいいに決まってるわ。そうでしょう？」

彼の表情が引きつった。どうやら胸に刺さるものはあつたらしい。だが、彼はそれでも何かに躊躇するかのよう。紫の瞳から視線を逃れた。紫恋はさせるものかとばかりに、彼の逸らした視界の中に入ろうと身をよじって黒い瞳を追った。

「鬼神。あなた、今夜私のところに来るって自分から言っただんではない。一度決めておいてこんな間際になって逃げるなんて鬼神の名が泣くわ。そ、それに……据え膳食わぬは男の恥って言うでしよう！」

「……知らん。なんだそれは」

「だ、だから目の前にこうして……とと、とにかく！女の私がここまで覚悟が定まっているのだから、男のあなたがここで引き下がるなんて許されないわよ。——男だったら逃げないで向かってきたらどうなの」

伏せられていた彼の瞳が、わずかに見開かれて紫恋へと向いた。少し言い過ぎたかもしれない、そう紫恋が怯んで身をすくめると、彼はじつと紫恋を凝視した後双眸を睥睨した。威嚇っぽいというよりは、まるで自嘲のように。

「……やはり俺にそれを言うのか、贅姫」

「え？」

囁くような言葉の意味を紫恋が解するより先に、鬼神が紫恋の肩を強く突き飛ばした。なんとか後頭部を打ち付けるのを回避して紫恋が倒れこむ。それと同時に、彼が再び心臓の上を両手で鷲掴みにして低い唸り声をあげた。

「待って鬼神！」

紫恋が体を起こすよりも先に彼は立ち上がり、片手を壁に乱暴に打ち付けるようにして、来た廊下を戻ろうとした。当然追う判断を下した紫恋だったが、彼に振り向きざまに向けられた眼光に思わず足がすくんだ。

「入ってくるな」

来たら今度こそ本気で殺す。彼の目はそう語っていた。さすがの紫恋も、これほどの眼差しを突きつけられては危機感に捕らえられざるをえなかった。

紫恋の凍りついた表情を確認した彼は、荒く肩を震わせながらもゆっくりと去っていく。漆黒の背中が月光の向こうの闇に溶けていってしまう。

「……っ・鬼神。待つて鬼神、行かないで、鬼神！」

彼は振り向かない。もう意識が遠くなっているのか、それともわざと無視しているのか。

ああ、どうすれば彼はこちらを見るだろう。紫恋は焦る気持ちの中、鬼神という名以外の彼の呼び名をふと思った。何だったろう、彼の名前は。

「み……みづ、魅月……魅月君！」

思いっきり叫んだ直後、紫恋は心の中でも盛大に叫び声をあげた。今、自分は何てことを口走ったのだ。——なぜ『君』をつけた！　ここは『様』か『さん』をつけて然るべきところを、なぜよりによって君なのだ。子どもじゃあるまいし。おそらく、先ほどまで稀那と一緒に話をしていたからついその名残が出てきてしまったのだと思う。だが、彼に向かつての場合響きがおそろしく笑えな

い。

冷や汗が吹き出る心地になった紫恋だったが、驚いたのは彼女だけではなかったらしい。ずるずると足を引きずりながら去っていた鬼神は、ぴたりと足を止めて紫恋に振り向いていた。方法はどうであれ、足止めにはなったようであった。彼は怒るでも不快な顔をするでもなく、これまで見たこともないほどに酷く虚を突かれた表情で紫恋を見ていた。紫恋は今の発言を取り繕おうと慌てて言葉をさがしたが、機転を利かすより前に突如彼の体がぐらりと傾いた。

前のめりに倒れる彼の頭が硬い床に打ち付けられる、その寸前に紫恋は滑り込むように彼の肩を抱いた。少女の腕では当然その体重を支えることなど不可能なため、ほとんど下敷きになったに近い形だ。なんとかもがいて彼女が身を起こすと、彼女の両肩に鋭い痛みがはしった。彼の両手が、爪をたてるほどきつく彼女の両肩を掴んでいたのだ。その手はかたかたと小刻みに震えている。耳元では、彼の苦しい息の音が繰り返されていた。

限界なのだ、やはり。つまらない意地などはっている場合ではないほどに。

紫恋は、そっと彼の背中に両手を回した。彼から拒絶がないのを確認してから、ゆっくりと震える背中をさすった。よく咳き込む妹にそうしたような、優しい手つきで。彼女の肩を掴む手が、ぴくりと動いた。

「……っ……入ってくるな」

耳に触れる距離で咳かれた声は、誰もが恐れる鬼神のものとは思えないほどの、ただの青年の声だった。

入ってくるなどということが、紫恋には解らなかった。彼の近くに寄るなどいうことが、それとも言葉を聴かせるなどいうことか。だが、その言葉は今効力を発揮しないことだけは判断できた。拒絶の言葉を口にしながらも、彼の手はより一層きつく紫恋を捉え

て離さなかった。彼女の肩を掴んでいた手はいつしか彼女の背中へと回り、彼女は彼に縋り付いて抱きすくめられる形になっていた。入ってくるな、入ってくるなと、彼は呟き続けた。それが彼が自身の理性を止めておく方法なのだろう。それでも、彼の腕は彼女を包んで離すことはない。

「鬼神」

返事はない。

「・・・魅月君」

ぴくりと彼の全身が揺れた。硬直した、と言うべきか。

紫恋はそんな彼の様子を観察しながら背中を撫で続けた。すると、だんだん彼の呼吸と震えが小さくなっていくのを感じた。

「魅月君」

背中をついでに、頭も撫でてみる。意外なほどに繊細な触り心地の黒髪だった。ふっと、彼の体から力が抜けた。さらに紫恋に体重が押し掛かる。それでも彼女は、自身の黒髪よりも柔らかい彼の髪に手を入れてゆっくりと梳いた。時折彼の名を呼びながら。

「大嫌いだ」

彼が一言、そう囁いた。紫恋の寝巻きをきつく掴んだままで。そうして、何の拒絶も示さないまま。そう、と受け流すような返事をして、紫恋は彼の呼吸が夜の空気に溶けるようになるまで、ずっと彼の背と頭を撫で続けた。

そうして、どれくらいたっただろうか。彼の体がやけに重たく感

じ、名を呼んでも本当に何の反応も示さなくなったのを不思議に思った紫恋は、そつと体を傾けて彼の顔を覗き見た。

「え・・・み、魅月君？ねえ、魅月君？寝てるの？」

なんと、彼は完全に眠りに入っていた。乱れていた呼吸はもうすっかり整って、すっかり穏やかな寝息へと変わっていた。大嫌いだと嫌悪していた少女の前で、こんなにまであっさり眠るとは。拍子抜けと言ったかなんと言ったか。

紫恋の肩に頭を乗せて寝てしまった彼の顔は、とても無防備なものだった。鬼神なんて名は関係しないような、一人の青年だ。むしろ、どこか子どものようなあどけなささえ垣間見えるような。紫恋はもう少しよく見たいと思って首を捻った。その途端、彼の体重を精一杯支えていた足がつるつと床を滑った。均衡を崩した体はあつという間に彼の体重に押しつぶされ、彼女は今度こそ彼の下敷きになった。彼は細身と言えど、背がある分やはり男でありそれなりに重い。なんとか少しずつ力を加えて彼を横向きにして下から這い出すことに成功した彼女だったが、その次に起き上がれないことに気が付いてぎよつとした。彼の手は、いまだしっかりと彼女の寝巻きの背を掴んでいたのだ。

魅月君、と耳元で呼びかけてみたところで反応はなく、体を揺すっても叩いても目覚める様子はなかった。彼の手を外そうと試みても、本当に寝ているのかと疑いたくなるほどに手はしっかりとした力で握られており、どうあがいても彼の腕から抜け出せなかった。

これは彼が起きなければどうにもならないなと諦めた紫恋は、しようがなく彼の抱き枕にされた状態で横に転がった。床の木の香りがふつと香り、それよりも強い彼の不思議な香りが鼻腔をくすぐった。背中には、今はひんやりとした感触が伝わってきていた。寝巻き越しても分かるほど彼の手の体温は冷たい。彼女は目の前にある美麗な顔立ちにそつと手を伸ばした。頬を触ってみると、こちらも

やはり冷たい。今宵はそんなに冷えるわけでもないというのに。思わず体温を分けてあげたくなるほどだ。

耳に届くのはすうすうと一定の間合いで繰り返される寝息だけ。人の気も知らないで、心地良さそうな眠りである。先ほどの汗の名残で少々べたつく彼の額に張り付く前髪をなんとなく払うと、ふいに彼の目じりに光るものが見えた。あ、と思ったときにはそれは一筋の線になりこめかみを伝って床に落ちていった。

夢でもみているのだろうか。それはどんな夢なのだろう。嫌いなはずの贅姫を抱きしめたまま見る夢は、あまり気分のいい夢ではないのではなからうか。彼の眉間にわずかに出来たしわをそつと撫でると、少しだけ表情は和らいだ。

彼は、ただ恐ろしい鬼神ではないのかもしれない。紫恋はそんな気がしてきた。これまでに、彼は無意識にいろんな顔を見せていた。怯えることも、驚くことも、笑うことも、こうして泣くこともするのだ。残酷に嘲笑う姿は、常に彼が意識的に紫恋に対して向けていたものであった気がする。もう少し、自分はこの城にいていいのだろうか。彼が必要としてくれているとは未だに思えないが、もう少し彼の近くで暮らしたら、彼はもっと違う顔を見せるのかもしれない。嫌悪はされても、せめて存在を認めてもらえる関係になればいい。早く彼の身の内にある剣が静まって、紫恋が役目を果たし終えるのを、互いに認め合う形で迎えられたら。

出来たらいいな、と思いつつ、紫恋は彼の背に腕を回した。いつも妹と並んで寝た時していたように。目の前の体の大きさはずいぶん違うはずなのに、不思議と同じような気持ちになるのは何故だろうか。

聴こえる寝息につられて、彼女はゆっくりと目を瞑った。もちろん寝るつもりはない。彼が気が付くのを待たなければならないのだから。

が不覚にも、そう思ったのはすでに夢と現の間であったことに紫恋は気が付かなかった。連日の苦勞のせいで消耗した自身の体力の

ほどを計ることが出来なかったのが悪かった。

少し目を休ませるだけ、そう思ったのが紫恋の最後の記憶だった。

次に目を開いた瞬間、とびこんできたのは月光ではなく朝日だった。そしてぼやけた視界には、見覚えのある白い天蓋の布。

いつのまにか部屋の布団の上に転がっていた体。それがこれからおこる波乱のきっかけになるとは、寝ぼけた頭の紫恋にはまだ知る由もなかった。

第六話

のそりと緩慢な動作で身を起こした。一瞬くらりと目眩を感じて何度か目を瞬かせる。手のひらが柔らかい白布団にふわりと沈むのをじっと見つめつつ、寝起きで働かない頭ながらも覚えた違和感に首を捻った。

はて、今までずいぶんと濃い夢を見ていたのだろうか。それとも今見ているこの状況が夢なのだろうか。さっきまで見ていたはずの場面が移り変わっているではないか。ぼうつと目の前の白布を見つめ、徐々に頭を回転させる。そして時間が経つにつれて、ゆっくりと彼女の表情はまのぬけたそれから変化していった。

本当に、夢だった？

「夢じゃ、ないわよ」

自問自答してみても、ようやく紫恋は状況を把握しはじめた。昨夜、紫恋は少し目を瞑るだけと油断したのを最後に寝てしまったのだ。いつ眠りに落ちたのか、全く気がつかないままに。それにしても不思議なのが、目覚めたら自室の布団の上に転がっているというこの状態である。しかもおまけに、丁寧に首元まで布団がかけられている始末だ。

紫恋は愕然としつつ自分の両腕に視線を落とした。記憶は一切ないわけだが、何故だが空になった両腕には違和感があった。何かが、抜け落ちてしまったかのような。

いつ、彼はこの腕からいなくなったのだろうか。そして彼はいつ、紫恋を掴んだまま眠っていたことに気が付いたのだろうか。もしかしたら二人とも眠りこけて気がつかないうちに、誰かが二人を発見してそれぞれの部屋に運んだのかもしれない。だとすれば発見した人物によつては今後城中に妙な憶測が飛び交う事態になるかもしれ

ない。それは少々めんどくさいことになりそうだ。

それにしても妙な感覚だった。つい今さっきまで抱きしめていたものが急になくなったかのような、空虚な体だ。これは、まだ眠る前に彼を支えていた感触の名残なのだろうか。それにしても妙に長く続いている名残である。

大きく首を捻って唸った紫恋は、ふと自身が眠っていた隣の範囲に目をやった。一人で眠るには無駄に広い寝所は、相変わらず隣がぼっかりと空いている。ただ一つ、そこに小さな変化があることに気がついて、彼女は不穏な予感に襲われた。

「いやいや、そんなまさか」

馬鹿な考察だとひきつった笑いを浮かべながら何かをまぎらわすかのように首を振ったものの、しかしどうしても気になった隣の空間に手が伸びる。すぐ隣の、誰も寝ていなかったはずのその空間。昨日はしわなく整えられていたそこは今、ちょうど一人が横たわった跡がくつきりと残っていた。手を置いてみると、そこだけ微かに新しい熱が感じられる。しかも掛け布団にも乱れが見られた。

「い……いやいや、ないわ。ないわよ絶対。あるわけないじゃない」

きつと自分の寝相が悪かっただけ。これは自分が寝転がった跡に違いない。そうに決まっている。だって、あるわけないだろう。・ぬくもりがまだ残っているほどつい今しがたまで、隣に誰かがいたなどと。

あるわけない。動揺を押し殺すように否定の首を振る。だが、さっきまで何かを抱いていた感覚の残る自らの腕のせいで、可能性の全てが否定できなかった。紫恋は視線を落として自らの体を確認した。白い寝巻きに、妙な乱れは見られない。体のどこにも痛みも怪

我もない。何もされていないのだ、だから、彼が隣にいたなどあるわけがないのだ。

そう冷静に考えようとしていた時、鳥の鳴き声しか聴こえていなかった部屋に突如ばたばたとするさい音が響き渡った。誰かが廊下を走っているのか、と思った瞬間、足音は部屋の前で止まり、荒々しく部屋の扉を開ける音が聴こえて来た。誰だ、と驚いて紫恋が寢所を囲む白布から顔を出そうとする、それよりもわずか先に白布は外側から豪快にばさりとめくられた。

白布が大きく翻り、紫恋が慄いて上を見上げたその先に、全速力で走ってきたのだろう、息を切らした深艶が立っていた。彼女は啞然とする紫恋の顔を見下ろした直後、血相を変えたように目を見開いた。突然のことに紫恋が言葉を失っていると、深艶はすぐにその顔をくしゃりとゆがめて膝を折った。

「無事だったのね紫恋・・・！」

訳が分からないままに、紫恋は深艶に思いつきり抱きしめられた。彼女の体から漂う香りに、思わず頭がとろける感覚を味わう。紫恋はそこで視線を上げて気が付いたのだが、彼女の頭が、いつもは赤い紐で美しく結わえられているのに、今はその長い黒髪は背に流したままになっていた。走ったせいで乱れているその髪を紫恋はそつと撫で付けて、同時に彼女がまだ寝巻き姿であることにも気が付いた。

「あの、みえ・・・じゃなくてお姉さま、なにかあったんですか？」
「なにかあったかですって？そんなの、私が訊きたいことよ！！」

がばつと紫恋の肩から頭を上げた深艶は、紫恋の顔を両手で強く掴んで観察するように見つめた。

「……まだ、あなたの氣に変化は感じられない。なら何もなかったってこと？でもそれならどうしてあいつは……」

「す、すみません、事態が把握しきれていないんですけど」

「一晩、あなた部屋で魅月と何をしていたの？」

「……はい？」

双方奇妙な表情を浮かべて見つめ合う。ややあつて、深艶は首を傾げて確認をしてきた。

「……昨夜、一度は行かないと言ったにもかかわらず、結局魅月はあなたの部屋に行つたんでしょう？」

「彼が私の部屋に？……どうしてそんな話が」

「もう後宮中の噂になつていいるのよ。今朝早く、魅月があなたの部屋から出て行くところを見た者がいるって」

紫恋は目を丸くした。二人が廊下で転がっていたという噂なら納得できるが、彼が紫恋の部屋から出て行つたというのはどういうことか。まさか……まさか本当に、布団のとなりにある跡は彼のものだというのが。だがしかし、どんな経緯でそんなことになつたのだろう。

互いに困惑の表情を浮かべていると、前触れもなく突然扉が開く音がした。二人は顔を外してそちらを見やる。すぐに深艶は、あからさまに引きつった表情を浮かべた。

「深艶姫。貴女には何度申し上げればよろしいのでしょうか？貴女は鬼導である前に、一族の姫君であるのだと」

いやみつたらしいほどの大仰なため息をつき、侍女を背後に引き連れた女官長、椿は部屋に入ってきた。深艶は慌てて乱れた長い黒髪を撫で付けて、少し肌蹴た衿元と裾を取り繕うように押さえる。

だが、飛び起きてそのままにここまで走ってきたという風貌は今さら取り繕えなかった。

「ひ、非常事態だったのよ。仕方ないじゃない。鬼導として、贄姫の無事を確かめる行動を即座にとったのは間違っていないかったと思うわ」

「そんなみつともない様で仰られても、私は納得がいきませんね。仮に姫という立場を考慮しないとしたところで、名誉ある鬼導としての姿でもないでしょうに」

深艶は返す言葉もないように椿から顔を逸らした。椿はまたため息をつき、今度はその鋭い視線をじろりと紫恋に向けた。何をしたわけでもないが思わず紫恋も身をすくめてしまう。

「お噂は伺いました。ですが、憶測にあつたようなことは何もなかったようですね。ひとまずはご無事で何よりです。詳しい事情も気になるのですが・・・まずは朝の支度が先でしょう。そなたたち、深艶姫をお連れしなさい」

椿の後ろに控えていた深艶付きの侍女たちは、少々呆れたといった表情を浮かべながら深艶を促した。だが深艶は紫恋のことが気にかかるようでなかなか動こうとしない。紫恋は昨夜の勝手な行動が露見してしまうのはまずいと思い、ここはとりあえず彼女を言いくるめることにした。

「あの、お姉さま。私はたった今目覚めたばかりで、その噂については私にもよく分かりません。彼に直接訊いたほうが良いように思います。とりあえず私は何事もなく無事ですから、安心してください」

「・・・わかったわ。真偽を確かめてみるわね。ごめんなさい、私

「つたら取り乱してしまつて」

侍女に打ち掛けを着せられて、深艶はようやく立ち上がった。侍女たちも椿も紫恋に一礼して、深艶に続いて部屋から出て行つた。再びしんと静まつた部屋で、紫恋はもう一度広い布団の上を見つめた。そして、次に空の腕を見る。それを何度か繰り返す。

今朝、彼がこの部屋から出て行つたという噂がもし本当だとしたならば。一体誰が紫恋を廊下からここに運んだのか。一度も起きることがないほど優しく丁寧に布団に寝かしつけたのは。

予感、あつた。しかしそれを肯定できるほどに、紫恋はまだ彼のことを知らなかった。彼が無意識に見せた表情しか垣間見ていないのだから。でも、と紫恋は布団ごと膝をかかえて縮こまる。でも、この腕の空虚を朝まで満たしていたものかもし本当にあつたとしたら。そして彼がそれを許していたとしたら・・・内なる苦痛を和らげるためだつたとしても、それは、間違いなく確かな変化だ。

「鬼神は何も明言なさつていらつしやらないご様子ですわ。なさつたらなさつたで采女の方々が荒れるでしょうが・・・このまま妙な憶測が飛び交うのも厄介ですわね」

紫恋の髪を梳きながら、ユウは手元に合わせるように淡々と朝の後宮の様子を語つた。噂はどうやらもう全ての采女の耳に届いたらしく、彼女たちの抱いたであろう感情は会わなくても想像に容易いことだつた。鬼神の妃という立場があからさまに仮の状態であつたなら問題なかったのに、この一件で鬼神が紫恋の存在を認めたという認識が広まつてしまつた。おまけに紫恋の体はまだ外界のそれであるということも、今朝会つた深艶の侍女たちから漏れたらしく、

それが余計にあらぬ噂を派生させているらしかった。女の噂は恐い。悪意があればあるほど事実無根であつてもあつという間に真実として定着して、人の感情をかき乱し醜い膿を生む。こんな閉鎖された特殊な場所ならなおさらだ。

「・・・大変なことになってしまったわね」

「そうですね。ですが・・・こうなったことに、紫恋様は心当たりがおりなのではないですか？」

そつと耳元で囁かれたユウの言葉に、紫恋は思わずぴくりと肩を揺らしてしまった。それを確認したユウが、小さく口元に笑みを作る。

「どうして、そんな風に思うの？」

「あら紫恋様。貴女様にお仕えしたばかりの身でも、私には分かりますわよ。紫恋様は正直な方ですもの、不思議があればそのお顔に分かりやすく現れるはずですよ。ですけど先ほどからずっと、紫恋様のお顔は何かを考えていらつしやるのですわ」

「あはは・・・敵わないわねユウには」

なかなか鋭い感覚の持ち主だ。このように優れた気の持ち主だからこそ、贅姫の侍女に選ばれたのだろうか。そしてありがたいことに、彼女はそこから先を問う様子はなかった。そういうところも実に優れた少女である。

髪を梳き終わったユウは、紅い櫛を化粧台の上に静かに乗せた。それを見て紫恋がお礼の言葉を述べようと首を振り向かせる。その時、ユウがすつと紫恋の目の前に片手を差し出して、紫恋はありがとうの言葉を飲んでしまった。ユウの手には漆黒の鞘に納まった小刀があつたのだ。紫恋は驚きの表情を浮かべてユウを見上げた。彼女の顔は、真剣なものだった。

「懐にお持ちくださいまし」

「これは、一体」

「ここはもう、紫恋様にとって決して安全な場所ではありませんわ。鬼神が紫恋様を受け入れたとなれば、今度は采女が敵となるのです。采女は、鬼神のようにはいきませんわよ。女には女の恐ろしさがございます」

そう言うと、ユウはとまどう紫恋の手に、小刀をねじこんだ。

「秀でた鬼にとってはこのようなただの刀は脅しにもならないでしょう。ですからこれは牽制ですわ。この事態のきっかけをお作りになったのが紫恋様自身なら、覚悟をお決めになってくださいまし」

昨夜、たしかにきっかけを作ったのは紫恋だった。ならばそれに追随する事柄も、向かっていく責任があるのだろう。

「・・・出来ることなら使いたくないものだけれど、一応受け取っておくわ。ありがとう」

手に馴染まぬその感触を確かめて、紫恋は衿の内側にそっと小刀を納めた。

先ほど深艶の使いの者から伝言が入り、彼女は地方領主の謁見を済ませた後にこちらに顔を見せるとのことだったので、紫恋は部屋でおとなしく待つことになった。部屋の外にはもう迂闊に出られない。深艶はおそらく鬼神のところに足を運んでから来るだろうから、何か彼の思惑を聞く事が出来たらという期待をするしかなかった。ユウが新たに持ってきてくれた書籍を気の入らない頭ではらばらめくっていく。

「ただ今、紫恋様の教育係の選定を始める動きもあるんですよ」
「教育係？教養や所作を教えてもらえるの？それはユウではだめなのかしら」

「いやですわ紫恋様ったら。私が教えて差し上げられることといったら侍女仕事しかございませんわ。もっと学のあるふさわしいお方でなければ。ですがなかなか、今の後宮では適任のお方を見つけることが難儀のようですけれど」

「もともと私は当初の予定ではここに留まる身ではなかったのだから、仕方がないわ」

「ええ、それもございますわ。ですが何より、今の後宮内における采女を中心とした派閥争いが、適任者を見つける上での妨げとなっているんですの。有能なお方は必ず良家の采女の息がかかっておいんです。そのような者を紫恋様と接触させるわけにはいかないのですわ」

采女同士だけでもやっかいなのに、そこに贅姫が放り込まれてさらに派閥がややこしくなったわけだ。本当に、めんどうなことである。

紫恋が分厚い史書の上にため息を落とした時、ふいに扉を叩く音が響き、続いて女性の声が外からかかった。他区域の侍女であるのことを確認してから、ユウが扉をあける。紫恋が椅子の背から顔を出しそつとユウの背中を覗き見していると、やがてユウは少し不思議そうな表情を浮かべて戻ってきた。

「第十五区域の侍女長殿が、私をお呼びのようなのです。申し訳ありませんが、少しお時間をいただいてよろしいでしょうか」

「ええ、いつてらっしゃい。私はここで待っているわね」

すぐに戻ります、と言い残してユウは足早に部屋を出て行った。それからほんの束の間の後のことだった。他区域の侍女長がユウ

に何の用なのだろう、とぼんやりと紫恋が考えていると、再び扉を叩く音が聞こえて来たのだ。気を抜いていた紫恋は少しどきりとして、そろりと扉に近寄った。まずは誰かを確かめてから、と思ったのだが、驚いたことに相手は紫恋が声をかけるよりも前に勝手に扉を開け放った。相手の姿を見た途端、すつと紫恋は血の気が引いたのを感じた。

「ごきげんよう、贅姫。気分はいかがかしらあ」

なつとりと絡みつくような笑みと、声。美しい女だった。体型も顔立ちも申し分ない、顔に鬼の紋を持つ女だ。まず目に入ってきたのはその彼女。次に彼女の背後から、にやにやと笑っている女が四人顔を出した。全員初めて見る女だ。だが紫恋は彼女たちの身なりや態度から、五人がただの侍女ではないことをすぐに悟った。

「・・・采女の方々ですか」

女たちはその問いを、凍りつくほど冷たい微笑で返した。ぞくりと悪寒を感じて紫恋は後退したが、一番前にいる女は素早く紫恋の腕を掴んで逃がさなかった。

「私たち、あなたとお話がしたいのよ。ちょっと来てくれるかしらあ」

ああ、はめられた。ようやく紫恋は、ユウが突然呼ばれていた訳を理解した。十五区域の侍女長は、当然名のある采女の息がかかっていたのだ。きつとしばらくユウは帰ってこないだろう。

紫恋の返事を待つこともなく、采女たちは強引に紫恋を引っ張っぱり部屋から連れ去った。廊下をしばらく行ったところで、助けを呼びたくても人は誰もいなかった。ここはもともと人氣が少ない場

所と言えども、これはあまりにも不自然だ。彼女たちはどうやら周到に用意を整えたらしい。

跡がつくほどにきつく掴まれていた腕は、壁に全身を叩きつけられたことedyouやく解放された。女たちに囲まれて逃げ場はなかった。たとえ逃げてても、鬼の彼女たちには脚力も腕力も敵うはずがないので無駄なのだ。

紫恋より背の高い女たちはじつと値踏みするように紫恋を見下ろした。その口元は皮肉っぽく微笑んでいる。だが、顔はもう笑っているとは言えなかった。一番中心的存在の様子である女が、細く白い指でするりと紫恋の頬を撫でて、そのまま指を喉の中心に宛がった。すぐにでも絞め殺すのではないかと思える表情だ。紫恋は胸元に隠した小刀を衿の上から確かめた。それからごくりと息苦しさを感ずる喉をならし、目の前の冷たい美貌を仰いで対峙した。

第七話

目の前に立つ女は、紅く艶めく唇に朱の色をほどこした目元をした、たいそう美しい女だった。紫恋が泣く様子もなく彼女を見上げたためか、彼女はたいそうおもしろくなさそうな表情を浮かべて紫恋を上から睨みすえた。

「こうして面と向かつては初めまして、よねえ。私はここより東の地、かんぼうさん翰坊山の麓の聖域を守護せしてんぼう天鋒の家あじやの娘。名は亜羅耶。どうぞよしなに、小さな贅姫様」

よしなに、と言われたところで彼女の長い爪は紫恋の首筋に柔らかくくい込んでいる。小さなという言葉にも、ただ身長差のことを指しているのではなく、女としての魅力にしても地位身分の後ろ盾にしてもお前は小物なのだという意味合いが痛いほどに伝わってきた。

紫恋は心臓がきゅうつと収縮した心地だったが、覚悟を決めると誓った以上は逃げ腰になるわけにはいかなかった。

「・・・初めまして、私は」

「知っているわ。紫恋と言うのでしょうか？あなたは今後宮内で最たる噂の的だもの」

「そう・・・ですか。それで、皆様は私に何の御用がありなのですか」

対等に渡り合おうと気を張ったところで、慣れない棘のある言葉はとってつけたような不自然な響きとなってしまった。正面の亜羅耶も取り巻きの他の女たちも、鼻で笑って皮肉めいた嘲笑を浮かべている。

「身に覚えがないと言っても言うつもり？あなた、自分が今此处で置かれている状況が分からないわけじゃあないわよねえ？今朝の噂はもうとつくに知れ渡っているの。しかもその時の目撃者の中には私の侍女も含まれているのよ。言い逃れなんて出来はしないわ」

「言い逃れをするつもりはありません。ですが、身に覚えがないというのも事実です。鬼神が今朝早く私の部屋から出て行ったという噂は聞きました。ですが私にはその噂にあるようなことは記憶にありません。そんな話が囁かれていることに一番驚いているのは他にもない私自身で——っ……いたっ……！」

右隣にいた女が、紫恋の反論が終わるより前に容赦なく紫恋の髪の毛を掴み上げた。小さな鈴の付いた髪飾りがリンと揺れて床に落ちる。根元から引きちぎられるのではないかと思うほどの激痛に紫恋は悲鳴をあげたが、力は緩まなかった。

「とぼけんのもいいかげんにしなさいよ小娘が！記憶にないなんて言い訳が通用するとも思ってたんの？あの魅月様が、相手に何の用もないのに部屋に渡るわけがないでしょう。ただでさえ、こちらから誘わなければ来てくださることのないお方だというのに」

「^{りよくは}緑羽の言うとおりよねえ。まあ確かに、あなたの気からはまだ何の力も感じられないことから、まだ鬼神と褥を御一緒にしていないことは分かるわよ」

「だ、だったら問題はないでしょう」

「……だから、問題だというのだけけど？これまで鬼神が我々采女の部屋にお渡しになる目的は、褥を御一緒にすること以外にはありませんでした。それも、特定の采女を気にかける素振りはないゆえに常に采女側から誘うしかない。それに比べてあなたの場合は何もかもがおかしいのよ。最初にあなたのお部屋に渡ったのは鬼神としての義務だから仕方がないことよ、でもそれなのにあなたを抱かない

で今の今まで後宮に留めているなんて普通じゃ考えられない！初夜の晩も昨夜も、あなたは鬼神に部屋で何をしたの？何を言ったの？最近のあの方の妙な様子はあなたのせいなんでしょう！？一昨日、鬼神は私をお選びになったというのに真夜中に突然どこかにいってしまった。帰ってきたと思えば夢にうなされている始末よ」

あなたのせいなんでしょう？そう声を荒げて亜羅耶は痛みに喘ぐ紫恋の前髪を引っ掴んでさらに上を向かせた。

亜羅耶も他の彼女たちも、常に自身の采女と言うあやふやな立場に苛立っていた。本来なら彼女たちは、正当な正妃側妃候補として城に上がっていておかしくない身分の名家の姫なのだ。それなのに魅月は誰を寵愛するでもなく、始末の悪いことに誰を拒絶することもしない。だから名家は自身の家の権威の増大を期待して、こぞって娘を魅月の元に送るのだ。鬼神の妃となれば、それに連なる家はそのなりの優遇を受ける。まして娘が子を産み、その子が次の鬼神となればなおさら家の力は大きくなる。家同士の思惑が火花を散らす中、送られた娘に対する家からの重圧は大きい。彼女たちは押し掛かる期待に耐えながら必死にこの女の園で戦っているのだ。どの采女も精神的に圧迫されており、根拠もない少しの噂にも神経過敏にならざるをえなかった。紫恋という変則的な存在を、彼女たちが黙って見逃せるはずがないのである。

今、彼女たちには明確な答えしか聞き届けてはもらえないだろう。事実をよく知らない、特に何をしたわけでもないと言ったところで彼女たちの怒りを余計に膨らませるだけだ。

「・・・殺されてしまえばよかったのに」

亜羅耶がその内心をありありと表情に浮かべて紫恋の髪に力を込めた。

「鬼神は絶対に贅姫を殺すと思っていたのに。なのに、どうしてあなたは生きているのよ。なにのうのうとこの後宮で暮らしているのよ。まさか鬼神が、本当にあなたみたいなのを気に入ったとでも言うの？冗談じゃないわ！」

存在していることすら許せない。彼女たちの眼差しは明確にそう語っていた。特に亜羅耶は一度感情的になったらそう簡単には気が静まらない性格らしく、もはや紫恋の話を聞く気はないようである。ただ自身の不安から来る怒りを紫恋にぶつけることでしか、やりようのない思いを解消することが出来ないようだ。そんな亜羅耶に合わせるように、取り巻く彼女たちの瞳にも剣呑な色が宿っていく。

「わ、私は断じて、鬼神に妃と認めてもらったわけではありません。私自身も、あなた方以上に鬼神の傍に寄ろうという思いなどは」

「嘘つき」

「存在が認められていないならとくに殺されているわよ」

「あんたがいるせいで、私たちの面目丸つぶれ。家からは書簡で圧力がかけられる始末」

「私も。これでは家に帰省することなど出来たものではない。・・・お前のせいで」

「あなたなんていなくなってしまうばいいのよ。もともと、最初からいなくなるはずだった贅姫なのだねえ」

紫恋の勘が警告を鳴らした。女には女の恐ろしさがある、そのユウの言葉の意味が改めて分かった気がした。紫恋はこの瞬間、魅月はあるでもまだ話の通じる相手であったことを知った。

亜羅耶の手が紫恋の髪を離し、再び首筋をなぞる。紫恋は助けを求めて叫ぼうとしたが、その前に亜羅耶はいつと目元を歪めて嘲笑った。

「無駄よ。人払いの結界を仕掛けてあるの。誰も近くにいやしないわあ」

この奥まった常識はずれの後宮で、一人が殺されたところで事件は簡単に闇に葬られるかもしれない。良家の姫が関わっていれば、きっと容易いだろう。

死ねない。もはやこの地で何度も繰り返し思った言葉を再度胸中で叫び、紫恋は胸に手を置いた。紫苑の思いのためにも生き抜く覚悟を決めたのだ。こんなところで負けられない。硬い感触を確かめて、紫恋は一気に懷から小刀を抜いた。

銀の光が鋭く煌めき、研ぎ澄まされた切っ先が正面の亜羅耶に真っ直ぐ向いた。さすがに反撃に動くとは思わなかったのだろう、亜羅耶は息をのんで紫恋の首から手を離れた。同様に、緑羽と呼ばれていた女も掴んでいた髪を離して半歩後ろに下がった。

背後は壁だから逃げ場はない。紫恋は漆黒の柄を両手でしっかりと握りしめ、彼女たちを睨み据えた。

「どうかお立ち去りください。私のことはもう構わないで。私も、今後これ以上あなた方のお気に障る真似はいたしません」

なんとか威嚇めいた声を絞り出し、紫恋は采女一人一人を訴えるような目で見回した。敵意と悪意と冷たい眼差しが返ってくる。そんな眼差しに屈するつもりはない。だがしかし、意思とは裏腹に銀の切っ先は小刻みに揺れだした。

しばし緊迫して張り詰めたその場の空気を、真っ先に握りつぶしたのは亜羅耶だった。彼女はその紅い唇の端を吊り上げて、くつくつとさも可笑しいといった様子で笑ったのだ。刃を目の前に向けられて笑っているその姿に、紫恋は柄を持つ指先から凍りつく感覚がした。やがて笑いを殺した亜羅耶は、猫のような目を獐猛に光らせて紫恋の持つ小刀を見下ろした。

「おもしろい子ね、あなた。本当に、おもしろいくらい愚かでお馬鹿なお子様だわあ。その刀の使い道もわからないのに、振り回して喚くだなんて」

「・・・使い道？これ以上の使い道があるとしても？」

「教えてあげましょうか？」

優しいままでにやんわりと囁いて、亜羅耶はいきなりなんのためらいもなく、向けられた刃を掴んだ。これには紫恋も含め、他の采女も息をのむ。亜羅耶の傷一つない美しい手によって、銀の刃はすっぽりと覆われた。もしここで紫恋が少しでも小刀を手前に引いてしまったら・・・その白い手の平からは、赤いしずくが滴り落ちることになるだろう。それを思った瞬間、紫恋の手の震えはぴたりと止まった。止めるように、意識をしたのだ。その紫恋の様子を確認した亜羅耶は、勝ち誇った笑みを浮かべて教えてくれたのだった。

「凶器というのはね、自分を護り、他者を傷つけるためにあるものなのよ」

それは至極当たり前の事。だからこそ紫恋はこの状況で刀を抜いたのではないか。だが実はこの瞬間、紫恋には本当の意味で刀を抜く覚悟というものがなかったのだ。それは紫恋本人が自覚していないことで、亜羅耶にはすぐに気付けたことだった。それが、勝敗を分けていたのだ。

亜羅耶は刀を掴んでいた手で、今度は刃の切っ先をつまんだ。一見軽くつまんでいるように見えたが、刀を持つ紫恋には、見た目に反して異様なほど強い力が加わっていることが伝わってきた。思わず刀を引こうとしたが、刀はその位置でびくともしない。再び紫恋の手が震え出す。今度の震えは、止めようとしても止められない。

じわじわと紫恋にも理解が出来てきた。自分は何を分かっている

かったのか。

「そんな心の持ち方でこの後宮で生きていこうなんて滑稽だわあ」

亜羅耶は囁いて、刃の向きを片手で軽々と紫恋の方に向かせた。紫恋は戦慄して柄を強く握ったが、刃の先に加わる力の方が上だった。

刃は、あっさりと紫恋の青ざめた頬を滑った。頬に感じた温かい違和感が、線となった傷から流れ落ちる血液だと感じるまでに、多少の間があった。紫恋は言葉もなく、痛みを喘ぐよりも眼前にある恐怖の根源に目を奪われていた。

勝ち誇った中に、もはや弱者に対する哀れな眼差しさえも覗かせている亜羅耶の目。・・・思い知らされた。自分がいかに甘い考えて刀を抜いたか。彼女たちにあつて自分にはないもの。それは、他者を傷付けてまでも自分を護らねばならない極限の状況に置かれた上での覚悟だったのだ。紫恋は自分の身を護るためには動いても、相手を傷つけようと動いてはいなかった。鬼とただの人、人種による力の差云々よりも前に、その甘さですでに紫恋の負けは決定していた。

勝てない、そう紫恋は確信した。この震える手で再び刀を振ったとしても、彼女たちの肉を切り裂いて己の手を血に染める覚悟は、きつとない。

紫恋から覇気が削げ落ちたのを見て再び気味のよさそうな表情を浮かべた亜羅耶は、小刀を紫恋の手からするりと抜いた。黒い柄を握り、切っ先を静かに振り上げる。人を斬り殺す瞬間に笑みを浮かべられるほど、彼女たちは追い詰められているのだろうか。紫恋は逃げるすべもなく、ただそんなことを思った。

「そこまでしておいたらどうだ」

助けはこない、そう思っていた状況で声がかけられたのはあまりにも意外なことだった。一番驚いたのは亜羅耶だったようだ。今まさに振り下ろそうとしていた手が大きく動揺に震えて、ゆっくりと現れた人影を目にした瞬間刀を袖に隠した。だが、隠したところでもう遅い。

「……なぜ、お前がここにいるのよ」

苦々しげに亜羅耶は言つて、現れた綺鏡をじろりと睨み付けた。彼はそれに動じることもなく、動揺する采女たちの反応を常と変わらぬ無表情で眺めてから、紫恋に視線を向けた。方頬を真っ赤に染めた紫恋の姿を至極冷静に見つめてから、彼はあきれたように息をついた。

「鬼導をなめるな。良家で護られて育ったあんたたちが身につけている結界なんて、威力はたかが知れている。人払いの結界にしてはあまりにも違和感があつて怪しかった。自分には逆に誘っているようにしか見えなかった」

「……黙れ、卑しい獣族が」

亜羅耶の顔がさつと怒りに染まり、その口ぶりからは心底彼を卑下しているのが窺えた。紫恋には詳しい事情は分からないが、獣族という言葉の言い方がやけに差別的な響きとして聞こえた。しかし彼はそんな言葉にも顔色一つ変えることはない。

「贅姫に手を出すのはやめておけ。鬼神の思惑が知れない今の段階で贅姫に手を出せば、あんたたちにも、後ろだてにある家にも、鬼神が何をするか分からない。贅姫殺害が家からの命令でないのなら、もう少しおとなしくしている」

「うるさいうるさい！お前のような身分のものが、鬼に命令するな

「身の程をわきまえたかどうかなの」

「鬼導として忠告しているまでだ。あんたたちこそ、少しは己の身をわきまえたかどうかだ。・・・采女は人質と変わらない」

刀がたたきつけられる破壊音が響き渡った。

綺鏡は己のすぐ横の柱に傷跡をつけて地に落ちた刀を一瞥もすることなく、亜羅耶を無表情に見つめていた。憤りが頂点に達した亜羅耶は、息を乱して体を戦慄かせていた。見かねた采女の一人が亜羅耶の背に手を添えたが、それすらも振り払って彼女は激昂をあらわに叫んだ。

「この半猫族が！いつか覚えておきなさいよ！この私に向かってよくもそんなことを・・・絶対に絶対に許さないから。なにが鬼導よ、弟がアレじゃなかったらお前みたいなのこの城に足を踏み入れることもなかったくせに。鬼神のお情けで置いてもらっている分際で、分かったような口を利くんじゃないわよ！お前のような下賤の生まれに、私たちのことなんて分かりっこないわ！」

一息にそこまで言って、それでもまだ言い足りないばかりに亜羅耶は声にならないうめきをあげた。そんな亜羅耶に、彼女に最も親しい様子の緑羽がもう行こうと声をかける。亜羅耶はもはや紫恋のことはあまり眼中には入れておらず、綺鏡を最後まで憎々しげに睨みながら踵を返した。

紫恋は彼女たちの足音が遠ざかっていくのに呆然と耳を傾けていたが、しばらくして綺鏡がじっと自分を見ていることに気がついて顔をあげた。彼は、相変わらず何を考えているのか分からない無表情なままだった。

「あ・・・ありがとうございました」

「別に礼はいらない。鬼導が贄姫を助けるのは義務だ」

「はあ……あの、亜羅耶さんとのあの口論って何だったんですか？人質、って言葉にやけに反応していたようでしたけど」

「……この魅月の代では少し形が異なっているが、元々采女というのは、名家が王家への忠誠の証しに差し出す姫のことだ。名家が鬼の名を汚す行いをしないように、昔から城には各家の姫たちを集めるという風習が続いている。体裁は行儀見習い、だが本当のところは名家を縛るための人質に過ぎないということだ」

「ああ、だからあんなに怒っていたんですね……」

人質という立場を理解していたとしても、それを面と向かって言われればあれだけ感情的にもなるだろう。おそらく亜羅耶にとっては、言った相手が綺鏡であるというのも大きな理由だったのだろうが、どうしてあそこまで綺鏡のことを——おそらく半猫族であるということを、卑下していたのか。綺鏡にしても、そのことを言われ慣れている様子があり、だが亜羅耶との間にはつきりと確執があるのも覗かせていた。これに興味を持つというのも無理な話だが、だが新参者の紫恋が軽々しく口を挟めることではなかった。彼の弟の稀那には厄介な事情があるのは聞いている。ならば彼にもそれなりの事情があるのだろう。

紫恋が口をつぐんでいると、ふいに綺鏡が近づいてきて彼女の顎を指先で上げた。顔を動かした途端、再びずきりと頬に痛みがはしって彼女は顔を思いつき顔をしかめた。修羅場の目撃によって多少忘れていたのだが、頬にはいまだべつとりと血がついている。早くなんとかしなければならなかった。

「もう少し早く出てくることもできた。その方がよかったか？」

「……いつから」

「あんたが刀を抜く前から居た。だが、もう少し見定めようと思った」

「つまり……期待外れだった、ということですね」

紫恋が自分をどこまで護れるか、護る覚悟があるか。彼はそれを見たかったのだろう。そして紫恋のこのざまは、あまりにも期待外れだったに違いない。

「いや別に。期待は最初からしていなかったからな。あんた、今まで争いをまともに経験したことがないんだろう。なら刀を抜くのを忘れなかっただけでもましな方だ」

はつきり言うなあ、と紫恋は思うが、言い返す言葉はなかった。彼の評価は正当だ。いくら期待されたとしても、紫恋があの采女のようになれるはずもない。いや、なつてはいけないのだろうが……
・見習うべき点は、あった。

「この傷をつけられた後で、よかったように思います。この城の怖さを身をもって実感できましたから。もっと強くなりたいと思いました」

「そうか。なら少しは期待してみよう。とりあえずあんたにはこれ以上危険な目に遭われると困る」

「ああ、鬼神の……」

「鬼神の件もそうだが、自分は稀那の方が気にかかる。あれはあんたのことが相当気に入っているようだからな。もしあんたに何かあったら稀那は自制が利かなくなるかもしれない」

「自制とは——？」

紫恋は首を傾げようとしたが、その前に綺鏡が紫恋の顎をしつかりと指で固定した。何、と彼女が問う間に、もう彼の吐息は彼女の頬を撫でていた。彼女はぎょつとして彼を押し戻そうとしたが、その手首は彼に易々と封じられた。動くな、と耳元で囁かれた声に顔が一瞬で熱る心地の彼女だったが、彼はまったくお構いなしで彼女

の傷口に舌を添わせた。やわらかく温かいものが頬を撫ぜる度に、ずきずきと傷跡が痛む。だがだんだんと、痛みが妙な熱を伴って傷口を包む様な、何とも言えない不思議な感覚に襲われた。そして徐々に、痛みが彼の舌に舐めとられていく錯覚を覚える。わずかに心地よささえ感じる行為に抵抗を忘れて立ち尽くしていると、突如もう一人の姿が視界の端に映った。はっと我に返った彼女は顎を動かさない代わりに横目で人物の顔を追った。

「お姉さま」

呟くと、彼はようやく紫恋から顔を離して、ここまで全速力で走ってきたらしい深艶を見た。今の様子を見られたところで、彼は至って冷静かつ無表情に深艶を迎えた。

「少し遅かったな、深艶姫」

何が遅かったか。簡潔すぎる彼の言葉は、この状況においてただ誤解を生むことになるのを彼は全く分かっていなかった。紫恋には、その瞬間深艶が浮かべた表情からなんとなくまずい予感がした。そして同時にもう一つ、女の勘のようなものが冴えたのだ。

深艶は一言も発することなく、一目散にその場を走り去った。おそらく紫恋のこの勘は当たっている。これは追わねばまずいと瞬時に判断した彼女は、綺麗を思いつき突き飛ばした。すると彼は今度はあっさりと身を離れた。

紫恋は一度彼に勢いよく頭を下げてから、大慌てで深艶の後姿を追った。頬の傷が走っても痛まなくなっていることに気がつく余裕はその時の紫恋にはなかった。

第七話（後書き）

お久しぶりです。復活することにしました。勝手に逃亡してすみませんでした。

まだこの小説を待っていた方がいらっしゃるのなら、本当に頭が上がりません。

読み手が一人でもいてくださる限り、頑張っ続けていこうと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8973e/>

贅姫と鬼神

2010年10月11日03時24分発行